

大阪市平野区

長原・瓜破遺跡発掘調査報告

IV

1984年度大阪市長吉瓜破地区
土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書

1992.3

財団法人 大阪市文化財協会

本書は、瓜破遺跡東南地区において発掘された飛鳥時代の建物や井戸、そしてそこから出土した土器群を中心に報告する。この地区の飛鳥時代の遺構群については、現在にいたるまで発掘が続いているが、今回報告する資料はその最初の発掘成果である。本書では飛鳥時代の土器について検討し、これらが当地域だけでなく、飛鳥時代の中心地でもある飛鳥地域においても資料数の少ない、飛鳥Ⅲの段階のものであることを示した。

瓜破台地上に形成された飛鳥時代の遺構群は、長原遺跡に展開する水田遺構と深く係わるものであろうことは容易に推察でき、当地域の開発の背景について多くの示唆を与えるものとなろう。

また、本書では、長原遺跡西地区と南地区における古墳とこれを壊してつくられた飛鳥～鎌倉時代の水田遺構、平安時代以後の開発と経営の基地としての建物群についても報告している。古墳が多数造営された時代から、これらを破壊して広範囲にわたる水田開発がなされ、広大な田園風景が出現する時代へと変化する過程は、日本の古代国家形成の過程の一端をなすものといえ、本書はその一つの事例を報告するものであるということもできよう。

大阪市平野区

長原・瓜破遺跡発掘調査報告

IV

1984年度大阪市長吉瓜破地区
土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書

1992.3

財団法人 大阪市文化財協会



飛鳥時代の建物

長原・瓜破遺跡発掘調査報告Ⅳ 正誤表

頁	行	誤	正
例言	5・9	第Ⅱ章第1節	第Ⅰ章第1節
ii(巻頭)	10	ii) 溝……138	ii) 溝……137
13	24	[大阪市文化財協会1992]	[大阪市文化財協会1992A]
49	15	1983]の図版二	1983B]の図版二
52	20	[大阪市文化財協会1990・1992]	[大阪市文化財協会1990・1992A]
107	30	[大阪市文化財協会1992]	[大阪市文化財協会1992A]
112	29	[大阪市文化財協会1992、	[大阪市文化財協会1992A、
132	29	1992 p.165	1992A p.165
143	11	[大阪市文化財協会1992]	[大阪市文化財協会1992B]
143	17	[積山洋1992B]	[積山洋1992]
148	18	[大阪文化財センター1978]	[大阪文化財センター1978A]
158	18	[大阪市文化財協会1983 図52・	[大阪市文化財協会1983A 図52・
159	26	「富官家」の墨書	「富官家」の墨書
164	1	『考古学研究会』	『考古学研究』
165	8	「……「富官家」墨書土器」	「……「富官家」墨書土器」
165	33	1980改訂	1982改訂
165	36	「板田寺」	「板田寺跡の調査」
iii(巻末)	15	2) …… from the Nagahara Site	2) …… from the Nagahara and Uriwari Sites
図版41	下段	13.M!	13.M!

大阪市平野区

長原・瓜破遺跡発掘調査報告

IV

1984年度大阪市長吉瓜破地区
土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書

1992.3

財団法人 大阪市文化財協会

序 文

長原遺跡は、はじめて発見されたのが、地下鉄の工事に伴う調査で、その内容も弥生時代の住居址や古墳であったため、本書のように、飛鳥時代の建物跡や井戸跡などという、意外に受け取られる向きもあるかも知れない。

飛鳥時代といえば、奈良県飛鳥の古墳や寺院、不思議な石造物などの遺跡がまず思い起こされるのが一般的ではあろうが、大阪市内の、旧河内の国の一角に、歴史書に記録もないうまま埋もれていた遺跡があったのである。

本書は、いわば、歴史の陰に隠れたままであった遺跡の発掘調査報告書の第一歩で、その後も続いて見つかった遺跡ともども、今後、古代史の復元にも学術的意義を増してくるものと思う。

区画整理事業に伴う発掘調査は、道路建設予定地を細く長く掘るため、広い面積の遺跡調査をしてゆく際には、いわゆるトレンチ調査の役割を果たすことになり、遺跡の大略を把握するのにかえて好都合という面もある。今回の調査成果を基礎に、さらに検討を加え、研究を深めてゆく所存であるが、大阪市の遺跡の顕彰と市民の古代文化の理解に一助となれば幸いである。

財団法人 大阪市文化財協会
理事長 佐治 敬三

例 言

- 一、本書は大阪市都市整備局長吉瓜敏地区区画整理事務所施行の大阪市平野区における1984年度土地区画整理事業に伴う発掘調査の報告書である。
- 一、発掘調査の作業は財団法人大阪市文化財協会調査課長代理永島輝臣様（現調査課長）の指揮のもとに、調査課の木原克司（現鳴門教育大学助教授）・鈴木秀典・黒田慶一・京嶋覚が行った。各調査の面積・期間などは、第Ⅱ章第1節の一覧表（表1）に記した。なお、NG84-24次調査は勝浦康守（現徳島市教育委員会）の援助を得た。
- 一、発掘調査と報告書作製の費用は、大阪市都市整備局および同市水道局・同市下水道局・日本電信電話公社（現日本電信電話株式会社）・関西電力株式会社・大阪ガス株式会社が負担した。
- 一、報告書の作製作業の分担は第Ⅱ章第1節に記したとおりである。また、X線透過写真撮影の実施に際して奈良国立文化財研究所遺物処理研究室肥塚隆保氏、石器遺物の検討においては奈良国立文化財研究所松沢亜生氏、動・植物遺体の同定では大阪市立自然史博物館那須孝徳・梶野博幸両氏の御指導・御協力をいただいた。記して深謝の意を表したい。
- 一、NG84-12次調査の基準点測量および空中写真撮影はアジア航測株式会社、NG84-24次調査の遺構写真の一部は財団法人大阪市協会、遺物の写真撮影は徳永園治氏に委託した。また、写真9は藤沢一夫氏の撮影によるものである。
- 一、遺構名の表記は、樹立柱建物（SB）・竪穴住居（SB）・溝（SD）・井戸（SE）・土塙（SK）・ピット（SP）の記号の後に、本書独自に各調査地区ごとの通し番号を順に付した。ただし、古墳に関しては、『長原遺跡発掘調査報告Ⅱ』で決定し、その後改訂した番号を用いた。
- 一、地層名は、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告Ⅲ』の第Ⅱ章に記した長原遺跡標準層序に対比したもので、長原1層・・・と表記する。また、遺構検出面の認定・呼称は『長原遺跡発掘調査報告Ⅲ』に従う。
- 一、調査時の測量は大阪市都市整備局設置の基準点・水準点を用い、国土平面直角座標（第Ⅵ系）の値に換算した。水準値はT.P.値（東京湾平均海面値）を用いた（本文中ではTP+と略称）。
- 一、発掘調査で得られた出土遺物その他の資料は当協会が保管している。
- 一、発掘調査および資料整理・図表作製などの作業には多くの補助員諸氏の援助を得た。深く感謝の意を表したい。

本文目次

序文

例言

第I章 長原・瓜破遺跡の発掘調査	1
第1節 1984年度の発掘調査と報告書	1
1) 発掘調査	1
2) 報告書の作製	2
第2節 調査の経過と概要	7
1) 瓜破遺跡東南地区	7
2) 長原遺跡西地区	8
3) 長原遺跡南地区	11
4) 長原遺跡東南地区	13
第II章 調査の結果	15
第1節 瓜破遺跡東南地区の調査(84-24次調査)	15
1) 調査地の層序	15
2) 飛鳥時代の遺構	16
i) 掘立柱建物・礎	16
ii) 井戸	18
iii) 土壇	19
iv) 溝	20
3) 飛鳥・奈良時代の遺物	21
i) 柱穴出土の土器	21
ii) SE01出土の土器	22
iii) SK02出土の土器	29
iv) SD04出土の土器	30
v) II・III区土壇出土の土器	32
vi) SD01~03・05出土の土器	33
vii) II区包含層出土の土器	35
viii) 陶硯・甕形土器・製塩土器	37
ix) 土製品	39
x) 銭貨	42
xi) 石製品	42
xii) 木製品	46
xiii) 核物遺体	47
4) 小結	48
第2節 長原遺跡西地区の調査(84-12・29・47・67・70次調査)	51
1) 調査地の層序	51
2) 各層出土の遺物	56
i) 土器	56
ii) 施釉陶磁器	59
iii) 埴輪	60
iv) 瓦葺	60
v) 陶硯・製塩土器・甕形土器・土鍾	63
vi) 石器遺物・鉄釘・銭貨	64

3) 古墳時代の遺構と遺物	77
i) 110号墳	77
ii) 111号墳	81
iii) 112号墳	89
iv) 197号墳	89
v) 掘立柱建物・溝	90
vi) 土塼	91
vii) 溝	94
viii) 動物遺体	96
4) 飛鳥・奈良時代の遺構と遺物	100
5) 平安時代の遺構と遺物	102
i) 掘立柱建物・柱穴	102
ii) 土塼	102
iii) 溝	103
6) 近世の遺構と遺物	104
7) 小結	106
第3節 長原遺跡南地区の調査(84-48・73次調査)	108
1) 調査地の層序	108
2) 各層出土の遺物	112
i) 土器・埴輪・土鏡	112
ii) 施釉陶磁器	115
iii) 石器遺物	115
3) 古墳時代の遺構と遺物	121
i) 69号墳	121
ii) 121号墳	125
iii) 122号墳	125
iv) 123号墳	126
v) 124号墳	126
vi) 125号墳	129
vii) 126号墳	129
4) 飛鳥・奈良時代の遺構と遺物	131
5) 平安～室町時代の遺構と遺物	136
i) 掘立柱建物	136
ii) 溝	138
iii) 水田遺構	139
6) 小結	140
第4節 長原遺跡東南地区の調査(84-70次調査)	144
1) 調査地の位置	144
2) 塚ノ本古墳	144
3) 平安時代以後の遺物	147
4) 小結	148
第三章 遺構と遺物の検討	149
第1節 飛鳥時代の土器とその時期	149
1) 器種構成	149
2) 食器類の法量	150
3) 土器と遺構の時期	152
第2節 長原・瓜破遺跡の製塩土器	155
1) 製塩土器の概要	155
2) 製塩土器の変遷と評価	158
別表	161
引用・参考文献	164
あとがき・索引	

原 色 図 版

- 1 瓜破東南地区 調査地全景と飛鳥時代の井戸
上：全景（西から）
下：SB01（北から）
- 2 瓜破東南地区 飛鳥時代井戸出土の土器
上：土師器
下：須恵器
- 3 長原西・南地区 施釉陶磁器
上：外面
下：内面

図 版 目 次

- 1 瓜破東南地区 建物
上：SB01（南から）
下：SB01（西から）
- 2 瓜破東南地区 遺構
上：東部の遺構（手前はSE01）（東から）
下：SE01（北から）
- 3 瓜破東南地区 井戸
上：SE01井戸側出土状況
左下：SE01裏込めの板材
右下：SE01須恵器杯出土状況
- 4 瓜破東南地区 井戸欄材・土橋
上：SE01井戸欄材
下：SK02（北西から）
- 5 長原西地区 調査地全景
上：Ⅱ区 全景（南から）
下：Ⅱ区 全景（南から）
- 6 長原西地区 調査地断面
上：Ⅰ-1区 南壁
下：Ⅳ-1区南部 西壁
- 7 長原西地区 110号墳
上：検出状況（西から）
中：全景（西から）
左下：全景（南から）
右下：土器出土状況
- 8 長原西地区 111号墳
上：検出状況（西から）
下：全景（西から）
- 9 長原西地区 111・112号墳
上：111・112号墳全景（北から）
下：111号墳東周溝内遺物出土状況（北から）
- 10 長原西地区 Ⅳ区古墳時代の遺構
上：北部全景（西から）
下：北部SB01・SA01（南東から）
- 11 長原西地区 Ⅴ区古墳時代の遺構
上：西部全景（東から）
左下：SK01遺物出土状況（南東から）
右下：SK01（南から）
- 12 長原西地区 Ⅲ区遺構
上：SD04~06（西から）
下：SD09（東から）
- 13 長原西地区 Ⅰ・Ⅳ区全景
左上：Ⅰ-2区 長原6A層上面（東から）
右上：Ⅰ-2区 長原4B層内（東から）
左下：Ⅳ-2区 谷状地形（北から）
右下：Ⅳ-2区 長原2層基底面（北から）
- 14 長原南地区 調査地断面
上：Ⅰ-2区 南壁
下：Ⅱ-1区 南壁
- 15 長原南地区 121・122号墳
上：121・122号墳全景（西から）

- 下：121号墳全景（北西から）
- 16 長原南地区 125号墳
上：全景（西から）
下：墳丘断面
- 17 長原南地区 123・124号墳
上：123号墳全景（西から）
下：124号墳全景（東から）
- 18 長原南地区 126号墳
上：全景（西から）
下：墳丘断面（南から）
- 19 長原南地区 飛鳥・奈良時代の水田遺構
左上：Ⅱ-2区 長原6A層上面（西から）
右上：Ⅱ-2区 長原6A層上面（西から）
左下：Ⅲ-2区 長原6A層上面（東から）
右下：Ⅳ-1区 長原6B層上面（東から）
- 20 長原南地区 飛鳥・奈良時代の溝
左上：Ⅰ-2区 SD01~04（西から）
右上：Ⅴ-1区 SD05（東から）
下：Ⅴ-3区 SD07・08（東から）
- 21 長原南地区 平安時代以後の遺構
左上：Ⅴ-2区 SD19・20（西から）
右上：Ⅴ-3区 SD21・22（東から）
下：Ⅱ-2区 SB01（南から）
- 22 瓜破東南地区 井戸出土の土師器（一）
SE01
- 23 瓜破東南地区 井戸出土の土師器（二）
SE01
- 24 瓜破東南地区 井戸出土の土師器（三）
SE01
- 25 瓜破東南地区 井戸出土の須恵器（一）
SE01
- 26 瓜破東南地区 井戸出土の須恵器（二）
SE01
- 27 瓜破東南地区 井戸出土の須恵器（三）
SE01
- 28 瓜破東南地区 土輪出土の土器
SK02
- 29 瓜破東南地区 遺構出土の土器
SD02~04、SK01・04~06・08
- 30 瓜破東南地区 包含層出土の土器・製塩土器
包含層、SE01
- 31 瓜破東南地区 甕形土器と植物遺体
上：SK01、包含層
下：SE01（スモモ核・オニグルミ核・モモ核）
- 32 長原西地区 包含層出土の土器
Ⅰ-2区、Ⅳ区、Ⅴ区、Ⅵ区
- 33 長原西地区 包含層出土の遺物
甕形土器、土師、飛雲文軒丸瓦、飛雲文軒平瓦、紙石、石葱丁、鉄釘
- 34 長原西地区 石器遺物（一）
石鏃・石匙・クサビ・クサビから剥落した剥片・ナイフ形石器
- 35 長原西地区 石器遺物（二）
底面をもつ剥片・剥片・その他
- 36 長原西地区 古墳出土の土器（一）
110号墳、111号墳
- 37 長原西地区 古墳出土の土器（二）
110号墳、111号墳
- 38 長原西地区 古墳出土の埴輪（一）
110号墳、111号墳、112号墳
- 39 長原西地区 古墳出土の埴輪（二）
111号墳
- 40 長原西地区 遺構出土の遺物
SK01~04・08、Ⅴ区
- 41 長原西地区 近世の遺物と動物遺体
上：SD09
下：Ⅳ区谷、SK01、Ⅴ区长原6層、SK05
- 42 長原南地区 包含層出土の遺物
Ⅰ区、Ⅱ区、Ⅳ区
- 43 長原南地区 石器遺物
石鏃・クサビ・二次加工のある剥片・底面のある剥片・剥片
- 44 長原南地区 遺構出土の遺物
124号墳、SD01・14・21、SB01、SP02

挿 図 目 次

<p>図 1 区別整理事業の施行範囲と調査地……………2</p> <p>図 2 版下を自作する方法の流れ図……………4</p> <p>図 3 編集者の分担範囲のちがい……………5</p> <p>図 4 瓜破東南地区の調査位置図……………7</p> <p>図 5 長原西地区の調査位置図……………8</p> <p>図 6 長原南地区の調査位置図……………11</p> <p>図 7 長原東南地区の調査位置図……………13</p> <p>図 8 調査地の層序……………15</p> <p>図 9 遺構全体図……………折込</p> <p>図10 SB01実測図……………17</p> <p>図11 SB02実測図……………18</p> <p>図12 SE01実測図……………19</p> <p>図13 SK02断面実測図……………19</p> <p>図14 SB01柱穴出土土師器実測図……………21</p> <p>図15 土器の器種分類 (1)……………22</p> <p>図16 土器の器種分類 (2)……………22</p> <p>図17 SE01出土土師器実測図 (1)……………23</p> <p>図18 SE01出土土師器実測図 (2)……………24</p> <p>図19 SE01出土須恵器実測図 (1)……………25</p> <p>図20 SE01出土須恵器実測図 (2)……………26</p> <p>図21 SK02出土土器実測図……………28</p> <p>図22 SD04出土土器実測図……………31</p> <p>図23 その他の遺構出土土器実測図……………33</p> <p>図24 包含層出土土師器実測図……………34</p> <p>図25 包含層出土須恵器実測図……………36</p> <p>図26 その他の遺物実測図……………38</p> <p>図27 銭貨……………41</p> <p>図28 石小刀・二次加工のある剥片・クサビから剥落した剥片・剥片……………43</p> <p>図29 SE01井戸構材実測図……………46</p> <p>図30 SE01出土木製品実測図……………47</p> <p>図31 長原西地区の地区区分……………51</p> <p>図32 I-1・2区、II区の断面実測図……………54</p> <p>図33 III-1区、IV区、V区の断面実測図……………55</p> <p>図34 各層出土の土器実測図……………57</p>	<p>図35 各層出土の遺物実測図……………60</p> <p>図36 飛雲文軒丸・軒平丸……………61</p> <p>図37 丸・平瓦拓影……………62</p> <p>図38 石楯・石匙実測図……………65</p> <p>図39 クサビ実測図……………67</p> <p>図40 クサビ・クサビから剥落した剥片実測図……………70</p> <p>図41 ナイフ形石器・底面をもつ剥片実測図……………71</p> <p>図42 剥片実測図……………73</p> <p>図43 剥片・その他実測図……………74</p> <p>図44 石製品・金属製品実測図……………76</p> <p>図45 西地区周辺の古墳分布図……………77</p> <p>図46 110号墳実測図……………78</p> <p>図47 110号墳出土須恵器実測図……………79</p> <p>図48 110号墳出土埴輪実測図……………80</p> <p>図49 II区全体図……………82</p> <p>図50 111号墳実測図……………折込</p> <p>図51 111号墳出土須恵器実測図 (1)……………83</p> <p>図52 111号墳出土須恵器実測図 (2)……………84</p> <p>図53 111号墳出土埴輪実測図……………86</p> <p>図54 111号墳出土埴輪実測図……………87</p> <p>図55 112号墳実測図……………89</p> <p>図56 112号墳出土遺物実測……………90</p> <p>図57 197号墳実測図……………90</p> <p>図58 IV区SB01実測図……………91</p> <p>図59 IV区北部 (上)・V区 (下) 全体図……………92</p> <p>図60 V区SK01実測図……………93</p> <p>図61 SK01出土の砥石実測図……………94</p> <p>図62 遺構出土土器実測図 (古墳時代)……………95</p> <p>図63 VI区SK03出土須恵器実測図……………96</p> <p>図64 III区全体図……………99</p> <p>図65 I区とその周辺の水田遺構……………100</p> <p>図66 V区水田遺構……………101</p> <p>図67 II区周辺の平安時代建物群……………102</p> <p>図68 II区SB02実測図……………102</p> <p>図69 遺構出土遺物実測図 (平安時代以後)……………105</p>
---	---

図70 調査地の地区区分	108	図91 126号墳実測図	130
図71 I・III・IV区の断面実測図	110	図92 I区SD03断面実測図	131
図72 II・V区の断面実測図	111	図93 I-2区SD01~04	131
図73 各層出土の遺物実測図	114	図94 SD01出土遺物実測図	132
図74 石鏃・クサビ実測図	116	図95 V-1区周辺の飛鳥・奈良時代の溝	132
図75 二次加工のある剥片・剥片実測図	117	図96 V区SD06実測図	133
図76 剥片実測図	119	図97 長原6A・6B層上面の水田遺構	134
図77 I・II区西部の古墳配置図	121	図98 長原6A層上面の畦畔配置図	135
図78 長原遺跡南部の古墳分布図	122	図99 II区长原4B層基底面検出の遺構	137
図79 69号墳実測図	123	図100 II区SB01実測図	137
図80 69号墳出土遺物実測図	123	図101 柱穴および開溝遺構出土遺物実測図	138
図81 121・122号墳実測図	124	図102 V区SD21・22出土瓦葺実測図	139
図82 122号墳出土埴輪実測図	125	図103 南地区北部の平安時代建物の分布	142
図83 123号墳実測図	125	図104 調査トレンチのパネルダイアグラム	145
図84 III区西部の古墳配置図	126	図105 塚ノ本古墳出土の家形埴輪実測図	145
図85 124号墳実測図	127	図106 クサビ・クサビから剥落した剥片・剥片実測図	146
図86 124号墳出土円筒埴輪実測図	127	図107 平安時代以後の土器実測図	148
図87 124号墳出土埴輪実測図	128	図108 食器類の法量	151
図88 125号墳出土土器実測図	129	図109 長原・瓜破遺跡の製埴土器の変遷	156
図89 125号墳実測図	129		
図90 V区古墳配置図	130		

表 目 次

表1 1984年度区画整理事業に伴う発掘調査一覧表	1	表8 ウマの臼歯計測値	98
表2 瓜破東南地区土壌一覧表	20	表9 遺物の出土層位一覧(南地区)	115
表3 平安時代土器の編年	58	表10 石器遺物計測表(南地区)	120
表4 瓦器編年の編年	58	表11 水田遺構の座標値	141
表5 遺物の出土層位一覧(西地区)	64	表12 土器の器種別集計表	150
表6 石器遺物計測表(西地区)	72	表13 飛鳥時代の土器と遺構	153
表7 長原遺跡西地区出土の動物遺体一覧表	97	表14 製埴土器一覧表	157

写真目次

写真 1	84-12次調査地とその周辺（北西から）9	写真 9	瓜破廃寺出土の埴仏.....49
写真 2	84-48次調査の作業風景（西から）.....12	写真10	丸・平瓦.....63
写真 3	SB01柱穴.....16	写真11	剥片.....75
写真 4	土師器平瓶.....21	写真12	Ⅱ区 SD05の断面.....101
写真 5	車輪文当て具痕.....30	写真13	Ⅱ区 SD07の断面.....103
写真 6	陶甕.....37	写真14	I-1区出土のオオタニシ.....136
写真 7	イダゴ壺・土製品・砥石.....40	写真15	塚ノ本古墳墳丘上の1トレンチ.....144
写真 8	石小刀・二次加工のある剥片・クサビから剥 落した剥片・剥片.....44	写真16	塚ノ本古墳出土の家形埴輪.....145
		写真17	クサビ・クサビから剥落した剥片・剥片.....147
		写真18	平安時代以後の遺物.....148

別表

1	長原遺跡の標準層序.....162	3	発掘古墳一覧表.....163
2	銭貨計面表.....163	4	建物遺構一覧表.....163

第 I 章 長原・瓜破遺跡の発掘調査

第 1 節 1984 年度の発掘調査と報告書

1) 発掘調査

1984年度の本事業に伴う発掘調査の総発掘面積は、前年度の発掘面積(6169㎡)の約6割に当たる3866㎡で、そのうち長原遺跡西地区が2539㎡、同南地区626㎡、瓜破遺跡東南地区が618㎡である。84-12・24次調査を除いて、小規模なトレンチによる調査が多く、まとまりのある遺構群の発見は少なかった。しかし、既存の知見を補足するにとどまらず、84-12次調査では、長原遺跡南部の古墳群とは別の一群と思われる方墳を発掘し(第Ⅱ章第2節参照)、また、84-24次調査では、それまで知られていなかった飛鳥時代の建物群の一角が、初めて明らかにされたのである(第Ⅱ章第1節参照)。

今年度を実施した発掘調査は8次に及び、1984年6月16日に開始して翌年3月18日にすべての発掘調査を終了した。各次調査の発掘面積・担当者などは表1に示した通りである。なお、当協会で使用している発掘次数は遺跡略号のあとに年度一番号を付したもので、たとえば、「NG84-12」は「長原遺跡における1984年度の12番目の調査」を表わす。ただし、本書報告の調査はすべて「NG」を冠するためこれを省略する。また、NG84-24次の調査地は瓜破遺跡に含まれるが、一連の事業に伴う調査であるため「NG」を冠している。

表1 1984年度区画整理事業に伴う発掘調査一覧表

発掘次数	面積	調査地番	担当者	調査期間
NG84-12次	1498㎡	半野区長吉長原西1丁目	調査課 黒田慶一	1984年6月16日～1984年10月4日
NG84-24次	618㎡	同 瓜破東8丁目	同 黒田慶一	1984年7月27日～1984年10月13日
NG84-29次	188㎡	同 長吉長原西1丁目	同 京嶋覚・鈴木秀典	1984年8月10日～1984年9月27日
NG84-47次	692㎡	同 長吉長原西2丁目	同 黒田慶一	1984年10月17日～1984年12月6日
NG84-48次	489㎡	同 長吉長原4丁目	同 京嶋覚・黒田慶一	1984年10月16日～1985年2月18日
NG84-67次	161㎡	同 長吉長原西1丁目	同 黒田慶一	1984年12月17日～1985年2月1日
NG84-70次	83㎡	同 長吉長原西2丁目 長吉長原東3丁目	同 木原克司(国領門前宮大寺) 黒田慶一・京嶋覚	1985年1月8日～1985年3月7日
NG84-73次	137㎡	同 長吉川辺1丁目	同 京嶋覚・木原克司	1985年1月24日～1985年3月18日

は調査課の久保和士が大阪市立自然史博物館の協力を得て行い、石製品の石材同定は同課の趙哲済が当り、地層の標準層序との対比にも協力があつた。さらに、建物遺構については調査課長代理の植木久の協力を得たほか、近世の陶磁器類については森毅、製塩土器については横山洋、飛鳥時代土器については南秀雄の各調査課職員の協力があつた。

本文のおもな執筆分担は、以下の通りである。

- 第I章 第1節 1 京嶋 2 京嶋・高井
 第2節 1・4 黒田 2 黒田・京嶋 3 京嶋
- 第II章 第1節 1・2 黒田 3 京嶋・岡村・久保
 第2節 1 松尾・黒田・京嶋 2 京嶋・岡村・佐藤 6 京嶋
 3 黒田・京嶋・櫻井・久保 4・5・7 黒田・京嶋
 第3節 1・3～6 京嶋 2 京嶋・岡村・佐藤
 第4節 1・3・4 京嶋 2 京嶋・岡村
- 第III章 第1・2節 京嶋

また、本文中の分担個所の末尾に執筆者名を記し、文責を明らかにした。なお、英文目次および要約は岡村が当り、ボーンマス大学学生Gaidagh Chapman氏の御協力を得た。

本書の編集は調査課長永島輝臣の指揮のもと、調査課の京嶋・高井健司が当つた。

(京嶋)

ii) コンピュータを利用した版下の作製

手書きからデジタルへ

最近のワープロ・コンピュータの普及には目を見張るものがある。当協会でも、1982年に刊行した「長原遺跡発掘調査報告」Ⅱ以来、報告書の作製にワープロを使用してきた。各執筆者の手書き原稿をワープロで入力し、それをもとに編集作業を進める。そして、最終的に完成した原稿をフロッピーディスク＝デジタルデータで印刷所に入稿する方法である。印刷所ではデータを電算写植機に移し、指定された位置に図や表、写真を貼込んだ「ゲラ」を作る。それをもとに校正を繰返して校了となり、印刷・製本の運びとなる。1987年以降、ワープロ専用機からパソコン上でワープロソフトを使う方法に移行したが、基本的な作業は同じである。

こうした方法には、それまでの手書き原稿による方法に比べて、次のような利点があつた。ひとつは、文字をコードで変換するために、手書き原稿から植字を行う際に生じる誤字・脱字などが解消した。ふたつめに、ワープロの一括変換機能を利用することで、容易

に用字・用語の統一がとれた。しかし、こうした利点の半面、コード変換がもたらす弊害もあった。機種によって用いるコード体系が異なるために、同一コードの文字が異なる文字に換わることがある。ワープロのセンタリングや罫線・外字が、写植機では別の判読不可能な記号になる「文字バケ」を起す。このように、ワープロ専用機やパソコンの導入は大量の文章処理に一定の便利さを提供したが、それでもなお、校正の必要がない決定稿の作製にはいたらなかった。

報告書の作製で手間のかかることのひとつに割付け作業がある。当協会でも、ワープロやパソコンの導入以後も、やはり割付け用紙を使って図や写真のレイアウトを行ってきた。

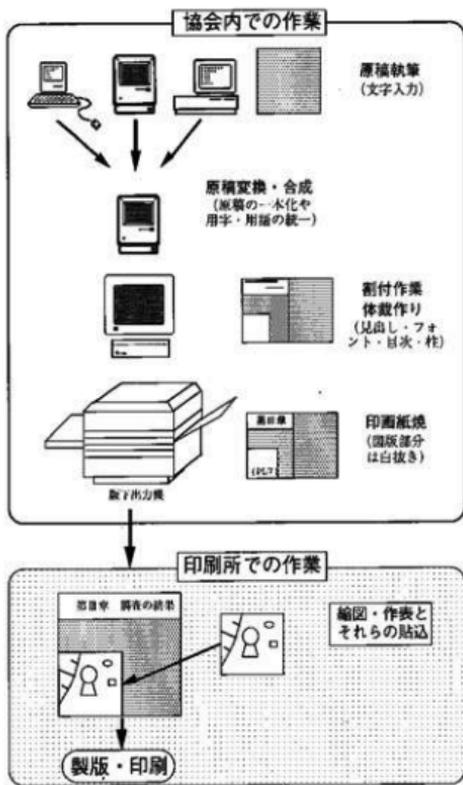


図2 版下を自作する方法の流れ図

た。図や写真の位置を決め、タイトルの行取りなどを考慮しながら、割付け用紙のマス目に添って残りの部分に文字を流し込む。図や写真の大きさをまちがったり、文字数を数えまちがうことは、本の分量が多くなれば避けられないことであった。また、割付け位置や外字のかたちなどは見本を作って印刷所に示すが、いつも思い通りの結果が返ってくるとは限らない。文字の大きさ(級数)を指定しても、その数値だけで仕上がり状態をイメージできるようになるには多少の経験が必要であった。

版下の自作

まちがいのない原稿で、なおかつ読みやすいレイアウトにするには、編集者がかなりの時間をかけて完成度の高い原稿を用意し、その上で印刷所との意志の疎通をはかることが必要である。そうでな

ければ、編集者自身が満足のゆく版下を自作するしかない。しかし、文字については大きさや間隔が微細に調整できて、印刷所と遜色ない美しさを得ることが必要である。図や写真については、拡大・縮小しても鮮明度が損われないことが要求される。ワープロ・パソコンを使って文字をコード化することは、報告書作りを進めるうえで一定の役割を果たしたが、さらに一步進めて版下を自作するとなると、解決すべき課題が多かった。

1990年以降、当協会内でもハードウェアやソフトウェアの環境が整い、図や写真などの「画像データ」は別として、文字や表などの「テキストデータ」部分の版下作製が可能となった。その後の試行錯誤や具体的な機器の紹介は、『長原遺跡発掘調査報告』IVや本シリーズ前書の「あとがき」でもふれているので参考にされたい。ここでは従来の方法との比較・検討をしておく(図3)。

報告書の作製に要する時間は、本の分量や内容が一定でないために新・旧の製作方法を単純には比較できない。作業の内容は、版下を自作する場合も、そうではなくて印刷所に任せる場合でも、基本的に同じである。相違点は各作業工程をどちらが受け持つかである(図3)。版下を自作する場合には、図や写真を除く部分についてはすべて編集者側の仕事になる。従来の方法にあった編集者と印刷所間での「ゲラ」のやり取りはなく、それは編集者と執筆者間で行われることはあっても、印刷所は介在しない。したがって、編集者の利用できる機器やソフトの機能の範囲内で、思い通りの文字・レイアウト・ページを作ることができる。特に、レイアウトは画面を見ながら思いのままに、追加・削除・移動が瞬時に

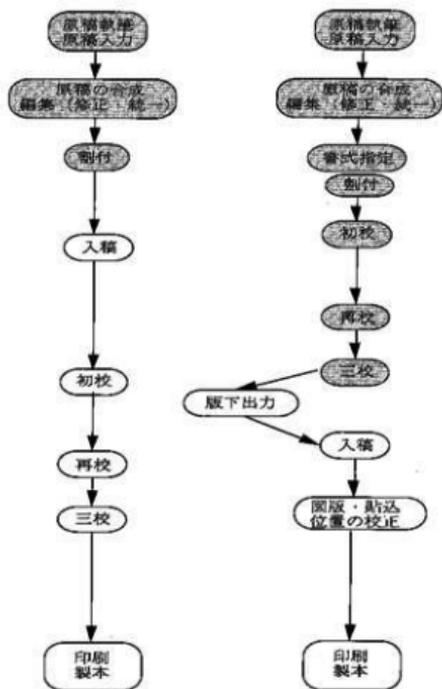


図3 編集者の分担範囲(図の斜かけ部分)のちがひ

でき、文字の校正によって図や表の位置がズレることもない。所要時間は紙の割付け用紙に比べてはるかに短縮でき、修正や大幅なレイアウトの変更も苦ではない。外字も自作することができ、満足のゆくものが得られる。最終的に版下は同一の機械で印画紙に出力するため、印刷所あるいは写植機の違いによる、微妙な書体の違いは発生しない。

パソコン利用の版下作製システムにも、まだまだ課題は残る。

- ①電算写植機に比べて書体(フォント)の数・種類が少ない。
- ②図や写真などの画像データは、まだまだ従来の方法の品質に届かない。
- ③すべての作業をひとつのソフトで済ませることができない。

などの点である。こうした問題の内、いくつかは近い将来に解決されるかもしれない。しかし、すべて自作することが必ずしもよいとは限らず、専門家に委ねる部分はなお、残であろう。

データの有効利用

版下を自作する過程で生れたデータは、次のような特性をもっている。

- ①デジタルデータとして保管されるために「劣化」しない。
- ②データを加工して2次的な利用が可能である。

後者の特徴を利用すれば、たとえば索引がたいへん容易に作れたり、全文を対象としたデータベースの構築が可能となる。従来の方法では、校正段階で変更が加わるために入稿時と稿了時の内容が異なり、最終原稿をもう一度パソコンで利用できるかたちに戻して印刷所から返却してもらわないと、検索機能を使った索引を作ることができなかった。また、テキストデータをページや行ごとに分割してその数値を入力すれば、原稿内容すべてをデータベースに再構築することができる。本書のようなシリーズものでは、各号の全文データベースを蓄積することで、さらにシリーズ全体をカバーする書籍データベースを作ることができよう。

区画整理事業の報告書作製には、早くからコンピュータを使ったデータ整理に努めてきた。整理作業を進めるうえで必要なデータが数多く作られ、報告書の作製に大きな役割を果たしてきた。各種の遺構や遺物ごとにデータベースを作り、そこでの検索や並べ換えの結果を参照しながら原稿を入力し、あるいは、結果そのものを表の形で報告書に盛込んだりしている。こうした従来の利用方法に加えて、版下を自作することは、完成済みのデータを別の角度からも有効に利用できる道を開いた。

(高井)

第2節 調査の経過と概要

1) 瓜破遺跡東南地区(84-24次調査)

市営瓜破霊園の南側で、既報告の83-44次調査[大阪市文化財協会1992A]の西側に位置する。JR阪和貨物線に平行する区画整理道路予定地内に、長さ80m、幅7mの調査範囲を設定して調査を実施した(図4)。調査地の北側にある市営瓜破霊園内には、瓜破廃寺と呼ばれる奈良～平安時代の寺院跡[大阪市1988]が存在するといわれているが、次章第1節で紹介しているように、白鳳時代の埴仏が出土しており、創建はこの時期までさかのぼる可能性がある。83-44次調査でもおもに7世紀後半に比定される遺構が検出された。最近の調査では、特に今回調査地の南側で7世紀前半の建物群や溝・槽が多数検出されている[南秀雄1987]。

調査は1984年7月27日に開始した。おもに7世紀末の遺物を含み、長原6層に相当すると考えられる包含層の上層まで重機によって掘削を行い、以後の掘削は人力によった。その結果、Ⅲ区では南北棟の掘立柱建物が検出されたので、トレンチの南と北を拡張して規模を確認した。また、Ⅰ区では削抜いた丸太を井戸側とする7世紀末の井戸が出土したが、安全確保のため人力での掘形の掘削は約2.5mまでとし、最終的には重機を用いた断割り作業を行った。調査面積は618㎡で、10月13日に終了した。

(黒田)



図4 瓜破東南地区の調査位置図
(網かけ部分は現在までの既調査地)

2) 長原遺跡西部地区(84-12・29・47・67・70次調査)

当地区における今年度の調査は、5次に分れている(図5)。1982年度の82-28次調査[大阪市文化財協会1990]でこの地区の発掘が開始され、1983年度も南北350mの範囲で発掘が行われた[大阪市文化財協会1992A]。その結果、古墳・奈良・平安時代の集落遺構の存在が明らかになった。

また、今年度の調査およびその後の周辺の調査で、当地区北部には古墳時代中・後期の小型方墳からなる古墳群が存在することが明らかとなった。これらは、南地区に分布する長原遺跡南部の一群とは別に、北部の一群として把握できる。北部の一群は当地区周辺で発見された古墳と出戸7丁目付近の大阪文化財センターの調査による「城山その1地区」で

発掘された古墳群を含め、現在までに28基が判明している。

i) 84-12次

調査地は都市計画道路「出戸川辺線」予定地内で、長原遺跡西部地区北端部に位置する。南隣の83-32次調査[大阪市文化財協会1992A]では、古墳時代から平安時代の建物群などが検出され、東隣の84-25次調査北部では7基の古墳が検出されている。調査は地下鉄出戸駅の南擁壁から約5m南に離れた、南北90m、東西14mの範囲を対象にしたもので、1984年6月16日に作業を開始した。

機械掘削は現代作土および長原2層相当の灰色シルト混り粗粒砂層の一部までとし、長原2層下面から精査の上、遺構検出

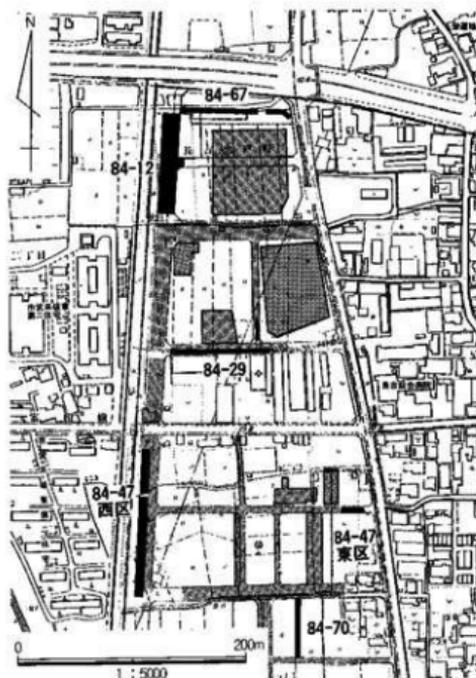


図5 長原西部地区の調査位置図
(網かけ部分は現在までの既調査地)

に努めた。その結果、調査地北部の長原2層下面で、北で西に振る方位の南北溝を、南部で南北方向の溝状の犂痕跡を、南部の長原3層基底面で不定形の土壌を、中央部の長原4B層内で南北方向の犂痕跡を、長原4B層および6層基底面で110～112号墳や溝などを検出した。また111号墳が検出された中央部分



写真1 84-12次調査地とその周辺（北西から）

は東に拡張し、古墳全体を調査した。地山層の上面の遺構は写真測量を行い、9月25日に調査を終了した。また、古墳は保護砂によって被覆し、10月4日に埋戻しを完了した。

（黒田）

ii) 84-29次

都市計画道路「出戸川辺線」内の、前書〔大阪市文化財協会1992A〕で報告した西地区I区南端部から、「長吉2号線」までをつなぐ東西の区画整理道路部分で実施したトレンチ調査である。この道路敷内ではすでに下水管埋設工事に伴う82-28次のトレンチ調査がなされており、今年度はそのトレンチの南に平行してトレンチを設定することになった。82-28次におけるこの道路敷内の調査と、この道路から「長吉1号線」までの区画整理道路部分のトレンチ調査については未報告であり、本書で併せて報告する。

84-29次調査は1984年8月10日に開始した。幅2mの東西トレンチの南1/4ほどは現代の用水路と重なっており、トレンチ南壁には土留めを施した。また、西端部は南側の工場のコンクリート製犬走が道路予定地内にあったため、トレンチ幅を狭くすることとした。

また、調査期間中、この道路敷内および「長吉1号線」までの南北区画整理道路敷内におけるガス管・電力ケーブルなどの埋設工事のために、小規模のピットないしトレンチによる試掘調査を実施し、さらに工事の立会を行った。調査は1984年9月27日に終了した。

（京嶋）

iii) 84-47次

調査地は「出戸川辺線」予定地内における83-32・53次調査の南部と西隣部、および83-53次調査の東部に位置し、「長吉2号線」につながる東西約25mの区間である。

1984年10月17日、「戸川辺線」予定地内の南北130m、東西6mの範囲を、重機により北から南へ掘削を開始し、現代の作土を除去した。掘削は北端から約40m南に位置する東西方向の灌漑用水路を避け、この約5mの未掘部分を境に、南北2区に分れた南区のトレンチは南北32mで、北区のトレンチは約90mとなった。

北区は地山層の上面が北から南に傾斜し、北端では古墳時代の掘立柱建物やビットなどが出土した。谷地形内では長原4層および6層上面で水田面が確認できた。一方、南区では北端で「馬池谷」(註1)の谷頭の一部が現われたが、ほとんどが谷部に当り、北端から約40m南の地点で急激に深くなって、地山層はTP+5.5m以下になる。また、南部30mは出水が激しく壁の崩壊が相次いだため、断面土層図を作成することができなかった。12月6日にすべての調査を終了した。

また、この地区の重機による掘削と併行して、10月23日から30日まで「長吉2号線」につながる東西の区画道路内で、長さ22.5m、幅3mのトレンチ調査を実施し、長原6層基底面で6世紀前半の土墳墓などを検出した。

iv)84-67次

調査は「長居公園通り」の南側に東西100mにわたって下水管を布設するため、長原遺跡西地区の北端部を東西に横断して発掘するものである。中央部分では下水管を地下鉄出入戸駅の擁壁部分に沿わせることから、調査の必要はなく、東・西2個所に分けて調査を行った。東区は全長22m、幅2mの「く」字形の調査区で、西区は長さ44m、幅2mである。現代の作土層までを重機で掘削し、以下は人力により各層理面ごとに調査した。東区では古墳の周溝を検出し、また、両区とも長原6層上面で水田畦畔を検出した。

調査期間は1984年12月17日から1985年2月1日までである。

(黒田)

v)84-70次

調査は西地区の整地工事に伴う立会調査であるが、さらに東南地区における整地工事に伴うトレンチ調査および来年度以降の調査予定地内の試掘調査も含まれている。ここでは西地区内における調査経過のみを記述する。

1985年1月8日に前書で報告した西地区Ⅲ区の南側の擁壁部分の立会調査がなされた。ここでは古墳時代の遺構・遺物が出土した。その後、1月16・28・29日に立会および試掘調査が行われたが、顕著な遺構・遺物は確認されず、当地区における調査は終了した。

(京嶋)

3) 長原遺跡南地区(84-48・73次調査)

当地区の東部に位置する塚ノ本古墳と、西部に位置する一ヶ塚古墳に挟まれた東西250m、南北300mの範囲では、1992年度現在で、100基を越える小方墳が発掘されており、密集した分布状況を呈している。このうち区画整理事業に伴う発掘調査では、1981年度に15基、1982年度に18基、1983年度に4基の古墳が調査され、すでに報告した。1984年度は6基の古墳を新たに発掘し、さらに、1982年度に発掘した2基の古墳についても、その一部を再発掘した。また、ほとんどのトレンチで古代の水田遺構を検出したほか、平安時代の柱穴も発掘され、この時代の屋敷地が存在することも明らかになった。

地区西部では、鎌倉時代から室町時代の主要な灌漑水路の一つと思われる大溝が発掘され、調査地東側を北流していた旧東除川との関係が注目される。

i) 84-48次

すでに82-19次[大阪市文化財協会1990]で調査された南北の区画整理道路の舗装工事に先立って、交差する東西の区画整理道路敷内に埋設管を事前に設置する必要があり、両者の交点付近において、幅2m、長さ約10~20mのトレンチ調査を9個所で行った。また、全長100mにわたるトレンチ調査を1個所で行った。



図6 長原南地区の調査位置図
(網かけ部分は現在までの既調査地)



写真2 84-48次調査の作業風景（西から）

発掘調査は1984年10月16日に開始した。調査中に当地区内では、埋設管・擁壁などの敷設工事や舗装工事が並行して実施されていたため、必要に応じて工事の立会を行い、67～69号墳〔大阪市文化財協会1990〕の墳丘を確認した。調査に際しては、既設の埋設管に注意し、道路工事や

農作業のための通路を確保することに努めたが、そのために古墳増丘の調査に必要な発掘範囲の拡張が充分でなかった。

また、工法変更により保存措置が取られた61～63号墳の墳丘が、ずさんな擁壁工事の掘削によって破壊される事態が生じた。埋戻して地下に保存された遺構が、再度掘削される可能性がある場合には、既調査地内であっても工事立会する必要がある、場合によっては再発掘も必要となろう。発掘作業は翌1985年2月18日に終了した。

ii) 84-73次

81-2次で東半部が調査された「長吉2号線」(東西の都市計画道路)の西半部の調査である。この南側の「出戸川辺線」で実施された82-27次調査〔大阪市文化財協会1990〕では、一ヶ塚古墳をはじめとする6基の古墳が発掘された。また、上述の都市計画道路をつなぐ南北の区画整理道路での83-52次調査〔大阪市文化財協会1992A〕のほか、巫女・馬・鶏形などの形象埴輪を出土した87号墳が発掘された83-38次調査や、堤を挟んで二重の周溝をもつ古墳を含む6基の古墳が発掘された91-18・53次の調査地〔久保和士1992〕とも隣接している。

84-48次調査が終了する前の1985年1月24日から現場作業を開始した。全長80mのトレンチ調査の予定であったが、発掘予定地中央にあった住宅の移転工事が遅れたため、中央部を除く予定地の西部から発掘を開始して、東部そして中央部と順次進めていった。

中央部では古墳を検出したため、発掘範囲をできるかぎり拡張した。現場作業は1985年3月18日で終了した。

(京嶋)

4) 長原遺跡東南地区(84-70次調査)

長吉長原東3丁目の擁壁工事に伴う調査である(図7)。1985年2月14日に調査を開始し、3月7日まで行った。

調査は、塚ノ本古墳(長原1号墳)の墳丘上における擁壁工事に伴うトレンチ調査と、本調査に先立つ「長吉4号線」内における坪掘り調査である。後者は1986・1987年度調査で本調査がなされているので、図7中に地点のみを示し、当該年度の報告書で詳述する。ただ坪掘り調査の位置は塚ノ本古墳が前方後円墳であると想定したばあい(註2)の前方部の位置に当るが、その痕跡は認められなかった。したがって、円墳の可能性が増大したことのみを記しておく。

塚ノ本古墳上における調査地は、現状が民有の畑地であったために、掘削深度や調査期間などにきびしい制限が加えられた。墳丘上面は後世の土壌や溝で攪乱されていたこともあり、墳丘の断割りはごく一部行っただけである。また、墳丘は周濠に向かって上面の高度を下げていったが、掘削深度の制限のため、現地表面から約1mの深さまでしか追跡できなかった。

(黒田・京嶋)

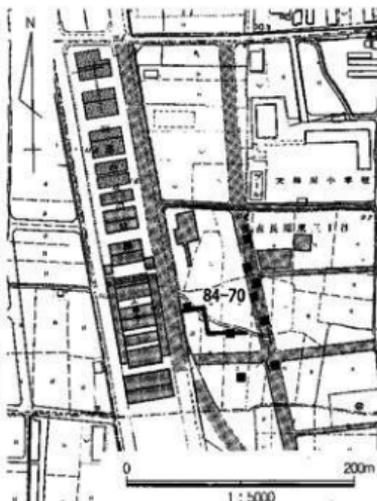


図7 長原東南地区の調査位置図
(網かけ部分は現在までの既調査地)

註)

(1) 調査書[大阪市文化財協会1992]で用いた呼称である。

(2) [長原遺跡調査会1978 p.90]において、「墳丘、周濠の規模や現存する水田畦畔の形態を考慮」して推定された。

第Ⅱ章 調査の結果

第1節 瓜破遺跡東南地区の調査(84-24次調査)

1) 調査地の層序

i) はじめに

当地区は、現在こそ新大和川に分断された南の松原市域や藤井寺市域などとは無関係のように考えられがちだが、現地地形・地山層上面とも南から北に緩やかに傾斜する河内台地の先端部に位置し、現地表面の高さはTP+12.8mである。本調査地は河内国丹北郡条里の6条4里(註1)に比定され、小字名は「墓ノ前」、「堤崎」(註2)である。

今回発掘された7世紀後半の遺構は長原6層相当と考えられる紫灰色粘土層の基底面で検出されたが、この粘土層には多くの遺物が含まれていた。Ⅱ区(調査地をⅠ～Ⅲ区に細分。図9参照)の調査区の壁面を精査中に出土した22点の銭貨は後述するように、奈良時代のもので、まとまって出土したことから、本層上面から掘込まれた遺構に伴っていた可能性がある。したがって、7世紀後半の建物や井戸の廃絶後も、当地は人の往来の頻繁な土地であったと考えられる。

ii) 層序(図8)

調査地の基本的な層序はⅡ区の南壁で示した。沖積層上部層Ⅰは現代の水田作土層を含めて次の4層に分れる。Ⅰ・Ⅲ区では沖積層上部層はほとんど堆積していなかった。ここでは前書で報告した83-44次の成果も踏まえて、長原遺跡の標準層序[大阪市文化財協会1992A]に対比して記述する。

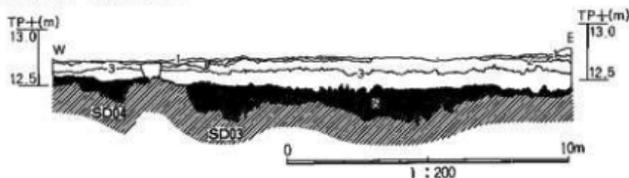


図8 調査地の層序

沖積層上部層Ⅰ

長原1層：現代の作土層である。

長原2層：褐色砂混りシルトで、層厚は5cmである。83-44次調査では第2層とした。

長原3層：黄褐色ないし黄褐色砂混りシルトで、層厚25~30cm、瓦器・須恵器の細片を含む。83-44次調査では第3b層とした。

長原6層：紫灰色砂混りシルトで層厚10~15cmである。特にⅡ区で堆積がみられ、7~8世紀の須恵器・土師器を含む。83-44次調査では第4層とした。

沖積層下部層(地山層)

地山層は黄褐色粘土ないし砂礫である。

2) 飛鳥時代の遺構

i) 掘立柱建物・柵

SB01(図9・10、図版1)

Ⅲ区で検出した桁行7間(12.95m)、梁行2間(3.95m)の掘立柱建物である。棟方向はN7°Wを示す。柱間寸法は桁行方向が1.65~2.00m、南側の梁行方向が東から1.95m、2.00mである。梁行がほぼ6.5尺等間と考えられるのに対して、桁行となる東側柱列はやや不揃いで、

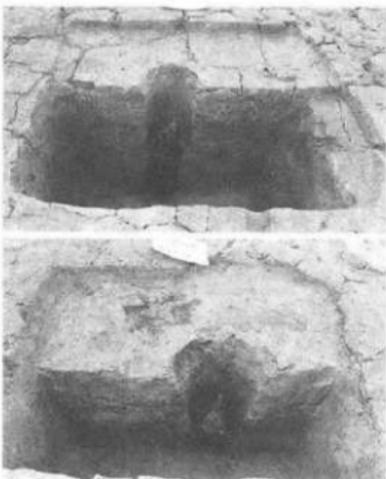


写真3 SB01柱穴

南および北から各2間目の柱間が約5.5尺(1.65m、1.68m)と狭くなる傾向がみられる。しかし、西側柱列ではその傾向はみられない。掘形は長辺0.6~0.7m、短辺0.5mの長方形を呈し、深さは0.2~0.4mである。2段に掘りくぼめられたものもある。柱痕跡は直径0.10~0.15mである。西側柱の南端から2・3番目の柱穴には柱根が遺存していた(写真3)。掘形の埋土は灰色砂混りシルトと黄褐色粘土質シルトが混在し、柱痕跡は灰色砂混りシルトとなっている。東側柱列の東に0.8m離れて、平行する浅い溝状遺構があり、建物に伴う遺構と思われる。遺物は出土しな

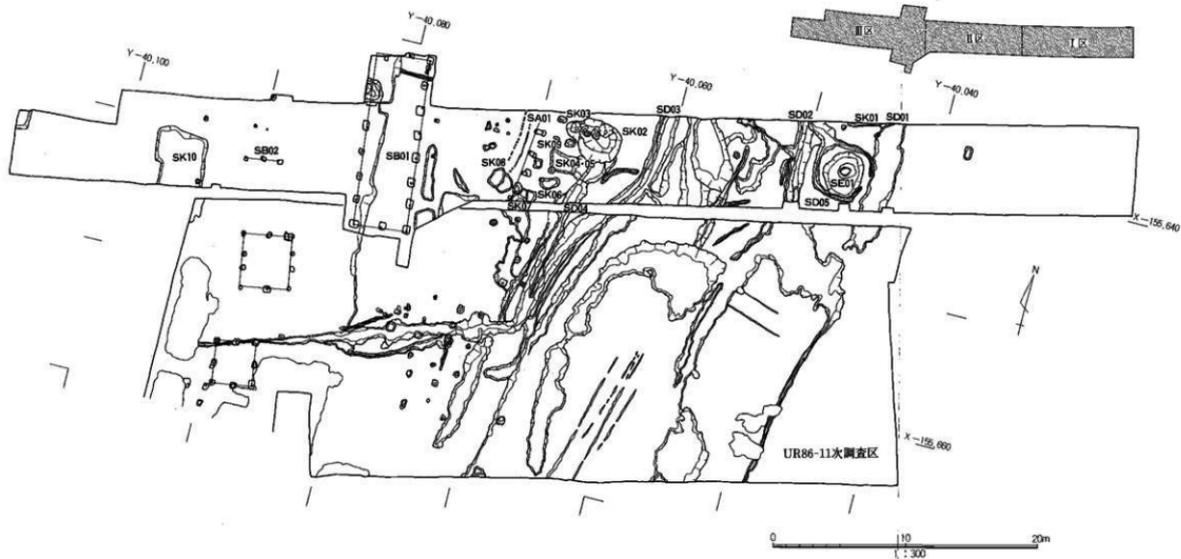


图9 遺構全体図

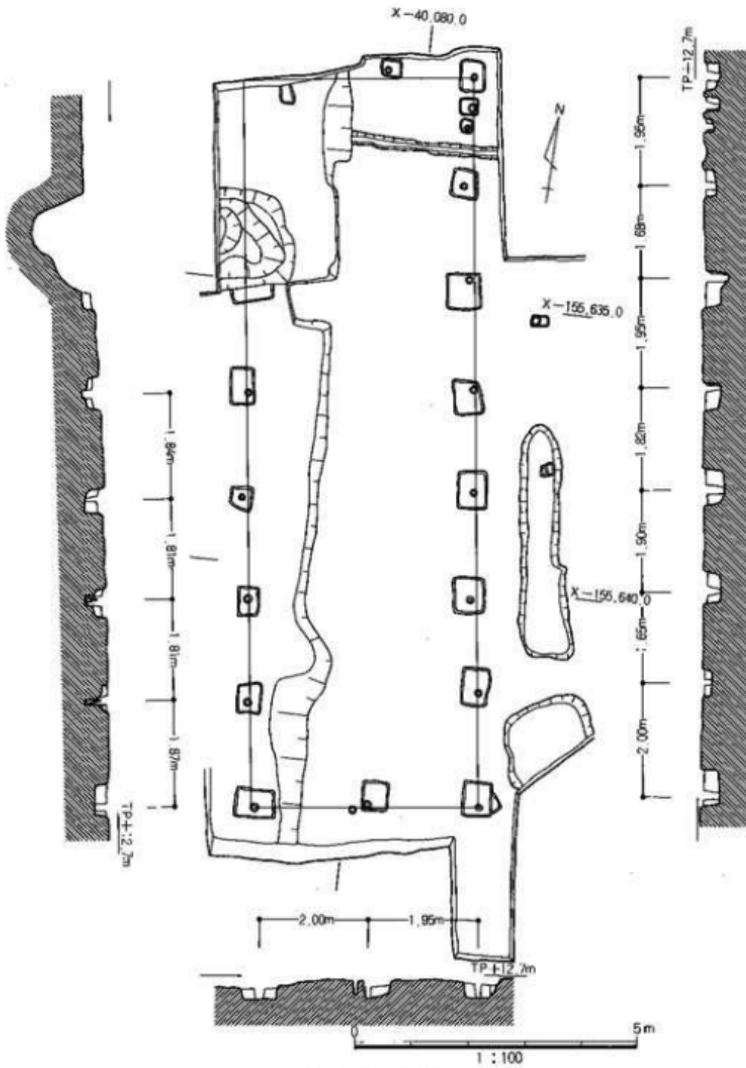


図10 SB01実測図

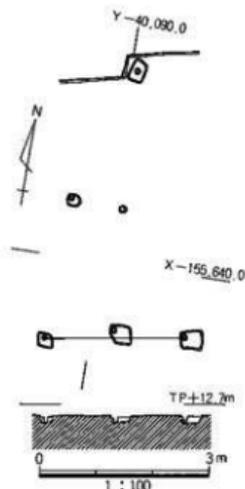


図11 SB02実測図

かった。

柱掘形内から土師器の杯A(1)・甕(2)・平瓶(3)の細片が出土しており、ほかにも須恵器の細片が出土した。

SB02(図9・11)

SB01から西に6.2m離れたⅢ区に位置し、南北棟建物と推測される。南甕と推測される2間分(2.46m)を検出したが、ほかの柱穴は検出できなかった。建物の棟方位は $N8^{\circ}30'W$ に復元でき、SB01と近似した値を示す。

遺物は出土しなかった。

SA01(図9)

Ⅱ区で検出した南北3間以上(5.25m以上)の櫓で、南側のUR86-11次調査で連続する柱穴は検出されていないが、北に続いている可能性はある。柱間寸法は北から南に1.70m、1.65m、1.90mとばらつきがある。掘形は長辺0.4~0.5m、短辺0.3mの長方形を呈し、深さは0.3~0.5mである。柱痕跡は直径0.1m前後であった。掘形の埋土は灰色シルトで、柱痕跡は褐灰色シルトである。方位は $N6^{\circ}30'E$ を示す。

柱掘形から須恵器・土師器の細片が少量出土した。

ii) 井戸

SE01(図9・12、原色図版1、図版2・3)

I区で検出した丸太割抜き井戸である。掘形の平面形は長径3.5m、短径3.0mの不整楕円形を呈する。井戸側は掘形の中央部からやや北寄りに位置し、平面形は上部が長径1.5m、短径1.0m、底部が長径0.7m、短径0.5mと楕円形を呈する。深さは約6mである。井戸側の構造は、割抜いた丸太材を3枚組合せた「丸太分割割抜き井戸」(註3)である。図29の217~219の各材には大小の柄穴が数箇所みられる。また上面より深さ約1mの掘形内には、井戸側を囲むように補強材とも考えられる板材の配列が認められた。井戸内の埋土はおおむね灰色または灰青色砂質粘土で、色調・土質に明瞭な差はなく、最下層には暗灰青色粗粒砂が堆積する。また井戸が完成したのち、周囲に幅0.15~0.40m、深さ0.05mで、断面がレンズ状を呈する小溝を巡らせており、隣接する溝SD02に続く。井戸の掘形内からは土師器杯C(8)、須恵器壺(41)などやや古い時代の土器が出土した。井戸内からは須恵器の杯B蓋・

平瓶・提瓶・壺、土師器の杯C・壺・甕・高杯などの完形品を含む多数の土器をはじめ、木製品、桃核などの植物遺体(図版31)が出土している。また、土師器高杯の小型模造品(9)や斎串と思われる木製品(216)が出土していることから、井戸における祭祀が行われた可能性が考えられる。

iii)土壌

SK01(図9)

I区のSE01の北側の調査地の北壁際で一部を検出した土壌で、深さは0.23mである。

SK02(図9・13、図版4)

II区で検出した長径4.3m、短径3.0mの不整楕円形を呈する土壌状の落込みである。斜面ないしは底面に直径0.5~1.0mの円形のピット状のくぼみが4個みられ、深い所では約1.8mを測る。掘土は地山の黄橙色粘土や砂礫のブロックを含む灰色砂泥りシルトないし粘土で、ピット状のくぼみ部分は砂礫層を介在して、灰色ないし青灰色の粘土が水平に堆積していた。須恵器・土師器片が多数出土したが、出土遺物に時期差はほとんど認められなかった。また遺構の性格につい

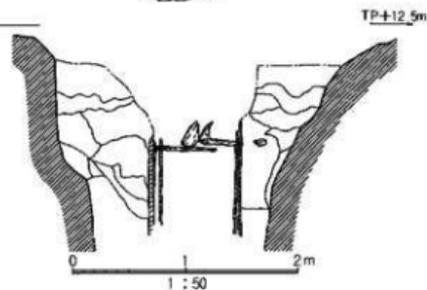
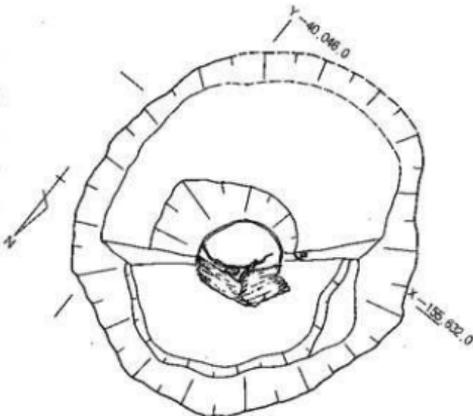


図12 SE01実測図

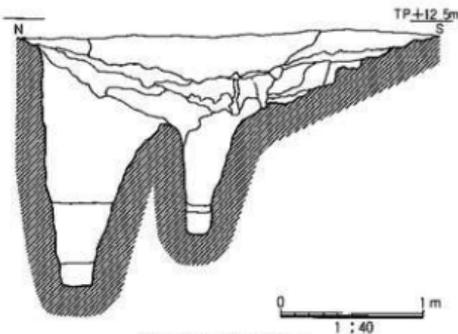


図13 SK02断面実測図

表2 瓜破東南地区土壌一覧表

遺構名	形状	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	標土	出土遺物	備考
SK01	不明	—	—	0.23		176	
SK02	不規則円形	4.3	3.0	1.80	灰色砂混りシルト～粘土	59～63・182	
SK03	円形	1.2	1.1	1.10	紫灰色砂混りシルト	103	SK02と一緒
SK04	長方形	1.9	1.3	0.05	紫灰色砂混りシルト	111	
SK05	不明	3.3	2.2	0.10	淡灰色粘土質シルト	114	SK02・04とSD04に切られる
SK06	楕円形	0.8	0.6	0.10	紫灰色砂混りシルト	121	
SK07	不明	2.7	—	0.13	紫灰色砂混りシルト	106	SA01の柱穴に切られる
SK08	楕円形	1.5	1.0	0.20	紫灰色砂混りシルト	99・100・107・112 113・115・116	
SK09	楕円形	0.8	0.5	0.30	紫灰色砂混りシルト	101・117・119・122	
SK10	長方形	—	3.8	0.05		110・214	

ては水溜施設・井戸とも考えられるが、現段階では不明である。

土壌群(図9)

Ⅱ区のSK02から西側の東西10mほどの範囲に11基の土壌が集中して分布している。平面規模は0.5～2.0m、深さは0.10～0.25mで、平面形は楕円形や長方形を呈する。埋土は紫灰色砂混りシルトを主体とするものが多いが、淡灰色粘土質シルトや灰色砂礫混りシルトのものもある。表2にⅠ～Ⅲ区のおもな土壌の規模を示す。

iv) 溝

SD01(図9)

Ⅰ区で検出した南北方向の溝である。幅1.7m、深さ0.05～0.10mで、浅い皿状を呈する。埋土は灰色シルトで、須恵器杯(109・120)などが出土した。

SD02(図9、図版2)

Ⅰ区で検出した南北方向の溝である。幅1.3m、深さ0.1～0.2mで、断面は逆台形を呈する。埋土は灰色砂混りシルトで、土師器皿(102)、須恵器杯蓋(108・118)などが出土した。

SD03(図9、図版2)

Ⅱ区で検出した南北方向の溝である。幅1.3m、深さ0.25mで、浅い舟底状を呈する。埋土は暗灰色シルトで、土師器甕(104)などが出土した。

SD04(図9、図版2)

Ⅱ区で検出した溝で、SK02につながっている。幅1.2m、深さは0.1～0.3mで、溝底はSK02から南に向って段状に低くなっている。埋土は灰色シルトである。

SD05(図9、図版2)

Ⅰ区の井戸SE01の周囲を巡る溝である。溝と井戸側との距離は1.5～1.7mで、井戸側を

中心とする一辺の長さが約4.3mの隅丸方形を描くように掘られている。この隅丸方形は北で2~3° 東に振る方位を示し、正方位に近い。東辺は溝幅が狭くなり、その中央部の約1mの間は途切れていた。また、北西隅から北西方向に幅1m、深さ0.15~0.30mで、北に向って深くなる一連の溝がある。また、SD05は一部で井戸SE01の掘形を切っており、井戸がつくられたのちに掘られたものである。以上のことから、SD05はSE01の周囲に設けられた排水用の水路であると考えられる。

(黒田)

3) 飛鳥・奈良時代の遺物

出土した遺物はほとんどが飛鳥時代に属するが、奈良時代に下る遺物も少量含まれている。以下に、主要な遺構から出土した遺物およびこれらを覆う包含層から出土した遺物について記述する。器種名は、食器類についてはおおむね『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』Ⅱ〔奈良国立文化財研究所1978〕の用例に従うが、食器類の一部やその他の器種については、必要に応じて本書独自の器種名を併用する(図15・16参照)。

i) 柱穴出土の土器(図14)

SB01の柱穴掘形から出土した土師器には杯A(1)、甕C(2)、平瓶または提瓶(3)(写真4)などがある。1・2は内外面の調整が不明の細片である。3は口縁部で、内外面はヨコナデ調整である。内面の体部との接合部は明瞭な段になり、接合痕と口縁端は平行せず、口縁部が体部の中心になかったことが窺われる。胎土は精良で緻密なものである。土師器の平瓶は羽曳野市茶山遺跡で口縁部の資料が報告されている〔羽曳野市教育委員会1984 p.90、図60-23〕。この資料は外面に縦方向のヘラミガキが施され、一般の土師器と共通の調整手法が用いられている点で3と異なるように思われる。したがって、3は焼成不良の須恵器といえるかもしれない。ほかに須恵器甕などの細片が少量出土した。

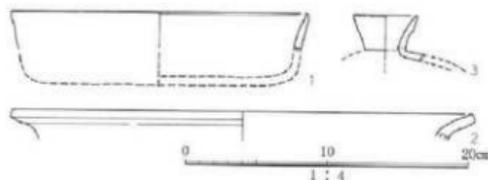


図14 SB01柱穴出土土師器実測図



写真4 土師器平瓶

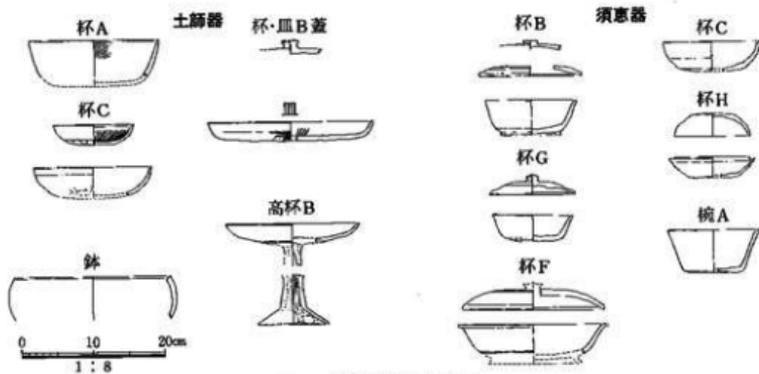


図15 土器の器種分類(1)

ii) SE01 出土の土器

土師器(図17・18、原色図版2、図版22~24)

杯C(4~8)、高杯(9・10)、甕(30)、甕(11~29)がある。

杯Cの4~7は外底面はユビナデ調整で、内面に放射暗文を施す。そのうちの5~7は内底面に簡略化された螺旋ないし円形の暗文があり、6・7にはさらに焼成後にヘラで「×」、「⊗」の記号が刻まれている。8は外底面に木葉の圧痕が残っている。4~7は径高指数25~26であるが、8は34と古い様相を呈する。

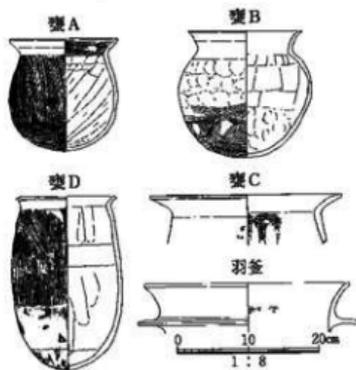


図16 土器の器種分類(2)

高杯9は小型の模造品である。10は脚柱部の破片で、内面の紋り痕が顕著である。

中・小型の甕は体部外面をハケ調整し、内面をヘラケズリして器壁を薄く仕上げる甕A(11~19)と、外面にユビオサエ痕を顕著に残し、おもに内面上半を板状の工具で平滑にナデ調整する甕B(21~29)がある。また、長胴の体部をなす20を甕Dとする。

甕Aの口縁端部は丸くするものや、外方につまみ出したり上方につまみ上げるものがあり、体部は肩部の張りが小さく、最大径がやや下方にある。体部最大径および器高が10~

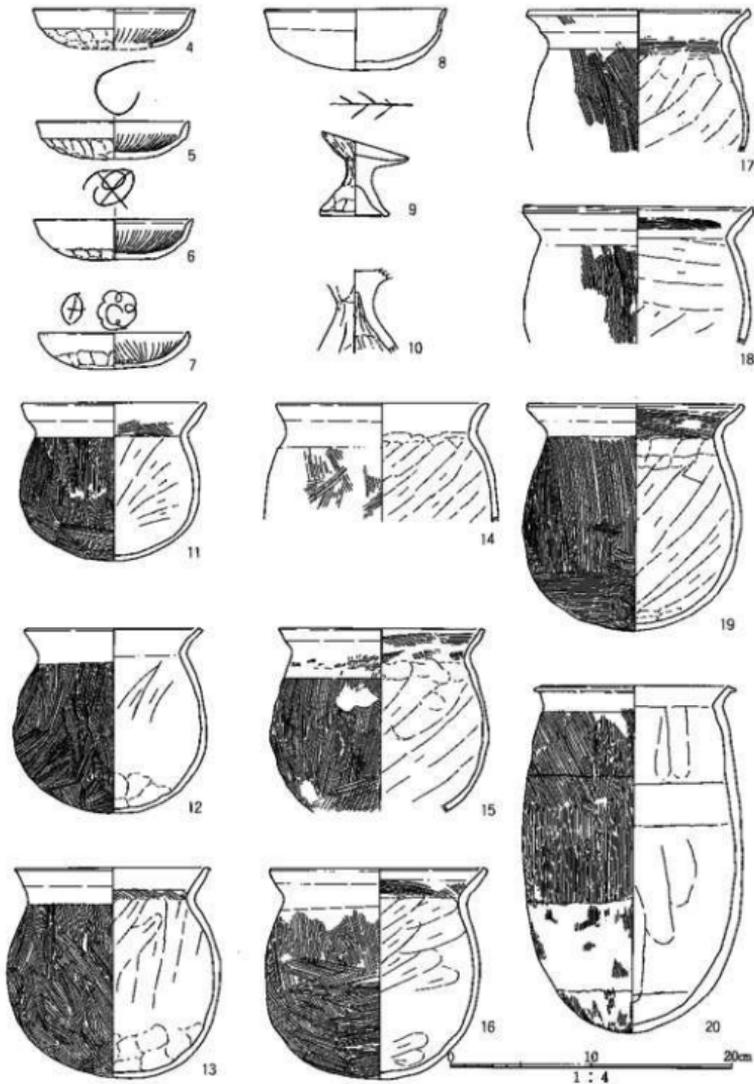


图17 SE01出土土器実測图(1)

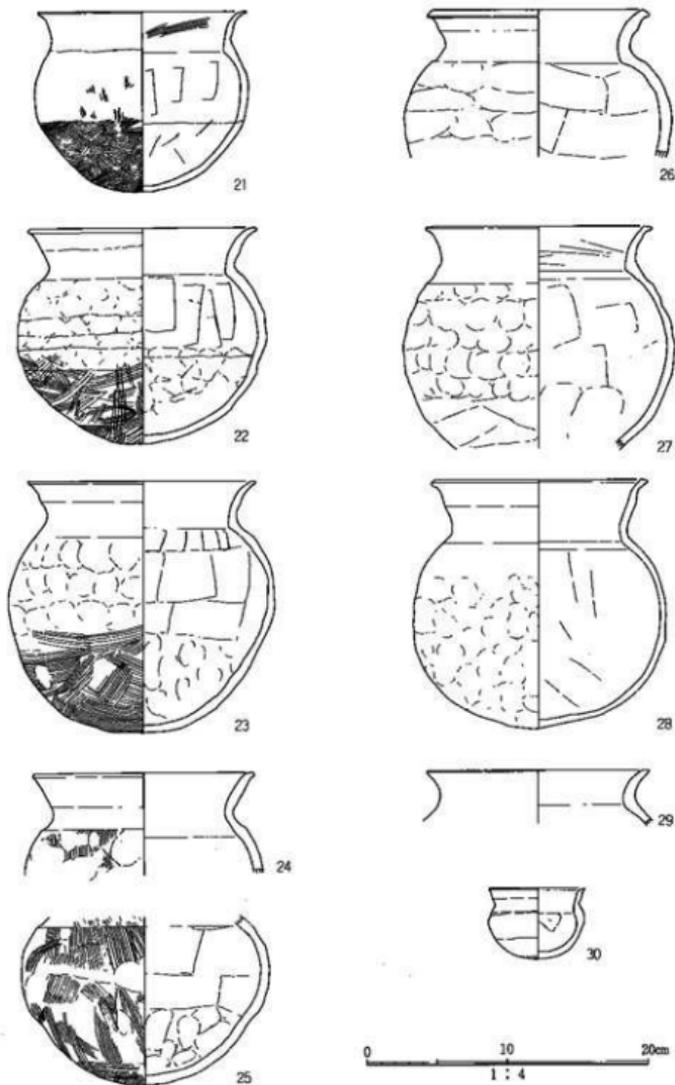


図18 SB01出土土師器実測図(2)

14cmのAII (11・12)と15~16cmのAI (13~19)がある。胎土は細粒砂を含む精良なもので、焼成も良好である。柏原市船橋遺跡における「甕B」[原口正三1962]に相当する(註4)。

一方、甕Bは体部外面や口縁部内面に粗いハケメを残すもの21~25と、ハケメがまったく認められないもの26~29がある。前者の口縁端部は外反して丸くおさめられるが、後者は外反して上部部に水平な面を作る。体部はほぼ球形を呈しており、体部最大径が14~16cmのBII (21)と17~20cmのBI (22~28)がある。船橋遺跡では「壺A」[原口正三1962]と呼称されている。

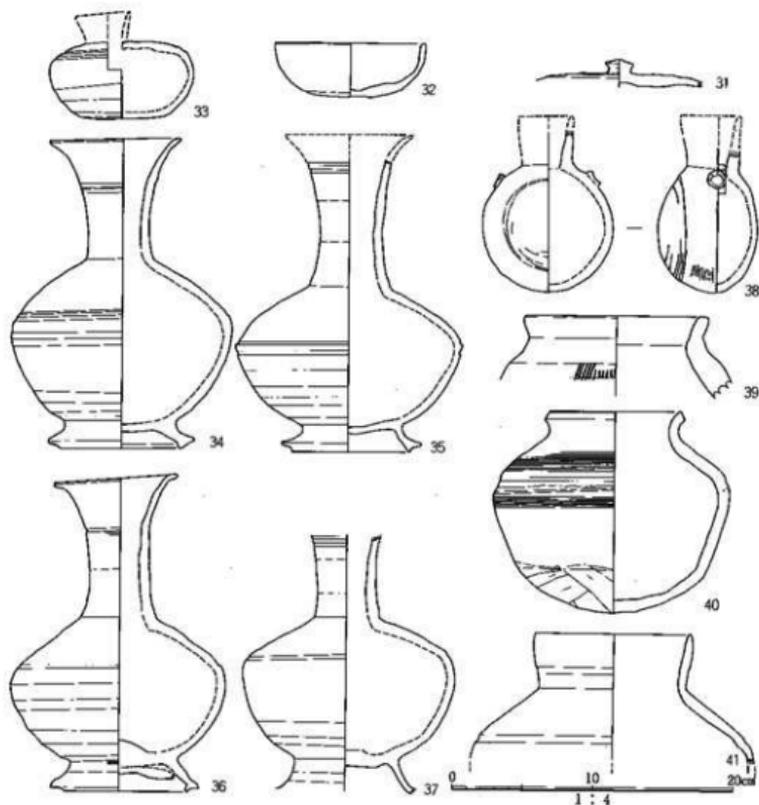


図19 SB01出土須恵器実測図(1)

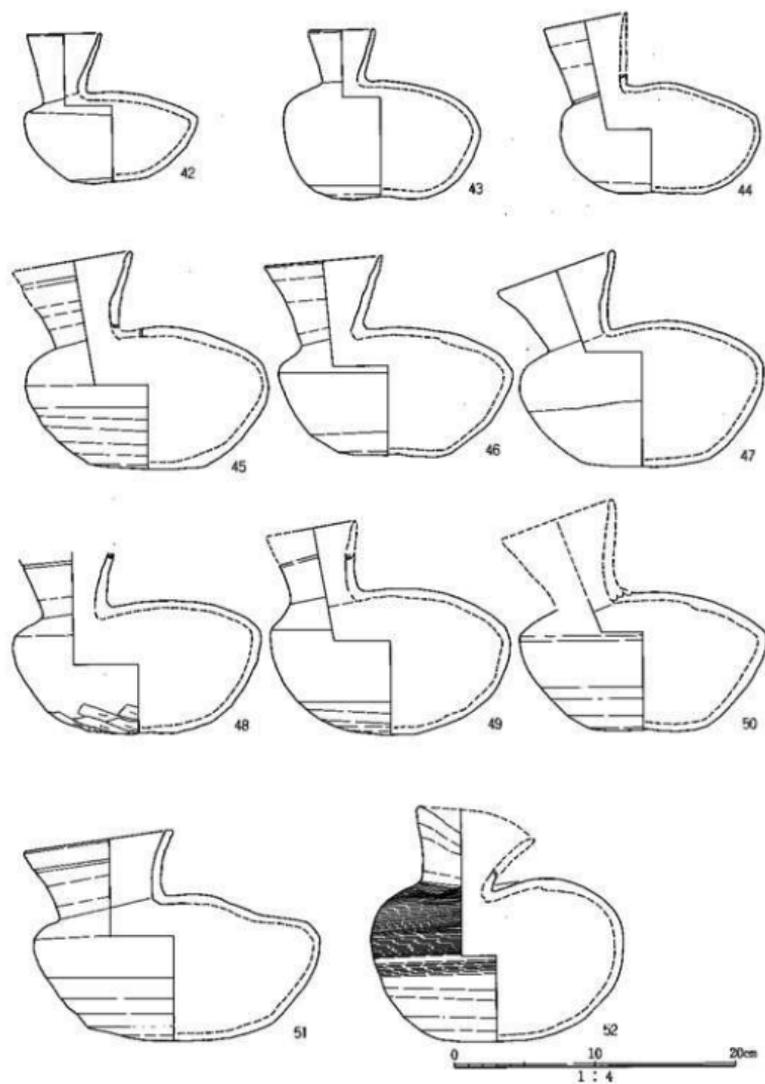


图20 SE01出土須恵器実測図(2)

甕A・Bは中・南河内地域における飛鳥・奈良時代の主要な器種であるが、大阪市難波宮下層遺跡(註5)や奈良県藤原宮跡(註6)、雷丘東方遺跡(註7)などでも他の器種と共に出土しているものである。また、堺市百舌鳥陵南遺跡[大阪府教育委員会1975]、同市翁橋遺跡[堺市教育委員会1984]などの和泉北部の遺跡や、大阪市南住吉遺跡、同市山之内遺跡などの住吉地域でも甕Aが出土している(註8)。

甕Dの20は口縁部が短く、端部を外方につまみ出す。体部は張りのない長胴形である。体部外面は縦方向のハケ調整で、下1/3はハケメが消えている。内面は下から上に向うナデ調整である。内面に粘土紐の接合痕が残っている。器壁はやや厚い(註9)。

30は甕Bと同様の形態と調整手法をとる小型壺である。外面はナデ調整するが、粘土紐の接合痕を残している。内面は板状工具でナデ調整し、平滑に仕上げている。

須恵器(図19・20、原色図版2、図版25～27)

杯B蓋(31)、杯G(32)、長頸壺(34～37)、短頸壺(39・40)、直口壺(41)、提瓶(38)、平瓶(33・42～52)がある。

31は天井部の破片で、口縁部を欠く。外面はヘラケズリし、頂部にやや扁平な宝珠つまみを付ける。32は完形品で、口縁部は丸くおさめ、底部外面はヘラキリののちにナデ調整して丸みをもたせている。

長頸壺はいずれも最大径が中位からやや上方にある体部に、直立して中ほどから緩やかに外反する口縁部が付き、底部には外方に大きく張出した脚台を付ける。口縁部の中位と体部の最大径部またはそのやや上方に1ないし2条の凹線を平行して施す。36は脚台部の三方にヘラを横にして突きさしてスカシ孔としている。また、脚台内の底部には杯類と思われる土器片が付着している。調整は体部外面の下半部がヘラケズリのほかはヨコナデ調整である。

短頸壺の39は全体的に器壁が厚く、体部は外面を平行タタキしているが、火影れを生じている。40は体部中位より上方が最大径部となる体部に、短く外反して端部が面をなす口縁部が付く。体部最大径部に2条の凹線を平行して施す。底部外面は静止ヘラケズリを行い、体部上半にはカキメを施す。直口壺の41は下半部を欠失する。口縁部外面のやや下位と体部最大径部のやや上方に1条の凹線を施す。

38は小型の提瓶で、口縁端部を欠く。体部には、直径1cmの粘土円板を口縁部を挟んだ両側に貼付ける。平瓶には体部最大径が16cm以上の大型品(45～52)と、14cm以下の小型品(33・42～44)がある。45・48・49・51の口縁部外面には凹線を施す。調整は体部下半に

第二章 調査の結果

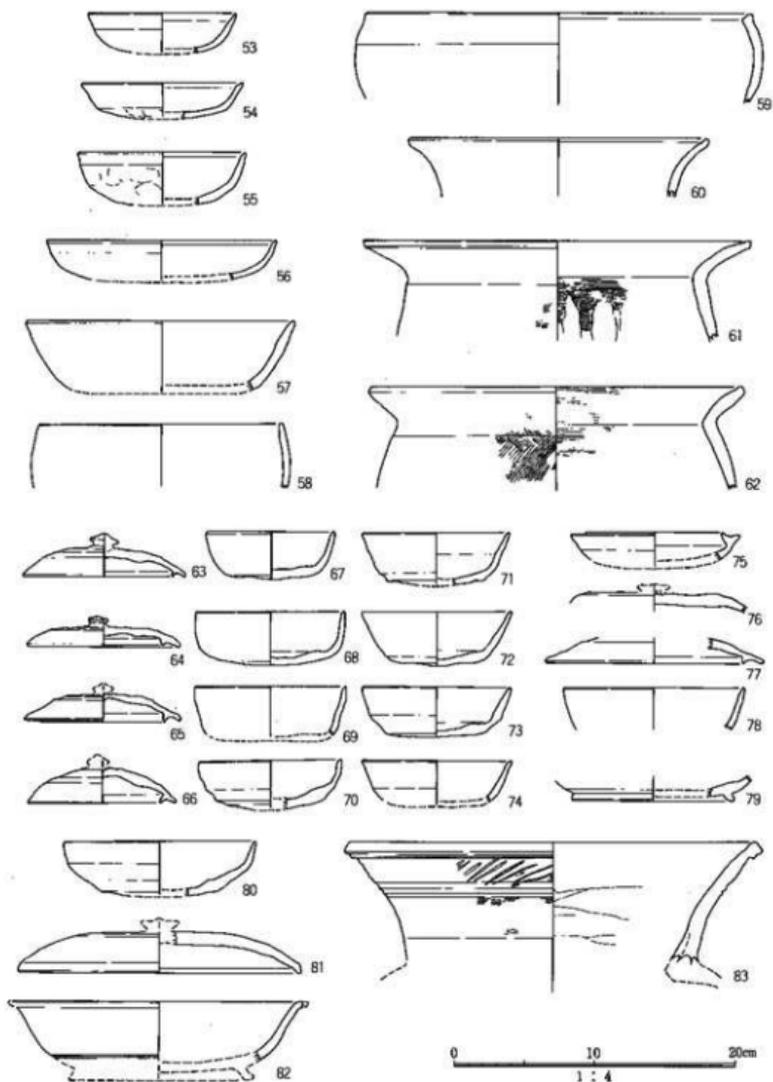


図21 SK02出土土器実測図
上鉢器(53~62)、須恵器(63~83)

ヘラケズリを残すものが多いが、小型の42~44はヨコナデによりヘラケズリ痕をあまり残さない。また、48の外底面は静止ヘラケズリを施している。51の体部の2個所にヘラで漢数字の「九」の文字が刻まれている(図版27)。

iii) SK02 出土の土器(図21、図版28)

土師器

杯C(53~56)、鉢(57~59)、壺C(61・62)、羽釜(60)がある。杯Cのうち53~55は口径10.3~11.9cmの小型で、器面は風化して内外面の調整は不明であるが、外底面はおおむねナデ調整と思われる。56は口径16.1cmで、内外面の調整は不明である。57・58の鉢は小型品で、57は外傾して直線的に延びる体部をなし、器壁は厚く、底部は平底になると推測される。胎土は砂粒を含んで粗く、内面は汚れている。58は内湾ぎみの体部をなし、口縁端部を薄く仕上げた。大型品の59も内湾する体部をなすが、口縁端部はヨコナデによってやや凹んだ面を作る。胎土は精良である。

61・62は口径20~30cmの大型で、口縁端部は面を作る。体部外面は縦ないし斜め方向のハケ調整をなし、内面は横方向のハケ調整後、ナデ調整を施す。61は長頸壺と思われるが、62は体部中位に把手を付けた壺である可能性がある。このような大型品を壺C(図16参照)と呼称する。60は羽釜である。口縁部は外反して長く、端部は上方につまみ上げる。胎土は生駒西麓産で、赤褐色を呈する。

須恵器

杯H(75)、杯B(78・79)、杯B蓋(76・77)、杯C(80)、杯G(67~74)、杯G蓋(63~66)、杯F(82)、杯F蓋(81)、壺(83)のほか、長頸壺・平瓶がある。

75は口縁部の断面形が三角形となるもので、口径は9.6cmである。

杯Bは外面不調整の底部の外周に高台の付く79と、やや外傾して直線的に延びる口縁部の78で、後者の口径は12.8cmである。77は口縁部内面に身受けのかえりがあり、口径は15.4cmである。

80は底部をヘラキリ後、不調整とし、丸みをもった体部をなす。杯H蓋に類似した形態だが、復元口径が13.4cmで、これに見合う法量の杯Hは出土していない。土師器杯Cに似た形状であり、径高指数が28と飛鳥ⅡからⅢの土師器杯Cと等法量であることから、須恵器杯Cと呼称して報告する。

杯Gは体部の外傾が顕著でなく、底部から直立ないしは内湾ぎみに立上がる67~70と、平底の底部から外傾して直線的に延びる体部となる71~74とがある。前者には復元口径が



写真5 車輪文当て具直

10cm以下のもの(67)が含まれる。後者は飛鳥Ⅳに出現する杯A(註10)に近い形状であるが、口径は11cm未満であり、杯Gの系譜である。外底面はすべてヘラキリ後不調整である。杯G蓋63~66は天井頂部に扁平な宝珠つまみが付くものであるが、65・66のつまみは欠損する。天井部外面はヘラケズリしている。口径は11cm前後である。

82は丸みをもった体部で、口縁端部を外方に小さく屈曲させる。体部外面の下位に平行する2条の浅い凹線を施す。内外面はヨコナデ調整する。胎土は砂粒を含む緻密なもので、軟質に焼成され、灰白色を呈する(註11)。同様の色調と胎土の土器は、数量の少ない口径20cm前後の杯蓋や後述する杯F蓋81にみられる。81は口径20.0cmで、口縁端部をわずかに下方に屈曲させ、丸みをもった天井頂部につまみを付けたものであるが、つまみは欠損している。天井部外面の上半はヘラケズリ、その他はヨコナデである。胎土は1~2mmの砂粒を含み、焼成がやや甘いために軟質で、白色を呈する。

82は丸みをもった体部で、口縁端部を外方に小さく屈曲させる。体部外面の下位に平行する2条

83は反外する口縁部で、端部は厚く、上端に面を作って断面方形をなす。口縁端部直下に稜線を引出し、端部と一体となっている。口縁部外面の中心よりやや上方に2本1組の稜線を作り、これと口縁直下の稜線との間にヘラにより斜行する平行線を線刻する。口縁部下端の剥離面にはヘラケズリした痕跡がみられ、口縁部を別にして体部に載せたことがわかる。また、接合に際して、特に内側に補強のための粘土が貼られたため、頸部となる下端部の厚みが増している。

図示しなかった長頸壺・平甕はいずれも口縁部の破片である。また、体部内面に車輪文の当て具痕を残す破片が1点ある(写真5)。これは体部外面を平行タタキのちカキメ調整する壺の頸部から体部の破片で、焼成があまく灰白色を呈する。軟質で81・82と同様の特徴をもつ(註12)。

iv) SD04 出土の土器(図22、図版29)

土師器

杯A(85)、杯C(84)、高杯B(86~88)、甕B(89)、甕C(90)、羽釜(91)、鍋(93)、把手(92)がある。

85は直立する体部で、口縁端部を内面にわずかに肥厚させる。体部外面は密にヘラミガ

キを施し、内面には傾きの異なる上下二段の斜放射暗文が認められる。底部は欠損する。

84は外面下半はナデ調整で、内面に放射暗文を施す。

高杯Bの86・87は浅い皿状の杯部で、87の体部外面には底部との接合部の段が残る。88は柱状部外面を縦方向にナデ調整する脚部である。裾部内面はユビオサエによる凹凸が顕著である。

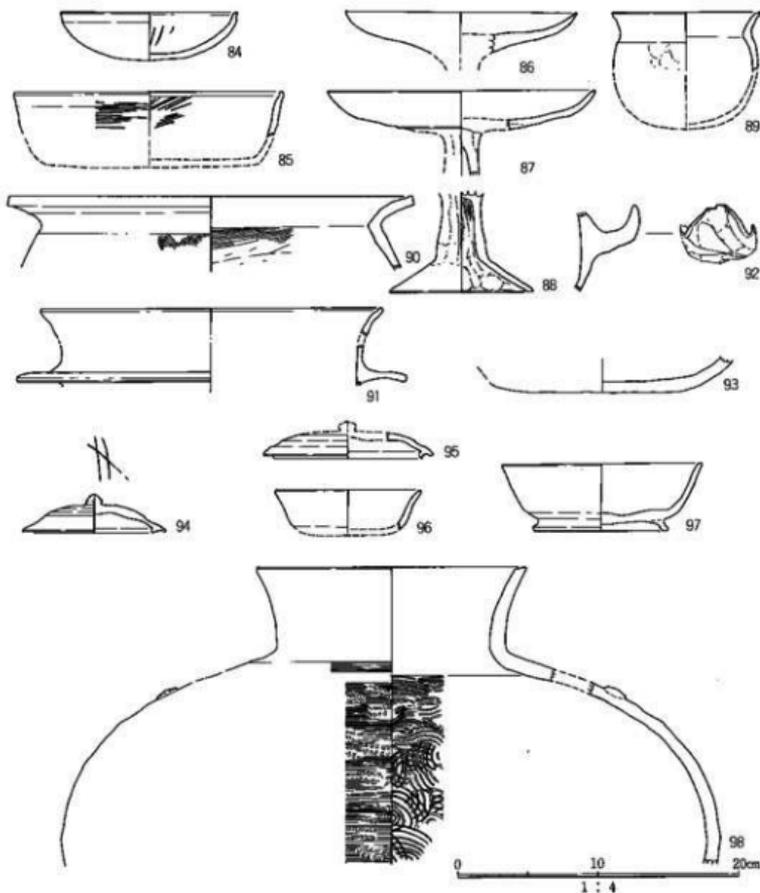


图22 SD04出土土器実測図
土器器 (84~93)、須恵器 (94~98)

89は体部外面がユビオサエ、内面はナア仕上げである。口縁端部の上端に面を作る。90は端部に面を作る口縁部で、体部外面はハケ調整、内面はハケ調整後にヘラケズリする。91は長胴形の体部に外反する長い口縁部が付く器形であり、胎土は生駒西麓産である。93は平底をなす底部片で、内面に魚け付いた物質が見られ、鍋の底部と考えられる。92は三角形の粘土板を上方に屈曲させており、甕Cまたは鍋の把手であろう。

須恵器

杯G(96)、杯G蓋(94・95)、杯B(97)、壺(98)がある。

96は底部を欠き、外傾する体部である。94は天井頂部にやや高い宝珠つまみが付き、その横に平行する2条の線刻とそれを斜めに横切る線刻がある。97は底部外周のやや内側に高台を貼付ける。体部は外傾して直線的に延びる。外底面はヘラケズリし、その他はヨコナア調整する。98は上端に面を作る直口甕で、体部外面の肩部に直径1.5cmの粘土円板を2個以上貼付けているが、その数と位置関係は不明である。体部の外面は格子タタキののちカキメ調整し、内面には同心円文の当て只痕が顕著に残る。

v) Ⅱ・Ⅲ区土城出土の土器(図23、図版29)

以下に記述する土器の出土遺構は表2に記載している。

土師器

杯C(99~101)、甕A(103)、把手(106・107)がある。

杯Cは口径12cm前後の99・100と17.2cmの101がある。いずれも内外面の調整痕は不明瞭である。103は甕Aの上半部で、あまり外反しない口縁部の端部は上方につまみ上げる。体部外面はハケ調整、内面は口縁部が横方向のハケ調整、体部はヘラケズリである。106・107は三角形の粘土板を上方に屈曲させたものである。

須恵器

杯H(110)、杯G(114・115)、杯G蓋(111~113)、杯B(119)、杯B蓋(116・117)、碗A(121)、鉢(122)がある。

110はヘラキリにより広い平底とする。114・115の体部は平底から外傾して直線的に延びる形態をなし、杯Aに類似する。復元口径はそれぞれ11.8cm、10.6cmである。杯G蓋は天井部外面をヘラケズリし、頂部に宝珠つまみを付ける。口径は111が12.3cm、113が11.8cmである。119は底部外周のやや内側に小さい高台を付ける。底部外面はヘラケズリする。116は口縁部内面に身受けの小さなかえりが付く。117は口縁部内面のかえりがなく、砂粒の少ない精良な胎土である。121は平底から外傾して直線的に長く延びる体部で、底部外面

はヘラキリ後にナダ調整している。今回の報告資料の中で確認できた唯一の椀Aである。122は直径7.4cm、厚さ1.0cmの粘土円板にやや外傾して直線的な体部が付くもので、古墳時代以来の器形である。欠損する上部の形態は不明である。

vi) SD01～03・05出土の土器(図23、図版29)

土師器

皿A(102)、小型壺(104)、甕C(105)が出土した。

102は体部外面はヘラミガキを、底部はヘラケズリののちにヘラミガキを施して仕上げ。内面には放射略文がある。104は短い口縁部をもつ小型の壺である。口縁部外面がヨコ

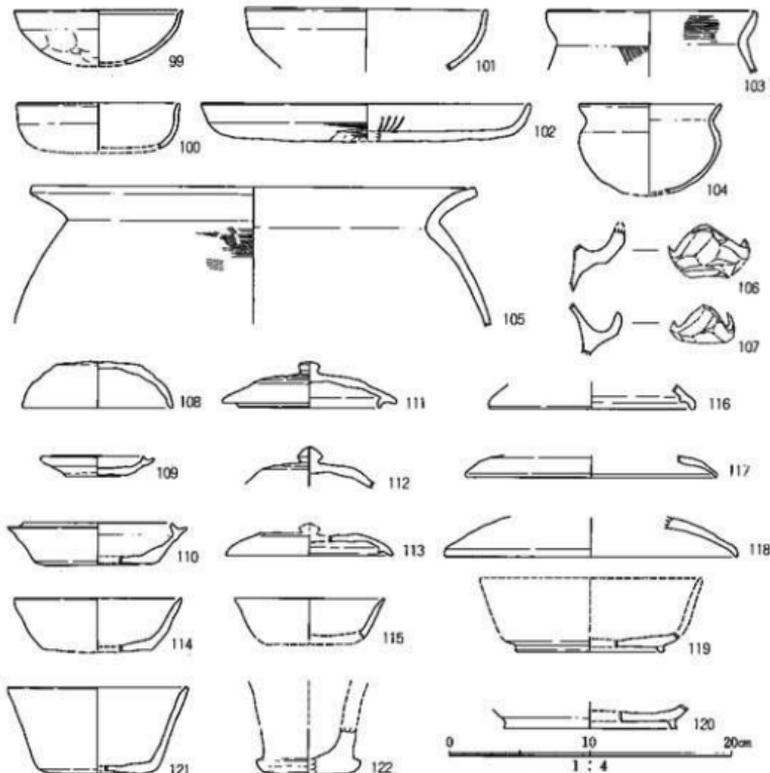


図23 その他の遺構出土土器実測図

Ⅱ・Ⅲ区土層群(99～101・103・106・107・110～117・119・121・122)、SD01(109・120)、SD02(102・108・118)、SD03(104)、SD05(105)

ナデ調整のほかは、器面が風化しているため調整痕が認められない。105は端部に面を作る短い口縁部である。体部はやや胴が張る形状と推測される。体部外面は横あるいは縦方向のハケ調整で、内面はナデ調整である。

須恵器

杯H(109)、杯H蓋(108)、杯B(120)、杯B蓋(118)が出土した。

109は口径6.4cm、器高1.4cmと杯Hとしてはかなり小型である。底部はヘラキリののち不調整で平底となる。壺などの蓋とみること可能だが、つまみがないことから杯Hとして報告する。108は丸みをもつ天井部で、その外面はヘラキリののち不調整である。120は底

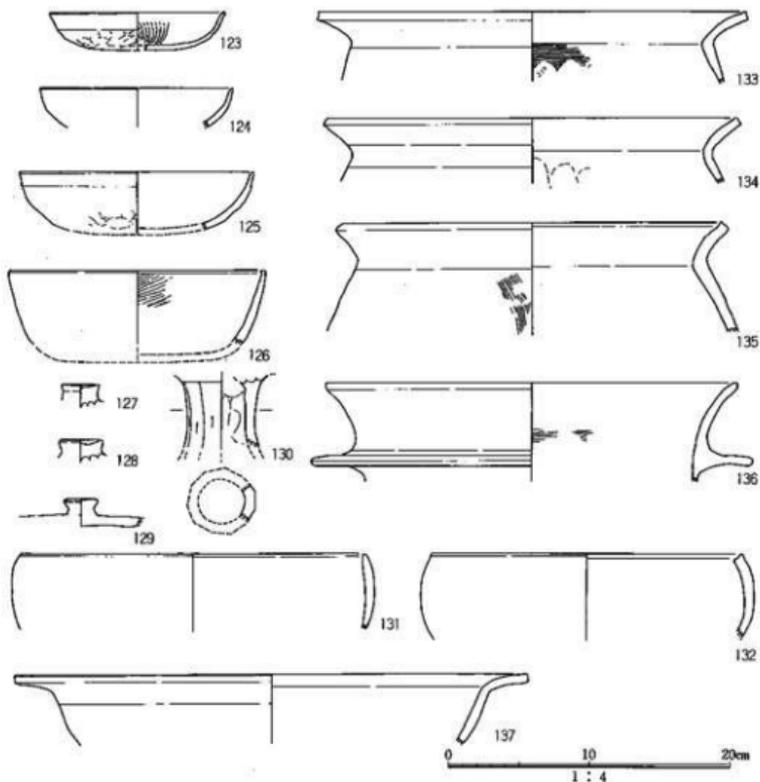


図24 包含層出土土器実測図

部外周に幅が狭く高い高台を貼付けており、底部外面はヘラケズリする。118は口径20.6cmの大型で、口縁端部を下方に屈曲させる。焼成は甘く、灰白色でやや軟質である。

vii) II区包含層出土の土器(図24・25、図版30)

土師器

杯A(126)、杯Bまたは皿B蓋(127~129)、杯C(123~125)、高杯A(130)、鉢(131・132)、甕C(133~135)、羽釜(136)、鍋(137)が出土した。

126は体部があまり外傾せず直線的に伸び、口縁端部は内面に小さく肥厚させる。内面には斜行する放射暗文を施す。外面の調整は不明である。127~129は頂部をくぼませた蓋のつまみである。杯Cは口径12~13.5cmの123・124と16.4cmの125の法量に分けられる。123の内面には放射暗文を施す。口縁部を除く外面はいずれもユビオサエのままである。130は高杯Aの柱状部で、ヘラケズリにより10ないし11の面を作る。131・132は口縁部が内湾ぎみになり、132の口縁端部はヨコナアにより面を作る。133~135は端部に面を作る短い口縁部である。135の体部外面はハケ調整するが、他は不明である。体部内面は133が横方向のハケ調整ののちナデであり、他はナデ調整である。羽釜136は外反する口縁部をもち、頭部付近に鈎を付ける。口縁部内面に横方向のハケメが残るが、他の部分の調整は不明である。胎土は雲母粒を多く含む生駒西麓産である。鍋と考えられる137は浅い体部から外方に屈曲する口縁部をなす。内外面に明瞭な調整痕は見られなかった。

須恵器

杯B(161~167)、杯B蓋(157~160)、杯C(156)、杯G(146~151)、杯G蓋(138~145)、杯H(153~155)、杯H蓋(152)、高杯(172)、短頸壺(169)、長頸壺(170)、壺蓋(168)、甕(173)、甕(171)が出土した。

杯Bのうち完形に復元できる161・162は底部外周に高台を付け、直立ぎみの体部となる。底部外面はヘラケズリする162とヘラキリ後、不調整の161・166がある。163は底部を欠き、164~167は底部の破片である。杯B蓋は口径20cm前後で、口縁部内面に身受けのかえりを作る157・158と、かえりのない小型の160、扁平なつまみの付く天井部の159がある。前者のうち158は焼成があまく軟質で、灰白色を呈し、157は堅く焼上がり、明青灰色を呈する。

杯C156は底部がヘラキリののち調整されず、丸みをもった体部をなす。口径は13.5cmであり、径高指数は31なので既述の80同様に杯Cとする。

杯G146~151は平底から外傾ぎみに直線的に伸びる体部のものと、直立ぎみにやや丸み

第二章 調査の結果

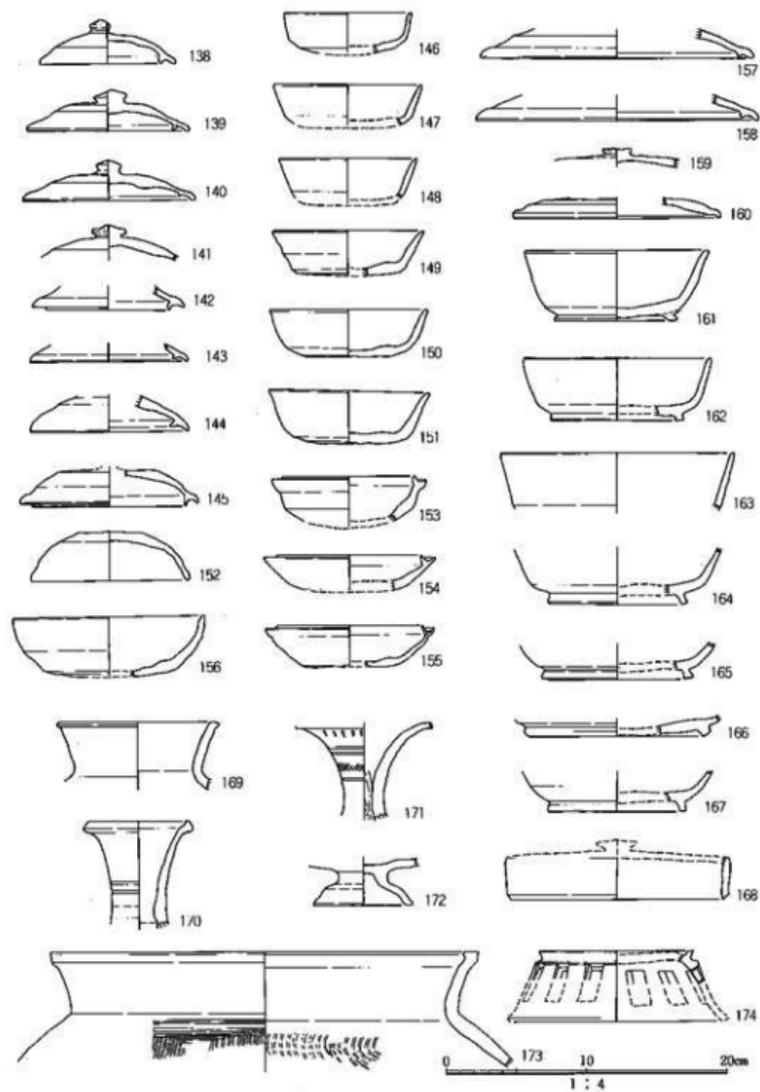


図25 包含層出土須恵器実測図

をもった体部のものがある。いずれも底部外面はヘラキリののち不調整である。杯G蓋138～145は138～141のように扁平な宝珠つまみが付くと思われる。口径が9.5cmで、大きなかえりをもつ138や、口径12.1cmで、小さなかえりをもつ140などがある。

杯Hは復元口径9.2cmの小型品153と、10cmを越える大型品154・155がある。前者は全体的に器壁が厚く、後者の155は体部上半の器壁を薄く仕上げる。杯H蓋の152の天井部は丸みをもつ。

172は低い脚の付く無蓋高杯の脚部と考える。杯部内底面はていねいにヨコナデ調整が施されている。脚部が段をなして屈曲していることから、台付椀の脚部とも考えられる。

169はやや外傾ぎみの直線的な口縁部となり、上端部は面を作る。170は口縁端部を厚くして面を作り、頸部中位のやや下方に2条の凹線を施す。

168は壺A蓋(註13)の口縁部である。水平をなす天井部から垂直に屈曲する口縁部をもつ。口縁端部の内側を下方に突出させる。壺Aは藤原宮の飛鳥Vの資料中にみられるが、168は端部内側を突出させる特徴から、平城宮土器Ⅲ以降に下るものと思われる。

皿171は口縁部を欠く頸部で、外面の口縁部直下と思われる位置にヘラによる刻みを施し、その下方に2条の凹線を介して斜行する列点文、そしてさらにその下方に1条の凹線を施す。全体的に磨減している。

173の壺上半部は上端に面を作る短い口縁部が付く。体部外面は平行タタキののちカキメを施し、内面には同心円当具痕が残る。

viii) 陶硯・甕形土器・製塩土器

陶硯(図25、写真6)

174はⅡ区包含層から出土した圓足面硯(註14)である。斜上方に延び、ヨコナデにより外端部を尖らせた外堤から台脚上部の小破片である。台脚には長方形のスカシ孔を14方に開け、外面の切取り口を面取りする。陸は欠損しており、海にも黒痕はみられない。

甕形土器(図26、図版31)

175～177は付け底系甕[稲田孝司1978]で、Ⅰ区SK01とⅡ区包含層から出土した。176は底が焚き口端部の近くにあり、焚き口側縁部分に相当すると推測される。177は底下端部の破片である。175は釜孔部と思われ、上端部は面を



写真6 陶硯

174

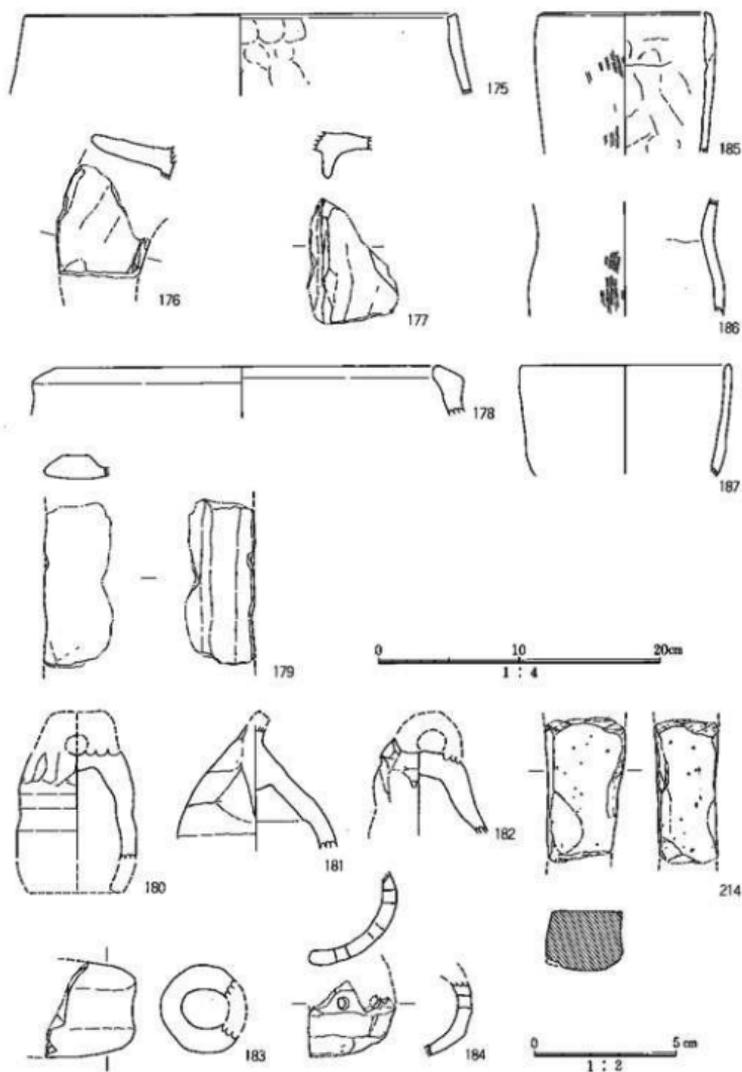


図26 その他の遺物実測図

壺形土器 (175~179)、イダゴ礎 (180~182)、土錘 (183)、不明土製品 (184)、製埴土器 (185~187)、砥石 (214)

作る。内面はナデ調整し、その上部は帯状に汚れる。胎土は1~2mmの砂粒を含み、橙色または淡黄灰色を呈する。

178・179は曲げ庇系甕で、Ⅱ区包含層から出土した。179は焚き口の下端部付近に相当し、焚き口の脛縁に沿った内面に幅3.5cmの粘土帯を貼付けて支柱とする。178は釜孔部の破片で、上端部を厚くする。内面は黒褐色に汚れている。淡褐色を呈する生駒西麓産の胎土である。

製塩土器(図26、図版30)

SE01から185~187の3点が出土した。185は直立する体部をなし、口縁端部を内側につまみ出す。外面には縦方向の平行タタキメに似た浅い痕跡がかすかに残り、内面はナデ調整するが、変形した布目がかすかに認められる。接合痕も明瞭に残る。胎土は砂粒を多く含み、淡黄色を呈するが硬質で、内面は淡褐色に汚れている。外面の一部は二次的に火を受けて灰褐色に変色する。岩本氏のⅡ類に属すると思われる。186は体部からやや屈曲して口縁部となるもので、端部は欠損する。体部外面には縦方向の粗いハケメ状の圧痕があり、内面はナデ調整しているが、粘土紐の接合痕がある。また、黒色の炭化物とともに白色を呈する微細な結晶をなす物質が付着している。胎土には砂粒を多く含む。外面は灰褐色または赤褐色をなし、二次的に加熱されている。187は直立する体部であるが、軟質で脆いため細部の形状や調整は不明である。砂粒を多く含む胎土で、灰黒色を呈する。製塩土器と断定できるものではないが、復元される全体の形状や特徴的な胎土からその可能性が高いと思われる。

製塩土器または、それと思われる資料は井戸以外で出土していない。内陸部に位置する他の遺跡でも井戸周辺で多く出土するばあいがあり、炊事に関連する祭祀行為に使用されたとする見解がある[岩本正二 P.405]。出土量は少ないが、そうした類例の一つとみることも可能であろう(註15)。

ix)土製品(図26、写真7)

イイダコ壺

180・181はⅡ区包含層から出土した須恵質のイイダコ壺である。180は釣手部は欠損しているが、直径0.7cmの紐孔が復元できる。体部内外面はヨコナデ調整し、紐孔付近の外面は縦方向にナデ調整する。181は釣手部を薄く作るが、上部は欠損している。いずれも内面にロクロを用いたヨコナデ調整を施す。182はSK02から出土した。灰褐色を呈する軟質で、欠損した紐孔付近は部分的に焼成が悪く、灰白色を呈する。調整は粗雑である。

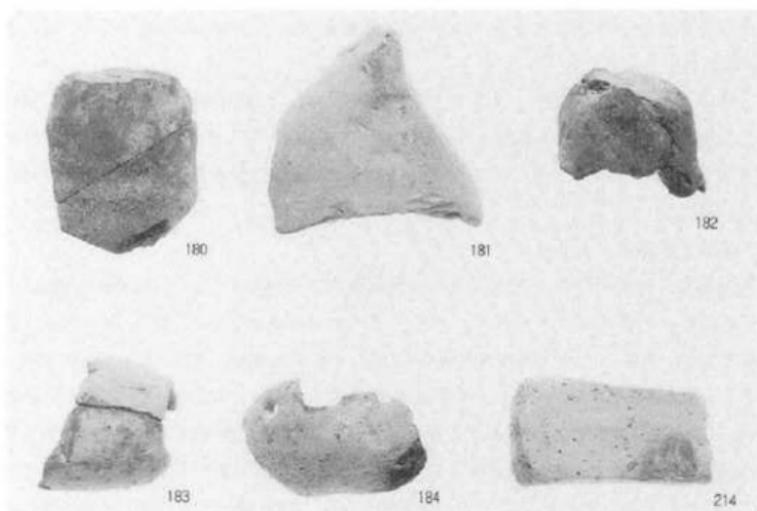


写真7 イイダコ壺・土製品・砥石

土鍾

183はSD04から出土した管状土鍾(註16)の破片で、現存する長さは3.1cm、直径3.5cmで、孔径は1.5cmである。破片の重量は24.5gである。胎土や焼成は土師器と同様である。

不明土製品

184はSD01から出土した。全体の形状は不明であるが、図26のように置いたばあい、底部がやや扁平な直径6.6cmの球形をなすものと推定される。全周の1/4の破片で、最大径部のやや上方に直径0.35~0.40cmの円孔が3個以上開けられている。遺存している3孔はそれぞれ0.17cm、0.14cmの間隔で横に並んでいる。図示した左端の断面が丸くなっており、端部であったと思われる。酸化焰焼成により土師質となり、黒斑がみられる。浅黄橙色を呈する。

以上のように復元される形状は、羽曳野市茶山遺跡で飛鳥時代後半から奈良時代中葉の土器とともに出土している土師質の鈴形土製品[大阪文化財センター1978B、羽曳野市教育委員会1982]に類似している。茶山遺跡の資料には本例のように体部に円孔が穿たれている類例はないが、いずれも本例と同時期に属するか、またはその可能性をもつことや形状の類似などから、本例も鈴形土製品の一例といえるかもしれない。

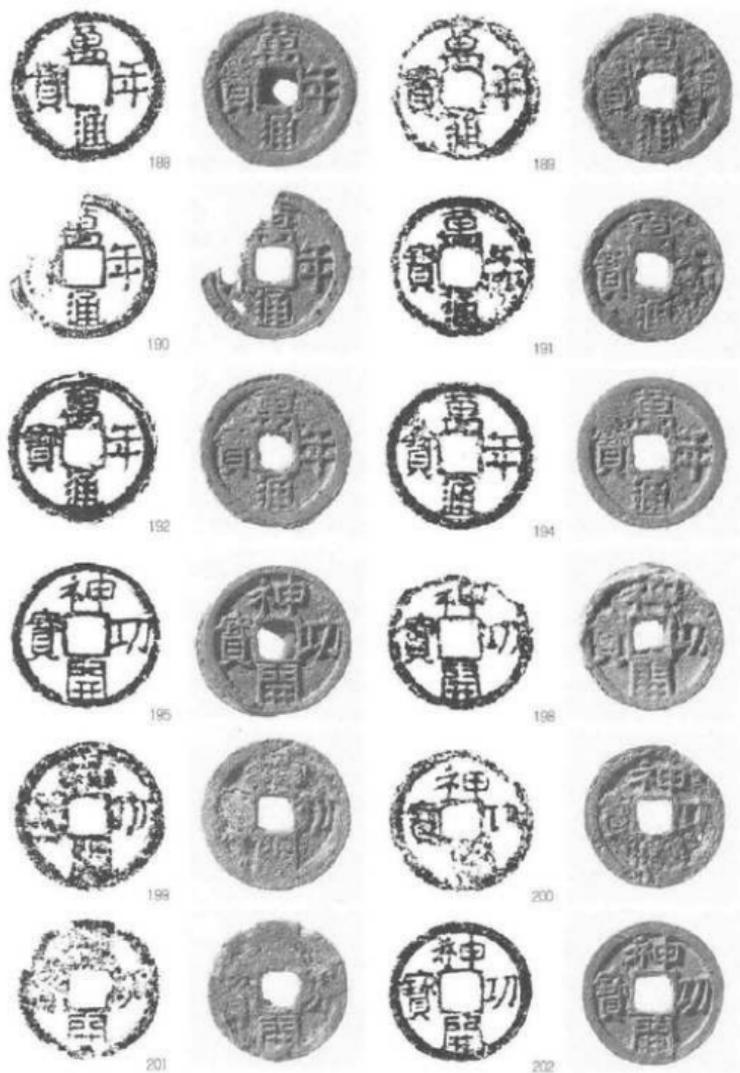


図27 銭貨 (1:1)

x) 銭貨(図27、別表2)

Ⅱ区のトレンチ壁面の清掃中に188～209の22点の銭貨が出土したが、これらは包含層を切る遺構ないしは包含層より上位の地層の遺物であると考えられる。また、これらは錆着して7群になっていたが、それぞれ発掘時に分離したと思われる形跡があるため、本来はすべて一括の資料で「銭差」に通されるなどされていたと推測される。

錆化が素材内部にまで進行して錆の除去が困難なものもあったが、X線透過写真により銭種を確認し(註17)、できるかぎり錆を除去した。なお、錆化や錆除去時の削剥により、別表2に示した計測値の精度はやや低いものとなっており、また、銭文の字体の細部が不鮮明なものがある。これらの条件を踏まえ、以下に平城京出土資料の分類(註18)に従い、観察可能な個体にみられる特徴を挙げておきたい。

万年通宝

188～194の7点である。万年通宝F・Gの「横点萬年」や万年通宝Eの「狭通萬年」の特徴はみられず、各個体の差異は顕著でない。万年通宝A～Dであると思われるが、細分はできなかった。

神功開宝

上記以外の195～209の15点である。195・196・198は功の旁を「刀」とし、功が大きい神功開宝A、いわゆる「大様神功」と思われる。199・200は銭文が不鮮明だが、功の旁を「力」とする「力功神功」と思われ、開を「開」字とする神功開宝Bである。また、201・202は開を「開」とし、「寶」の「貝」が他に比べて小さい神功開宝Eである。

なお、両者の初鑄年は、万年通宝が760(天平宝字4)年、神功開宝が765(天平神護1)年である(註19)。

(京嶋)

xi) 石製品(図26・28、写真7・8)

サヌカイト製の石小刀(210)、二次加工のある剥片(211)、剥片(212・213)があるが、これらはすべて古墳時代以降の地層から出土した遊離資料である。また、SK10から出土した砥石(214)もここで報告する。

石小刀

210は完形の石小刀であるが、一部新しい欠けにより失われている。下縁はほぼ直線的で、先端側2/3がわずかに内湾する(以下、内湾縁と呼ぶ)。上縁は円弧状に外湾する(以下、外湾縁と呼ぶ)。長さ7.44cm、幅2.47cm、厚さ0.90cmであり(註20)、長幅比3.0、長厚比

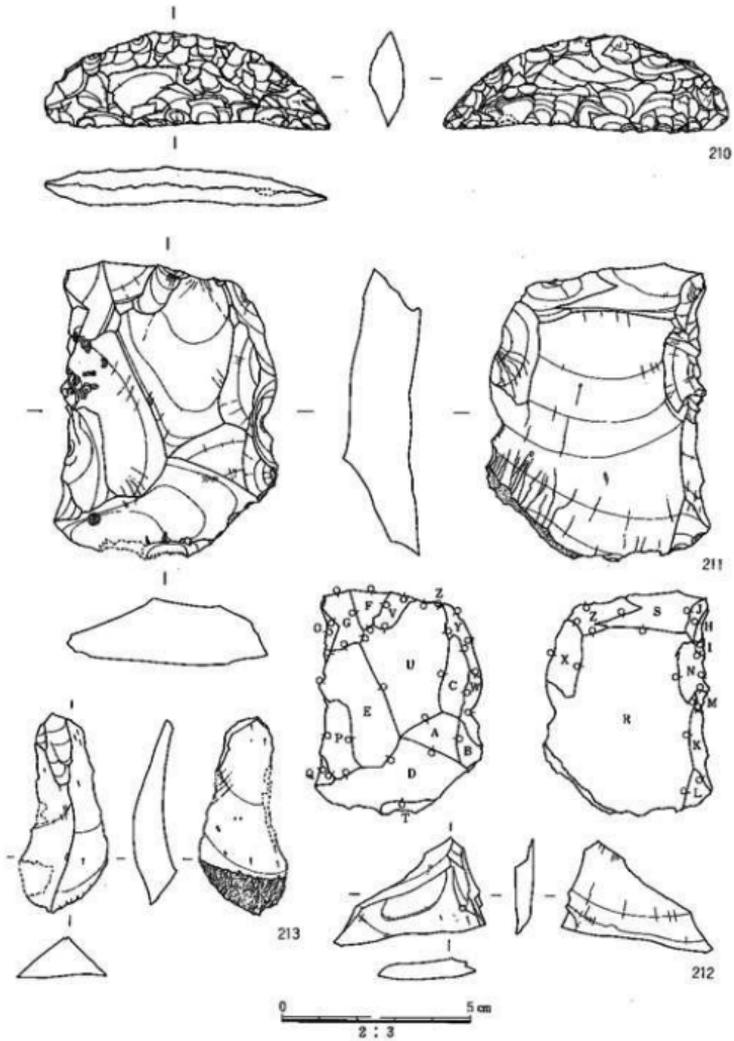


図28 石小刀・二次加工のある剥片・クサビから剥落した剥片・剥片

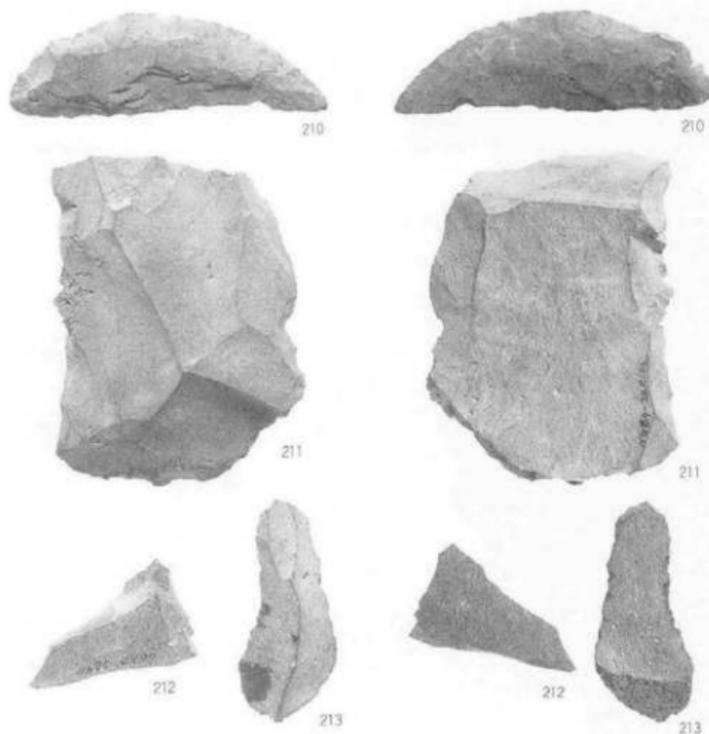


写真8 石小刀・二次加工のある剥片・クサビから剥落した剥片・剥片

8.3は[森本晋1985]の平均値に近い。幅厚比は2.7となり、[森本晋1985]の薄型に属する。内湾度は5%で、重さは16.55gである。

両面とも中央付近に成形時初期の大きな剥片が取られた複数の剥離面が残っている。本体は長軸方向に反りをもっており、左図が素材となった剥片の主剥離面側である可能性が高い。左図の両縁の整形剥離面は縁にはほぼ直交し、比較的小さく揃っている。基部と尖頭部を除く内湾縁の剥離の末端はステップとなっており、鋭い縁を作っている。剥離作業は、内湾縁では先端側から基端側へ、外湾縁では基端側から先端側へほぼ連続的に行われた傾向が認められる。右図の両縁の整形剥離面は縁にはほぼ直交し、比較的大きく不揃いである。剥離作業は内・外湾縁ともに先端側から基端側へ、ほぼ連続的に行われた傾向が認められ

る。両面中央に広く使用時の擦痕が光沢となって認められる。

二次加工のある剥片

211は後にも触れるが、背後部のU面を復元的にみれば、断面三角形の剥片を素材としている。長さ7.77cm、幅5.58cm、厚さ1.75cmを測り、重さは106.31gである。

主剥離面はR面である。S面は加撃の方向がR面と一致し、同時に生じた折面であると考えられる。この剥片をとった石核は主剥離面形成以前のK～N面と主剥離面の左下端に残る自然面との面構成から、最大でも2～3倍の厚さであったと復元される。石核の面構成はA～G面であり、石核の両側辺・末端部から中央に向けて剥離されている。この後、左側辺に背面側からの打撃が繰返され、H～N面が形成されており、結果的に、石核の側辺に縦方向の稜線が作られていることになる。D・E面には、この時の打撃が打痕となって残っている。また、主剥離面との前後関係は不明であるが、K面を打面としているP・Q面、G面を打面とするO面も、この段階に剥離されたものと推定される。以上の一連の剥片剥離作業は採取された剥片に統一性が認められず、石核の側辺加工を目的としたものであったと考えられる。

この剥片が剥離されたのち、背面側から主剥離面側への打撃によってX・Z面、その反対方向の打撃によってV・W・Y面が作られており、これらの剥離によって主剥離面左側辺は鋭い縁となっている。また、これらの剥離に先立って、剥離されたU面は中央の稜線を剥離し、板状の剥片に整形することが目的であったと考えられる。したがって、石核から剥離される前後に行われた一連の剥片剥離作業は、基本的には両側縁に鋭い刃をもった剥片を用意するためのものであったと考えられる。クサビとして使用されていれば、鋭い刃縁に対して、打縁としての潰れがみられるはずであるが、このような痕跡は認められない。また、道具として使用された顕著な痕跡も認められない。

クサビから剥落した剥片

212は側辺がすべて古い折面で、厚さに比べて幅のある剥片である。長さ4.04cm、幅2.59cm、厚さ0.49cm、重さ4.14gである。クサビ本体から分割して飛び散ったものと思われる。

剥片

213は背面が4枚の剥離面と自然面からなる縦長剥片であり、長さ5.36cm、幅2.32cm、厚さ1.18cm、重さ8.65gである。背面・主剥離面ともに打撃の方向は長軸方向と一定している。主剥離面の打点は古い折れのために失われている。

(岡村)

砥石(図26、写真7)

214はⅢ区のSK10から出土した灰白色石英粗面岩製の砥石である。断面方形を呈し、4面を使用している。

xii)木製品(図29・30、図版4)

215・216はSE01から出土した。215は曲物の底板である。直径16.8cmに復元され、厚さは0.6cmである。木釘留めが1個所ある。216は幅1.8cm、現存長30.5cm、厚さ0.4cmの素串と

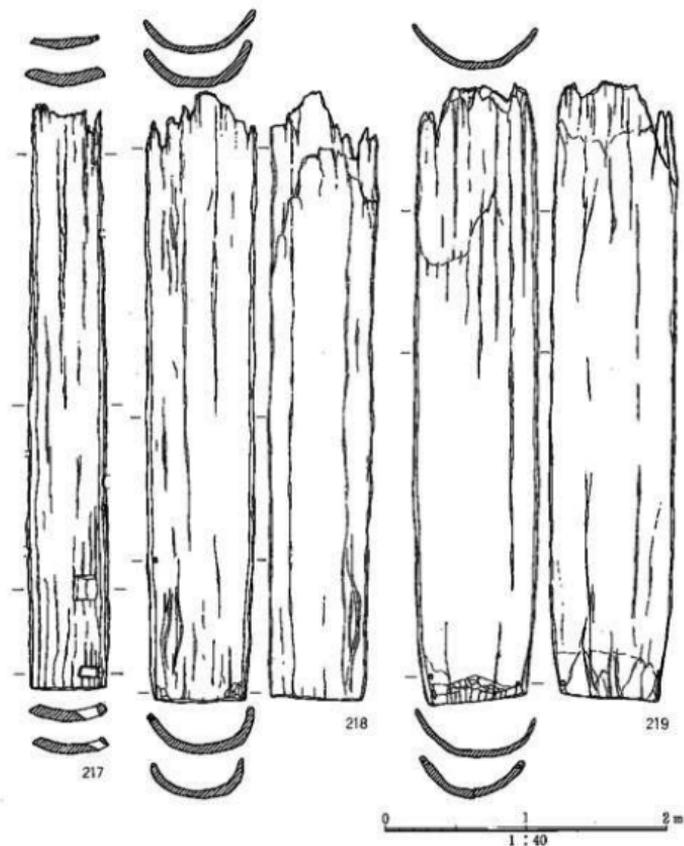
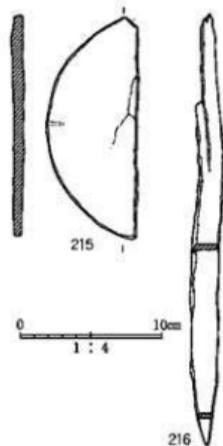


図29 SE01井戸廻材実測図

思われる。下端は剣先状とするが、上端は欠損している。

217～219はSE01に使用されていた丸太削抜きの井戸側材である。現存する長さは約4.1～4.3mで、幅は217が52～57cm、218が70～76cm、219が70～90cmである。いずれも下端部は直線的に切断され、218・219の両側縁部は丸く、217は面取りして加工されている。219の下端部は内外面に加工痕があり、ややすぼまる形状をなし、両側縁付近には小さな孔が開けられている。217は他の2点と異なり、両側縁部に各2個所の挟りがあり、一方の側縁部付近に方形の孔が開けられている。材質はいずれもスギ(註21)である。

これらは219の形状などから、船の船体に利用された削抜き材を転用した可能性がある。



(京嶋) 図30 SE01出土木製品実測図

xiii) 植物遺体(図版31)

植物遺体は井戸SE01から出土した。資料は20点あり、同定の結果、以下の3種が判明した(註22)。和名および学名は、「原色日本植物図鑑 木本編」Ⅱ[北村四郎・村田源1979]に従った。

オニグルミ	<i>Juglans mandshurica</i> Maxim.	(クルミ科)
スモモ	<i>Prunus salicina</i> Lindley	(バラ科)
モモ	<i>Prunus perica</i> Batsch	(バラ科)

以下、種類ごとに記載する。

オニグルミ

半分に割れた核が1点出土した。大きさは長さ1.80cm、幅1.62cmで、現生のものと比較して非常に小さい。また、表面の彫紋の特徴もやや異なっている。

オニグルミは落葉性の高木で、果実は9～10月に熟し、食用となる。

スモモ

完形の核が2点出土した。大きさは平均値で長さ1.40cm、幅1.03cm、厚さ0.70cmである。スモモは小高木で、果実は6～7月に熟し、食用となる。

モモ

完形の核が16点、半分に分れたものが1点出土した。大きさは最大のものが長さ3.22cm、

幅2.35cm、厚さ1.63cm、最小のものが長さ1.95cm、幅1.94cm、厚さ1.59cm、平均値で長さ2.32cm、幅1.87cm、厚さ1.48cmである。これらは現在一般的ないわゆる“水蜜桃”の核の大きさに比べてかなり小さく、また表面のざらつきも少ない。むしろ、現在の野生の“野桃”のものによく似ている。

“野桃”は、大阪周辺では高槻市芥川流域の山間部に生息する小高木である。果実は3cmに満たない小さなもので、秋に熟し、食用となる。ちなみに“水蜜桃”の熟する季節は夏で、“野桃”のほうが晩生である。この“野桃”が本来自生のものか、栽培品が野生化したものかは現在のところ定説がない。

したがって、SE01出土のモモの核は“野桃”の核に似ているが、この比較だけではこれが栽培されていたものか、遺跡周辺に自生していたものかを判断することができない。しかし、遺跡に限って多く出土し、一方、自然堆積層からはあまり多く出土しない状況から判断して、遺跡周辺で栽培されていた可能性が強いものと考えられる。

(久保)

4)小結

最近までの調査成果を踏まえれば、今回の調査地南側のUR86-11次調査などで検出された建物群は、ほぼ飛鳥Ⅱの土器の時期に造替されたと思われる、おそらくこの時期に四方に柵を巡らしたと思われる。一方、今回報告した北方の一群は、第三章第1節で後述する出土土器の検討の結果、飛鳥Ⅲの土器の時期に限定できるようである。この建物群は東に目隠し塀と考えられる遮断物を南北方向に設けた以外は、溝により区画されているだけであり、また、SB01以外の建物は2間×2間、3間×2間と小規模で、配置も規則性に欠ける。しかし、7間×2間という長い建物と、敷地外に位置しているため共用の井戸である可能性が高い大型の井戸(SE01)が存在することは注意される。UR86-11次調査地周辺の南部の建物の桁行は、最大でも6間までである(東西側のすぐ北に位置する南北棟建物に関しては7間以上となる可能性はある)のに対して、今回の建物は長大なものといえる。

一方、調査地の北側には瓜破廃寺と呼ばれる奈良時代の寺院が存在したと推定されており、ここでは多数の瓦とともに、大和の川原寺の資料と同範と考えられる白鳳時代の埴伝(写真9)が出土している(註23)。これがその創建期の資料であるとするれば、今回の建物群は瓜破廃寺創建期に属することになり、古代寺院の造営に係わる氏族の手になるものと想定することができる。

また、東方の長原遺跡では本章第2・3節でも一部報告するように、飛鳥・奈良時代の水田遺構が広範囲に分布しており、その上限は7世紀前半ころにあるのではないかと推測される。その時期は当地区の南部の建物群の形成された時期に当り、南部建物群と今回の建物群は、飛鳥時代における水田の開発・経営の基地としての役割を担っていたと考えることができよう。

(黒田・京嶋)

註)

(1) [服部昌之1975]に基づいた「長原遺跡発掘調査報告」[長原遺跡調査会1978]の用例に従い、河内の直線古道である大津道を里の起点とし、難波宮から南下し、大津道・丹北道と交差する古道を条の起点とする、固有名詞里を数詞里に置換えた呼称法である。

(2) [瓜破遺跡][大阪市文化財協会1983]の図版二を参照。

(3) 井戸の構造や各部の名称は[宇野隆夫1982]に従う。

(4) 壺Aはいわゆる「河内型」の壺 [小笠原好彦1980]である。

(5) [大阪市文化財協会1981]所収の図面35の188・189は壺A、187は壺Bである。

(6) [奈良国立文化財研究所1978]所収のSE1235-50・SD1064-80の土器は壺A、SE1300-57・SD1070-94は壺Bと思われる。

(7) [奈良国立文化財研究所1980]所収のSD110出土資料の16は壺A、18は壺Bと思われる。

(8) 堺市百舌鳥陵南遺跡から出土した壺は、[小笠原好彦1980]では「和泉型」とされているが、和泉北部から住吉地域で出土する壺Aは中河内地域



写真9 瓜破庵寺出土の埴土(約1/2、藤沢一夫氏提供)

で出土するものと、形状や調整手法に大きな違いはなく、同じく壺Aとする。

- (9) 奈良県藤原宮SB1235から、飛鳥Ⅳの類似した形態の「壺F」が出土し、井戸からの出土品が多いことが指摘されている[奈良国立文化財研究所1978, p.54]。また、法益や形態は香川県下川津遺跡で出土しているマダコ壺に類似している[香川県埋蔵文化財調査センター1990]。これをマダコ壺としたばあい、大山真充氏の分類のB類[大山真充1992]に属する。
- (10) 西氏は、須恵器杯AⅣは須恵器杯Gとの関連をもちながら飛鳥Ⅳの段階に成立したと推定する[西弘海1978 p.98]。
- (11) 平城京で色調・胎土で分類されたⅣ群土器[奈良国立文化財研究所1989, p.87]に相当すると思われる。
- (12) 車輪文は6世紀から9・10世紀までの須恵器にみられる当て具痕の文様で、大正時代からその存在が知られ、注目されていた[中山平次郎1915]。最近、富加見泰彦氏は、「陶邑」地域内にある堺市大庭寺遺跡からの出土資料にみられる「蜘蛛の巣状」の車輪文が、6世紀初頭であることなどから、車輪文の成立を九州や東北に求める旧説を退け、「陶邑」地域で発生したと推測する[富加見泰彦1991]。本例は堺市野々井10号墳・岸和田市山直中遺跡出土例にみられる「花卉状」の車輪文であり、両遺跡出土資料に与えられたⅢ～Ⅳ型式[中村浩1981]の時期は、本例の時期とも一致する。
- (13) 平城宮での名称[奈良国立文化財研究所1976, p.86]で、いわゆる葉蓋の蓋である。
- (14) 名称は[奈良国立文化財研究所1983]に従う。
- (15) 本地域出土の製土器の概要は、本書第Ⅲ章第2節で示している。
- (16) 土唾の名称などについては[渡辺誠1985]および[大阪市文化財協会1992C, pp.70-75]に従う。
- (17) X線透過写真の撮影は奈良国立文化財研究所遺物処理研究室の施設を利用させていただいた。
- (18) 分類・用語などの名称は[奈良国立文化財研究所1974]に従う。
- (19) [栄原永遠男1991]によれば、神功開宝は万年通宝の10倍の公定価値を付与されたものであったが、通貨インフレなどにより、772(宝龜3)年に両者は等価値とされ、和同開珎の使用が禁止される。しかし、779(宝龜10)年には和同開珎の使用が再開され、3種の銭貨が等価値とされる。本資料に和同開珎が含まれていないことを重視すれば、これらは、772年から、和同開珎の使用再開をはじめとする施策がとられた779年までの正規の通貨ということになる。
- (20) 計測方法は[森本晋1985]に従った。
- (21) 樹種の同定は(財)元興寺文化財研究所保存科学センターの北野信彦氏による。
- (22) 同定ならびに記述にあたっては、大阪市立自然史博物館那須孝徳氏に全面的にご教示をいただいた。記して謝意を表する次第である。
- (23) 現物は現在行方不明だが、藤沢一夫氏が1946年ころ、瓜破出張所にて写真を撮影されており、今回の御好意によりこれを掲載させていただいた。記して謝意を表します。なお、藤沢氏は瓜破庵寺址を宇「ゴマ壺」付近に想定されている。

第2節 長原遺跡西地区の調査(84-12・29・47・67・70次調査)

1) 調査地の層序

西地区の調査地は点在する6地点からなるが、これを図31に示すようにI～VI区とし、さらにI・III・IV区は1区と2区に細分して呼称する。

i) I・II区(図32、図版6)

沖積層上部層I

長原1層：現代の作土である。

長原2層：灰色シルト混り粗粒砂である。層厚15cmで、II区南部から中央部にかけて分布する。

長原3層：淡灰黄色シルトで、層厚は5～20cmである。I-1区では長原2層の直下に長原4A層が堆積しており、本層に対比しうる地層は認められない。I-2区には層厚約20cmで存在するが、砂粒を多く含んでおり、後述する4A層を母材とするものである。II区ではほぼ全域に本層に対比できる地層が分布する。

110号墳の上を横断する、北で西に大きく振る方位の溝状の凹み(幅9m、深さ0.6m)の埋土も本層に対比しうるものと思われる(図32参照)。また、II区南部の本層基底面でSK06・07が検出された。

長原4A層：淡青緑灰色または灰色の細粒砂ないし砂礫である。層厚は5～25cmである。I-1区では15～20cmの層厚で堆積する。I区南側の84-25次北部の調査では北東部のみに本層が確認されている[大阪市文化財協会1990]。

長原4B層：I-2区とII区では、上部が層厚10～15cmの灰黄色シルトであり、下部は層厚10～20cmの橙色粘土である。一部に層厚5～10cmの灰色シルト混り粘土が介在するが、I-1区では層厚10～25cmの単一の淡灰色シルト層となる。II区の南部では地山層の直上に



図31 長原西地区の地区区分

本層があり、Ⅱ区北部では下部の橙色粘土層に多くの埴輪が含まれる。

長原5層：水成の黄褐色シルトである。Ⅰ区において長原6A層上面の水田面を覆っている以外は分布しない。本層が遺存する地点では長原6A層上面の水田畦畔がよく残っている。

長原6A層：灰紫色粘土の水田作土層である。層厚は5～25cmで、Ⅰ区とⅡ区北部に分布する。本層上面を長原5層が覆っている部分には畦畔が遺存し、下面には踏込みや農具によるとと思われる凹凸がみられる。Ⅰ区における本層上面はTP+8.5～8.6mである。

長原6B層：暗灰色ないし黒色粘土である。Ⅰ-1区の一部、Ⅰ-2区の東端に分布する。本層下面も踏込みなどによるとと思われる凹凸がみられることから、水田の作土層であると思われる。

沖積層下部層(地山層)

地山層は黄白色ないし黄色の粘土である。本層上面はⅠ区東端でTP+8.4m、西端で8.5m、Ⅱ区北端でTP+8.6m、南端で9.1mである。

(黒田)

ii)Ⅲ区(図33)

84-29次調査の東西トレンチ(Ⅲ-2区)と82-28次調査として実施し、[大阪市文化財協会1990]では未報告であった南北(Ⅲ-1区)・東西(Ⅲ-2区)の2本のトレンチによる調査区である。このうち82-28次調査と84-29次調査の東西トレンチは同じ道路敷内で互いに接する位置にある。

この付近の層序は[大阪市文化財協会1990・1992]でも記述したように、現地表は西が低くて東が高く、また、北が低くて南に高くなっている。しかし、地山層(長原13層)上面の微地形は西が高くなっている。したがって、沖積層上部層は東が厚く、西にいくほど薄くなっている。Ⅲ-2区でも現代の表土層と地山層の間に長原2～4層に相当する薄い層が介在し、西にいくほど薄くなっていた。

一方、Ⅲ-1区の地山層上面は現地表と同様の傾斜をもって、北が低くて南が高くなっており、地山層上面までの深さは約60cmで、長原6層より上位の地層のみが堆積していた。地山層検出時に長原4層を埋土とする遺構が少量認められたのみである。

沖積層上部層Ⅰ

長原3層：暗褐色礫混りシルト質砂で、作土層である。

長原4A層：黄色細～中粒砂である。上位層によって部分的に削平を受けているが、Ⅲ-

2区西半部を除く全面に広がっていたと想定される水成の砂層である。[大阪市文化財協会1990]では「鳥畑の芯」と考えた。

長原4B層：Ⅲ-1区の北部を除いて、長原13層の直上に堆積している。82-28次調査北部の東西トレンチの西半でも13層直上に本層が堆積しており、13層が高くなるⅢ-1区南部とⅢ-2区では長原5～7層は確認できない。本層は以下の4層に細分できる。

上層は淡灰色砂混り砂質シルトで、Ⅲ区全体に堆積し、周辺で広く遺存している。Ⅲ-1区北端に近い所では本層上面で畦畔状の高まりが見つかった。82-28次調査北部の東西トレンチでも本層の上面で畦畔状の高まりが見つかっており[大阪市文化財協会1990]、本層が水田として利用されていたことを物語る。また、Ⅲ-1区に東接する84-25次調査南部でも、同じ層準で水田遺構が検出されており、広い範囲が水田になっていたようである。Ⅲ-1区の本層上面はTP+9.3～9.5mである。本層は長原4Bi層に対比できよう。

中層は黄灰色砂混りシルトで、Ⅲ-1区北部にしか堆積していない。

下層は灰黄色砂混りシルトで、断続的にみられる。

最下層は黄褐色砂混り粘土質シルトで、Ⅲ-1区北端部にしか確認できない。

長原6層：灰色を呈する砂混り粘土質シルトである。Ⅲ-1区北端のごく一部に堆積しているのを確認した。[大阪市文化財協会1990]では本層上面で畦畔を確認しており、水田の作土層である。Ⅲ-1区北端の本層上面はTP+9.0mである。

沖積層下部層

長原13層：黄色または黄白色のシルトないし粘土である。Ⅲ-1区北端における本層上面はTP+9.0m、南端ではTP+9.3mであるが、Ⅲ-2区においてはTP+9.3～9.4mで、ほとんど東西の高低差はない。Ⅲ-1区の中央より南半はほぼ水平面をなすが、北半は北に低くなる傾斜面になっている。

(松尾・京嶋)

iii) IV・V区(図33、図版6)

沖積層上部層I

長原1層：現代の作土層である。

長原2～3層：IV区の「馬池谷」に堆積し、最大140cmの層厚がある。シルトないし細粒砂層が挟んで顕著な斜行葉理をなす、砂・礫を主体とする水成層である。V区では上部が層厚5cmのぶい黄褐色シルト混り砂礫で、下部は黄褐色粘土質シルトだが、V区の中央部では上部の砂礫層が流路の埋土に当ることから層厚は45cmになる。

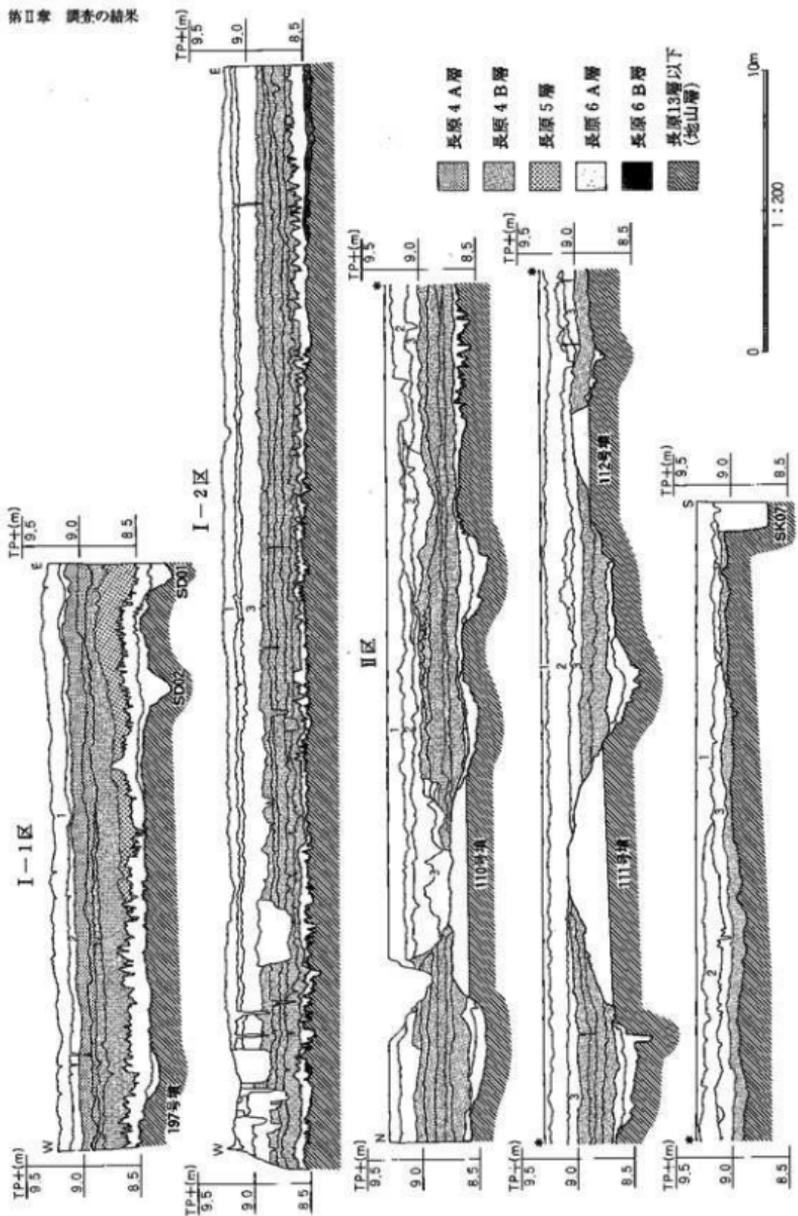


図32 I-1・2区、II区の断面実測区

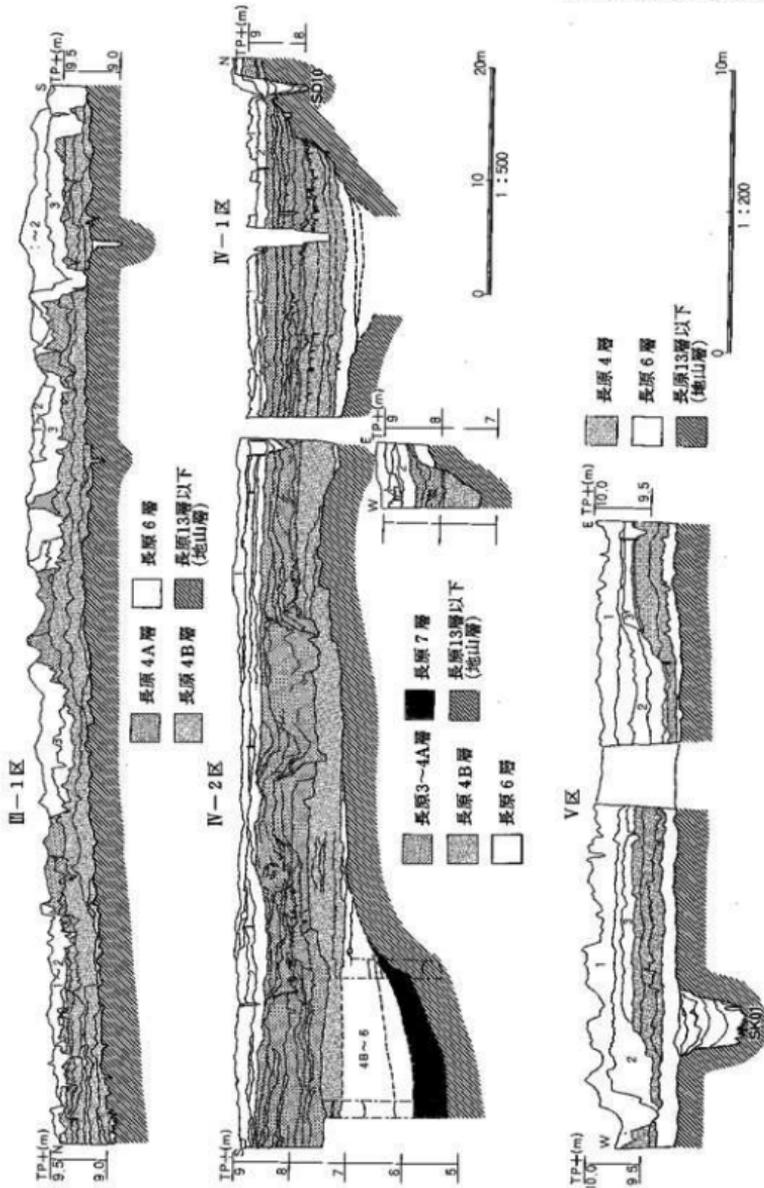


図33 III-1区、IV区、V区の断面実測図

長原4A層：灰白色砂礫で、Ⅳ区の「馬池谷」内に分布する。層厚は20～80cmで、南に向って層厚を増す。Ⅴ区には分布しない。

長原4B層：Ⅳ区北端では黄褐色粘土質シルトである。層厚10～15cmで地山層の直上に存在する。Ⅳ区の「馬池谷」内の堆積は灰色ないし青灰色のシルトまたは粘土質シルト層と砂層が互層になっており、層厚は60cmである。本層上面はTP+7.4～8.0mで、南に向って段をなして高度を下げていく。近接するほかの調査地の本層上面でも畦畔が検出されている。Ⅴ区では上部が層厚10cmのオリーブ褐色粘土質シルト、下部が層厚10～15cmの黄灰色粘土質シルトである。

長原4～6層：Ⅳ区の「馬池谷」内に存在する灰色ないし緑灰色の粘土である。本層からは古墳時代から平安時代の遺物が出土し、おおむね長原4層に対比できる層準と思われるが、6層との区分が不明瞭であり、一括して報告する。

長原6層：Ⅴ区で検出された灰黄褐色粘上で、層厚は5～15cmである。本層上面で畦畔が検出された。上面はTP+9.4mである。

沖積層上部層Ⅱ

長原7層：Ⅳ区の「馬池谷」埋積土の下部に相当する灰黒色粘土が本層に対比できると思われる。石廬丁や古墳時代の土器が出土する。Ⅳ区南端の本層上面はTP+5.8mである。

沖積層下部層(地山層)

Ⅳ区北端の地山層の標高が高い部分ではにぶい黄橙色粘土であるが、「馬池谷」の斜面では緑灰色粘土ないしは砂礫となっている。Ⅴ区では黄白色粘土で、上面はTP+9.2～9.3mである。

(黒田)

2)各層出土の遺物

以下に各層出土の遺物について記述するが、各資料の出土地区と層準については表5にまとめて示した。

i)土器(図34、図版32)

220～225は須恵器蓋杯である。220は口縁端部を丸くする杯身であるが、他のものの口縁端部は内傾する面をなす。220はTK216型式(註1)ないしON46段階であろう。221・222はTK23型式、223はMT15型式である。杯蓋224は天井部と口縁部とを区分する稜線がかすかに意識されており、口縁端部は内傾する面をなすTK10型式、225は丸い天井部と

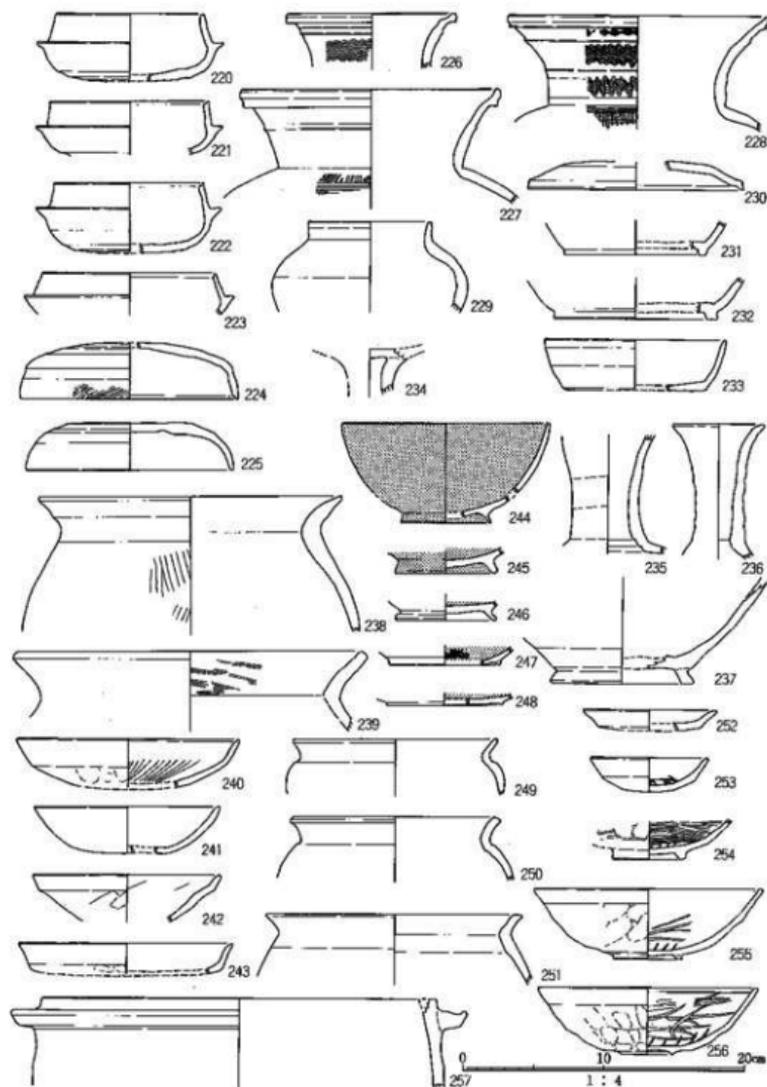


図34 各層出土の土器実測図

須恵器 (220-237)、土師器 (238-243・249-251・257)、黒色土器 (244-248)、瓦器 (252-256)

口縁部との間の稜線がなく、口縁端部も丸い。TK43型式であろう。壺226～228は口縁部外面に1ないし2本の稜線を作り、226・228は波状文を施す。227・228の体部外面は平行タタキを施したのち、カキメで仕上げる。229の短頸壺は底部を欠く。全体をヨコナデで平滑に仕上げている。

238・239は土師器甕である。238は器壁が厚く、体部外面に粗いハケメが残る。239は口縁部内面に横方向のハケメが残る。

須恵器杯Bの231・232は平底をなす底部外面のもっとも外側に断面方形の高台を付ける。杯B蓋230は天井部から口縁部をやや屈曲させ、端部を下方に突出させる。須恵器杯A 233は粘土紐巻き上げ痕を底部外面に残す平底から、鋭く屈曲させて直線的な体部をなす。

230～233は平城宮土器VないしVI[奈良国立文化財研究所1976]に対比できよう。235・236

表3 平安時代土器の編年

A.D.	平安時代I期	古
800		
	平安時代II期中	新
900		
	平安時代III期	古 新
1000		
	平安時代IV期中	古 新
1100		

表4 瓦器碗の編年

A.D.	I	1
1100		2
	II	3
		1
1200		2
	III	3
		1
1300		2
	IV	3
	V	

は長頸壺の口縁部である。外面に凹線などではなく、内外面ヨコナデ調整する。237は脚台をもつ壺の底部で、内底面の自然軸の付着範囲からみて、口の比較的広い(約12cm)壺と思われる。内外面はいていねいなヨコナデ調整を施す。

240は土師器杯Cである。内面に放射暗文を施す。径高指数23で飛鳥ⅢないしⅣに対比できる。241・242は土師器碗Aである。

241は平底ぎみの底部から丸みをもった体部となる。242は口縁部内外面を強くヨコナデし、それ以下の体部外面はユビオサエのままである。243は土師器皿Bで、平底から屈曲して外反ぎみの体部となる。241～243は平安II期古段階(表3)に比定できる(註2)。

244～248は黒色土器碗である。244・245は黒色土器B類碗で、高台が高く、244は深い体部となる。246～248は黒色土器A類碗である。246は外方に張出す高台を付け、247・248は小さい高台を付け、高台径が大きく、器壁を薄くしている。247の内面には細かいヘラミガキが密に施されている。247・248は平安II期、ほかの黒色土器は平安Ⅲ・Ⅳ期である。249～251は土師器甕である。いずれも頸部を強くヨコナデ調整し、短い口縁部とする。249は端部を丸く、250・251は上端に面を作る。体部は内外面ともナデ調整である。257は口縁部が短く、上端部に面を作る羽釜である。チャートなどの砂粒を多く含む胎土で、他地域産の

土器と思われる。菅原正明氏の分類によれば摂津C型[菅原正明1983]に属し、長原遺跡では平安Ⅲ期の資料に類例[大阪市文化財協会1982 図版140-161]がある(註3)。

252～256は瓦器椀・皿である。254は断面方形の大きな高台を付け、内面を密にヘラミガキし、外面もヘラミガキする。Ⅱ-2～3期(表4)である(註4)。255・256は内面に疎なヘラミガキを施し、内底面は平行暗文を施す。外面はエビオサエのままである。255の高台内面の外底面には焼成後に「×」が刻まれている。Ⅲ-3期である。252・253の皿はⅢ～Ⅳ期である。

(京嶋)

ii) 施釉陶磁器(図35、原色図版3)

緑釉陶器

258～261は緑釉陶器椀・皿である。258・259は同一個体と思われる。口縁端部をわずかに外反させる。体部は中位で屈曲し、わずかに稜をなす。底部は削出しの輪高台である。素地は灰白色を呈する軟質で、外底面にも釉を施し、釉調は淡い緑色である。平安京近郊産である。260は貼付け高台の底部で、内端に段を作り、外底面はヨコナデ調整する。底部内面の外周に浅い沈線を巡らす。素地は淡灰色を呈する硬質で、釉調は濃緑色である。外底面にも施釉する。261は貼付け高台の底部で、下端部に内傾する面を作り、外底面はヨコナデ調整する。底部内面の外周に浅い沈線を巡らす。素地は淡灰色を呈する硬質で、淡い黄緑色の釉が薄く残る。外底面には釉は施さない。260・261は近江産と思われる。

灰釉陶器

262・263は灰釉陶器椀である。いずれも釉は潰掛けで、内湾ぎみの高い高台を貼付ける。猿投窯の欄年では、折戸53号(O-53)窯式～東山72号(H-72)窯式に当る。

磁器

264～267は白磁碗である。264～266の口縁部は大きな玉縁状をなす。やや黄味がかった灰色の釉を施す。横田・森田氏による分類[横田賢次郎・森田勉1978]のⅣ類である。267は断面台形の高台を高く削出し、外面は露胎で、内面に灰白色の釉を薄く施す。Ⅱ類かⅢ類であろう。

268は竜泉窯系の青磁碗である。口縁端部の外面に、幅6mmのやや丸みをもった面を作り、それ以下には蓮蓮弁の文様がある。黄緑色の釉を厚く施している。横田・森田氏による分類のⅠ-5・b類である。

(佐藤)

iii) 埴輪 (図35)

269・271・272は円筒埴輪で、272の底部は外面に板状の工具でナデ調整されており、底部の器壁を薄く仕上げる。270は朝顔形埴輪の頸部である。すべて黒斑がなく、川西氏の編年[川西宏幸1978]でV期に属する。これらはI-1区西端の長原6層から出土しており、その基底面で検出された197号墳に伴う遺物と思われる。

(京嶋)

iv) 瓦埴

飛雲文軒瓦 (図36、図版33)

273・274はいずれもIV区北部の「馬池谷」斜面に堆積する長原4～6層から出土した。273は軒丸瓦である。瓦当の文様は内区が単弁の蓮華文で、外区は右回りの雲文である。274は

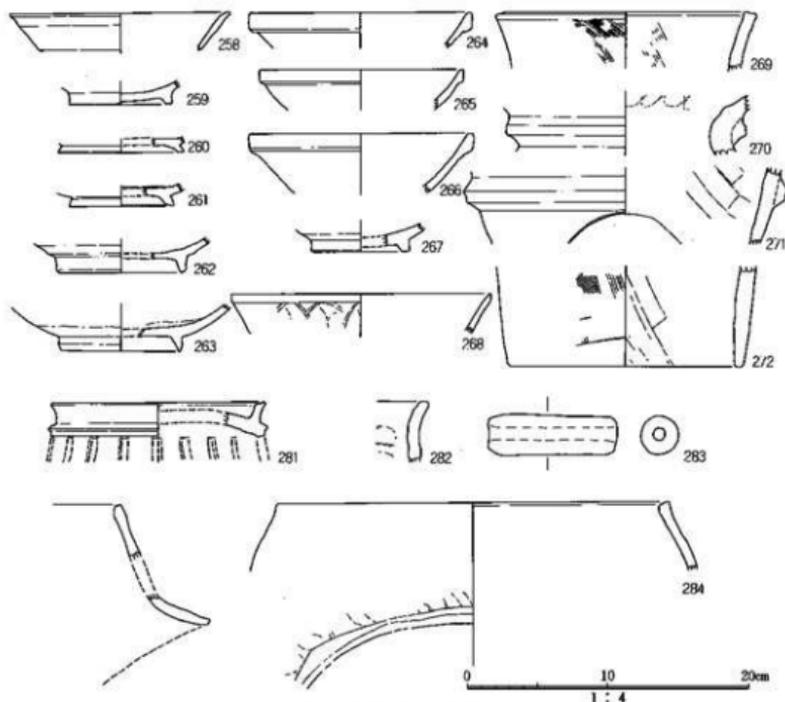


図35 各層出土の遺物実測図

緑釉陶器 (258～261)、灰釉陶器 (262・263)、白磁 (264～267)、青磁 (268)、埴輪 (269～272)、陶硯 (281)、
 製瓦土器 (282)、土鏡 (283)、壺形土器 (284)

軒平瓦で、文様は左右対称に雲文を配し、中心飾りをもたないタイプである。どちらも近江で出土する飛雲文軒瓦の系統に属する。胎土には砂粒を含み、やや軟質である。淡赤褐色を呈する。

長原・瓜破遺跡の周辺では上述のようなタイプの飛雲文軒丸瓦・軒平瓦のセットのほか、都で用いられた飛雲文軒平瓦(長岡京7802型式)とそれに伴う蓮華文軒丸瓦(長岡京7228型式)や、この周辺にしかみられない蓮華文軒丸瓦がある[佐藤隆1992A]。

(佐藤)

丸・平瓦(図37、写真10)

Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ区の長原3～4層から約40点ほどの丸・平瓦が出土した。いずれも細片であり、完形に復元できるものはない。ほとんどが平瓦で、丸瓦は278のみである。凸面は例外なくタタキが施され、縦位の平行タタキが1点、格子タタキが2点(279・280)あるほかはすべて縦位の縄タタキである。丸瓦278は縄タタキしたのちにナデ調整している。凹面の布目は1cm幅の中に7本の目が見えるものが多く、模骨痕や糸切り痕を残すものがある。焼成は瓦質のものと黄灰色ないしは灰褐色を呈する軟質のものがあり、1:2の割合で後者が多い。

埴

Ⅱ・Ⅲ区で8点の破片が出土した。いずれも細片であるため、大きさは不明であるが、厚さは平均5.76cmのほぼ同一規格である。灰色から赤褐色を呈し、瓦質焼成のものや二次的に火を受けたものなどがある。前書で報告した西地区SB14の礎盤として利用された資料[大阪市文化財協会1992A 図88-332]は、厚さ7cmでやや厚い。また、瓜破遺跡の2次調査で出土した2例は厚さ6cmで、うち1点が瓦質である点、

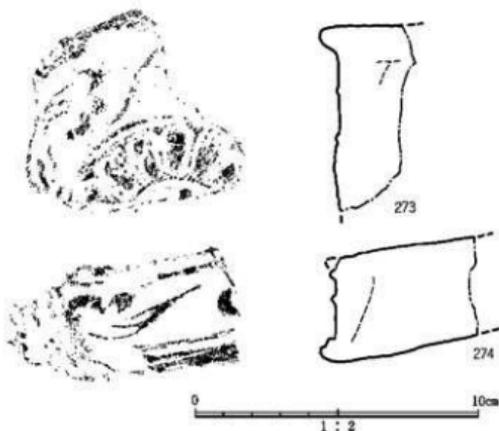


図36 飛雲文軒丸・軒平瓦

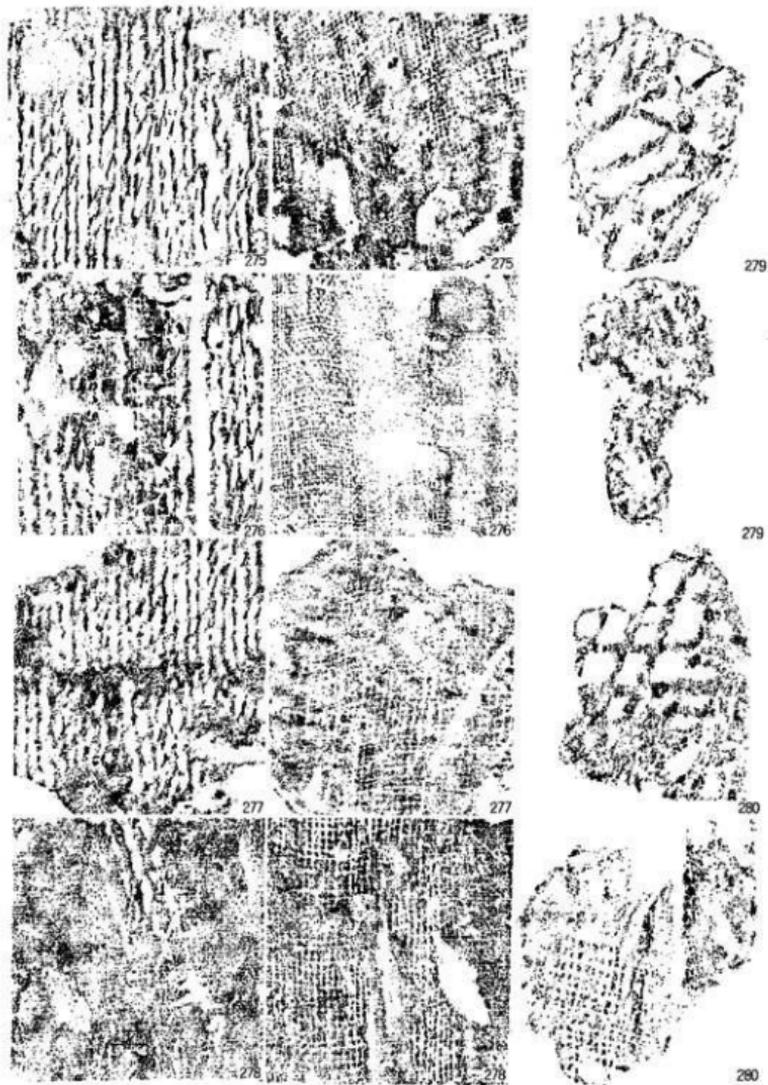


图37 丸・平瓦拓影(2:3)
丸瓦(278)、平瓦(275-277·279·280)

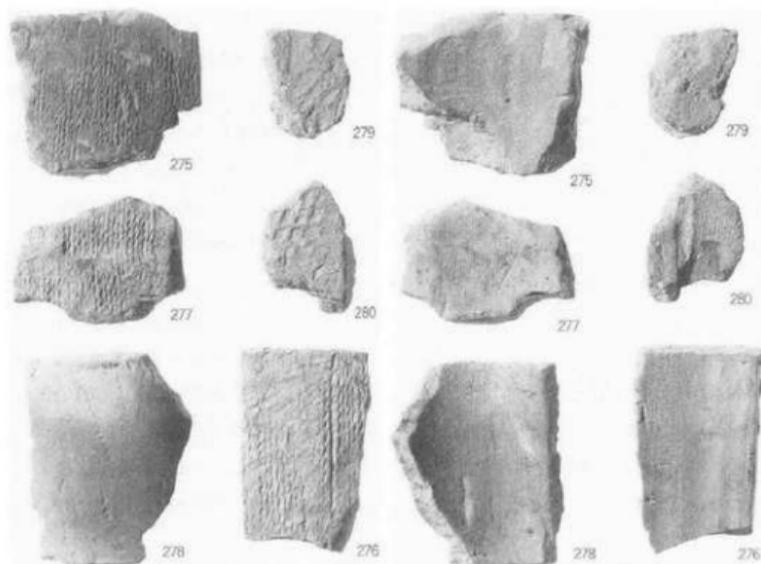


写真10 丸・平瓦

今回の資料に近いものである。

v) 陶硯・製塩土器・甕形土器・土鍾(図35、図版32・33)

281はⅣ区「馬池谷」内の長原4～6層から出土した圈足円面硯[奈良国立文化財研究所1983]である。上端面がやや内傾する外堤下端に突帯を作り、それ以下に20個の長方形のスカシ孔を開けていたと復元できる。外堤部の復元外径は15cmである。陸はほとんど欠損しているが、遺存する硯面は使用により磨滅し、墨痕が残っていることから、無堤式で海との境界が不明瞭な形状であったと思われる。

282は製塩土器の口縁部片である。粒径1mm前後の砂粒を多く含む。

284はⅣ区「馬池谷」内の長原4～6層から出土した曲げ底系[稲田孝司1978]の甕である。釜孔は上端をヘラケズリにより面を作り、全体的に器壁は薄い。内外面をナデ調整で仕上げ、内面は煤が付着して黒色を呈する。胎土に長石粒を含むが、曲げ底系甕に多い生胸西麗産ではない。

283は長さ9.1cm、直径2.7cm、重さ91.4gの大型の管状土鍾(註5)である。棒に粘土を巻付

表5 遺物の出土層位一覧(西地区)

地区	地層	出土遺物	
I区	長原3~4A層	242・243・250・258・259	
	長原4B層	247・248・262	
	長原6層	220・226~229・269~272	
II区	長原3~4層	221・234・251・252・254・262・267・279・319	
	長原4B層	222・223・230~232・236・245・246・260・261 264・265・280	
IV区	長原4A層	288	
	長原4B層	244・256	
	長原4~6層	233・235・237・238・240・241・249・253・257 266・273・274・276~278・281・283・284・315 316・318	
		長原7層	224・225・239・317
		長原3層	263
VI区	長原4A層	255	

けて作られており、孔径は約1cmである。粒径1~2mmの長石・チャートを多く含み、土質質に焼成されて淡灰黄色ないし灰色を呈する。IV区「馬池谷」内の長原6層に対比できる茶褐色粘土混り砂層から出土した。

(京嶋)

vi)石器遺物・鉄釘・銭貨
サヌカイト製石器遺物は総数25点が出土した。石鏃(285~

289)、石匙(290)、ナイフ形石器(297)、クサビの使用に關係する資料(291~296)のほか、瀬戸内技法の剥片剥離作業の中の産物と理解できる剥片などである。また、石庵丁(317)、砥石(315・316)、鉄釘(318)、銭貨が出土した。これらはすべて古墳時代以降の地層から出土した。

石鏃・石匙(図38、図版34)

285はえぐりが浅く、脚の短い凹基式石鏃である。脚の端部は尖りさみである。側縁は大小の押圧剥離によって整形され、その後、えぐり部が数度の剥離で作られている。剥離のほとんどは末端がステップとなっている。尖頭部には上方からの剥離があり、使用によるものかもしれない。縄文時代前半のものと考えられる。

286も凹基式石鏃である。背面側の右寄りに素材の面を残している。側縁は平面形が鋸歯状で、側面形がジグザグに仕上げられており、きわめて薄くて鋭い。数回の大きな押圧剥離で基部のえぐりが整形されたのち、側縁の整形へ移行している。尖頭部は新しい欠けにより失われている。縄文時代のものと考えられる。

287は細身の刃部、両側縁が平行する長い茎部をもった大型の凸基式石鏃である。側縁は両面とも大きな押圧剥離によって全体の形が整えられたのち、ていねいな細部調整が施されている。側縁はやや内湾し、平面形が鋸歯状、側面形がジグザグに仕上げられている。弥生時代中・後期のものと考えられる。

288は凸基式石鏃である。両面に素材となった横長剥片の背面・主剥離面を残している。茎部を大きめの押圧剥離で製作したのちに、側縁を上方に向けて整形されたと観察できる

ところが多い。横長剥片は打面側が厚く、末端部が薄い断面三角形となっている。剥片の末端に当る部分はわずかな調整を加えただけで、ほとんどは素材の面のままである。剥片の厚い左側縁からは十数回の押圧剥離が施され、下半の大きな剥離の端部はステップとなっている。新しい欠けによって側縁の一部を欠いている。弥生時代中期のものと考えられる。

289は側縁が直線的であり、幅の広い凸基式石鏃である。反りをもった剥片を素材としており、右図中央は素材の主剥離面である。横断面は非対称であり、主剥離面側は凸形、背面側は平坦である。側縁は大きな押圧剥離で整形されたのち、細かい剥離によって細部調整が施されているが、下半部から基部は大きな剥離で整形されている。刃部先端、基部末

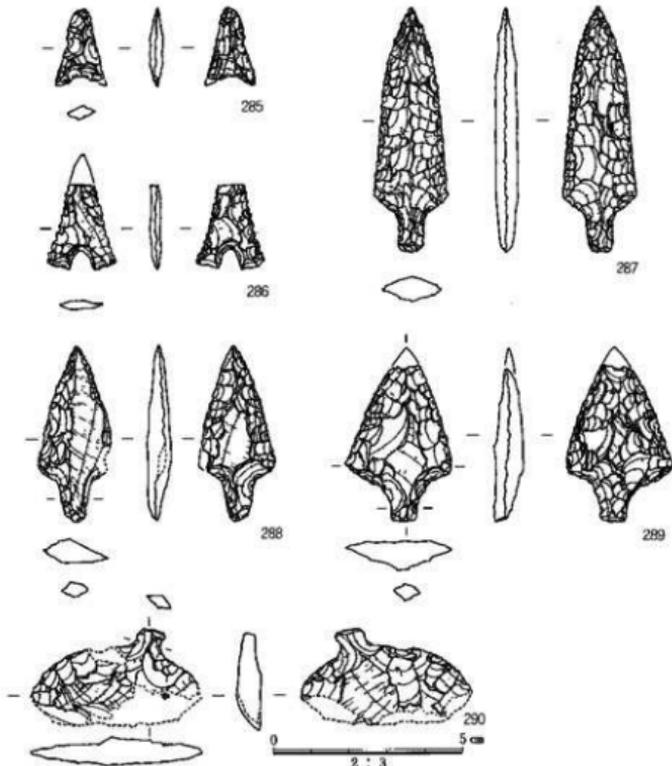


図38 石鏃・石匙実測図

端は古い折れで失われている。弥生時代中期のものと考えられる。

290は機型の石匙である。素材の剥離面を両面の中央を残しており、右図が主剥離面である可能性がある。大きな押圧剥離によって、つまみが整形されたのち、両側縁が整形されている。刃部の大半とつまみ先端は新しい欠けによって失われている。縄文時代のものと考えられる。

クサビ(図39、図版34)

クサビが使用者によって加撃される部分を「打縁」、その対向する側で対象物に当てられ、それを割り裂いていく部分を「刃縁」と呼称する(註6)。

291はI・J面を主剥離面とした板状剥片を素材としている。A面は自然面である。この剥片は、剥片が剥離される以前にクサビとして使用されたと想定できる段階、剥片が剥離された段階、打撃方向を前段階と変えて、クサビとして再使用された段階、の三つの段階が観察できる。主剥離面形成以前の剥離面は、主剥離面側がH面、背面側がB・C面から構成される。C面の打面はH面で切取られている。C面のリングは段をなし、打点に対向する位置にあるB面はフィッシャーが著しく発達している。G面はB面に平行し、キズが入込んでおり、後述する衝撃によって剥落して形成されたものである。D面は末端がステップとなった複数の小さな剥離面からなる。以上の背面の面構成からは、上下方向に強く打撃が加えられたことが指摘され、打縁が失われているものの、クサビとして使用された可能性が高い。次にH面を打面として、ほぼ現状の形態をもった剥片が剥離されている。このH面を形成した打撃は剥片に対して、垂直方向であり、クサビの使用とは直接つながらないが、その際の一連の打撃によって生じた折面を利用した可能性がある。また、主剥離面であるI面の打点は明瞭であるが、J面は打点が一定でなく、H面を打面とする複数の打撃によって生じたキズを取込んで剥離されたものと考えられる。剥離された剥片は主剥離面側の下側辺が比較的鋭い縁を、上側面が平坦なA面をもち、横断面が三角形に近い形態となっている。A面には多数の打撃が加えられている。この一連の打撃で形成されたのが、L・M・N面、B面の小さな剥離面(Q・R・S面)である。対向する折面のO面、小さな剥離面のP面は、この加撃の反作用で形成された可能性が高い。以上から、この剥片は剥離されたのちには、打撃の主軸を90°転回し、A面を打縁、対向する位置に刃縁を備えたクサビとして再使用されたものと考えられる。

292は自然面と5枚のネガティブな剥離面からなり、素材の形態は復元できない。E面は複数の小さな剥離面を・括したもので、末端が著しいステップとなっている。この打撃方

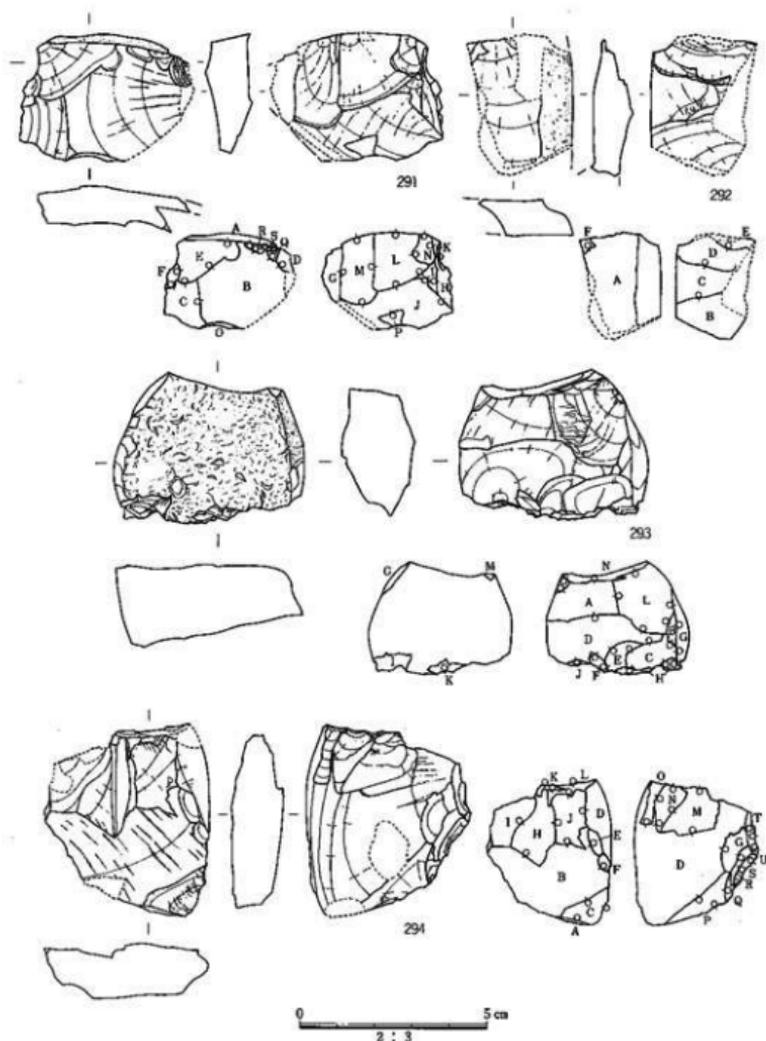


図39 クサビ実測図

向とA面は一致し、E面が打線に当たると考えられる。また、打点が対向するB面とD面の末端が大きなステップになっており、これらが向極からの垂直方向の打撃によって形成された剥離面であることを示している。刃縁と主剥離面側右側辺は新しい欠けによって失われている。

293はA面が主剥離面である。背面と側面は自然面である。A面のフィッシャーの集まりから、素材の形態は、上方に1cmは伸びないものであったと復元できる。また、主剥離面形成以後に取られた剥片は大きなものではなく、現状よりやや厚みのある素材が使用されたものと考えられる。C・D・E面の剥離によって、鋭い刃に加工された剥片の下側縁は刃縁と考えられる。これに対向する位置にある打線はN面の上方に求められる。G面はクサビ使用時の一連の打撃で生じた裁断面であり、F・H～K面はこれらの打撃によって剥落して形成された剥離面である。次に、G面の端部を打面にしてL面が剥離されている。この剥離の目的は明確でない。その後、このクサビは使用時の加撃によって折面(N面)が生じ、最終的に破棄されている。

294は板状の剥片が素材である。A面は自然面である。主剥離面はD面であり、末端はヒンジ・フラクチャーとなって、背面に及んでいる。E・F面はヒンジ・フラクチャーに付随して末端部で生じたものと考えられる。また、D面の打点側に近い凹み(G面)は、主剥離面を作った打撃時のキズからのちに剥落して形成されたものと思われる。背面側の主剥離面形成以前の面はB面である。H面はB面と打点の方向が近く、B面を形成した打撃がキズとして保存され、後述する側縁部への打撃によって剥落したものと考えられる。I面も打点が失われており、同じ打撃によって剥落している。この剥片が剥離された段階の形態は、A・B・D面を延長して復元すると、背面・主剥離面が平行し、上側面が平坦である歪な四辺形となる。次に上側縁部に打撃が繰返され、主剥離面側に末端がステップとなったM・N・O面、背面側にJ・K・L面が形成されている。また、K面のキズはH面に入込んでおり、最終的にこれを剥落させている。これらの一連の作業は剥片剥離作業や素材の側辺加工とは異なり、クサビの使用時の状況が考えられる。潰れに近い状況は打線の特徴であるが、そのように仮定した場合には、対応する刃縁は平坦なA面となる。反対に、刃縁と仮定した場合には、対応する側面は自然面のA面となるが、打撃された痕跡は見られない。いずれにしても、これらの関係は典型的なクサビの打線・刃縁の対応関係では説明できない。しかし、すでに開口している裂け目に打ち込むようにして、補助的に使用されるものであれば、A面は刃縁として機能することは可能であろう。この後、背面側のI面を打面

としてT面、B面を打面としてP～U面が剥離されている。この加工によって、剥片は最終的に平面形が三角形に近い形態のものとなっている。この側辺は比較的鋭い縁となっているが、クサビとしての打縁・刃縁の対応関係は見つけられない。また、使用痕も見られない。

295は左図中央に成形時初期の大きな剥片が取られた剥離面(B面)が残されている。主剥離面は不明である。A面は自然面である。B面の周囲の剥離の末端は、いずれも一般的な剥片剥離作業とは異なる。上半部は上方向から加撃され、剥離の末端はF面ではヒンジ・フラクチャー、他の面ではステップとなっている。下半部は下方向から加撃され、剥離の末端は著しいステップになっている。P面はN面の剥離に付随して生じた剥離面である。このような剥離の状況は両極からの垂直方向の打撃が繰返された結果として生じたものであると考えられる。打縁・刃縁の対応関係は、剥離面の特徴から下側縁が打縁である可能性が高いが、対辺が折面(U面)によって失われているために明らかにできない。また、平坦で末端がステップとなったT面は加工段階のものか、クサビ使用時のものであるかは不明である。B面に近いC・D面は比較的古い剥離面と考えられ、加工段階の剥離である可能性がある。左右側辺は古い折れである。

クサビから剥落した剥片(図40、図版34)

296は板状の剥片を素材にしており、主剥離面はB面である。背面の一部と側面には自然面が残っており、本体は鏢の端部を素材としたものであったことがわかる。A面の打点は下方にある。主剥離面には不安定なリングがみられ、フィッシャーが発達している。また、背面・主剥離面ともに打面に対して垂直に割れており、これらの打点是对向する位置にある。以上のことから、この剥片がクサビから剥落した剥片であると考えられる。側辺のほとんどが新しい欠けによって失われている。

ナイフ形石器(図41、図版34)

297は背潰しの特徴や断面三角形の形態からナイフ形石器の中央部分であると考えられる。基部・尖頭部・刃部は新しい欠けである。底面の打点の方向は左下にある。一つ前に剥離された剥片の背稜部が残っておらず、素材が翼状剥片であるか特定することはできない。主剥離面上部には背潰しに伴う打痕が残されている。刃部の断面の角度(刃角)は約25°である。

底面をもつ剥片(図41、図版35)

298は素材となる盤状の石核の主剥離面を底面にもつ横長剥片である。G面が主剥離面、

B面が底面、D面が打面であり、E面が作る山形の稜線近くに打痕が明瞭に残る。一つ前に剥離された剥片も同じ底面をもち、F面とG面の剥離作業は連続性がある。典型的な翼状剥片で、刃角は約42°である。背面側の左側辺は折れている。この折れは剥片製作中の可能性があり、背潰しされていないことと関連するかもしれない。鋭い刃部には2個所の折れがあり、使用された可能性がある。

299は背面が底面(A面)と複数の剥離面(B～E面)からなる。A面の剥離方向は保存状況が悪いため、判定できない。背面側の剥離状況から打点がジグザグに後退していく作業が復元できる。刃角は約42°で、上端部と一側辺は新しい欠けによって失われている。

300は背面が底面(A面)と複数の剥離面(D～H面)からなる。主剥離面の打点はB・C面の稜線上にある。D～H面の打点は上方にあり、打点がジグザグに後退していく作業が復

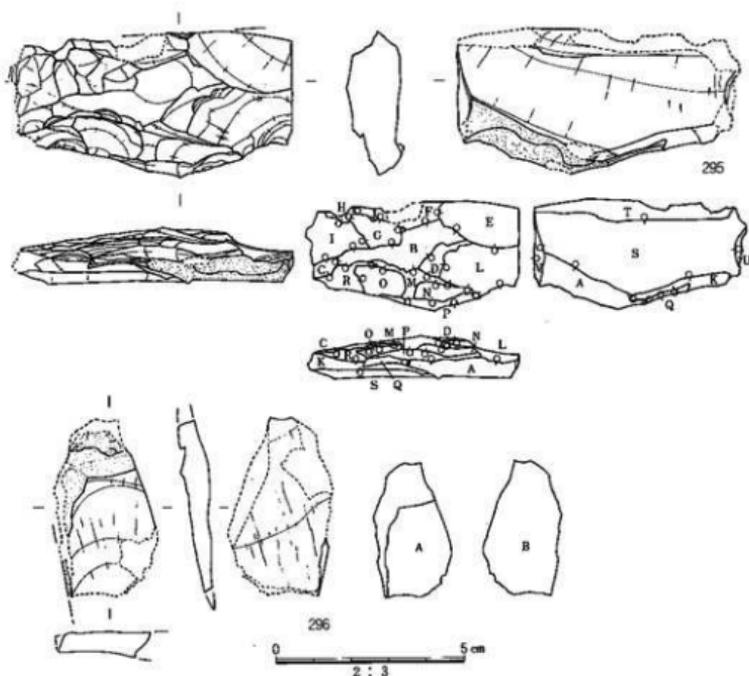


図40 クサビ・クサビから剥落した剥片実測図

元できる。F・G面から剥離された剥片は厚いものではない。H面はこの剥片を剥離する際の打ち損じと考えられる。主剥離面と底面の角度は 25° である。主剥離面右側辺は折れている。

301は底面がB面である。背面を構成する面のうちで、主体をなしているA面に打点があり、A面を打面、B面を主剥離面とする板状の素材が作られている。この時の打痕は大きく明瞭に残っている。この剥片は瀬戸内技法の剥片剥離作業のなかで、盤状剥片から最初に剥離された剥片に相当するものと考えられる。B面と対向する位置にあるD～I面は新

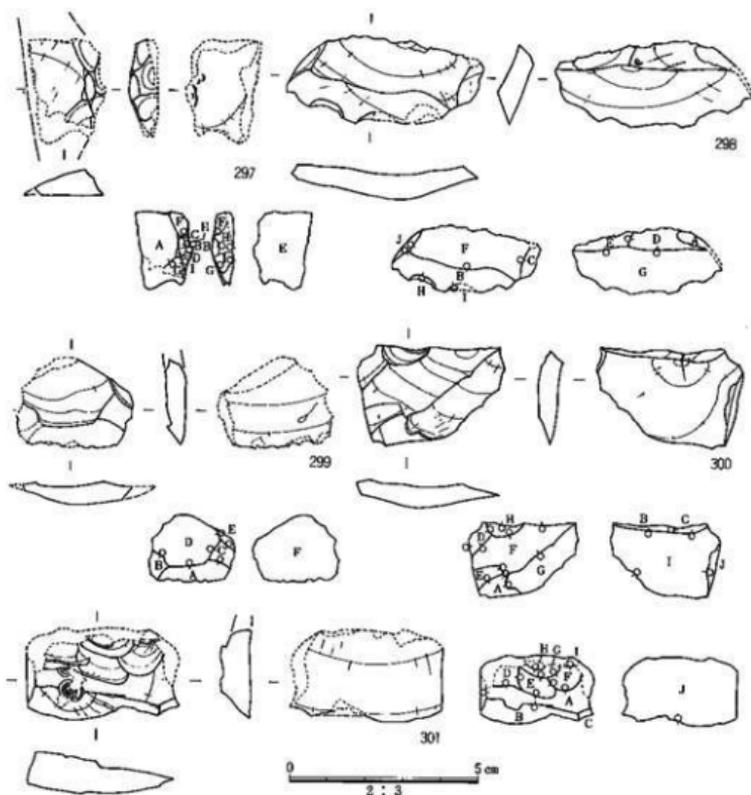


図41 ナイフ形石器・底面をもつ剥片実測図

表6 石器遺物計測表(西地区)

()は欠損品

種類	番号	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
石 鏃	285	2.02	1.30	0.34	0.62
	286	(2.27)	1.86	0.25	(6.88)
	287	6.49	1.94	0.57	6.77
	288	4.66	(1.82)	0.66	(4.59)
	289	(4.17)	2.75	0.79	(7.59)
石 匙	290	4.50	(2.56)	0.78	7.18
	291	(4.56)	3.33	1.14	(19.81)
	292	(3.61)	(2.64)	1.05	(12.51)
	293	4.68	3.97	2.20	49.70
	294	5.06	4.29	1.42	37.96
クサビ	295	7.50	3.84	1.41	(47.87)
	296	(4.68)	2.52	0.77	(10.74)
クサビ剥片	297	(2.79)	(1.75)	0.68	3.95
ナイフ形石器	298	5.27	2.28	0.69	9.14
底面をもつ 剥片	299	(3.08)	(2.31)	0.60	(4.98)
	300	3.84	2.62	0.58	6.82
	301	(4.09)	(2.40)	0.93	(11.59)
	302	2.91	2.47	1.07	6.39
剥片・その他	303	3.99	3.77	0.83	10.43
	304	8.18	2.77	1.66	41.51
	305	5.50	3.62	1.04	12.14
	306	(5.48)	(2.22)	1.40	(17.19)
	307	3.03	(2.15)	0.58	(4.67)
	308	3.51	(2.30)	0.84	(9.69)
	309	5.38	3.29	1.80	20.82
	310	5.00	3.94	1.23	20.28
	311	2.46	2.45	0.54	2.72
	312	4.03	2.65	0.53	4.79
	313	6.06	3.85	0.54	14.59
314	(6.47)	(4.80)	1.44	(39.20)	

～J面)からなり、背面中央の稜線を見通して剥離されている。L面上端には明瞭なバルブアースカー、リングが認められるものの、中央部にはこれに直交する方向のフィッシャーが見られ、横方向に間接的に打撃された可能性もある。比較的鋭い刃となっている右側縁は新しい欠けのため、使用痕の有無は不明である。

305は薄く、断面が三角形を呈する不定形な縦長剥片である。背面は6枚の剥離面(A～F面)からなる。打面は自然面である。E面と主剥離面(F面)は平行し、主剥離面の剥離作業の目的はA・C面とD面が作る中央の稜線を取ることであったと考えられる。

306は幅に対して厚みがあり、断面が三角形を呈する縦長剥片である。背面は2枚の剥離面(A・B面)と自然面からなる。剥片は背面中央の稜線を見通した方向で剥離されている。

しい欠けのため、主剥離面との関係が不明であり、性格は決められない。背面左側縁は折れている。

剥片(図42・43、写真11、図版35)

302は側面に自然面をもつ三角形の剥片である。背面は3枚の剥離面からなる。打面は自然面であり、E面は同時にできた折面である。主剥離面端部に小さな剥離が見られる。

303は素材の側面に自然面をもった不定形な剥片である。背面のB～F面と主剥離面の打点は、同じの方向にある。

304は先端が湾曲した縦長剥片であり、厚く、断面が五角形を呈する。左側面は自然面である。背面は7枚の剥離面(A～G面)からなり、打点は上方にある。打面は打面調整に係わる複数の剥離面(H

また、D面はこの時の折面である。

307は薄く、背面が2枚の剥離面(A・B面)と自然面とからなる縦長剥片である。打面は平坦であり、複数の打痕が残る。主剥離面にはバルバースカーが発達している。

308は厚く、断面が三角形を呈する縦長剥片である。背面は5枚の剥離面(A～E面)からなる。打面は打面調整に係わる複数の面からなる。剥片は背面のA・B面が作る稜線を見通した方向で剥離されている。主剥離面はバルブが発達している。M面は折面であるL面と一連のものと思われる。I・J・K面は剥片の形態を変化させるものではない。

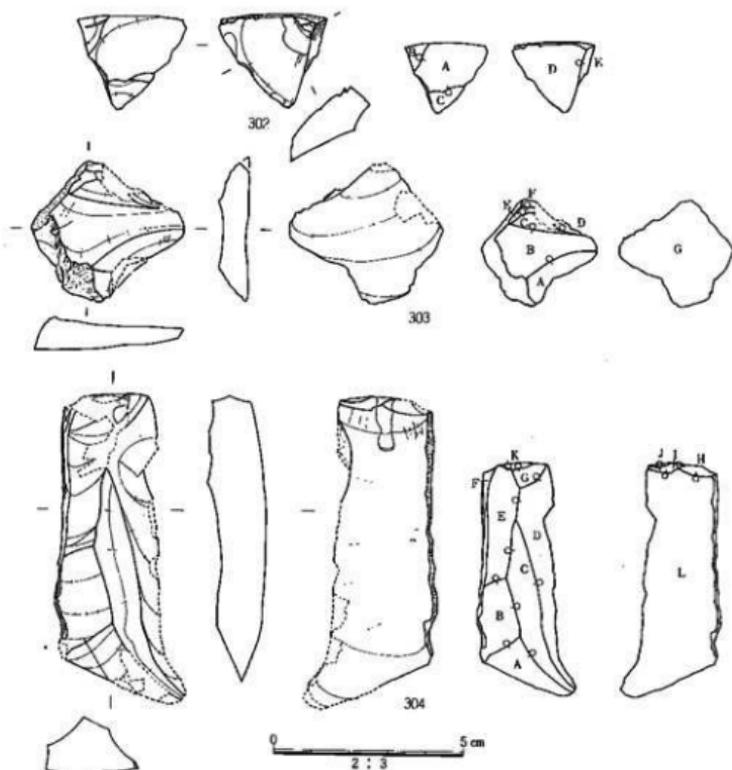


図42 剥片実測図

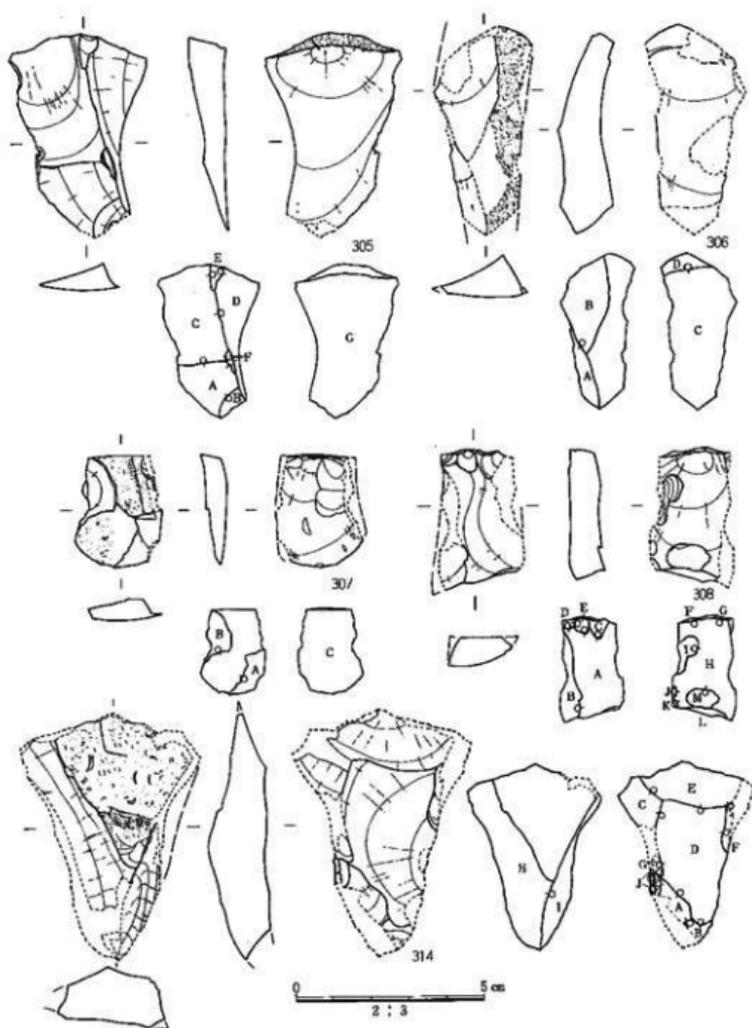


图43 剥片・その他実測図

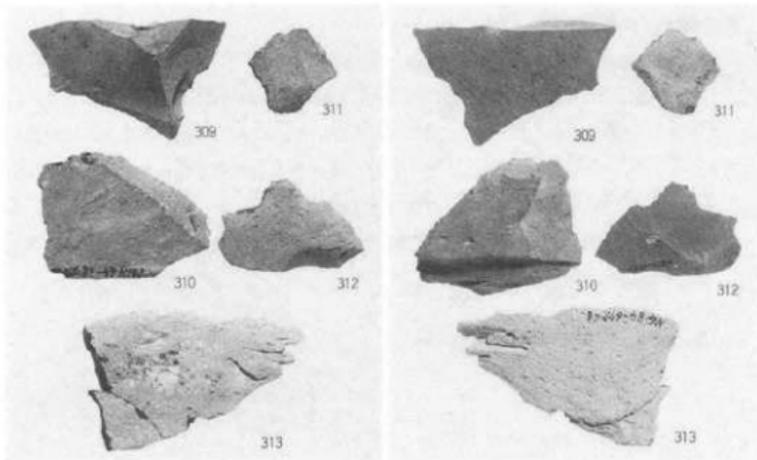


写真11 剥片

309は6枚の剥離面からなるブロック状の剥片である。面關係を検討できる資料ではない。

310は背面が1枚の剥離面と自然面からなる。この剥片を剥離した打撃は素材にあったキズから分散し、主剥離面のほかに、2枚の剥離面を形成している。

311～313は背面が自然面である薄い剥片である。313は風化が著しい。

その他(図43、写真11)

314は自然面と主要な7枚のネガティブな剥離面からなる。表裏面で剥離の状況が異なる。D・E面では比較的大きく、縁をもった剥片が剥離されたと考えられる。周囲を新しい欠けで失っており、他の剥離面との關係を説明できないため、剥片を剥ぐことを意図したものか、板状の素材を加工したものかは判定できない。

(岡村)

石庖丁(図44、図版33)

317は明緑灰色結晶片岩製の石庖丁である。背部と両側端部を欠く。刃先端から3cmの間隔において、刃に平行する位置に直径0.4～0.5cmに復元できる2個の紐孔を穿つ。これらの間隔は心々で2.5cmである。Ⅳ区「馬池谷」内に堆積する長原7層に相当する黒色粘土層から出土した。

砥石(図44、図版33)

IV区「馬池谷」内に堆積する長原4～6層に相当する緑色ないし緑灰色粘土層から2点が出土した。315は割れ面以外の3面のうち、図44の断面図における左右両側面が使用された砥石である。右側面は研磨により凹面をなしている。もっとも広く遺存する上面は中央が凹んでおり、そこには敲打痕が残る。砥石として使用されたのち、台石として使用されたものと思われる。浅黄色を呈する細～中粒砂岩製である。

316は遺存する3面のうち、図44の断面図における上面のみが使用され、下面および両側

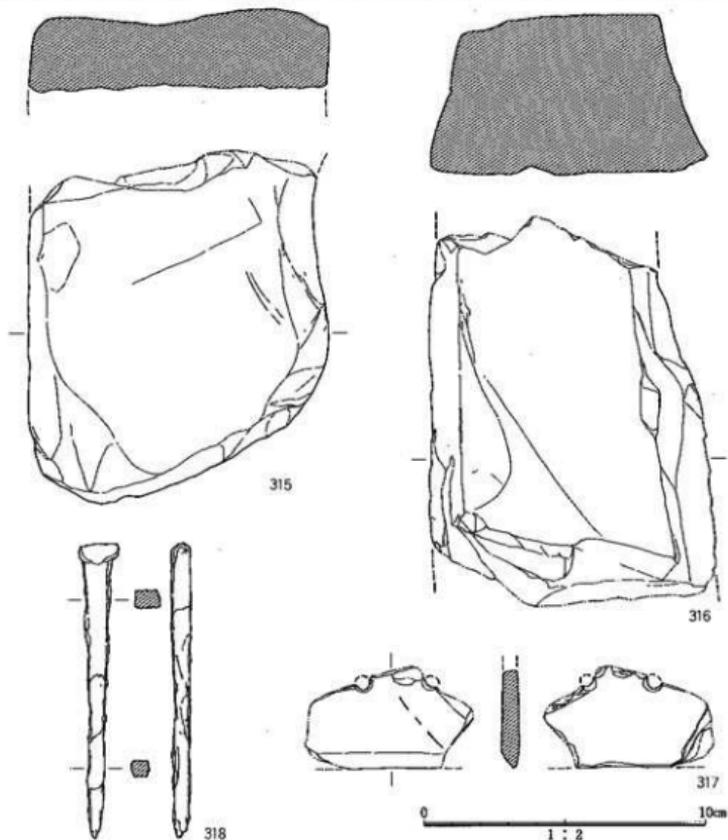


図44 石製品・金属製品実測図
砥石(315・316)、石版丁(317)、鉄釘(318)

面は平坦に加工しているものの、使用されていない。オリブ灰色を呈する紫蘇輝石安山岩製である。

鉄釘(図44、図版33)

318はⅣ区「馬池谷」内の長原4～6層から出土した。現存長10.4cm、脚の断面形は0.5cm角の方形を呈する。脚上端を薄く叩き延ばして折曲げた折頭釘である。

銭貨(別表2)

319はⅡ区中央部で出土した。銹化が著しく、外縁は消失している。銭文は「元寶」が判読でき、他の二文字は部分的な字面からみて「型宋」ではないかと思われるが、明瞭でない。型宋元寶は1101年初鑄の北宋銭である。

(京嶋)

3) 古墳時代の遺構と遺物

Ⅰ・Ⅱ区で古墳4基(図45)、Ⅳ区で掘立柱建物1棟、柵1列、Ⅴ区で土塚墓1基などのほか、多数の土溝・溝を検出した。

i) 110号墳

遺構(図46、図版7)

Ⅱ区北部に位置する。墳丘の南北の長さが9.3mの方墳で、周溝の幅は2.3～3.0m、深さは0.15mである。長原4層を埋土とする溝で墳丘の上部を削られ、墳丘はもともと残りのよいところで周溝底から0.35mの高さを残しているにすぎない。墳丘の方位はほぼ正方位で、北周溝内から有蓋高杯2個体(322・323)、南周溝で衣蓋形埴輪(330)が出土した。

(黒田)

遺物(図47・48、図版36～38)

須恵器

蓋杯(320)、完形の有蓋高杯(322・323)と高杯蓋とみられる321、高杯形器台(324・325)、甕(326)がある。

320は天井部を欠いており、高杯蓋の可能性もある。321は天井部外面に

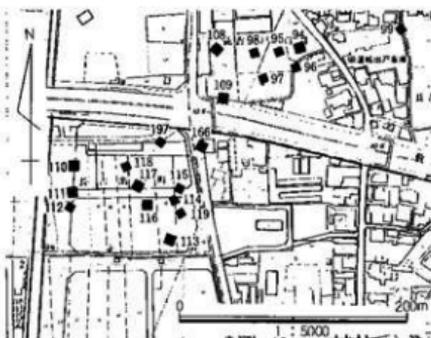


図45 西地区周辺の古墳分布図
(ゴチック数字は本書報告古墳)

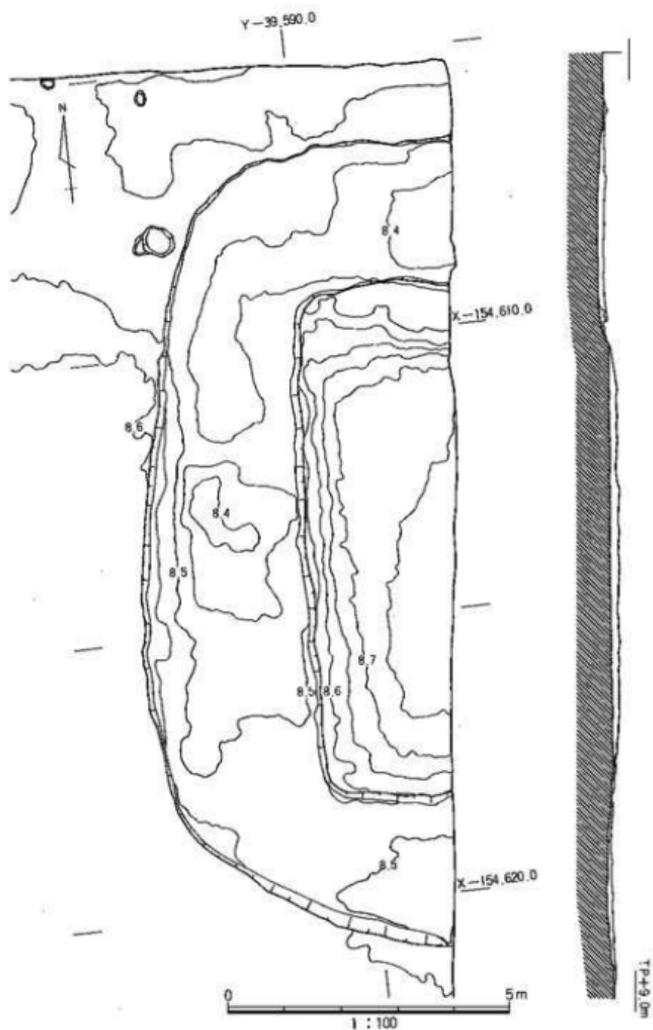


図46 110号墳実測図

カキメを施し、口縁端部は面を作る。頂部は欠損しているが、つまみが付くものと推測される。

322・323は脚端部の内側をヨコナデにより下方につまみ出し、端部外面に面を作る。杯部口縁部は上端に面を作るものである。322は三方に円孔を穿つ。323は脚部に長方形のスカシ孔を三方に開け、脚端部は丸みをもつ。脚部から杯底部の外面はカキメを施し、杯部外面に「×」のヘラ記号を線刻する。

324は口縁端部を短く外方に屈曲させ、面を作る杯部である。2本1単位の稜線を上下二段に作り、上段の稜線帯と口縁部との間には列点文を、上下の稜線帯の間には波状文を施す。底部付近の外面には平行タタキが施され、内面には同心円の当て具痕が残る。325は脚台部で、2本1単位の稜線が3単位確認でき、それぞれの間に2ないし3帯の波状文が描かれている。三角形に復元できるスカシ孔がある。

326は口縁端部を上下につまみ出し、稜線以下の頸部に波状文を施す。体部外面は平行タタキを施している。

これらの須恵器はおおむねTK208型式に比定できる。

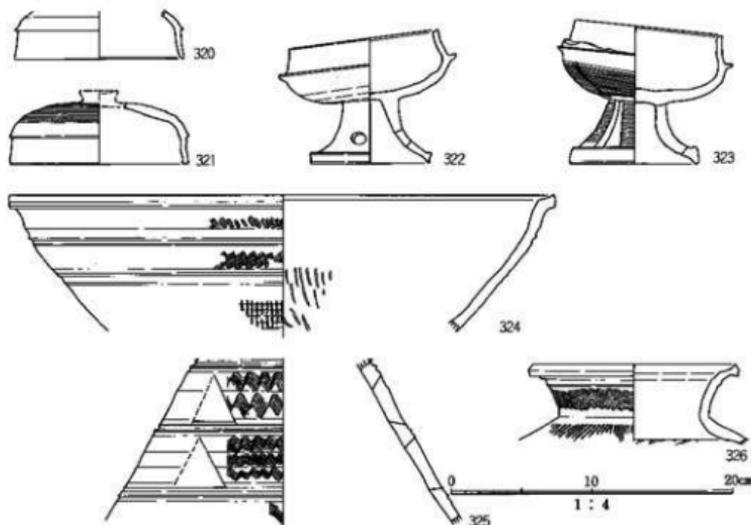


図47 110号墳出土須恵器実測図

第二章 調査の結果

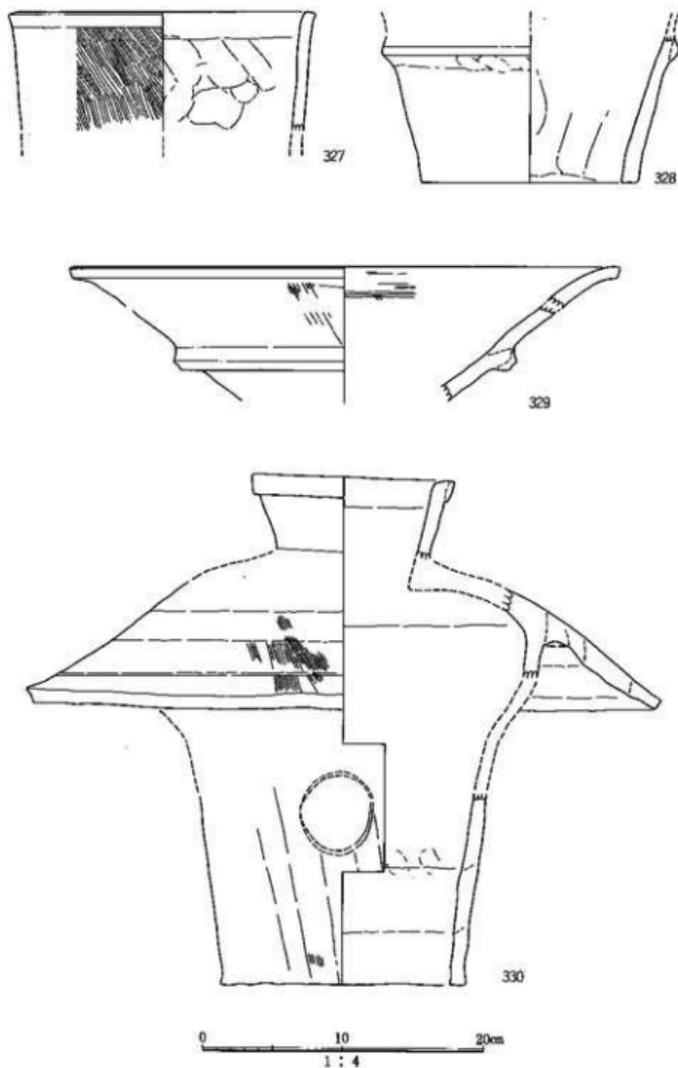


図48 110号墳出土埴輪実測図
円筒埴輪 (327・328)、朝顔形埴輪 (329)、衣鉢形埴輪 (330)

埴輪

円筒埴輪(327・328)、朝顔形埴輪(329)、衣蓋形埴輪(330)がある。これらはすべて無黒斑である。

327は口縁部で、口縁上端に面を作る。外面は左上がりのタテハケ調整、内面はナデである。底部328は外面にかすかに縦方向のハケメが残る。断面が低い台形のタガが巡る。朝顔形埴輪口縁部の329は頸部と口縁部の接合部外面に粘土紐を貼付けてタガとする。口縁部外面は縦方向のハケメ、内面には横方向のハケメが残る。

330は、笠部と円筒部は接合できないものの、胎土や色調から同一個体と判断できるものである。笠頂部の立飾りを挿入する筒部上端の外面には、粘土紐を貼付けて厚くしている。笠部はわずかに丸みをもって開き、外面にはハケメと粘土の接合痕が残る以外は、線刻などによる表現は施されていない。笠部の直径は44.8cmである。円筒部には一対の円形のスカシ孔があったと推測され、外面は縦方向のナデ調整をしている。底径は17.4cmである。

いずれも長石・チャートを含み、黄橙色を呈する。

(京嶋)

ii) 111号墳

遺構(図50、図版8・9)

Ⅱ区中央部に位置する。墳丘は南北10.8m、東西10.3mのやや菱形を呈する方墳で、方位はN17°Wである。周溝の幅は2.7～3.6mで、深さは0.2mを測り、北周溝の墳丘寄りに直径0.25m、深さ0.15mの円形のピットがある。また南周溝の中央部が東西3.0～3.3mの幅で深くなっている。周溝の底から墳丘の最高点までの比高は0.5mである。また墳丘頂部は直径0.5～0.6mで亀甲状にひび割れ、粗い砂が噛んでいる。これは墳丘築造の際の盛土の一単位を示すものと推測される。このほか、墳丘上には長原3～4層を埋土とする中世の溝が、墳丘中央を中心として弧を描くように刻まれている。

多くの遺物が出土したが、特に須恵器器台は南周溝の外縁部で、馬・人物形埴輪は東周溝内に集中して出土した。

(黒田)

遺物(図51～54、図版36～39)

須恵器、無黒斑の埴輪が多く出土した。

須恵器

蓋杯(331～334)と高杯(337～345)、高杯蓋(335・336)、高杯形器台(346・347・

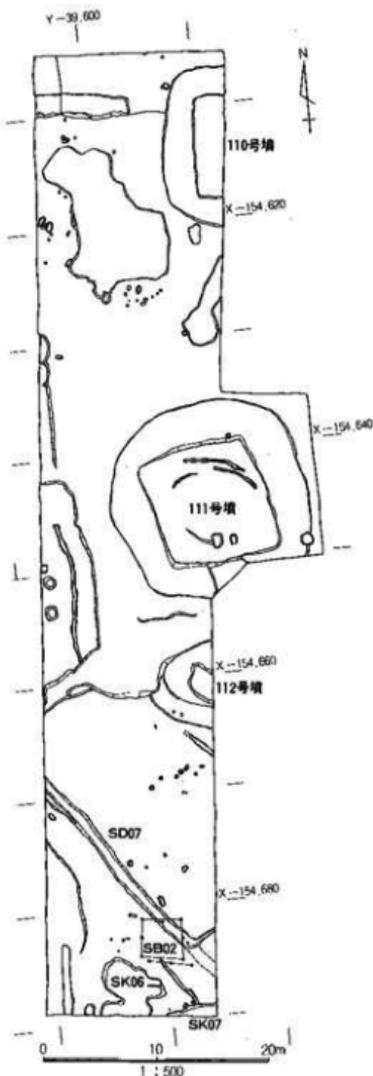


図49 II区全体図

350)、筒形器台(349)、甕(348)がある。

331・332は丸みをもった天井部から、やや開きぎみの短い口縁部をもつ杯蓋で、端部に内傾する面を作る。TK216型式である。これらはともに西周溝外縁部で出土したもので、本墳に伴わない可能性がある。

杯身の333は立上がり短く、口縁部に内傾する面を作る。底部外面にヘラ記号がある。334は深い体部で、全体的に器壁が薄い。337～341は口縁部の上部に面を作る有蓋高杯である。337は脚部に三角形のスカシ孔を三方に開け、その直下に稜線を作り、段を作って脚端部となる。338は裾部に稜線を作り、杯部との接合部までの外面にカキメを施す。スカシ孔はない。342～345は高杯脚部で、343・344は外面調整がカキメで、スカシ孔がない。342は長方形のスカシ孔が四方に開けられ、内面に「X」のヘラ記号がある。345は直径5mmの円孔を四方に開ける。高杯蓋は開きぎみの口縁部の335と、天井部が高く口径が小さい336がある。以上の高杯はおおむねTK23型式である。

高杯形器台の346は杯部外面の口縁部直下に1本の、それ以下に2本で1単位の稜線を上下2段に作り、それぞれの間に2ないし3帯の波状文を施す。杯底部外面には平行タタキを施している。脚台部にも同様の稜線が作られており、その間に波状文を施す。また、長方形のスカシ孔を八方に開ける。脚端部347は端部を下方に屈曲させてい

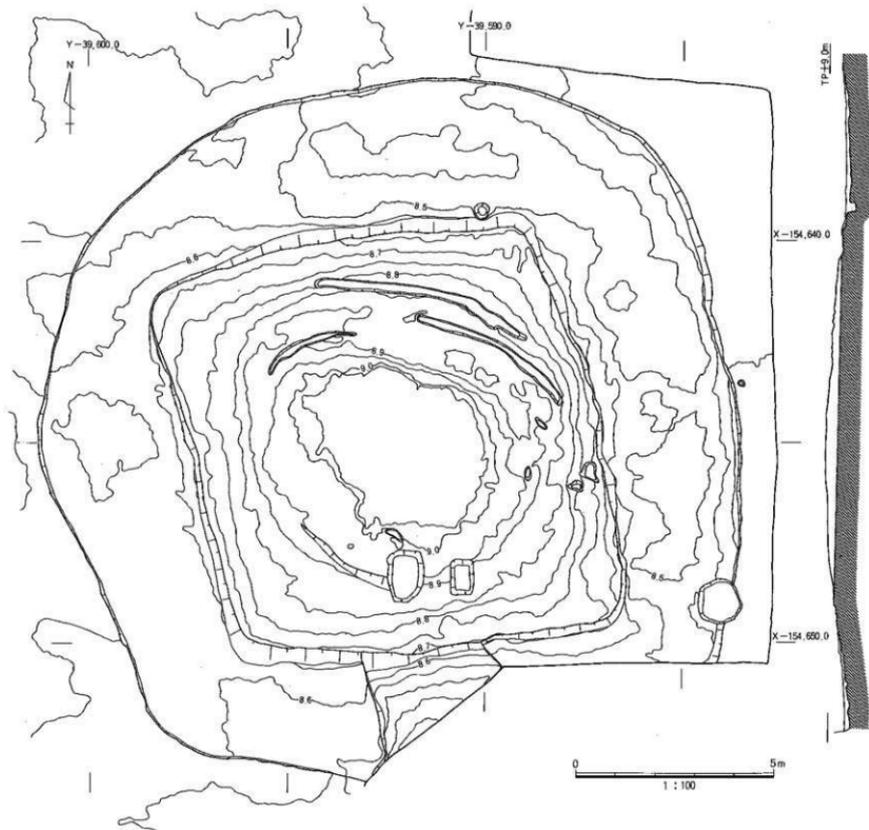


图50 111号墳实测图

る。脚台部350は外面に2本で1単位の稜線を4単位作り、それぞれの間に三角形のスカシ孔を開け、波状文を施す。裾部はそのまま広がり、端部はヨコナデで面を作る。いずれもTK23型式である。

筒形器台349は外面に2本1単位の稜線を2単位作り、その間に波状文を施す。小さな杯

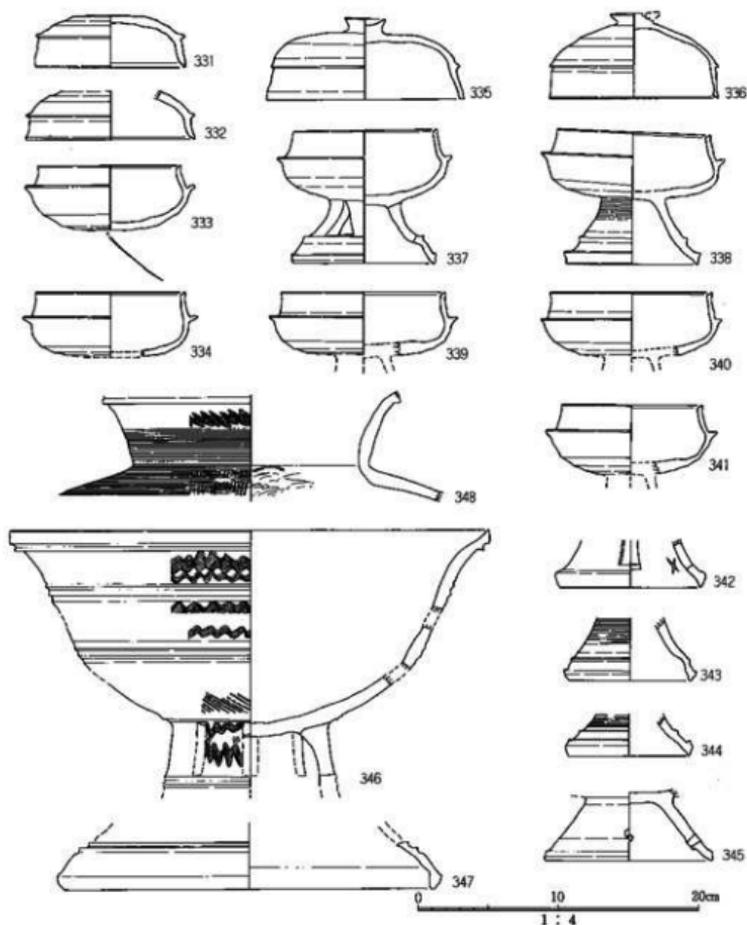


図51 111号墳出土須恵器実測図(1)

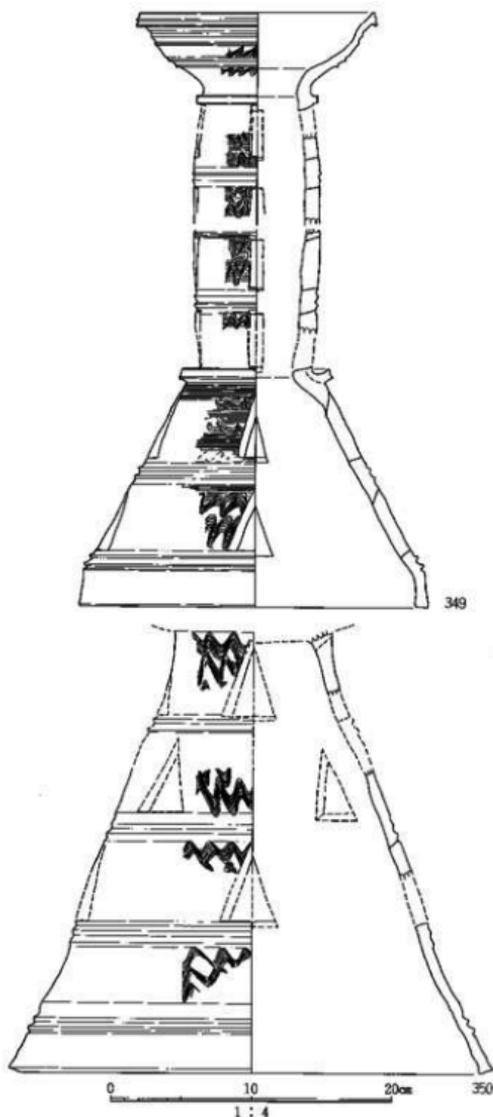


図52 111号墳出土須恵器実測図(2)

部から断面方形の突帯を介して筒部となる。筒部は接合できないが、2本1単位の稜線で外面が4段以上に区分される。各稜線の間は、四方に長方形のスカシ孔が開けられ、波状文が施される。筒部と脚部との境界には、やはり断面方形の突帯を作り、脚部には2本1単位の稜線を2単位作り、その間に三角形のスカシ孔を四方に開けて、外面をカキメで仕上げたのち、波状文を施す。脚端部は下方に屈曲させ、端部は面を作る。杯部内面や筒部外面に緑色の自然釉が厚く付着する。

以上の器台はすべて南周溝外縁付近で出土している。

348は口縁端部を欠く甕の上半部である。口縁部下の稜線の下方に波状文を施し、それ以下、頸部外面はカキメで仕上げる。体部外面は平行タタキののち、カキメで仕上げる。

このほか、本墳周溝外の北西部で、体部に波状文を施す小型碗2個体と小型壺1個体を破片で出土している。

円筒埴輪

351～353は外面を斜方向のハケ調整する。内面は351・353がナデ調整、352は斜方向のハケ調整である。口縁の上端に面を作る。351は断面三角形の低いタガが、353は断面台形の低いタガが付く。

朝顔形埴輪

356は頭部、354・355は端部を欠く口縁部で、口縁部の外面の頭部との接合部には断面台形のタガを貼付ける。風化が顕著であるが、354の内面に横方向のハケメがみられる。

家形埴輪

357は切妻形式の屋根の破風板の破片で、下端部が遺存する。わずかに残る屋根面に線刻などは見られない。

衣蓋形埴輪

358は立飾りである。4枚の飾り板が十字に交差する部分の上端部に当る。遺存する1枚の飾り板の両面には、外周に巡る平行する2条の線刻と、その内側に2ないし3条の平行する線刻が緩やかな弧を描いて施されている。

人物形埴輪

359は頭部から頭部にかけての破片である。360は頭部の「美豆良」を表現したものと思われ、上部は薄くなり、上端側方に接合された痕跡がある。これらは砂粒を多く含み、乳白色を呈する軟質のもので、他の埴輪との識別が容易である。同様に頭部と思われる破片がほかにもあるが、顔の表現を残す破片はない。

(京嶋)

馬形埴輪

以下に記述する馬形埴輪は、373～376が111号墳北周溝北部で出土した以外はすべて墳丘東部または東周溝内から出土した。

頭部(361)、鬣(362・365)、鞍橋(363・364・366)、鞍(368)、障泥(369～374)、脚(375)、尾(376)がある。362は鬣の先端を円筒状にしたものであろう。残存高4cmである。

361は左顔の目から耳にかけての破片である。頭頂部には鬣の剥がれた痕がある。また、耳の下に面繫を表わした突帯の痕跡もある。目の部分は楕円形に穿孔され、眼に当たるところが隆起している。

363・364・366は鞍橋であるが、前輪・後輪のいずれかは明確でない。363の片面には、その下端部にわずかに線刻があり、これが雲珠につながる紐の表現ならば後輪といえよう。

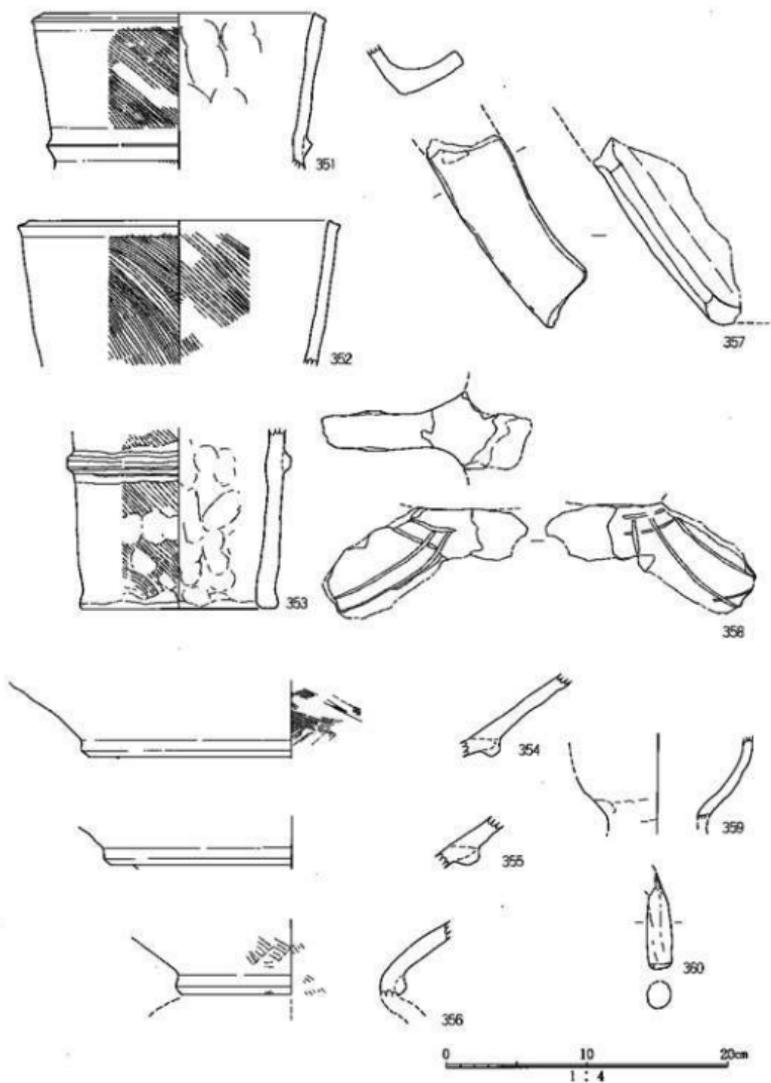


图53 111号墳出土地輪実測図

円筒地輪 (351~353)、胡瓶形地輪 (354~356)、冢形地輪 (357)、衣裳形地輪 (358)、人物形地輪 (359・360)

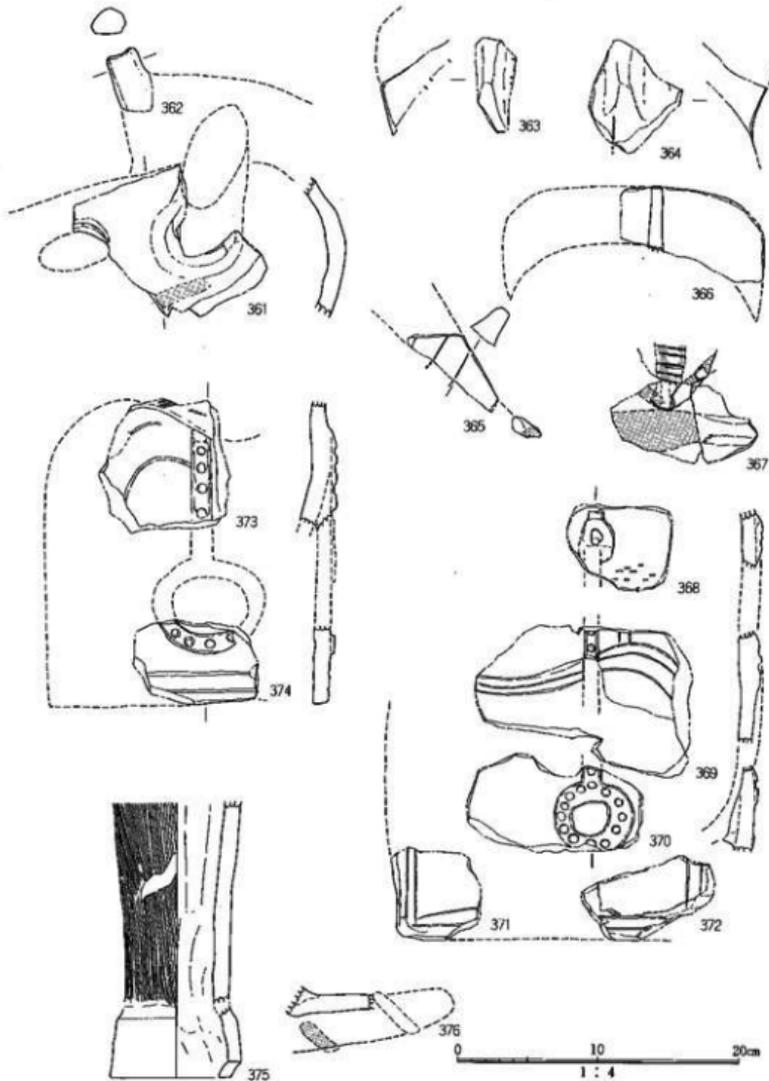


图54 111号填出土周形地輪尖測図

364には、障泥あるいは障泥を下げるための紐の表現と思われる線刻がある。366は全体の約半分が残り、もとの鞍橋の形状を知ることができる。それによると、左右の幅は約18cmで、上部の平坦なものであったことがわかる。

365・367は鬘と前輪の一部である。鬘は前輪に向って徐々に低くなる。鬘の両側面には頸部との接合面に対し垂直に線刻が施されており、鬘の毛のようすを表わしたものとと思われる。鬘と前輪の接する部分には前方から取束してくる手綱が表現されている。手綱は幅約1cmの突帯を貼付けたものである。なお、鬘と頸部との接合にあたっては、頸部側にキザミ目を入れ、接合をよくするための作業を行っている。

368は鞍褥と、鐙を吊す紐であろう。紐は幅約1cmの突帯で表わされるが、その一部に環状になっている部分があり、その部分は鉸具の可能性もある。この突帯の右に列点文の施された部分があり、他の馬形埴輪の類例から考えて、鞍褥と思われる。

369～374は鐙と障泥に当る。鐙の位置から考えて、373・374は左側面、369・370は右側面であろう。373・374の障泥は上辺がM字形になるもので、縁に沿って2条の線刻がある。鐙は輪鐙で、幅1.4cmの突帯で表現され、銜を表わすと考えられる円形の刺突が施される。373の表面には腹部との接合痕がある。369・370に表現されているものも、基本的に373・374と同じであるが、以下の点で異なっている。まず、障泥の上辺のM字形が緩やかなカーブであること、また、輪鐙の径が小さく、その突帯の幅も1.8cmと、前者に比べて広いものであること、さらに、その上に施された円形の刺突もわずかに大きく、施文の間隔も狭いこと、である。こうした諸点から、前者とは別個体とも考えられる。なお、369には鐙から続く突帯の右に2条の線刻があり、障泥を吊り下げるための紐を表わしたものとと思われる。370の裏面には腹部との接合痕がある。

375は脚である。残存高19cmの円筒状の破片であるが、下端から4.5cmの位置から外方に折り曲げて蹄を表現する。蹄の後方は半円形にヘラで切り取られるが、この時、接地面全体も同時にヘラケズリされている。そのため、脚部がまだ1本の円筒の状態の時に、この作業が行われたことが推測される。外面にはタテハケを残すが、蹄の部分はナデ調整される。内面もナデ調整されている。焼成は他の破片とは異なり、非常に堅緻である。

376は先端を欠く尾の部分である。残存長は6cmである。外面に幅1cmの突帯を螺旋状に巻付けていた痕跡がある。直径1.5cmの芯棒を用い、それに粘土を巻いて成形する。焼成は375と同様である。

(櫻井)

iii) 112号墳(図55・56、図版9・38)

Ⅱ区中央部に位置する。墳丘は南北5.7m以上、東西4.5m以上であるが、北側は後世に掘削を被り、現在は不定形である。したがって、111号墳との関係も不明であるが、周溝を共有していた可能性がある。南側の周溝の幅は1.8m、深さは0.05～0.10mで、周溝底から墳丘の最高点までの比高は0.30mである。

出土遺物には須恵器壺、円筒埴輪、朝顔形埴輪、衣蓋形埴輪、盾形埴輪があるが、いずれも小破片である。

377は口縁端部外面にヨコナデによる面を作る。外面に稜線を2本作り、その間に波状文を施す。TK208型式である。

埴輪はすべて無黒斑である。円筒埴輪379は底部で、外面に斜方向のハケ調整を施したのち、台形の大きなタガを貼付け、タガから上の外面にB種ヨコハケ[川西宏幸1978]を施す。内面はナデ調整である。378は朝顔形埴輪の肩部から頸部にかけての破片である。380は衣蓋形埴輪の立飾りである。両面に2本の平行する線刻で直線と弧を描く。381は盾形埴輪で、円筒部と盾面の接合部である。盾面はかなり磨滅しており、ほとんど線刻は見えない。

112号墳は111号墳と隣接しているため、これらの遺物の中には111号墳からの混入品もあると思われる。

iv) 197号墳(図57)

I-1区の西端で、墳丘東隅と周溝の一部を検出した。周溝幅は1.9mで、深さは0.1m、墳丘の盛土は失われ、基底面の黄白色粘土の地山が遺存するのみだが、周溝底

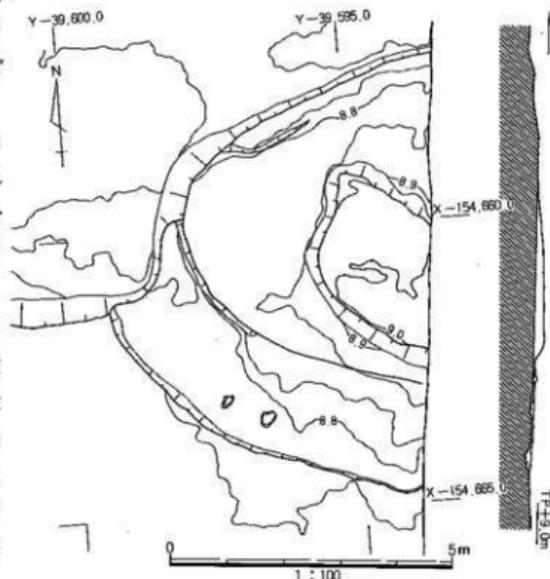


図55 112号墳実測図

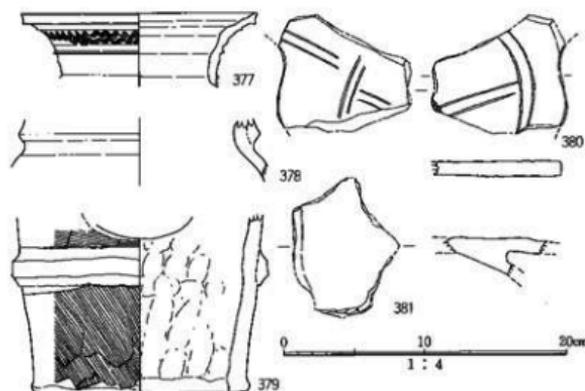


図56 112号墳出土遺物実測図

須恵器(377)、朝顔形埴輪(378)、円筒埴輪(379)、衣蓋形埴輪(380)、唇形埴輪(381)

から墳丘の最高点までの比高は0.25mを測る。発掘時には古墳と断定できなかったが、本節の「1)調査地の層序と遺物」で報告した269~272をはじめとする円筒埴輪が、推定される周溝および墳丘の上面に堆積する長塚6層から出土し、

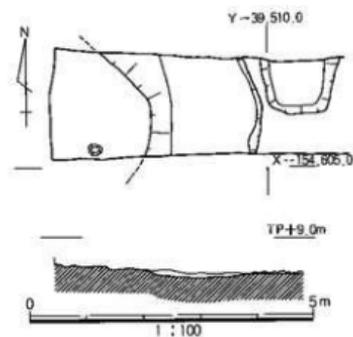


図57 197号墳実測図

一方、I区他の地点ではまったく出土していないことから、本誌では新たに197号墳の通し番号を付けて報告する。

v) 掘立柱建物・櫓

SB01(図58・59、図版10)

IV-1区北端に位置する2間×2間の掘立柱建物である。桁行総長3.2~3.4m、梁行総長2.9~3.2mで、平面形はややいびつな方形を呈する。柱穴の平面形は不定形で、0.4~0.5mの規模である。南東の隅柱は83-53次調査のSD15

[大阪市文化財協会1992A p.74]の連続と思われる浅い溝状遺構を切っている。棟方位はN20°30'Wである。柱穴から遺物は出土しなかった。SB01の北4.5mには、同様の方位を示す83-32次調査のSB23[大阪市文化財協会1992A p.64]があり、一連の建物群をなすものと思われる。

SA01(図59、図版10)

IV-1区北端で、SB01の南辺に重なって位置する。3間以上の櫓で、5.35m以上を測る。柱間は1.5~2.2mで不揃いである。柱穴は一辺の長さが0.4~0.6mの方形である。櫓の示す方

位はE5°Nである。柱穴からの出土遺物はない。

vi) 土壌

SK01

遺構(図59・60、図版11)

V区に位置し、長原7層を埋土とする浅い土壌を切って、その埋土の上面から掘込まれている。規模は長さ2.2m、幅1.9m、深さ0.52mである。板で蓋をするための蓋受けと思われる幅0.2~0.25mの浅い段が作られていた。段の内側の部分は長さ2.0m、幅1.0

~1.8mで、平面形は台形を呈する。須恵器甕を主とする遺物が段の部分と同じ高さに分布していることから、段の内側の深い部分がある程度埋没してから、土器が置かれたものと思われる。後述するように、土壌埋土の中位からウマの下顎骨が出土しており、ウマの部を埋葬した遺構の可能性はある。

ところで、SK01は形態はやや異なるものの、底面が段状に低くなる、ウマの遺体出土する、供献土器とみることも可能な土器が出土するなどの点で83-32次調査のSK10[大阪市文化財協会1992A pp.71-72]と類似している。

遺物(図61・62、図版40・41)

土師器は甕(386・389)のほか瓶の破片がある。386は口径10cmの小型甕で、あまり外反しない短い口縁部である。体部外面に粗いハケメがかすかに残る。内面の調整は不明である。389は外反する口縁部で、端部に面を作る。体部外面にハケ調整を施すが、内面の調整は不明である。須恵器には高杯(390)、高杯蓋(391・392)、高杯形器台(400)、甕がある。390は脚部の破片で、長方形のスカシ孔を三方に開ける。端部は下方に延び、上方の外面に稜線を作る。391・392は391の天井部外面のヘラケズリをナダにより仕上げていること、392の天井頂部につまみの痕跡があることから高杯の蓋と考えられる。いずれも、口縁端部にやや凹む面を作る。400は杯部と脚部の接合部付近の破片である。杯底部の外面には平行タタキを施している。脚部には三角形のスカシ孔を四方に開け、外面に波状文を施す。また、この遺構からの出土遺物ではないが、このトレンチ内で出土した古墳時代の土器として、須恵器蓋杯(393)、甕または壺(401・402)がある。401は口縁端部を欠く。口縁端部

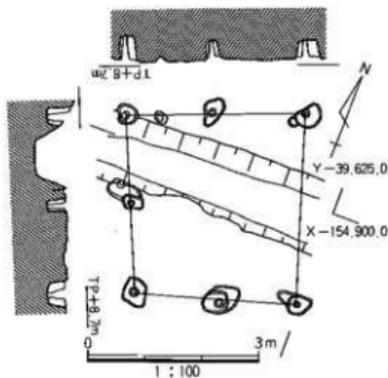


図58 IV区SB01実測図

第Ⅱ章 調査の結果

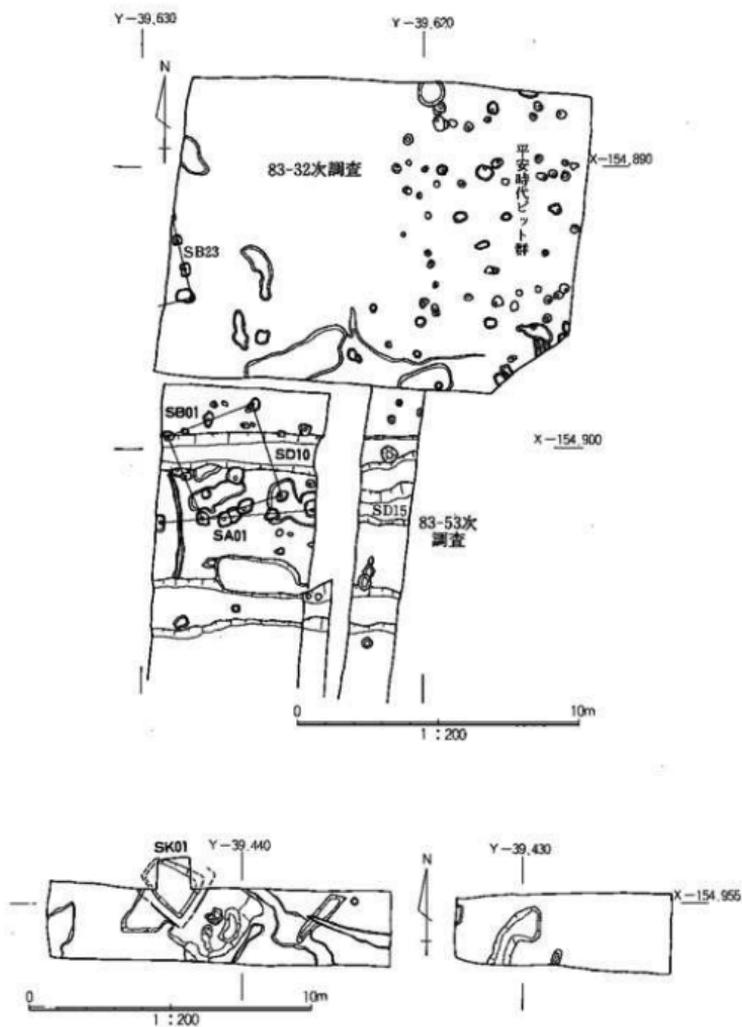


図59 N区北部(上)・V区(下)全体図

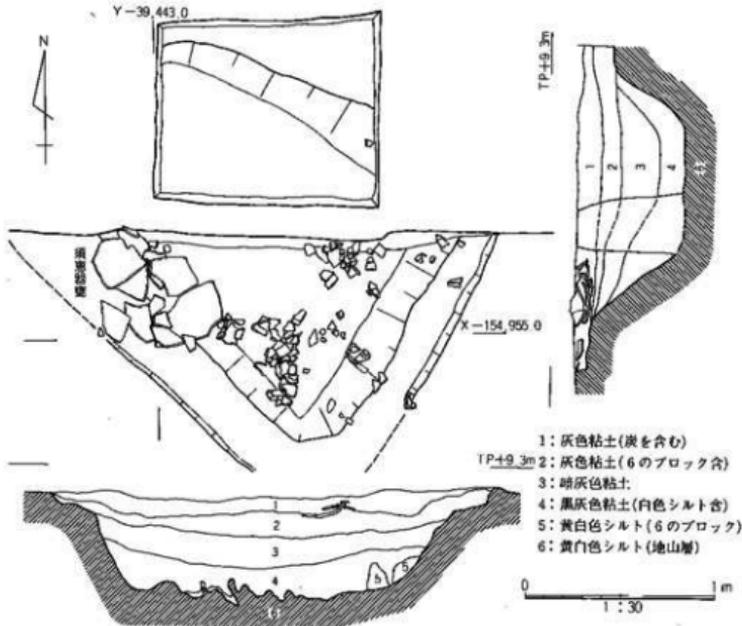


図60 V区SK01発掘図

の下方の外面に2本の稜線を作り、その間に波状文を施す。体部上半は底部付近を除いてカキメ調整で仕上げ、最大径部のやや上方に列点文を施している。体部の遺存する部分については、円孔が開けられていた痕跡は認められなかった。402の口縁部は端部を外方につまみ出し、上端に面を作る。頸部から口縁部にかけての屈曲部外面に稜線を作る。口縁部および頸部の外面に波状文を施す。

既述のように、甕の体部片が据えられた状態で出土したが、口縁部はなく、体部のみであった。外面は平行タタキで、内面には同心円の当て具痕が残る。

404は灰白色石英粗面岩製の砥石である。剖面に対して斜方向の研磨面がわずかに残る。研磨面はわずかに研ぎ減って凹面をなしている(図61)。

SK02~05(図62・63、図版40)

Ⅵ区の北半部で検出された土壌である。平面規模が0.5~2.0m程度で、深さは0.2~0.5mである。この地区の調査は工事の立会調査であったため、これ以上の記録がないが、後述す

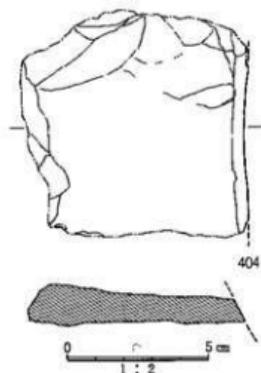


図61 SK01出土の砥石実測図

る出土遺物から古墳時代の遺構であると断定できる。また、SK05は直径が約0.5mの円形を呈すると思われる小型の土壌であるが、後述するようにウマの頭部が埋納されていたと推測される。

土師器高杯382はSK02から出土した杯部であるが、器面は風化が顕著である。383はSK03から出土した土師器高杯の脚部である。柱状部外面は縦方向にナデ調整し、裾部の内外面は斜方向にナデ調整する。柱状部内面には絞り痕を残す。384・385・387・388は土師器甕である。384はSK02出土で、直立する口縁部をもつ。外面にはハケメがわずかに残る。385はSK03から出土したもので、短い口縁部の小型品である。387・388はSK04からの出土で、いずれも調整痕はほとんど遺存しない。

394～396・398・399はSK02～04出土の須恵器蓋杯である。SK02出土の394は口径8.9cmの小型の杯で、口縁端部は丸く作り、受部を鋭くつまみ出す。体部外面のヘラケズリは受部付近まで及び、体部の器壁が厚い。外底面に「V」のヘラ記号がある。TK216型式である。SK03・04出土の395・396・398・399のうち395は口縁端部を厚くし、内傾する面を作る。体部外面の調整は器面が荒れているため不明である。淡黄灰色を呈し、土師質に焼上がる。TK23型式である。396は立上がりが高く、上端部に面を作る。398・399はいずれも立上がりを欠くが、398は外底面のヘラケズリが上方までなされているものである。403(図63)はSK03から出土した甕で、ほぼ完形に復元できる。体部外面は平行タタキのうち、カキメ調整で仕上げ、口縁部もカキメ調整を施す。内面は同心円の当て具痕を残す。TK23型式である。

vii) 溝

SD01・02

I-1区東端の長原6A層基底面で検出された平行する溝である。東側のSD01は幅0.6～0.9m、深さ0.2mであり、西側のSD02は幅0.5～2.5mといびつで、深さは0.25mである。両者の間隔は溝の中心で3.8mである。いずれも黒色粘土を埋土とし、出土遺物はなかった(図32断面図参照)。

I区の南側に位置する84-25次調査地では、道状の遺構の側溝として紹介した平行する

2条の溝が存在する。両溝の間隔が4~6mであることや検出層準からみて、今回検出したSD01・02はその延長部と考えることができ、これまでの理解に基づき古墳時代の遺構として報告する。

SD03

VI区中央部に位置する、南東から北西に延びる溝である。幅約1m、深さ0.2~0.3mである。この溝は85-16次調査で北および南の一部が検出されており、ほぼ直線的に100m以上の長さで続いていることが判明している。今年度の調査では遺物は出土しなかった。

(黒田・京嶋)

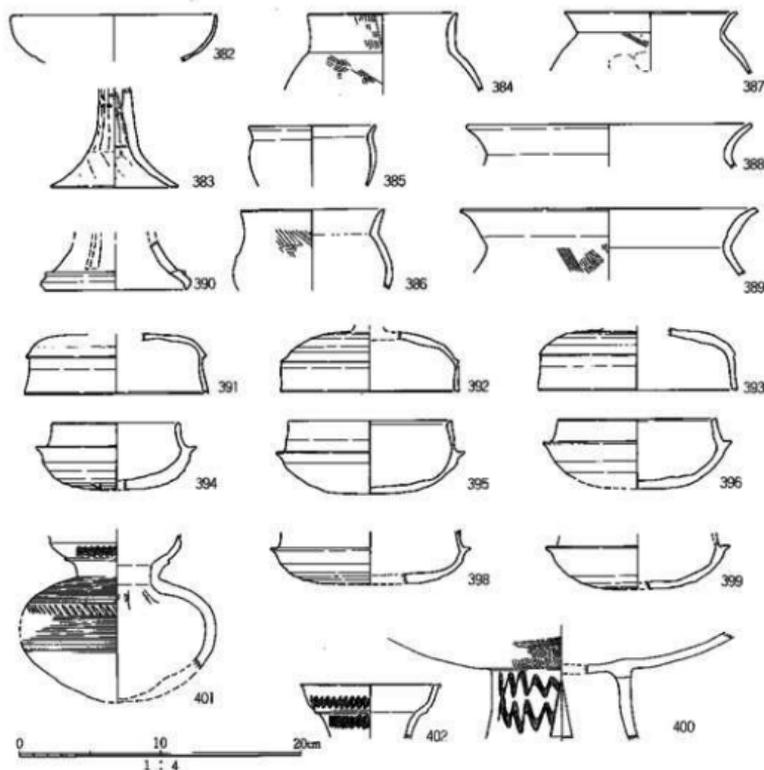


図62 遺構出土土器実測図 (古墳時代)

SK01 (389~392・400)、SK02 (382・384・394)、SK03 (383・385・399)、SK04 (387・388・395・396・398)
V区周辺 (386・393・401・402)

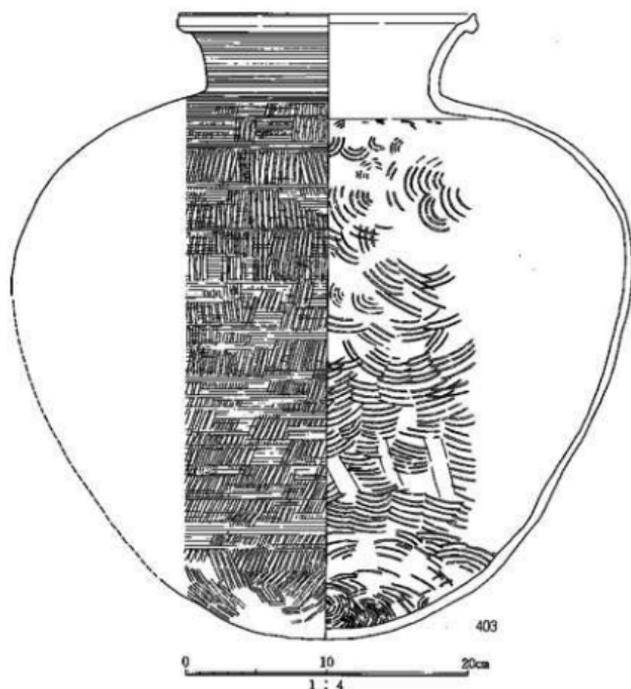


図63 VI区SK03出土須恵器実測図

viii) 動物遺体(図版41)

ここで報告する動物遺体は、長原遺跡西地区の古墳時代から奈良時代の年代が考えられる遺構および地層から出土した5件である(表7)。同定の結果、すべてウマ(*Equus caballus* Linnaeus)であることがわかった(註7)。資料は歯が多く、骨はわずかで、ウマの歯が土壌中での腐食に強いので比較的良好に残存しえたものと考えられる。

以下、各資料ごとに記載する。なお、参考のために各歯の咬面のエナメルヒダの長さど幅の計測値を表8に示しておく。

資料1

V区の後述するSK01を覆う灰紫色粘土層(長原6層相当)から出土した。左上顎の遊離歯で第1後臼歯M¹あるいは第2後臼歯M²と考えられる。歯根は形成されているが、それほ

ど発達していない。

資料2

V区古墳時代中期の年代が考えられる土壌墓状の遺構SK01から出土した。土壌内での正確な出土位置は不明であるが、埋土最上部にあった土器群より下位から出土したものである。資料は右下顎骨および右上顎の第2前臼歯P²である。前者は破損が著しいが、第3前臼歯P³から第3後臼歯M³が植立した状態のものであることがわかった。比較的遺存状態のよい第4前臼歯P⁴では、歯根がすでに形成されているのが観察できた。後者も破損が著しく詳しいことはわからないが、骨の一部が付着しており、本来上顎骨にはまっていた状態であったことが推定される。咬耗の進行状態から判断して下顎骨と年齢的には大きな隔りはないと考えられ、同一個体に由来する可能性が高い。

資料3

IV区「馬池谷」内に堆積する長原4層ないし6層に対比される地層から土器片などとも出土した。右の第2中手骨と第3中手骨が癒合したもので、遠位端が欠損していた。遺存状態は良好で、第3中手骨の近位端を計測することができた。幅49.8mm、前後径32.9mmを測る。

西中川氏らの方法[西中川駿・松元光春1991]を用いて、幅の計測値から骨の最大長を推定すると220.3mmとなる。さらに林田氏らの方法[林田重幸・山内忠平1957]で、体高を推定すると約135cmとなり、これはいわゆる中型馬の大きさに属する。

資料4

資料3と同様の出土状態のものである。歯は7点あった。上顎遊離歯は、左側では第3前臼歯P³・第1後臼歯M¹があり、右側では第2前臼歯P²・第3前臼歯P³・第1後臼歯M¹があった。これらは左右で若干大きさが異なるが、すべて歯根が同じ程度に発達しているので、同一個体に由来する可能性が高い。一方、下顎遊離歯は右側第1後臼歯M¹・第2後臼歯M²があった。上顎歯と比較して歯根がそれほど発達していない。歯根の形成の度合と咬耗の進行状態から判断して、上顎歯はかなりの年齢(10才前後)の個体に由来し、下顎歯は若い個体に由来するものと考えられる。したがって、2個体以上のウマが存在したものと推定される。

歯以外では、左中足骨の体部が1点出土している。近位と遠位の両端部を欠損している。

表7 長原遺跡西地区出土の動物遺体一覧表

資料番号	地区名	遺構・層位	時期
1	V区	長原6層	5～8世紀
2	V区	SK01	5～6世紀
3	IV区	長原4～6層	7～10世紀
4	IV区	長原4～6層	7～10世紀
5	V区	SK05	5～6世紀

表8 ウマの臼歯計測値

資料番号	部位	左右	第2臼歯	第3前臼歯	第4前臼歯	第1後臼歯	第2後臼歯	第3後臼歯
1	上顎	左	—	—	—	(24.6)×(23.5)		—
2	上顎	右	—	—	—	—	—	—
2	下顎	右	—	—	(26.9)×(14.7)	(25.1)×(14.6)	—	—
4	上顎	左	—	28.2×(28.3)	—	23.6×(24.6)	—	—
4	上顎	右	36.3×24.7	27.0×27.4	—	22.9×24.3	—	—
4	下顎	右	—	—	—	—	—	—
5	上顎	左	—	—	—	—	—	(27.0)×(21.0)
5	下顎	左	—	(30.0)×(17.0)	(28.0)×16.0	—	(24.5)×14.5	—

(南冠咬面の長さmm×幅mm、括弧を付したものは現存値を示す。—は計測不能。)

資料5

VI区の古墳時代中期のSK05から出土した。しかし、詳細な出土状態は不明である。上顎遊離歯は左第3後臼歯M³で、歯根は形成の初期の段階で咬耗も始まったばかりのものである。左下顎骨は、第2前臼歯P₂から第2後臼歯M₂が植立した状態のものである。いずれも歯根がまだ発達しておらず、M₂においては咬耗があまり進行していない。以上より判断して、上下両顎歯は同一個体に由来する可能性が高い。

以上が今回出土した動物遺体であるが、なかでも資料2は注目すべき出土状態の資料である。資料2が出土したSK01の規模は長さ2.0m、幅1.0～1.8m、深さ0.5mを測り、平面が台形を呈する土壌墓と考えられている。土壌の南辺中央の埋土上面には供献土器と考えられる須恵器の甕が掘えられていた。ウマは埋土の中位から上下顎骨・歯の一部のみが出土し、土壌中での遺存度や土壌の大きさ・形状を考慮すれば、頭蓋骨や四肢骨など一頭分の骨が存在した可能性もあるだろう。また、このウマも5～6世紀の長原遺跡周辺の出土資料で確認されているいわゆる中型馬に属するものと考えられるので、土壌の大きさはこれを埋葬するのに十分なものである(註8)。以上から判断して、SK01は馬墓である可能性が高い。やや形態は異なるが、前書で報告した同じ西地区のSK10も同様の遺構である[大阪市文化財協会1992A pp.71-72]。また、資料5は頭部のみを土壌内に意識的に埋めた可能性もあろう。このような古墳時代のウマを出土する遺構は、位置が比較的近接し、かつ当時の集落内に存在するものが多い。このことは、長原遺跡における馬の利用を考えるうえで重要な手がかりとなるものと考えられる。

(久保)

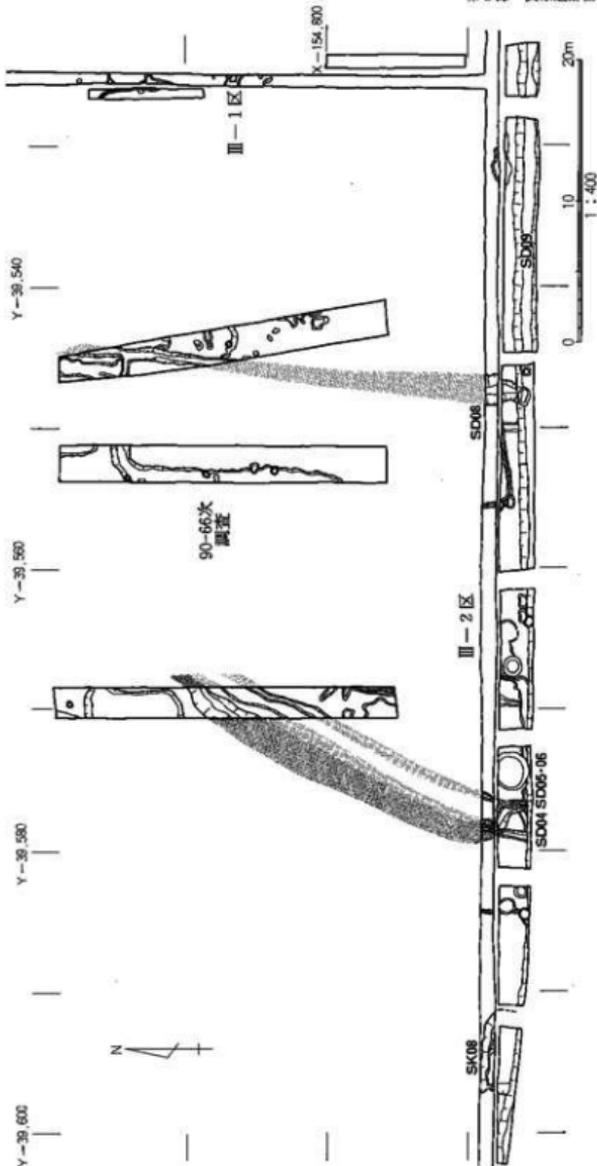


图64 III区全体图

4) 飛鳥・奈良時代の遺構と遺物

i) 溝

SD04・05・06(図64、写真12、図版12)

Ⅲ-2区の西部に位置し、平行して南西から北東に向う溝である。SD04は幅0.65m、深

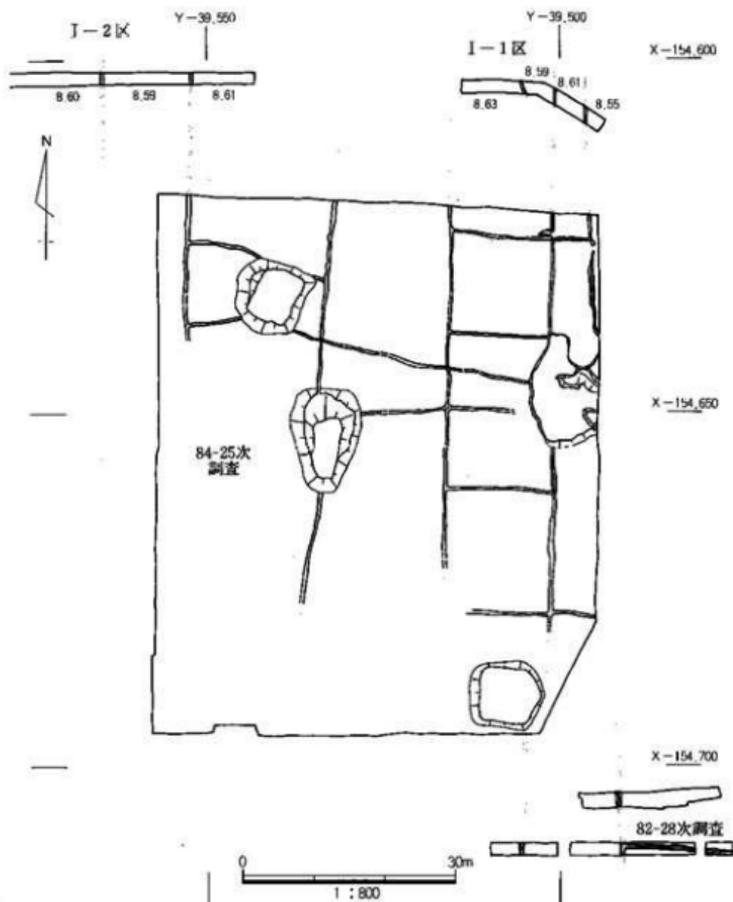


図65 I区とその周辺の水田遺構
(数値は上面のTP+値)

さ0.25m、SD05は幅0.5m、深さ0.32mで、溝中心で2.5mの間隔をあけて平行する。埋土は前者が淡灰色粘土、後者が暗灰色粘土質シルトである。SD06は幅0.70～0.85m、深さ0.23mである。南でSD05と同じ位置に重複し、西に屈曲してSD04と重複する。埋土は灰色シルトである。

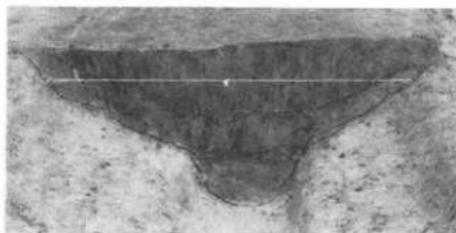


写真12 III区SD05の断面

SD04からMT15型式と思われる須恵器の杯が出土したほかに、土師器甌の口縁部などが少量出土した。SD05からは須恵器蓋杯や土師器甌の細片が出土した。また、SD06からは土師器・須恵器の細片が出土したのみだが、須恵質で凹面に布目を残す丸瓦片も出土した。

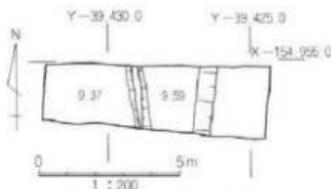
SD04・05の出土遺物は古墳時代のものであったが、この溝の北に続く部分を調査した90-66次調査では飛鳥時代の遺物が出土しており、その時期の遺構として報告する。また、SD06は前書において奈良時代までさかのぼる可能性のある溝SD03[大阪市文化財協会1992Ap.113]と同じ溝ではないかと推定した。しかし、90-66次調査ではSD04に続くと思われる溝を切って重複する奈良時代の溝が検出されていること、SD06がSD04・05を意識した配置を示していることなどからみて、SD06は90-66次調査の溝に続く可能性がより高いものと訂正したい。

ii) 水田遺構(図65・66、図版13)

I-1区で3本、I-2区で2本、V区で1本(図66)の南北畦畔を長原6A層上面で検出した。畦畔が検出されたのは、上面を覆う長原5層が遺存する地点に限定できる。検出された畦畔の規模はおおよそ上端幅0.4m、下端幅0.6m、高さ0.05～0.10mである。I区の南北方向の畦畔は図65で示したように、84-25次調査の長原6A層上面の水田遺構と連続するものである。

また、II区北端でも東西14.5m、南北5.2mの範囲にわたって長原6層を埋土とする踏込み跡が6層基底面で検出されており、この部分も水田であったと推測される。

(京嶋)

図66 V区水田遺構
(数値は上面のTP+値)

5) 平安時代の遺構と遺物

i) 掘立柱建物・柱穴

SB02(図67・68、図版5)

Ⅱ区南部に位置する2間(3.5~3.7m)×2間(3.3~3.5m)の掘立柱建物で、平面形はひずんでいる。掘形は直径0.2mの円形である。棟方位はE7°30' Sを示す。また、南側に0.3~0.4m離れて総長3.9mの2間分の柱列があり、この建物に付属する建築遺構と考えられる。

柱穴から土師器・黒色土器A類の細片が出土した。後述する溝SD07の埋土を柱穴が切っており、建てられた時期は平安Ⅲ期以後である。

Ⅳ区北部のピット(図59、図版10)

既述の古墳時代の建物SB01と重複して、円形を基調とするピットが検出された。Ⅳ区北側の83-32次調査のⅡ区南部[大阪市文化財協会1992A 図104]では、東半部に平安時代のピットが集中して検出されており、これと一連の分布域を形成するものと思われる(図59上図を参照)。出土遺物は少ないが、黒色土器A類椀や土師器の椀Bなどの細片が少量ある。

ii) 土壌

SK06(図49)

Ⅱ区南部の不定形の土壌で、南北5m以上、東

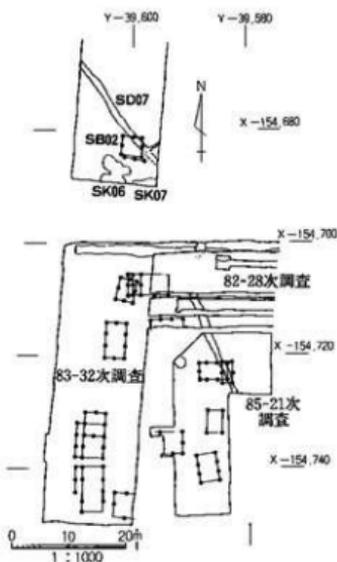


図67 Ⅱ区周辺の平安時代建物群

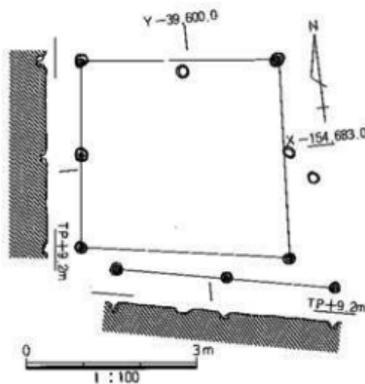


図68 Ⅱ区SB02実測図

西5.5m、深さ0.45mである。灰色シルトを埋土とする。

SK07(図49)

Ⅱ区南部でSK06の東側に位置する不定形の土壇である。東西4.5m以上、深さ0.3mを測り、灰色シルトを埋土とする。

土師器・須恵器の細片のほか、黑色土器A・B類碗の破片やⅡ期ごろと思われる瓦器碗の破片もあり、平安Ⅳ期まで下る遺構である。

SK08(図64・69、図版40)

Ⅲ-Ⅰ区の西端で検出した土壇で、規模は東西約6m、南北2.5m以上である。埋土は炭や地山層のブロックを含む灰色粘土である。

土師器碗B(405・406)、甕B(408・410)、須恵器底部(407)、黑色土器A類碗(409)が出土した。土師器碗Bは405が低い高台を付けるのに対して、406は高い高台を付ける。いずれも顕著に磨滅しており、調整は不明である。甕Bの408は短く、上端部に面を作る口縁部である。410は体部から外反する口縁部で、ヨコナデにより外端部を外方に突出させ、上端に面を作る。407は底部外周に断面台形の高台を貼付ける。外底面は糸切り痕が残り、内面に淡緑色の釉が附着する。甕の可能性がある。409は高い高台をもち、全体的に薄く作られた黑色土器A類碗の底部である。底径は8.8cmと大きく、体部は浅くなる器形と推定される。これらの遺物はおおむね平安Ⅱ期中段階からⅢ期古段階に比定できる(表3参照)。

iii)溝

SD07(図49、写真13、図版5)

Ⅱ区南部に位置する幅0.8~1.0m、深さ0.10~0.35mの溝で、調査地を直線的に横断している。方位はN35°Wである。東端では段をなして浅くなっており、ほとんど埋土をとどめていなかった。また東端で北側に直角に幅0.25~0.45mの細い溝が取付く。この溝が埋没したのち、SB02が建てられる。

古墳時代の遺物とともに、土師器甕B、黑色土器A類碗、篠窯系の須恵器鉢の細片が出土した。これらの遺物から、最終的に埋没したのは平

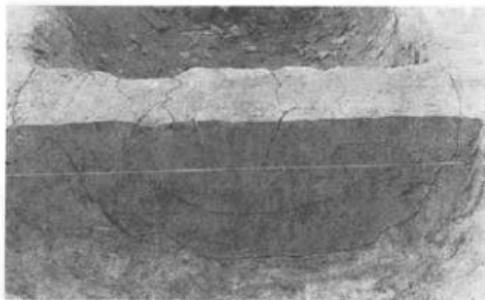


写真13 Ⅱ区SD07の断面

安Ⅲ期古段階としうる。

SD08(図64・69)

Ⅲ-2区東部に位置する南北方向の溝である。幅1.4~2.1m、深さは0.3mである。調査地北部の90-66次でも調査されており、平安時代に属する遺物が出土している。

412は奈良時代の須恵器杯B蓋である。天井部は低平で、頂部は欠損する。土師器皿413は体部外面にヨコナデ調整を施し、やや外反ぎみになる。平安Ⅳ期新段階である。

(黒田・京嶋)

6) 近世の遺構と遺物

SD09(図64・69、図版12・41)

Ⅲ-1区の南側に調査トレンチと平行して位置する東西溝である。幅は約1.6mで、深さ0.4~0.5mである。現存する条里遺構の坪境溝であるが、惣土の下部は長原2層に類似する暗青灰色砂質シルトであった。この埋土下部からは丸・平瓦の破片とともに以下の陶磁器が出土した。

418は青花で、基筒底となる皿Ia類[森毅1992]である。外面に芭蕉文と波濤文を描く皿で、類例は豊臣氏大坂城期前半期の資料[大阪市文化財協会1992C 図面67-2301]に多くある。416・417は瀬戸美濃焼の碗底部である。内面は416が鉄釉、417が灰釉を施す。胎色はいずれもやや黄色味をおびた灰白色を呈する。両者とも底部外周を打欠いて円板とする。

423は瓦質の播鉢である。口縁端部は丸く、端部と体部との間の内面に稜を作る。播目は破片の両端に1条ずつ確認できる。外面は口縁部直下に横方向のハケ調整を施し、それ以下は縦方向にハケ調整する。豊臣氏大坂城期の資料[大阪市文化財協会1992C 図面49-1852]に類例があり、16世紀後半代のものである。

以上の資料は16世紀後半から17世紀初頭に比定される。

414・415は内外面に淡緑灰色ないしは淡灰色の釉を施した唐津焼の碗・皿である。414の内面は蛇ノ目軸割ぎとする。高台およびその内側は無釉である。

419・420は堺播鉢[白神典之1992]である。口縁部外面には2条の凹線を、また、端部内面には凸帯をもつ。体部外面は横方向にヘラケズリする。419は内面に8条1単位の播目を、420の内面には、8条以上を1単位とする播目を隙間なく刻む。ともに白神氏の分類でI形式に属する。421・422は丹波焼の播鉢である。いずれも口縁部の破片で、口縁端部は内傾する面をなしたり、玉縁状に作り、備前焼の影響を示す。おもに内面に釉を施し、5

～7条の描目を密に刻む。

以上の資料は17世紀末から18世紀前半に比定できよう。

このほか、丸・平瓦や埴、鬼瓦片などが出土している。これらの遺物は16世紀後半～17世紀初頭と18世紀初頭前後の時期におおむね2分でき、この溝の埋土下層が長原2層に対比できるとすれば、2層の年代を示唆する資料といえる。また、この付近に寺院が存在した可能性もある(註9)。

SD10(図59、図版10)

Ⅳ区北部の長原1層基底面で検出され、長原2層を切る東西坪境溝である。上述の坪境溝SD09の1町南に位置し、幅1.3m、深さ0.7mである。埋土は上半部が灰～灰褐色砂礫混りシルト、下半部が灰色粘土質シルトに2分でき、溝の時期は長原2層を切る時期と、それ以前の2時期あったと思われる。一方、東側に隣接する83-53次調査地[大阪市文化財協会1992A]では、この溝は幅0.7m、深さ0.25mの小規模な溝になっており、その埋土はSD10の上半部に対比できる。したがって、SD10の下半部、すなわち古い時期の溝は東に続かず、途切れるも

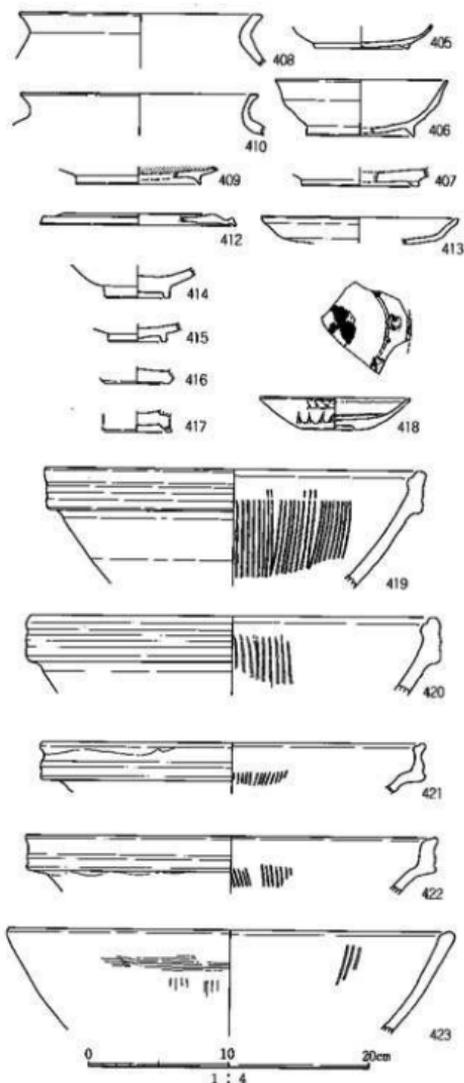


図69 遺構出土遺物実測図(平安時代以後)
SK08(405～410)、SD08(412・413)、SD09(414～423)

のと思われる。

溝からは豊臣氏大坂城期を下限とする備前焼および丹波焼の摺鉢片、17世紀後半から18世紀初頭の肥前磁器の碗が出土しており、おおむねSD09と同時期のものが出土している。しかし、18世紀後半以降の肥前磁器の広東碗も含まれており、これを溝の埋土上半部の遺物とみれば、長原1層の上限と長原2層の下限を示す資料ということになる。

(京嶋)

7) 小結

i) 古墳の時期(別表3)

110号墳は出土した須恵器がおおむねTK208型式であり、円筒埴輪が二次調整の省略されたものであることから、長原古墳群の3期[京嶋覚1989]に属するものと思われる。しかし、須恵器にはON46段階に近いものも含まれ、TK23型式のものが含まれないなど、3期の中でもやや古く位置付けられよう。これと近い時期の古墳には、造出しをもつ方墳である長原57号墳があり、須恵器の高杯形器台や筒形器台、馬・人物形埴輪などが出土している[大阪市文化財協会1989A pp.81-94]。

111号墳はおおむねTK23型式の須恵器、外面に二次調整を施さない円筒埴輪を出土していることから、3期に位置付けられる古墳である。TK216型式に比定される331・332は本墳に伴わない可能性が高い。墳丘規模は10.8mと小方墳の中では大型に属し、須恵器の高杯形器台や筒形器台、馬・人物形埴輪などの遺物を出土している。

それらの出土状況から、大型の土器が南周溝外縁部に、馬・人物形埴輪が墳丘東辺に置かれていたことを推定することができる。また、馬形埴輪は2個体以上あり、北周溝外縁部で出土した破片があるため、本墳以外の古墳に伴うものも含まれていると思われる。

112号墳は111号墳の南側周溝に接する位置にある小規模な古墳である。長原1次調査南部の29・30号墳[長原遺跡調査会1978 pp.85-89]などに周溝を共有する類例があり、その可能性もある。しかし、本来この古墳に伴っていると断定できる遺物ではなく、また、断片的なものではあるが、TK208型式の須恵器や二次調整にB種ヨコハケを用いた円筒埴輪などの111号墳に比べて古い様相をもつ遺物が出土しているため、111号墳造営時に破壊された可能性が高いと思われる。

197号墳は本書ではじめて古墳と認定した。古墳周辺から出土した埴輪からみて3期に属するものである。

ii) 飛鳥・奈良時代の水田

この時期の水田遺構は、I・V区で検出できた。長原遺跡西地区では、東部および北部の一部と「馬池谷」内で当該期の水田遺構が検出されているが、平安時代以後に削平されたり、のちの作土層に同化されるなどして遺構が残っていることが少ない。灌漑用水路やこれに係わる遺物の発掘例が少ないため、灌漑水系や開発された時期も現段階では明らかでなく、今後の検討課題としておきたい。

iii) 近世の長原遺跡西地区

西地区では1町離れて平行するSD09・10の2条の東西坪境溝を調査した。これらはいずれも1600年前後と1700年前後の2時期の遺物を中心に出土する点で共通していた。また、SD09の1町北の坪境溝では豊臣氏大坂城期の犬形土製品が出土〔大阪市文化財協会1990p.181〕し、SD10の1町南の未報告の坪境溝でも16～18世紀の遺物を出土している。このことは灌漑水路としての坪境溝の広域的な改修時期を示唆している可能性がある。

後者の時期においては、1704(宝永元)年に大和川が付替えられたことにより東除川が廃され、当地区の灌漑水系に変更を余儀なくされたとすれば、新たな水系を確立するための改修があったとみることができよう。

(黒田・京嶋)

註)

- (1)以下、本書で使用する古墳時代の須恵器の型式名は、〔田辺昭三1981・1982〕に従う。
- (2)長原遺跡の平安時代の土器の編年は〔鈴木秀典1983〕で最初に提示され、従来これを用いてきた。その後、〔佐藤隆1992B〕では旧編年を基礎に、新たな知見を加えて再検討し、新しい編年を提示した。本書ではこの新しい編年を用い、以下、平安時代I～IV期を平安I～IV期と略称する。表3参照。
- (3)これと類似した形態で11世紀ころの羽釜が香川県下川津遺跡でも多く出土している〔香川県埋蔵文化財調査センター1990〕。
- (4)以下、本書中の瓦器碗の編年は〔鈴木秀典1982〕に従う。表4参照。
- (5)土師の名称などについては本章第1節註15を参照。
- (6)これらの呼称は〔田島富慈英・清水和明1993〕で提唱されたものである。
- (7)同定にあたっては、大阪市立自然史博物館野村幸氏に館所蔵の現生標本と比較のうえ、多くのご教示を賜った。記して、謝意を表する次第である。
- (8)瓜破遺跡〔榎野博幸1978〕、長原遺跡〔大阪市文化財協会1992〕の出土例において体高推定を行っている。
- (9)出土地点の東には「堂ノ前」「寺東」などの寺院関係の字地名が残っている。

第3節 長原遺跡南地区の調査(84-48・73次調査)

1) 調査地の層序(図71・72、図版14)

以下の記述にあたって、調査地を図70に示したようにI～V区に大きく区分し、さらにトレンチごとに1・2区または1～3区に細分して調査地点を表記する。

沖積層上部層I

長原0層：現代の客土である。おもに道路予定地内に搬入された山土である。

長原1層：現代の作土である。I～V区のすべての地区で確認できたが、客土による整地工事で失われた部分もある。本層上面はⅢ区東端でTP+10.5m、V区西端でTP+11.7mである。

長原2層：含粗粒砂灰色ないし灰黄色シルトである。マンガンを多く含む。長原1層の直下であり、層厚は5～30cmである。

長原3層：含粗粒砂褐色灰色シルトないし含シルト灰色中～粗粒砂である。本層は2ないし3層に細分でき、Ⅲ区では上部が中～粗粒砂を主体とすることが多い。層厚は15～50cm

で、Ⅱ・Ⅲ・V区では西に向って層厚を増す。

本層は作土層として定義されている[大阪市文化財協会1992A p.20]が、V区西端のSD22を埋める層厚80cmの砂礫層は本層に相当する可能性があり、また、IV区にも本層に対

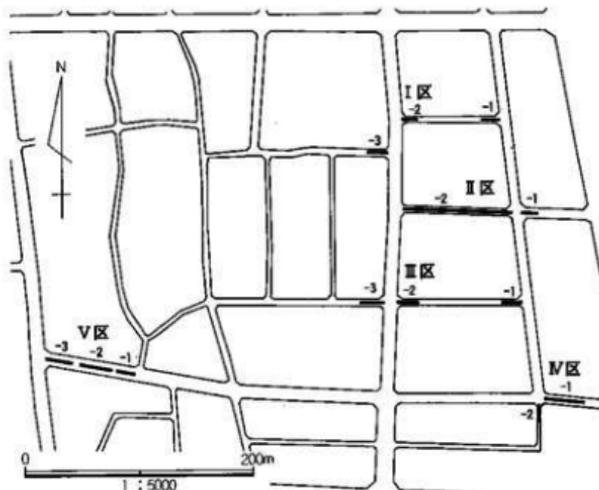


図70 調査地の地区区分

比できる水成層が確認されたことから、本層中に14世紀後半の洪水によって堆積した水成層が存在すると思われる。

長原4A層：黄色ないし灰白色細～中粒砂で、7～36cmの層厚である。Ⅲ区東端、Ⅳ・Ⅴ区で観察できる。

長原4B層：含砂灰色ないし灰黄色粘土質シルトで、すべてのトレンチで観察される。層厚は10～25cmである。長原4A層の存在しない部分でも、本層上部の踏込み状の凹み内や上面で、水成の細砂がかすかに認められるところがある。本層下部は、酸化鉄が沈着して黄色味が強く、耕作により下位層の長原5層の砂粒が多く混入する。

Ⅲ-1区では4Bi～iii層に細分でき、4Biii層上面で畦畔および人の足跡が検出された。また、Ⅲ-1・Ⅴ-1区の4Bi層上面で水田の畦畔が、Ⅱ区では4B層基底面で柱穴などの遺構が検出された。

本層上面はⅠ区東端でTP+9.8m、Ⅲ区西端でTP+10.0m、Ⅳ区東端でTP+10.5m、Ⅴ区東端でTP+11.6mを示し、北東方向に向って高度を下げる。

長原5層：黄色ないし灰色細粒砂または砂礫である。水成で顕著な斜行葉理が観察される。層厚はⅢ-3区で10cm、Ⅱ-2区で最大100cmに及ぶ。Ⅳ区とⅤ-3区には存在していなかった。Ⅱ-1・2区の一部では、本層下部に灰色粘土ないしシルトのブロックを混入する細粒砂～極細粒砂層が、下位の長原6A層上面を覆うように堆積しており、5A層と5B層の区分が可能である。しかし、他のほとんどのトレンチでは本層が希薄であるか、5A層の堆積時に5B層が攪拌されたために細分できない。

本層上面はⅠ区東端でTP+9.6m、Ⅱ-2区でTP+10.3m、Ⅲ-2区でTP+10.4m、Ⅴ区西端でTP+11.3mである。Ⅰ～Ⅳ区において、Ⅲ-2区からⅡ-2区にかけての範囲に長原5層の厚い堆積があり、微高地となっていたことがわかる。後述するⅡ-2区で検出された平安時代の建物は、こうした地形上に形成されたものである。

長原6A層：灰色シルトないし灰色または暗灰色の粘土である。層厚は10～20cmである。本層は、Ⅰ-2・Ⅲ-3区の一部では、作土である6Ai層と、下位の6B層との間に薄く挟在する水成の6Aii層（淡黄色細～粗粒砂）に細分される。両トレンチの6Ai層を構成する土壌は、6Aii層に相当する水成のシルトを母材とするため、6B層以下の地層を母材とする他のトレンチの6Ai層と層相を異にする。また、Ⅳ区の6Ai層は6Aii層に由来すると思われる緑灰色極細粒砂のブロックを含む灰色粘土で淘汰不良である。

本層上面はⅠ区でTP+9.2～10.0m、Ⅱ区でTP+9.5～10.0m、Ⅲ区でTP+9.9～10.2m、Ⅳ

第Ⅱ章 調査の結果

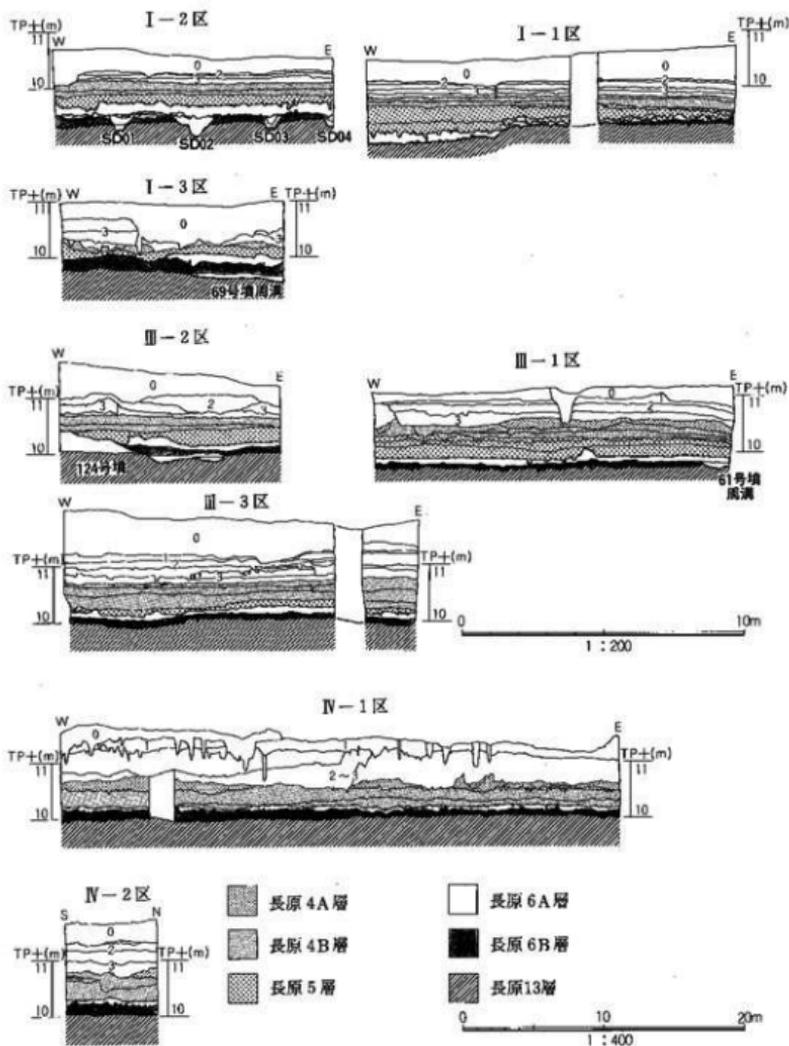


図71 I・III・IV区の断面実測図

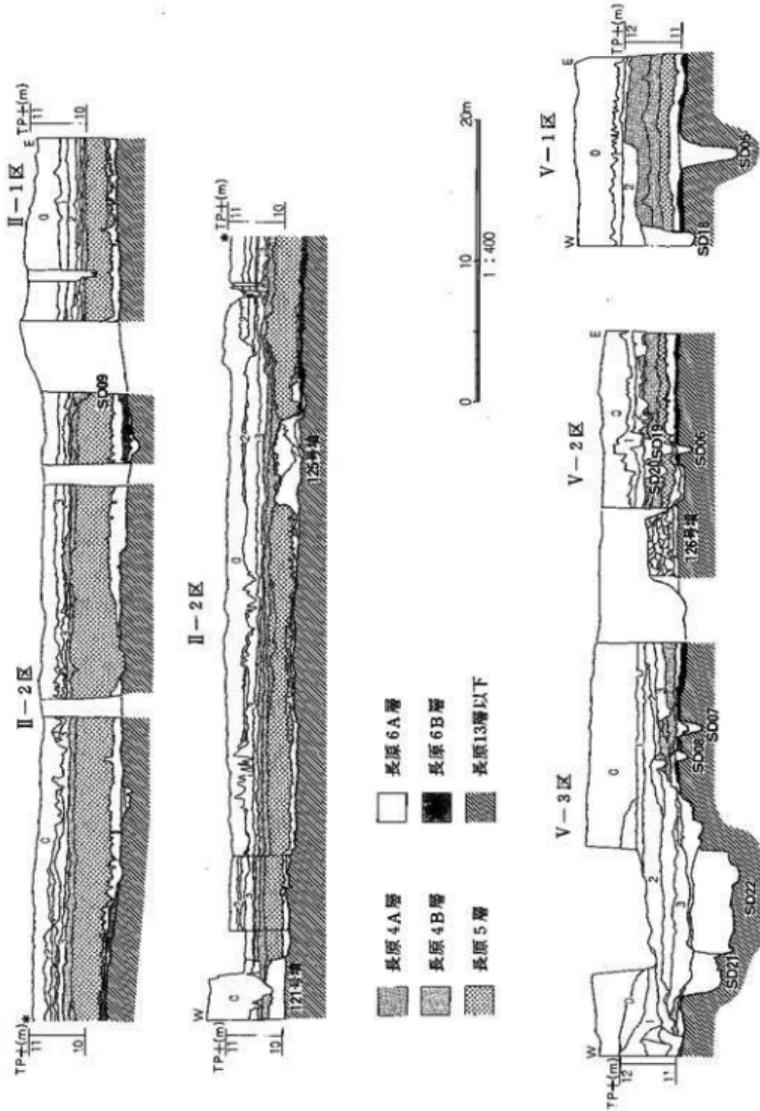


图72 II・V区の断面実測図

区でTP+10.2mである。Ⅰ・Ⅱ区では、いずれも東端からやや西寄りにもっとも低い地点がある(図97参照)。

長原6B層：暗灰色または黒色の粘土で、長原6A層の直下に存在する、より暗色を呈する粘土層である。層厚は5～15cmである。本層は6Bi層のみが検出され、6Bii層は認められなかった。既述のように、Ⅰ-2・Ⅲ-3区の一部では、本層と6Ai層との間に6Aii層が挟在する。

すべてのトレンチにおいて、本層が長原7層を母材とする作土層であったため、7B層を母材とする作土層である7A層との識別は困難であった。したがって、長原7A層として観察しうる層準は認められなかった。

沖積層上部層Ⅱ

長原7B層：黒色粘土ないしシルトである。層厚は5～10cmで、古墳の墳丘盛土下のみに遺存する。

沖積層下部層

長原13層：灰白色または黄色の粘土ないし粘土質シルトである。本層は13A層か13B層であると思われるが、現時点での判別は困難であり、長原13層として報告する。

本層上面はⅠ区がTP+9.0～9.8m、Ⅱ区がTP+9.4～9.9m、Ⅲ区がTP+9.7～10.1m、Ⅳ区がTP+10.0m、Ⅴ区がTP+11.0mである。

(京嶋)

2)各層出土の遺物

以下に記述する資料の出土地区と層準については表9にまとめて示した。

i)土器・埴輪・土錘(図73、図版42)

424～427は瓦器碗である。424～426は口径が小さく、内面のみへラミガキを施す。424・426に高台はない。瓦器碗におけるⅣ-3～Ⅴ期(表4)である。427は内外面に密なヘラミガキを施し、内底面の暗文は不明だが、瓦器碗におけるⅡ-1期と思われる。

428は土師器小皿で、口縁端部の内面への巻込みはほとんどない。

429はⅤ区の長原4A層から出土した碗形の土製品で、土師質である。内外面をナデ調整する。焼成は良く、橙色を呈する。Ⅴ区から40m南に位置する83-52次調査でも、長原4層から出土した類例がある[大阪市文化財協会1992、図120-550]。430は高い高台の付く土師器皿と思われる。434は高台の付く土師器鉢である。口縁が内湾し、球形に近い体部をな

すものと推定される。内外面は粗雑なナデ調整である。431～433は黒色土器B類焼で、内外面に密にヘラミガキを施す。

441は土師器皿B[奈良国立文化財研究所1976]である。口縁端部の内面を肥厚させ、底部外周に低い高台を付ける。内面にかすかに斜放射暗文が確認できる。細片だが口径27.2cmに復元される。平城宮土器Ⅲに対比できる。442は土師器鉢の口縁部である。端部が面をなす口縁部は内湾ぎみになり、片口を作る。443は須恵器杯B蓋の口縁部である。ヨコナデにより、端部を下方につまみ出す。

444はⅠ区で出土した須恵器杯Gである。内外面をヨコナデし、底部外面は不調整である。口径は9.8cmである。445・446は土師器杯Cである。445は口径が12.6cm、器高3.8cmである。体部外面の下半はユビオサエで、他はヨコナデである。446は口径16.8cm、器高5.4cmである。体部外面の底部はヘラケズリし、それ以上はナデないしヨコナデ調整である。上部にはヘラミガキがかすかに認められる。内面には螺旋暗文と放射暗文を施し、口縁部付近は横方向にヘラミガキしている。いずれも砂粒をほとんど含まない精良な胎土である。444～446は調整手法や法量からみて飛鳥Ⅱに相当する。また、出土層位は446が長原6B層上面、444・445は長原6A層である。

447・448はⅣ区で出土した。いずれも口径が12cmを越える大型で、口縁端部を丸く作る。447は体部外面に「三本葉」(註1)のヘラ記号がある。TK10型式と思われる。449はⅣ区で出土した須恵器直口壺である。球形に近い体部から直線的に外上方に延びる口縁部が付く。体部中位から下位にかけてカキメを、その上方に波状文を施す。口縁部には2本の稜線を作り、その間に波状文を施す。TK208型式を下ることはないと思われる。

450はⅡ区出土の庄内式甕の口縁部である。口縁部は「く」字形に屈曲し、端部は上方につまみ上げず、丸く仕上げる。体部外面には平行タタキを右上がりに施し、内面はヘラケズリする。ヘラケズリは頸部の屈曲部まで及んでいない。胎土は生駒西麓産である。

451はⅣ区の長原4B層から出土した形象埴輪片である。球形になると推定される上部に、幅2cmの粘土板を巻付け、その上面に直径4～5mmの刺突痕を2列に配している。粘土板の下位にはそれと平行して線刻を施す。頂部は直径6cmの円孔となっている。種類は不明であるが、武人形あるいは甲冑形埴輪の冑部分と推測される。

452は小型の管状土錘で、直径は中央部が最大で1.5cm、長さは3.0cmである。内径は0.2cmと小さく、重さは5.4gである。土師質に焼成される。

(京嶋)

第II章 調査の結果

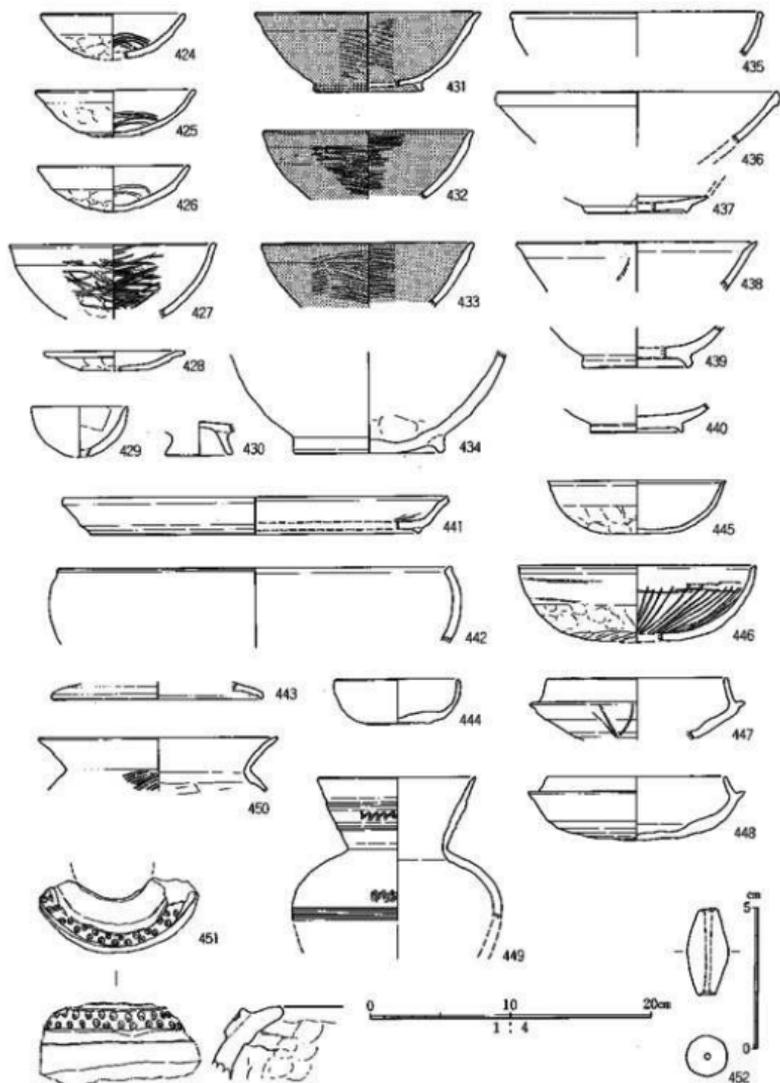


图73 各層出土の遺物実測図

上師器 (428-434・441・442・445・446)、須恵器 (443・444・447-449)、注内式土器 (450)、瓦器 (424-427)
 黒色土器 (431-433)、白磁 (435-437)、青磁 (438)、灰釉陶器 (439)、緑釉陶器 (440)、形象埴輪 (451)、土鐘 (452)

ii) 施釉陶磁器(図73、原色図版3)

435~437はIV区の長原4B層から出土した白磁碗・皿である。437は皿の底部で、底部と体部の境の内面に段を作る。高台は幅が狭く、削出しは浅い。胎土は精良で、釉調はやや青味がかかった透明感のある白色である。山本信夫氏のXI類[山本信夫1988]に属すると考えられる。435は内湾ぎみの形態をなし、口縁部は小さい玉縁状をなす。II類[横田賢次郎・森田勉1978]に属する。436は口縁部が大きな玉縁をなす。貫入が見られる乳白色の釉が施されている。IV類に属するものであろう。

438は竜泉窯系の青磁碗である。口縁端部外面を強くヨコナデ調整する。内外面に明瞭な文様はない。黄みの強い緑色を呈する。釉調からII類、あるいは無文のI-1類[横田賢次郎・森田勉1978]であろう。

439は灰釉陶器碗で、内湾ぎみの高台が付く。釉は漬掛けで、内面の上部に薄く淡緑色の釉が残る。

440は緑釉陶器皿と思われる底部である。貼付け高台の下端に内傾する面を作る。外底面ははいねいなヨコナデ調整である。淡灰色ないし淡灰褐色の素地の全体に緑色の釉を施す。やや軟質である。近江産であろう。

(佐藤)

iii) 石器遺物

石鏃(453~455)、クサビ本体(456)、二次加工のある剥片(457・458)、底面のある剥片(459)など合計13点の石器遺物が出土した。これらはすべて古墳時代以降の地層から出土した遊離資料である。石材はいずれもサヌカイトである。

石鏃(図74、図版43)

453はえぐりが深く、脚の長い凹基式石鏃である。側縁は直線的であり、剥離の末端はステップとなるものが多い。脚の端部は尖りぎみである。風化が著しく、側縁とえぐりの調整の前後関係は不明であるが、基部はえぐりに重点をおいて作られている。左脚端部は古い折れで失われている。縄文時代前半のものと考えられる。

454はえぐりが深く、脚端部の丸い凹基式石鏃である。右図中央に素材の主剥離面を残している。両面とも比較的平坦である。側縁は直線的である。側縁を成形したのち、えぐり

表9 遺物の出土層位一覧(南地区)

地区	地層	出土遺物
I区	長塚4層	427・428
	長塚6層	444・446
II区	瓦原3層	424・426
	長塚4層	430・434・440
	長塚4B層	436・439・452
	長塚5層	442・450
	長塚6層	445
IV区	長塚3層	425
	長塚4B層	435~437・451
	長塚5層	441・443
	長塚6層	447~449
V区	長塚4A層	429

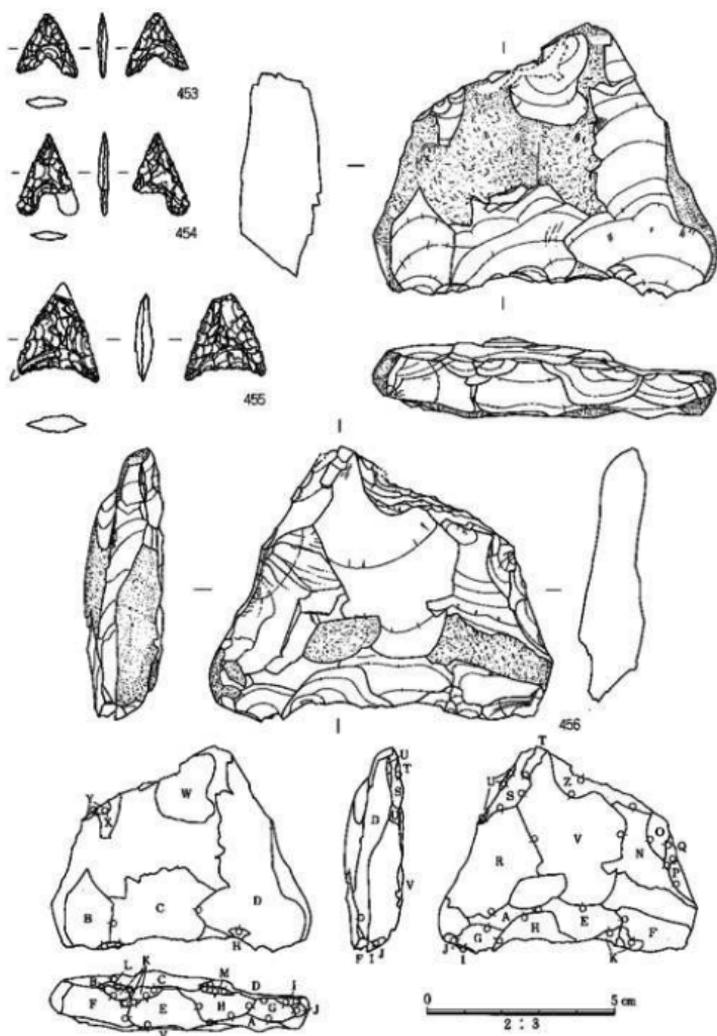


图74 石鏃・クサビ実測図

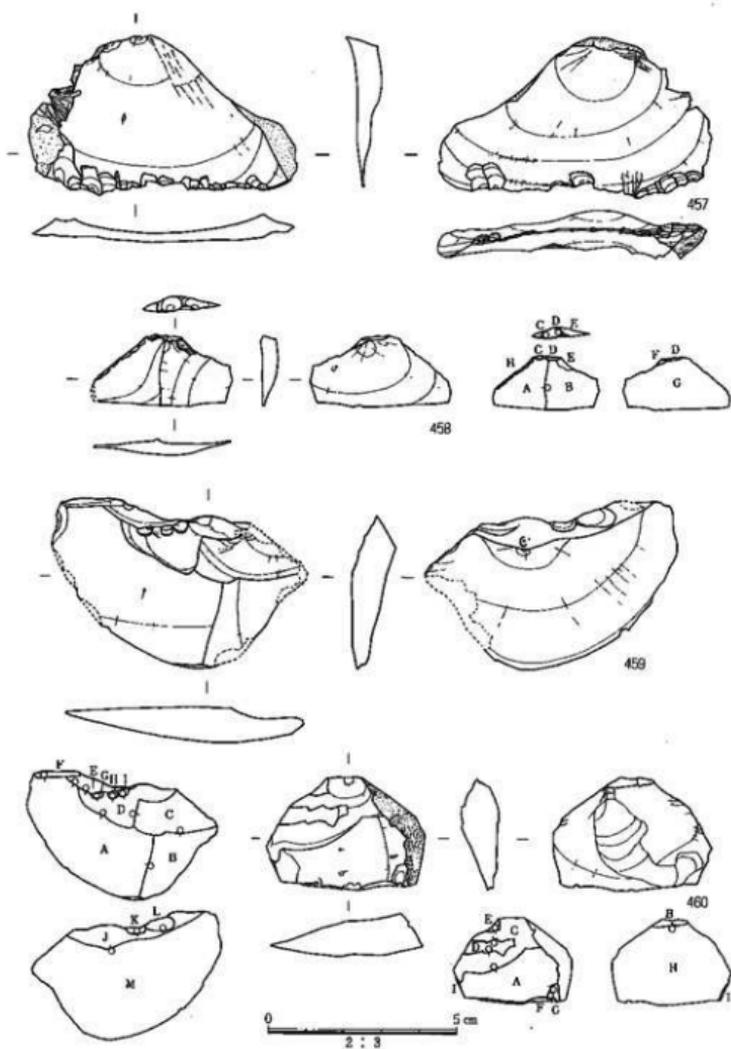


図75 二次加工のある剥片・剥片実測図

を製作している。縄文時代前半のものと考えられる。

455はえぐりが浅く、側縁がやや外湾する凹基式石鏃である。全体に押圧剥離がゆきわたっているため、素材の面は残っていない。基部は側縁の加工ののちに作られている。尖頭部の折れは古いもので、使用時に生じたものであるかもしれない。縄文時代後半のものと考えられる。

クサビ(図74、図版43)

456は板状の礫が素材となっている。剥離面はすべてネガティブな面からなるが、目的な剥片を採取した形跡は認められず、素材を少し加工し、刃を付けてクサビとして使用した例と考えられる。刃縁は両面で加工のようすが異なる。左面ではB・C・D面の大きな3枚の剥片が剥離されているのに対し、右面では小さな剥片が剥離されており、刃部の形態は片刃になっている。どちらの面から刃が作られたのかはよくわからない。対向するZ面は垂直割れとなった複数の小さな剥離面からなる。打縁の特徴である潰れの状況を示している。打縁は刃縁に対して平行せず、やや傾斜している。また、潰れがみられるR面もこの一連の打撃に直接的に関連するものと考えられる。刃縁の小さな剥離面K・L面は使用による折れである可能性がある。

二次加工のある剥片(図75、図版43)

457は背面が1枚の剥離面からなり、平面が三角形をした剥片である。打面は自然面である。ヒンジ・フラクチャーとなった左右の比較的厚い端部を調整して、平面・側面も直線的な刃部を作り出している。刃部中央の剥落は使用によるものと考えられる。背面にも主剥離面と同様な湾曲をもった剥離面がある。

458は背面が2枚の剥離面からなり、平面が三角形をなす小型の剥片である。背面のA・B面は中央に稜線を作る。打面は複数の剥離面からなる。底辺は折れている。左側縁に主剥離面からの調整が加えられており、使用されている可能性が高い。

底面のある剥片(図75、図版43)

459は背面が底面(A面)と複数の剥離面(B～I面)からなる。背面を構成する剥離面の打点は上方にあり、打点がジグザグに後退していく作業が復元できる。剥離された剥片は左右非対称であり、断面が三角形に近い。打痕が明瞭に残る。主剥離面と底面の作る角度は約25°である。主剥離面右側縁は折れている。主剥離面の末端はヒンジ・フラクチャーであり、縁が丸い。主剥離面と底面の角度は約15°である。主剥離面の右側縁は新しい欠けである。全体に磨減が著しい。

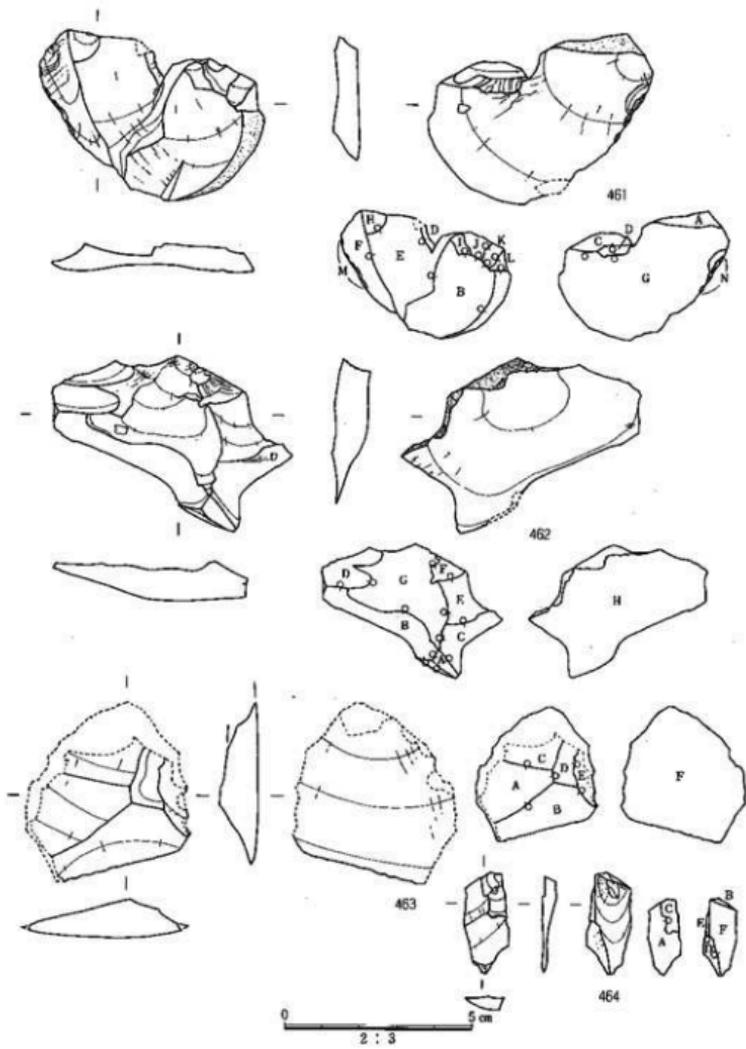


图76 剥片実測図

剥片(図76、図版43)

460は背面は細かくみれば多くの剥離面に分離できるが、主体となるのはA面とC面である。右側面は自然面である。C面と主剥離面の打面は同じ剥離面上にある。主剥離面はバルバースカーが発達し、末端はヒンジ・フラクチャーとなっている。

461は側面に自然面を残す不定形な剥片である。背面は複数の剥離面からなる。D・E面は上方からの打撃によってキズとして保存されており、この剥片を剥離させた打撃によって、同時に剥離されたものと考えられる。この打撃はD面のキズの一部分を取込むと同時に、B面の一部を剥離し、F面の折れも生じさせている。C面は折面である。B面の上端は調整され、左側縁には小さな剥離がみられる。全体に磨滅が著しいため、これらが使用痕であるかは不明である。

462は不定形な剥片であり、背面が複数の剥離面からなる。背面で最後に剥離されたG面は、打点が自然面上にある。フィッシャーが発達し、リングが不安定である。主剥離面の打点も自然面上にある。この剥離の末端はヒンジ・フラクチャーとなって、背面側に回り込んでいる。

463は不定形な剥片であり、背面が6枚の剥離面からなる。B・F面は鋭い縁を作っている。周囲がすべて新しい欠けによって失われており、面構成の評価ができない。

表10 石器遺物計測表(南地区)

種類	番号	()は欠損品			
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
石 鏃	453	1.58	1.61	0.27	0.43
	454	2.22	(1.48)	0.22	(0.44)
	455	(2.20)	2.19	0.47	(1.68)
クサビ	456	6.83	9.17	2.05	133.56
二次加工の ある剥片	457	3.96	7.11	0.81	19.87
	458	3.74	1.82	0.51	2.66
剥 片	459	6.80	4.15	0.96	26.79
	460	4.19	2.97	1.07	13.85
	461	6.12	3.84	0.82	19.91
	462	6.57	3.78	0.91	20.91
	463	(5.10)	(4.34)	1.04	(19.05)
	464	2.71	1.04	0.37	1.06
	465	4.17	2.19	0.78	12.14

464は背面が複数の剥離面からなる縦に長い剥片である。E面はC面と同時にできた折面である。打面(B面)は丸く、素材が大きなヒンジ・フラクチャーをもった剥片であると考えられる。この剥片はヒンジ・フラクチャーの末端の加工を目的として剥離された調整剥片の可能性がある。

465は板状の剥片であり、四辺が折れている。保存状況が悪く、面構成を説明できない。

(岡村)



3) 古墳時代の遺構と遺物

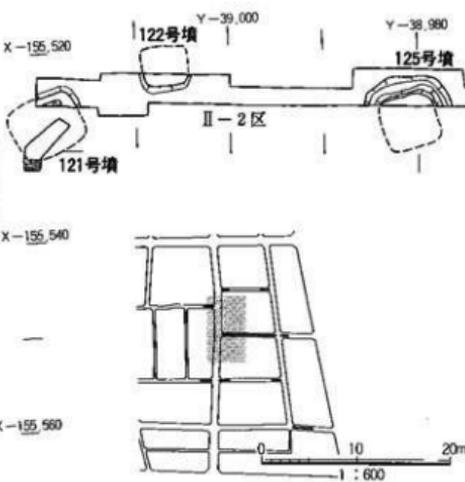
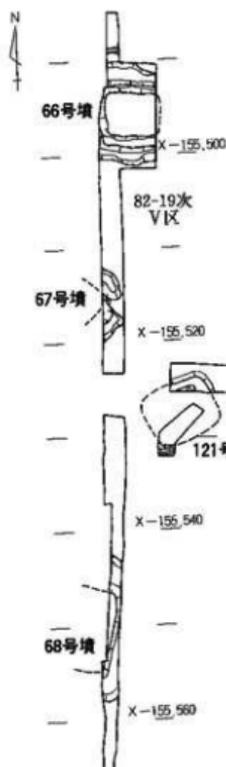
Ⅱ・Ⅲ区で古墳6基を新たに検出し、Ⅰ区で82-19次調査で発掘した69号墳の周溝を検出したほか、埋設管敷設工事の立会調査で67～69号墳の墳丘の一部を確認した。以下に、新たに遺物が出土した69号墳を含む7基の古墳について記述する。

i) 69号墳(図79・80)

Ⅰ-3区で、周溝の南西隅と推定される部分を調査した。このトレンチでは墳丘を確認できなかったが、集水枡設置工事で墳丘南東斜面を、ガス管理設工事で墳丘の南端と北端を確認できた。

墳丘は一辺が11.5mの方形をなし、周溝幅は約3mであると推定される。墳丘の方角はN26°Wとなる。

Ⅰ-3区の周溝内から朝顔形埴輪470が、集水枡設置工事で確認した墳丘南斜面で土師器甕466が出土した。



466は体部内外面にハケ調整を施し、内面をハラケズリしないa手法(註2)による中型の甕である。470は端部を欠損する朝顔形埴輪の口縁部である。頸部上端の内面に口縁部を接合し、

図77 Ⅰ・Ⅱ区西部の古墳配置図

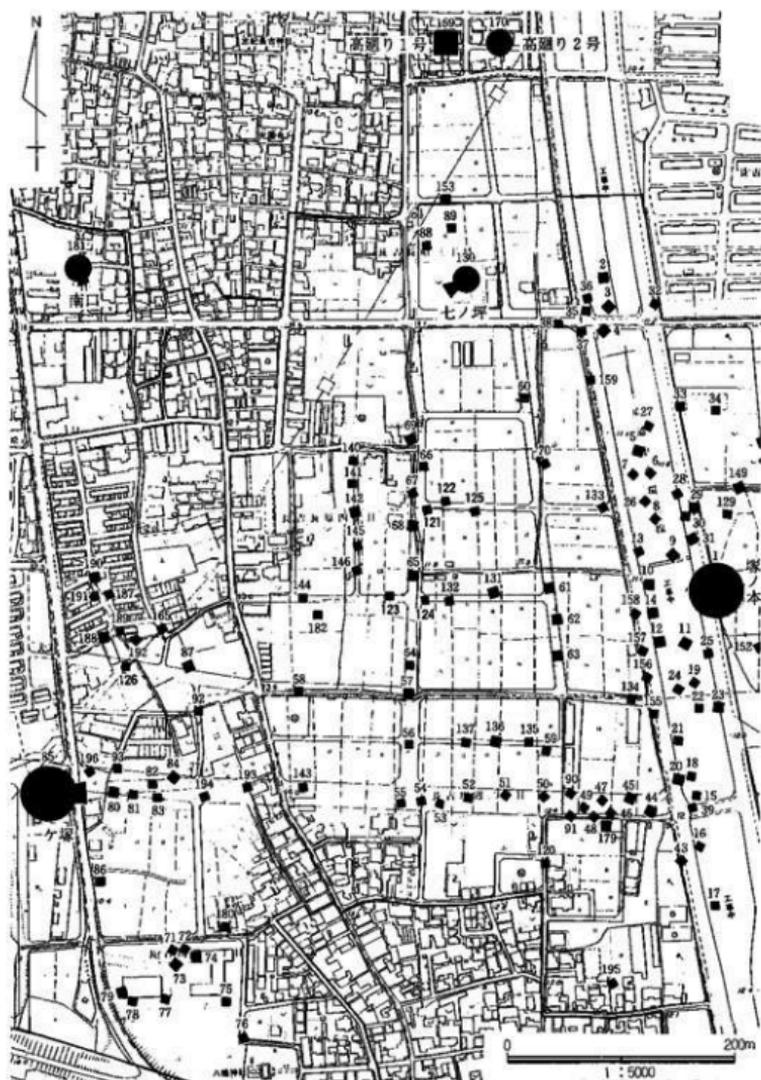


図78 長原遺跡南部の古墳分布図
(ゴチック数字は本書報告古墳)

頸部上端部が作る擬口縁を覆うように粘土紐を貼付け、ヨコナデによりタガを作る。外面にはハケメが認められず、板状工具によるナデが斜方向に施されている。内面は横ないし斜方向のハケ調整が施され、タガ貼付け部の内面はハケメがナデにより消えている。灰褐色を呈し、軟質である。467~469は円筒埴輪の細片で、467・469は外面に縦ないし斜方向のハケ調整を施し、タガの断面形が三角形を呈するが、468は外面に14条/cmのB種ヨコハケ[川西宏幸1978]を施す。

69号墳は、82-19次調査で周溝南東部が初めて確認され、円筒埴輪が出土

している[大阪市文化財協会1990 pp.81-82]。この円筒埴輪はハケ調整が十分でなく、成形時の粗雑なナデを残す特徴的な資料であったが、今回出土した朝顔形埴輪470の外面にハケ調整が施されていないことも、本古墳の埴輪にみられる一連の特徴であり、円筒埴輪の新

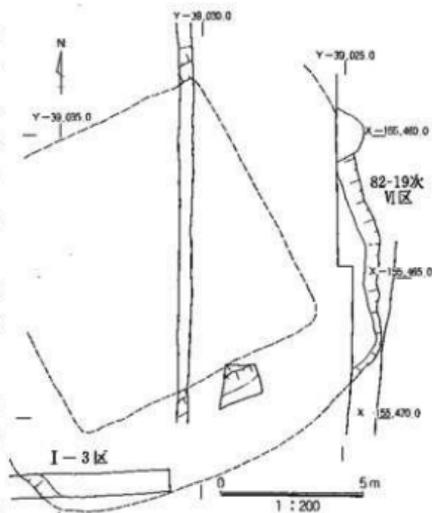


図79 69号墳実測図

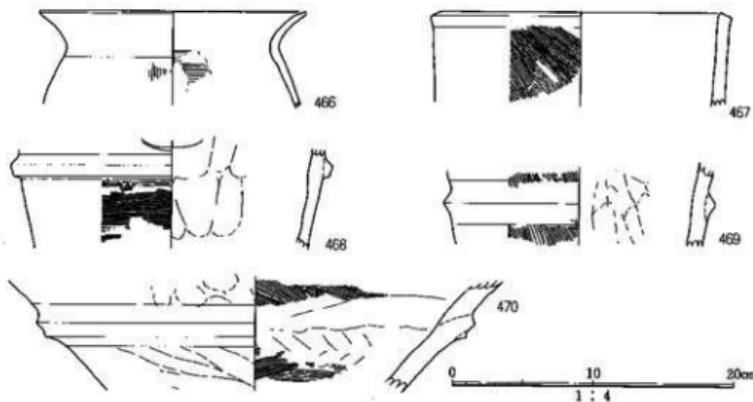


図80 69号墳出土遺物実測図

土師器(466)、円筒埴輪(467~469)、朝顔形埴輪(470)

第II章 調査の結果

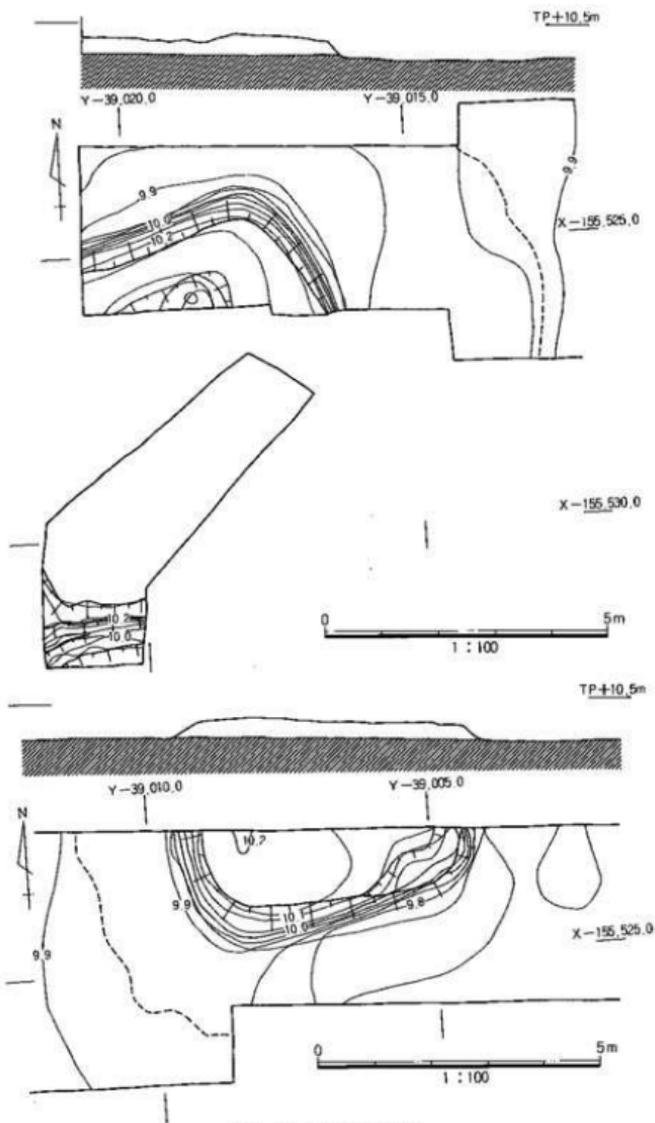


図81 121・122号墳実測図
(上:121号墳、下:122号墳)

しい要素として理解しうる。

ii) 121号墳(図81、図版15)

Ⅱ-2区西端部に位置し、墳丘北部および南接する擁壁工事部分で墳丘南部を調査した。墳丘は一辺が7.4mの方形で、周溝底からの高さは0.45mである。周溝は不明瞭で、幅3.8mほどの痕跡(註3)のみが確認できた。墳丘の方位はN12°Wである。

遺物は墳丘上面などから少量の円筒埴輪や須恵器甕の体部片が出土した。円筒埴輪は外面に縦方向のハケ調整を施す軟質のもので、須恵器甕の体部は外面に平行タタキを施し、内面の当て具痕はナデにより消している。

iii) 122号墳(図81・82、図版15)

Ⅱ-2区西部で、121号墳の東に位置し、墳丘の南半を調査した。墳丘は一辺が5.5mの方形で、高さ0.5mである。周溝は浅く、約2mの幅でその痕跡が確認できた。墳丘の示す方位はN12°Wである。

墳丘上面で円筒埴輪が少量出土した。471は外面に縦方向のハケ調整を

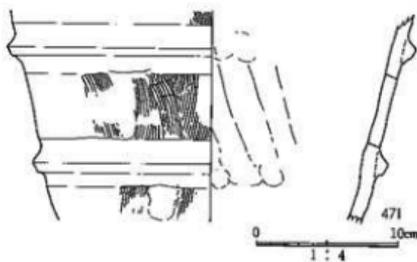


図82 122号墳出土埴輪実測図

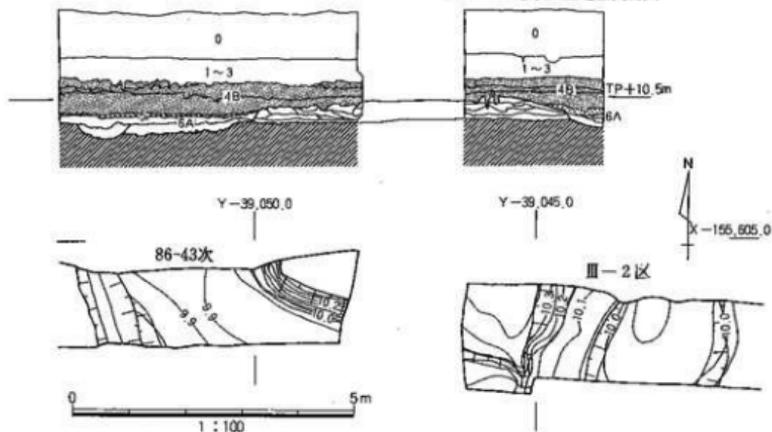


図83 123号墳実測図

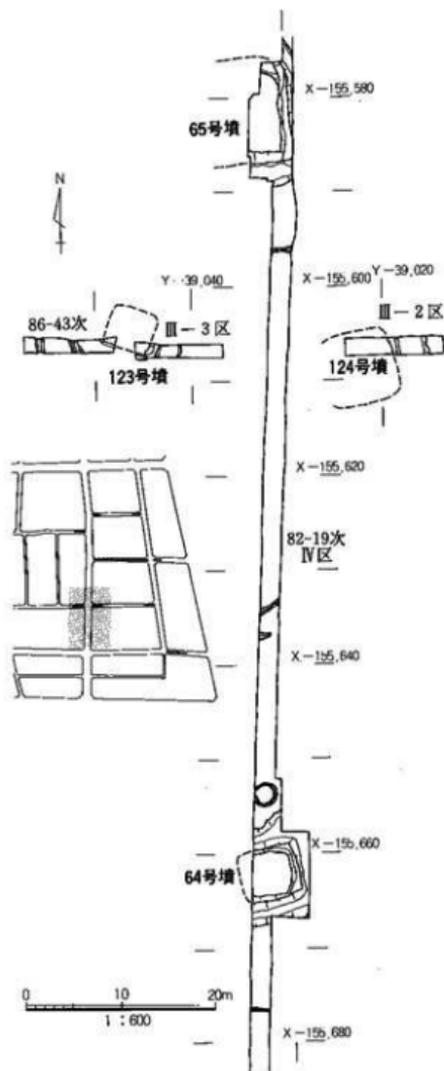


図84 III区西部の古墳配置図

施し、内面はナデで仕上げる。タガの断面形は台形を呈し、円形のスカシ孔がある。赤灰色を呈するが、硬質に焼成されている。このほか、須恵器甕の体部片が出土している。

iv) 123号墳(図83、図版17)

Ⅲ-3区西端に位置し、墳丘の南東隅を調査した。その後、86-43①次調査で本古墳の南西隅が発掘され、一辺6.0mの方墳であることが判明した。墳丘は長原7B層の灰色シルト層の上に、長原7Bおよび13層の粘土で築かれており、周溝底からの高さは0.52mである。周溝の幅は2.4m、深さは0.1mである。墳丘の南東隅は、長原7A層上面の水田造成に際して、畦畔状に削込まれている。墳丘の示す方位はN19°Eである。

本年度および1986年度の調査とともに、本古墳から遺物は出土しなかった。

v) 124号墳(図85～87、図版17・44)

Ⅲ-2区西端に位置し、墳丘の北東部を調査した。墳丘は一辺の長さが5.8m以上の方形と推定され、周溝底からの高さは0.64mである。周溝は幅が3.5m、深さが0.1mであ

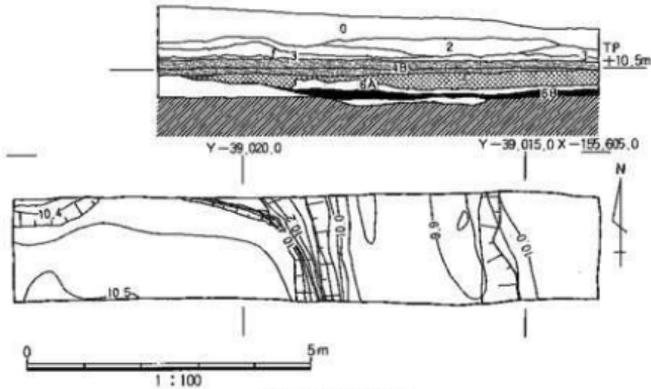


図85 124号墳実測図

る。墳丘の方位はN12°Wである。

周溝内から円筒埴輪・朝顔形埴輪が、墳丘上面からは家形埴輪の破片が出土した。

円筒埴輪472~475は外面に縦方向のハケ調整を施し、内面をナデないしハケ調整する円筒埴輪で、いずれも円形のスカシ孔と断面台形のタガがある。472はヨコナデによって口縁上端にやや凹んだ面を作り、口縁部外面を二次的な横方向のハケ調整で仕上げる。ハケメは6条/cmの目の粗い原体によるものである。472は淡褐色で軟質、473~475は淡灰黄色ないし灰褐色を呈し、硬質である。

朝顔形埴輪478は上半部が復元できた。外反する口縁部は、頸部上端の内面に接合され、接合部分の外面にタガ

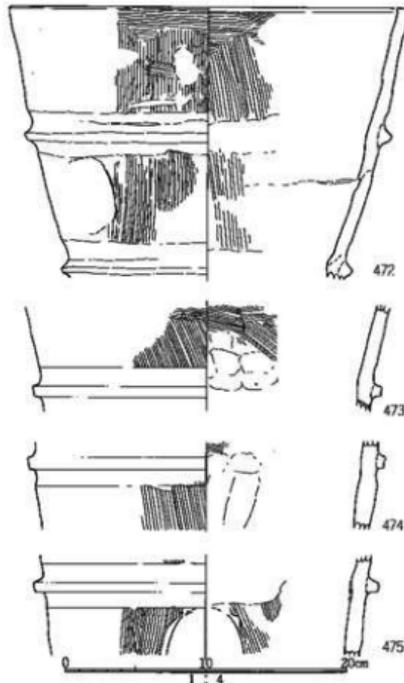


図86 124号墳出土円筒埴輪実測図

を貼付ける。円筒部のタガは断面台形を呈し、スカシ孔は円形である。タガ部を除く外面調整は、口縁・頸部が縦方向のハケ調整、肩部はナデ調整、円筒部は横方向のハケ調整である。内面にはハケメが見られず、口縁部は工具によるナデ、肩部から頸部にかけてユビオサエ、円筒部はナデ調整である。

476・477は同一個体と思われる切妻形式の家形埴輪片である。476は破風板と屋根の一部の破片で、屋根には横方向のハケメを施しているが、押縁や網代の表現は認められない。破風板の表裏面はナデ調整で仕上げる。477は妻側壁の上部の破片で、直径が約5cmに復元できる円孔がある。

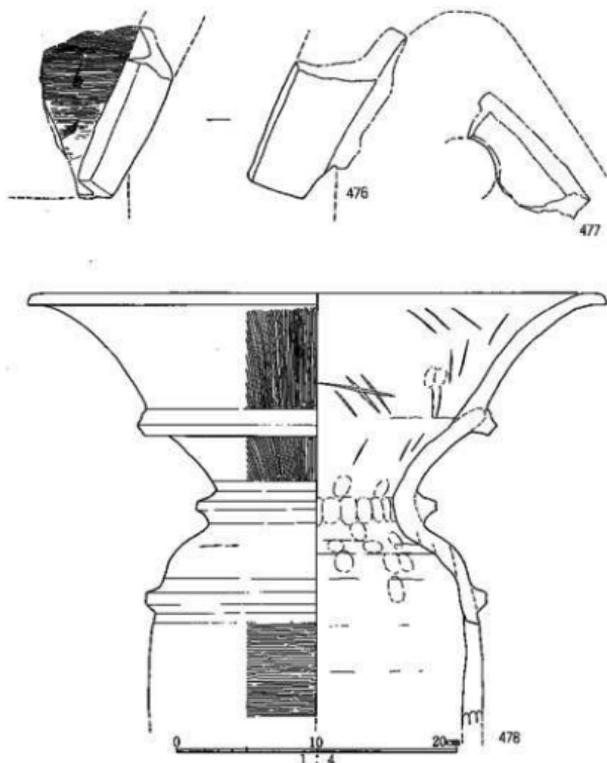


図87 124号出土埴輪実測図
家形埴輪 (476・477)、朝顔形埴輪 (478)

vi) 125号墳(図88・89、図版16)

Ⅱ-2区中央付近に位置し、墳丘北半を調査した。墳丘盛土下には長原7B層が遺存していない部分が多かった。一辺が6.7mの方形を呈し、周溝底からの高さは0.66mである。周溝は浅く、1.8mの幅でわずかに凹んでいた。墳丘の方位はN18°Wである。

周溝内から出土した479は土師器壺の上半部で、口縁部は「く」字形に屈曲させる。体部外面と口縁部内面はハケ調整、体部内面はナデ調整と思われる。タガが低く、縦方向のハケメを施した円筒埴輪片も出土している。

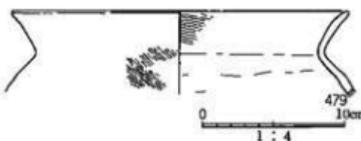


図88 125号墳出土土器実測図

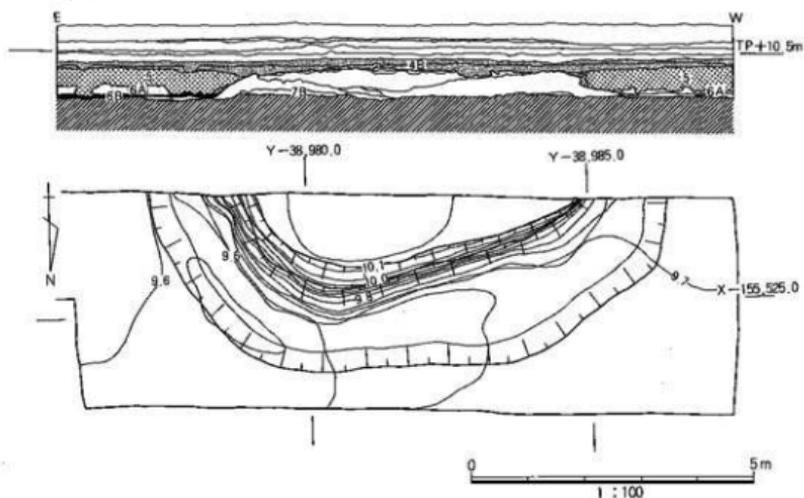


図89 125号墳実測図

vii) 126号墳(図91、図版18)

V-2区に位置する。墳丘の北・西端は調査範囲外にある。墳丘は長原7B層上に築かれており、一辺が6.0m以上の方形を呈すると考えられる。周溝底からの高さは0.77mで、周溝幅は3.25m、深さは0.1mである。墳丘の示す方位はN5°Eである。

盛土内から石鏃などが出土したが、古墳に伴うと思われる遺物は出土しなかった。

(京嶋)

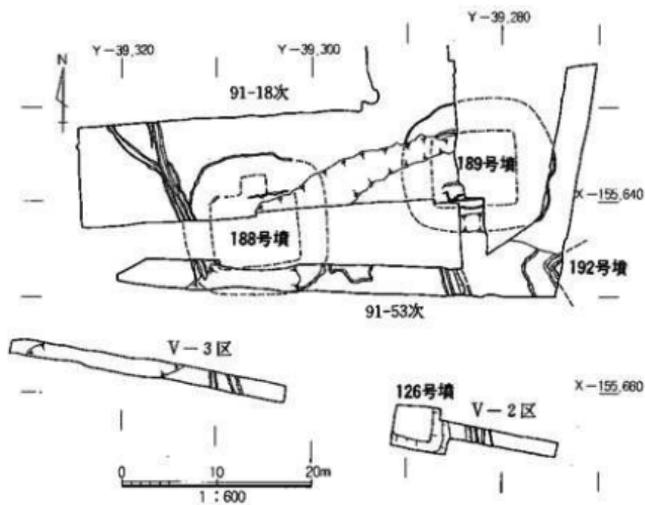


图90 V区古墳配置図

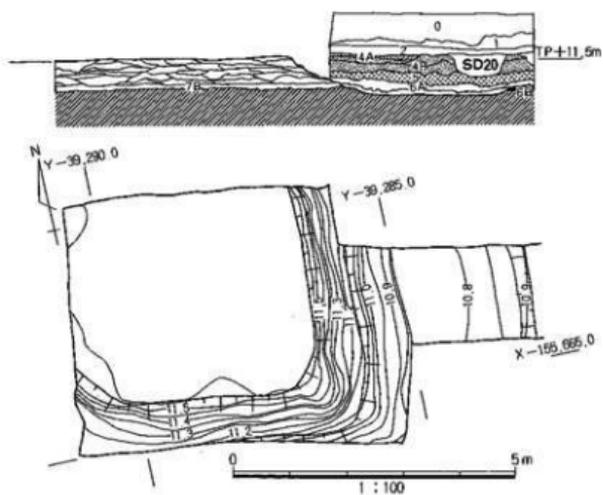


图91 126号墳実測図

4) 飛鳥・奈良時代の遺構と遺物

i) 溝

SD01~04(図92~94、図版20・44)

I-2区の長原6B層上面で検出された約2.6mの等間隔で平行する南北溝である。いずれも長原6Aii層堆積時にはすでに埋没しており、埋土上面には6Bi層上面と一連の踏込みが認められた。したがって、これらの埋土は6Bi層に対比される可能性があり、そのばあい長原7A層上面の遺構ということになる。いずれも北で約10°東に振る方位を示す。

SD01は幅0.45m、深さ0.25m、埋土は2層に分れるが、おおむね灰色粘土で、上層には炭化物の細粒を含む。SD02は幅1.15m、深さ0.35m、埋土は灰色粘土である。また、SD03は幅0.75m、深さ0.25m、埋土は灰色または灰黒色の粘土で3層に分れ、中層には長原13B層の灰白色粘土の小塊を含む。SD04は西屑の一部を検出した。深さは0.2mで、埋土はおおむね灰色粘土であるが、2層に分れる。

SD04の東側には平行する溝が存在しないことが1985年度の調査で判明している。また、SD01の西側には82-19次調査のSD14[大阪市文化財協会1990 pp.141-143]が存在し、トレンチ西端でその東肩部を検出した。SD14は幅3.6m、深さ1.0mで、これを埋めた水成層は長原6Aii層であると考えられる。

遺物はSD01で土師器・埴輪が出土したが、他の溝から遺物は出土しなかった。480は土師器杯Cで、口径10.7cm、器高3.6cmで、径高指数33.6である。外底面はナデ、そのほかはヨコナデと思われる。飛鳥Ⅱに相当する。既述のI-2区の長原6A層から出土した土師器杯C446は同時期の資料であり、これらの遺構に関連するものと推定される。

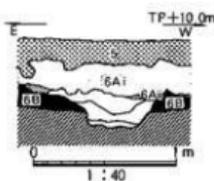


図92 I区SD03断面実測図

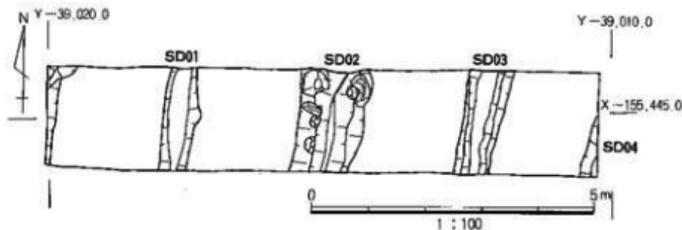


図93 I-2区SD01~04

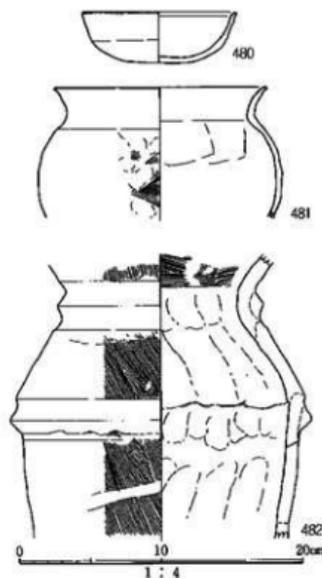


図94 SD01出土遺物実測図

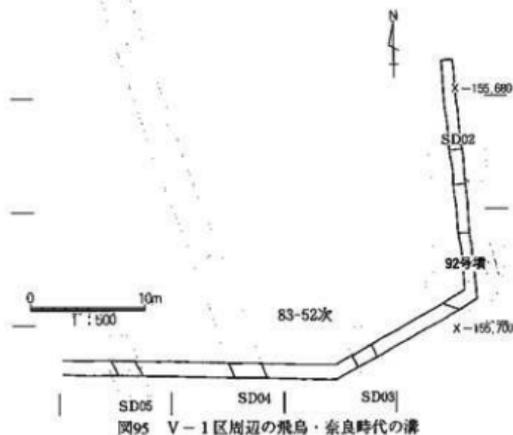
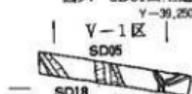


図95 V-1区周辺の飛鳥・奈良時代の溝

481は土師器甕Bの上半部で、ほぼ球形と推定される体部に、外反する口縁部が付く。口縁上端部はヨコナデにより面をなす。調整は、体部外面にハケメがみられるが、ほとんどユビオサエによって消えている。体部内面は板状の工具によりナデ調整し、平滑に仕上げる。

482は朝顔形埴輪の上半部で、口縁部を欠く。円筒部と肩部の間のタガは断面形が三角形を呈する。肩部の張りは顕著ではない。外面はタガの接合部を除き、縦ないしは斜方向のハケ調整で、内面の頸部以下はナデ調整、口縁部は横方向のハケ調整を施す。

SD05(図95・97、図版20)

V-1区の長原6A層基底面で検出された溝である。幅2.4m、深さ1.0mで、北で約6°西に振る南北方向の溝である。埋土は6B層の灰色粘土や13B層

の灰白色粘土をブロックとして含む水成の砂礫層である。TK216型式に属する須恵器甕の口縁部片が出土したのみだが、検出層準や埋土から、飛鳥・奈良時代の遺構と思われる。

この溝は、位置や検出層準から判断して、83-52次調査で検出されたSD04[大阪市文化財協会1992 p.165]と同じ溝と考えられる。

SD06(図90・96・97)

V-2区に位置する幅1.0m、深さ0.35mの南北溝である。北で約2°西に振る方位を示す。長原6B層上面から掘込まれ、両肩部に黄色粘土で畔状の堤を築いている。埋土は水成の黄褐色粗粒砂で、黄色シルトを含む。埋土直上は長原5層が覆い、6A層が存在しないことから、6A層上面でも溝であったと思われる。遺物は出土しなかった。

なお、この溝は82-27次調査で検出されたSD01[大阪市文化財協会1990pp.151-152]と同じ溝と推定され、さらに1991年度に実施された91-18・53次調査[久保和士1992]では、北延長部分が調査されている(図90参照)。また、この位置は、後述するように、長原4B層上面でも溝となっている。

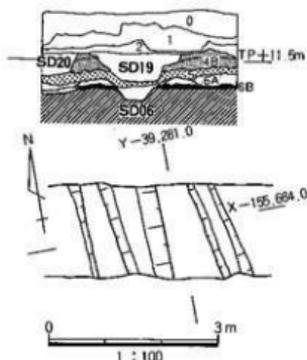


図96 V区SD06実測図

SD07・08(図90、図版20)

いずれもV-3区に位置する長原6A層基底面検出の南北溝である。SD07は幅1.1m、深さ0.4mで、SD08は幅0.7m、深さ0.2mである。SD07は北で西に約18°、SD08は約6°振る方位を示す。埋土はいずれも灰白色粘土の小塊を含む褐灰色粘土質シルトである。

SD08から須恵器・土師器の細片が出土した。

SD07は82-27次SD02[大阪市文化財協会1990pp.152-154]と、SD08は82-27次SD04[大阪市文化財協会1990p.155]と同じ溝の可能性が高い。また、いずれも91-18・53次調査で、北延長部分が調査されている(図90参照)。

ii) 水田遺構(図97・98、図版19・20)

I~V区のすべてで検出した。I~III区では、長原5層が厚く堆積しており、長原6A層上面の畦畔が良好に遺存していた。これより下位の作土層はおおむね6A層に同化され、識別が困難になっている。しかし、I-2区では、前述のように長原6Aii層が存在し、下位層準の遺構が検出された。一方、IV区では長原5層が存在せず、6Ai層に対比できる粘土質シルト層が存在する。本層下位の6B層上面で畦畔が検出された。また、V区でも長原5層の堆積が薄く、長原6Ai層上面で畦畔は確認できなかったが、6Aii層は厚く堆積していたため、6B層上面で畦畔や前述の溝状遺構を検出した。

I~IV区の周辺の水田畦畔は、1982年度調査でも検出され[大阪市文化財協会1990]、1985

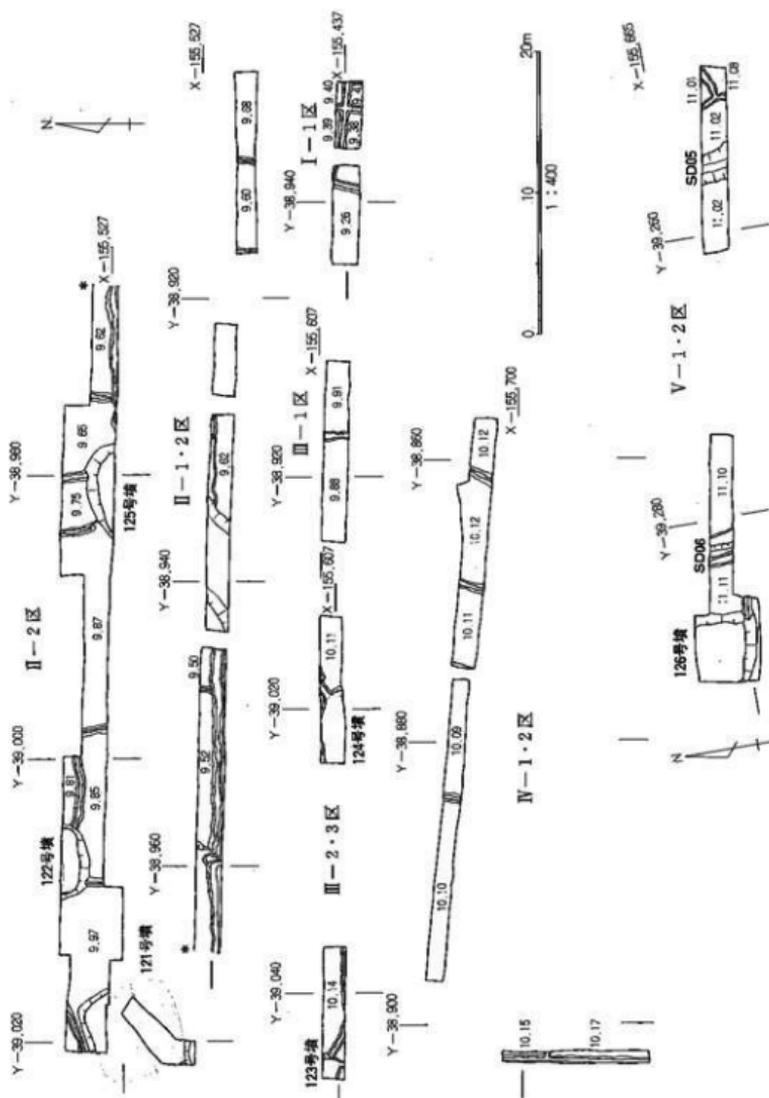


図97 長原6A・6B層上面の水田道標
(数値は上面のTP+値)

年度調査でも広範囲に検出されている。今年度の調査資料は断片的なものであるため、内容は続刊において報告することにして、ここでは、特徴的な造作のみられる部分について触れておく。

Ⅱ-2区の125号墳丘東辺の中央部から東に直線的に延びる長原6A層上面の畦畔①-②は、下幅0.6~0.8m、上幅0.3~0.4mで、延長50mを確認した。この東西50mの間の6A層上面は東端に向かって0.1~0.2m高度を下げていき、さらに東のⅡ-1区では再び0.1~0.2m高くなっている(図98参照)。また、この東西畦畔を挟んだ南と北の水田上面では0.1mの高低差がある。すなわち、Ⅱ-2区北東端部がもっとも低い地点となり、周辺との比高が0.2m前後あるため、ここでの畦畔の高さは最大で0.22mとなっている。また、125号墳の西辺か

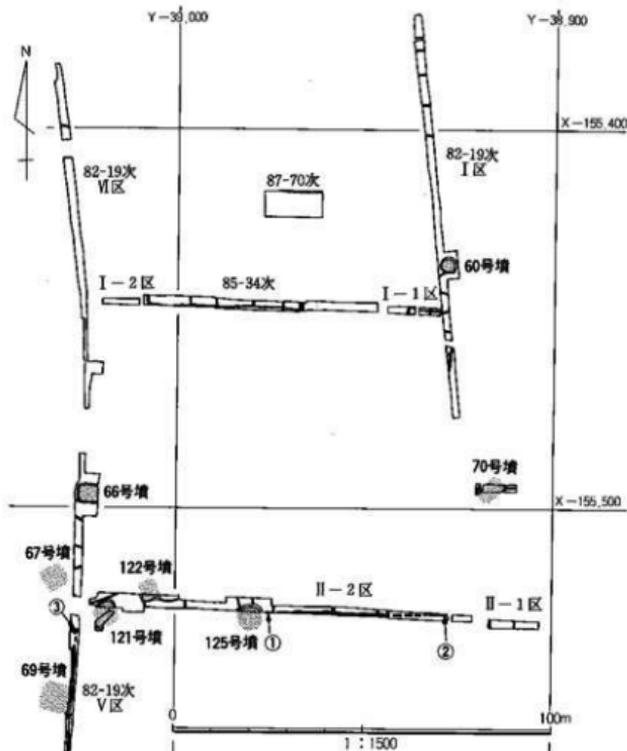


図98 長原6A層上面の畦畔配置図



写真14 I-1区出土のオオタニシ

ら121号墳南東隅に取り付き、墳丘南西隅から82-19次調査地V区の東西方向の大畦畔③〔大阪市文化財協会1990 p.139〕まで続くと考えれば、延長100m続くことになる。このことから、この東西畦畔は、地形に即して、方向を変えることの多い小規模の畦畔とは異なり、この地区の水田区画の基準となる畦畔であったと考えられる(註4)。

II-2区西端の121号墳の墳丘北辺に平行し、屈曲して82-19次調査地V区の畦畔〔大阪市文化財協会1990 pp.137-138〕に続くと推定される畦畔がある。墳丘との間隔は0.8mで、121号墳東側の区画への導水路となっている。このほか、II-2区では、おもに畦畔の交点において水口が認められた。また、I-1およびII-2区の長原6Ai層からオオタニシ〔*Cipangopaludina japonica* (v.Martens)〕が各1点出土した(写真14)。

水田の時期を示す新たな資料は、6Aii層が飛鳥Ⅱの土器の時期より後に堆積したことを示すSD01出土土器だけである。この知見は飛鳥Ⅳ・Ⅴ土器の時期に6Aii層が堆積したと考えられること〔趙哲済・京嶋寛・高井健司1992〕と矛盾しない。

(京嶋)

5) 平安～室町時代の遺構と遺物

i) 掘立柱建物

SB01(図99～101、図版21・44)

II-2区に位置し、長原4B層基底面を検出面とする東側に庇をもつ南北棟建物である。南妻柱の柱穴は検出できなかった。身舎は桁行1間以上(2.15m以上)、梁行推定2間(3.55m)で、柱間は桁行は約7尺、梁行は1.78mで約6尺と推定される。東側庇の出は1.5～1.6m(約5尺)である。庇南端の柱穴から南に1.18m(約4尺)離れて柱穴があり、南側にも庇が付く可能性があるが、身舎南東隅柱の南には対応する柱穴がなく、断定できなかった。柱穴の掘形は、身舎が直径0.3～0.5m、庇が0.2～0.4mの円形で、身舎の柱径は0.15mである。建物の方位はN2°30'Wである。

南東隅柱の柱穴から土師器甕の口縁部487が、南東隅柱から1間北の柱穴からは、土師器の細片のほか砥石489が出土した。487の甕Bは短い口縁部が付き、その内外面がヨコナデ調整、体部外面はナデ、内面は板状工具によるナデ調整である。489は大型の砥石で、上面

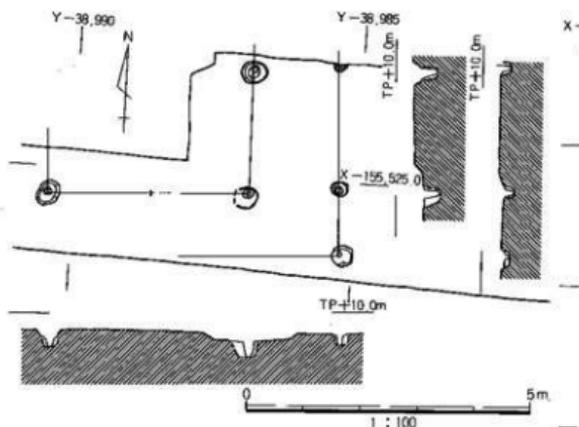


図100 II区SB01実測図

に幅1~2mmの溝状の研磨痕が3条認められる。底面および両側面も使用されているが、上面がもっともよく使用されている。褐灰色を呈する細粒砂岩製である。487は平安Ⅲ期である。

柱穴群(図99・101、図版44)

II-2区東部に位置する、長原4B層基底面検出の9個の柱穴からなる。SB01から東に約45m離れている。直径0.2~0.3mの円形を呈するものが多いが、SP01のように0.4m×0.5mの隅丸長方形の掘形で、柱径が0.1mとなるものもある。

この大型の柱穴から土師器杯484が、それから西に約2m離れた柱穴SP02から黒色土器A類碗485が出土した。484は口縁部をヨコナデし、体部外面はユビオサエにより粗雑に仕上げ、器面の凹凸が顕著である。485は外方に張出す高い高台をもち、体部外面はユビオサエで、内面はヘラミガキを施す。いずれも平安Ⅲ期である。

ii) 溝

SD09(図99・101)

II-2区東端に位置する南北溝で、西半部を検出した。幅

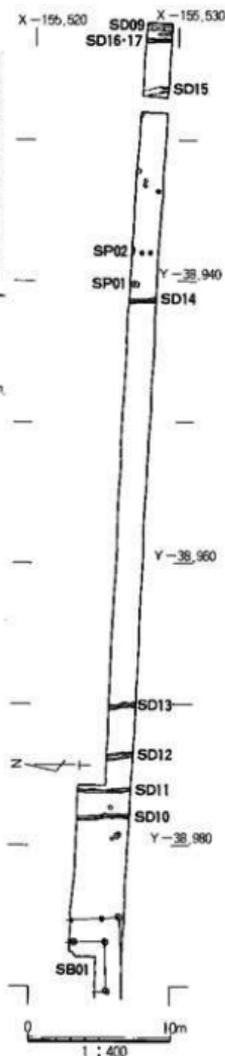


図99 II区长原4B層基底面検出の遺構

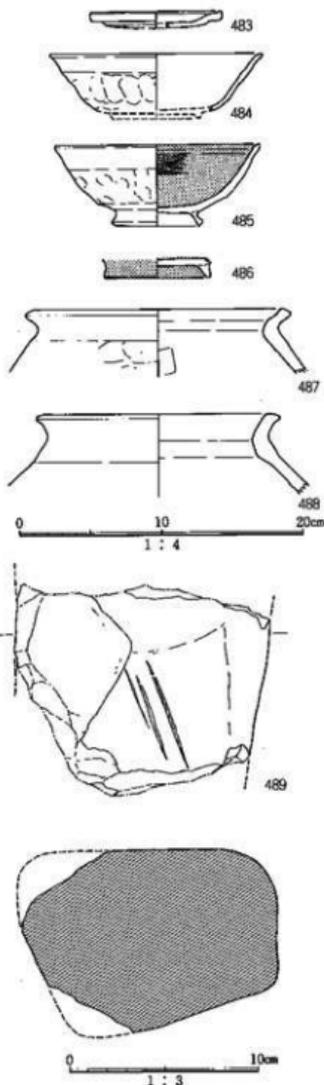


図101 柱穴および関連遺構出土遺物実測図
土師器(483・484・487・488)、砥石(489)、黒
色土器(485・486)

0.5m以上、深さ0.35mで、埋土は含砂灰色シルトである。土師器甕B488、黒色土器B類碗の細片が出土した。488は上端に面を作る短い口縁部をもち、体部内外面はナデ調整である。平安Ⅲ期に属する。

この溝は河内国丹北郡条里における7条と8条を分ける阡線の位置にあり、この地域に現存する条里地割が当該期までさかのぼる可能性を示唆する。しかし、南側のⅢ-1区では検出されず、長原4B層上面の南北畦畔がその位置に確認された。したがって、この溝はⅡ・Ⅲ区の間で途切れるか屈曲するものと思われ、Ⅱ区の屋敷地を区画すると考えることもできよう。X-155,528.3m、Y-38,921.8mの点が溝中心の位置にある。

SD10-17(図99・101)

Ⅱ-2区東半部の長原4Bi層下面ないしは基底面で検出された南北溝である。いずれも4B層の耕作に関連する溝と思われる。

SD14から平安Ⅲ期の土師器小皿483と黒色土器B類碗底部486が出土した。

SD18(図95、図版20)

V-1区西端の長原2層基底面で検出された溝である。南東から北西に延び、現代の地割溝もほぼ同じ位置にある。長原4A層を掘込んでいることから15・16世紀のものであろう。

SD19・20(図版21)

V-2区に位置し、SD19は下位層準のSD06と同位置にある(図96断面図参照)。いずれも長原4B層上面で検出された南北溝である。SD19は幅1.5m、深さ0.5mで、SD20は幅1.1m、深さ0.4mである。埋土はいずれも灰色または黄色の砂礫で、長原4A層

に相当するものである。それぞれ両肩部に群状の堤を築き、両溝間は堤を共有する。群状の堤は調査時には検出できず、土層観察によって確認した。遺物はSD19から土師器の細片が出土した。

SD21・22(図90・102、図版21・44)

V-3区西端部に位置し、東で約37°北に振る方向の大溝である。SD21は東側をSD22に壊されており、幅は2.5m以上、深さは0.7mである。埋土は灰褐色または黄灰色のシルトで、砂礫や緑灰色粘土のブロックを含む。SD22は幅4.5m、深さ1.0mで、灰白色ないしは灰色の砂礫が一気に埋積している。

SD21の西肩部の埋土内から完形の瓦器椀490が出土した。断面三角形の高台をもつ内湾する体部である。外面調整はユビオサエの凹凸が顕著であるが、密にヘラミガキが施されている。内面も密にヘラミガキがなされ、内底面には格子暗文が施されている。瓦器椀におけるⅡ-1期(表4)に対比できる。この時期に相当する層準は長原4Bii層または4Biii層である。

SD22からは瓦器491~494が出土した。瓦器椀491~493のうち、491は内湾する体部で、外面にヘラミガキを施す。Ⅱ-1~2期である。SD21に由来する遺物と思われる。492・493は直線的に延びる浅い体部で、492の内面のみにヘラミガキがみられる。Ⅳ-1期に属する。494は瓦器羽釜で、ヨコナデにより口縁部上端は面をなし、頸部外面は段を作る。幅2cmの鈎をもつ。遺物の時期に対比される層準は長原4A層であるが、北側の91-18次調査ではⅣ-4~Ⅴ期の瓦器椀も出土しているため、この溝を埋めた砂礫層は長原3層に対比できるものとしておきたい。

iii) 水田遺構

I~Ⅴ区に長原4B層が分布する。しかし、畦畔が確認できるのは上面を被覆する長原4A層の分布する地点に限定される。

Ⅲ-1区西端の4B層上面で南北方向の畦畔を断面観察により確認した。下幅が1.1mの大畦畔で、東側は幅0.6m、深さ0.1mの浅い溝状をなしていた。この位置は、Ⅱ-2区SD09と同じく、

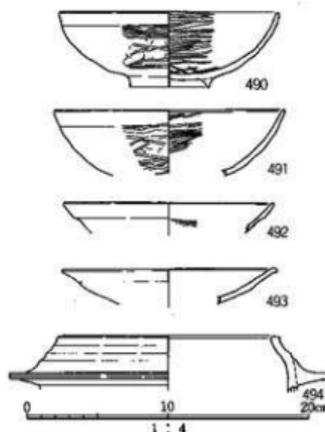


図102 V区SD21・22出土瓦器実測図

7条と8条を区切る阡線に相当する。また、この畦畔から東に7mの位置の長原4Biii層上面でも、南北方向で下幅0.5mの畦畔と、これをまたいで歩行した人の足跡を検出した。足跡は長原4Bii層に対比される明黄褐色細粒砂で埋っていた。なお、西側の85-34②次調査地の同じ層準でも同様の南北畦畔や足跡が検出されているが、この畦畔との距離は約22mである。

V-1区では、断面観察によって長原4B層上面の南北方向の畦畔を、2個所で確認した(図72断面図参照)。いずれも下幅0.5m、上幅0.3mで、両者の間隔は8.8mであった。また、長原2層下面では、4A層を20cmほど掘込んだ島島と思われる遺構を確認した。

(京嶋)

6) 小結

i) 古墳の時期(別表3)

82-19次調査で調査された69号墳は円筒埴輪から、長原古墳群の3期に比定されている[大阪市文化財協会1990]。今回の調査では、土師器甕・朝顔形埴輪が新たに出土したが、所属する時期に変更の必要性はない。122号墳は墳丘上で出土した円筒埴輪を重視すれば3期、124号墳は朝顔形埴輪の円筒部外面および円筒埴輪の口縁部外面に二次的なヨコハケ調整を施しており、タガも断面台形で突出していることから、2期に属するものと考えたい。121・123・125・126号墳は時期を判定するに十分な遺物が出土せず、時期は不明である。

121号墳南の65・68号墳と北の67号墳は、外面がタテハケ調整のみの円筒埴輪と二次調整のヨコハケ調整を施す円筒埴輪が共存する2期の古墳である[大阪市文化財協会1990]ことから、出土遺物の少ない121号墳も、2期の一群に属する可能性がある。

ii) 長原6A層上面の大畦畔の位置と地割

II-2区で検出された東西の畦畔(図98の①-②)は表11でみるように、地形の起伏に左右されずにE0°ブ11°Nの正東西方向に近い方位を示す。また、この畦畔は125・121号墳が障害物となっているため、約5m南に位置を変えて③まで続いていたと推定すれば、全長100m以上の大畦畔となり、一定地域における基準地割に準拠した可能性が考えられる。

今回の調査地の北部に位置する、大阪文化財センター調査の「城山その3」地区で発掘された「第2水田」(長原6B層上面の水田)の大畦1[大阪府教育委員会・大阪文化財センター1986]は、西側の87-35次調査のSR051[大阪市文化財協会1992B p.95]に続くものと思われ、

ほぼ正方位に近い(註5)。この畦畔と前述の畦畔①-②との距離は444.7mとなり、おおよそ4町という推定が成り立つ。このように、長原6層上面で検出される大畦畔や

表11 水田遺構の座標値

地点	X - m	Y - m	偏 度
①	155,527.2	38,976.0	
②	155,527.1	38,928.2	①-② E0° 7' 11" N
③	155,532.0	39,026.8	③-① E5° 23' 52" N

(①-③は図95中で示した地点)

灌溉用の水路は、すでに幾度となく指摘されているように、糸里制に係わる何らかの計画地割に準拠して構築された可能性が高いのであるが、その実体を追及する考察は緒についたばかりである。今後ともこの計画地割の復元作業を行うために、より精度の高い資料の整理を進めていくことが必要となろう(註6)。

iii) 平安時代建物群の範囲と周辺の環境

Ⅱ-2区の平安Ⅲ期の建物群は丹北郡糸里の7条4里31坪に位置している(図103)。坪を越えた西側の85-70・86-43次調査では同時期の建物群が発掘されており、さらに北側の坪にも分布が広がっている。また、31坪の南端まで柱穴[大阪市文化財協会1999p.72]があり、西側の32坪も86-43次調査で南端まで建物があるが、それ以南は18坪まで建物はみられない。

図71・72により南地区の地層の堆積状況を見ると、Ⅰ-Ⅳ区の範囲では、平安時代の生活面を支持する長原5層の層厚がⅡ-2区において最大となっており、当時、微高地になっていたことが窺える。図103に示したように、Ⅱ-2区の建物群は10.2m前後の標高の平坦面に形成されており、北部の7条5里7坪で発掘された平安Ⅲ期の建物群(註7)はおおむね9.6-9.8mの平坦面に形成されている。また、西側の32坪にある平安Ⅲ期の建物群(註8)は10.4-10.6mのコンターが示す南北70-80mの長原5層が形成する微高地上に位置している。前書でも指摘した平安Ⅲ期の屋敷地の分布傾向[大阪市文化財協会1992A pp.134-135]は、奈良時代末期~平安時代初頭の洪水による砂礫層(長原5層)の堆積によって形成された微地形に即した開発があったことを示している。また、地形に沿って存在したと想定される難波と河内を結ぶ交通路[大阪市文化財協会1992B p.111]についても、現状ではそれを実証する手掛かりは少ないものの今後留意すべきである。

今回の報告では建物全体が検出されておらず、建物の存在を知りえたにすぎないが、これらは坪を越えて隣接する建物群と一連の分布域の中にあり、それらを含めた屋敷地群として捉えられるものであろう。

(京嶋)

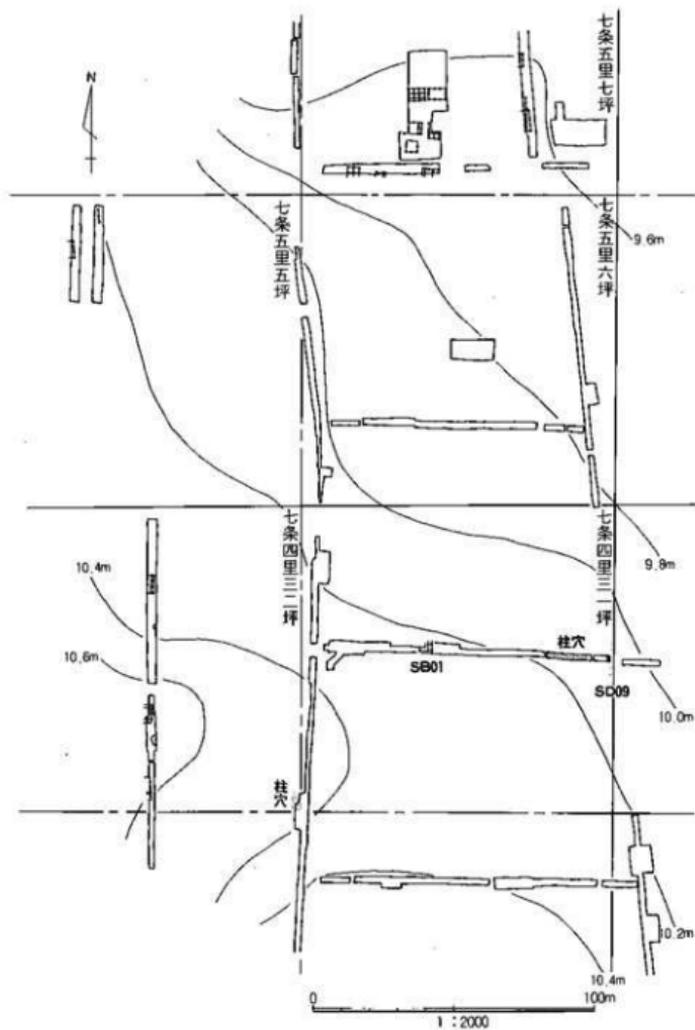


図103 南地区北部の平安時代建物の分布
(コンターは従来5層上端の地形を示す)

註)

- (1)堺市日置荘遺跡で発掘された須恵器窯第1床面出土の蓋杯の資料にみられるヘラ記号である。日置荘遺跡の資料は「陶器編年Ⅱ-2-Ⅱ-3型式」[中村浩1981]とされ、本資料と同型式である[大阪府教育委員会・大阪文化財センター1989 pp.41-54]。
- (2)[京嶋寛1992]で示した土師器の調理用土器にみられる調整手法の分類である。
- (3)墳丘周囲(図81の墳丘と波線の間の部分)には長原6層下面の踏込み状の凹みが多くみられた。これは6層の基底面で検出される長原13層上部の固くしまったシルト質部分が、周溝の掘削により消失したため、滲水時に、軟弱になった13層に、周溝の埋土が踏み込まれたものと考えられる。
- (4)この東西畦畔については、すでに[黒田慶一1986 pp.13-15]で紹介されている。
- (5)87-35次調査地で、大畦畔1と同じ位置の6Aii層上に奈良時代の東西方向と思われる溝があり、その南に配置された建物群の北を画していることが明らかになっている[大阪市文化財協会1992]。
- (6)[木原克司1982]では、当地域の糸里制地割は平安時代前期をさかのぼりえないであろうと推定していたが、その後、長原6A層上面に正方位の畦畔が検出されたため、奈良時代にさかのぼる可能性が示唆された[鈴木秀典1983]。また、[藤永正明1986]では新資料の発掘を通じて、南北間距離が約110mの地割の存在が指摘され、より具体的な検討が行われた。これをうけて[大阪市文化財協会1989A p.100]では長原遺跡中央地区から南地区にかけての地域で、当該距離を単位とする他の大畦畔の存在を指摘し、さらに、[横山洋1992B]でも同地域における畦畔間距離の検討がなされ、8世紀において未完成ながらも方格地割が存在したと考えた。
- 以上の既存の研究から、この地域において奈良時代に計画的な地割が存在したことは、すでに妥当な見解といわざるをえない。したがって、今後は資料のより精度の高い検討を通じて、当地域の地割の具体的な復元作業に取り組み、その歴史的意義を明らかにしていく必要がある。
- (7)85-23次、86-90次調査で発掘された。未報告。
- (8)85-70次、86-43②次調査で発掘された。続刊の「長原・瓜破遺跡発掘調査報告」Vで報告の予定。

第4節 長原遺跡東南地区(84-70次調査)

1) 調査地の位置

84-70次調査は、長原遺跡西地区(第2節で報告)および長原遺跡東南地区における擁壁工事に伴う調査および9個所の試掘調査を加えたものである。ここでは、後者の地区における調査と試掘で得られた資料を報告する。

擁壁工事に伴うトレンチによる調査地は、塚ノ本古墳(長原1号墳)の墳丘東半部に位置し、墳丘中心部と推定される地点から東墳丘裾部にかけて調査した。しかし、擁壁の設計上の掘削深度は浅く、また、当地が民有地であり、農作物の栽培もなされていたため、発掘の掘削深度や期間に制約を受け、十分な調査は行えなかった。以下に、塚ノ本古墳(長原1号墳)の調査報告と平安時代以後の遺物について報告する。なお、調査トレンチは西から1-3トレンチとする。

2) 塚ノ本古墳

i) 遺構(図104、写真15)

1トレンチは塚ノ本古墳の墳丘中心から東部に位置すると推測される(註1)。現在の地表面下0.3mで黒色粘土や黄棕色粘土からなる墳丘の盛土が検出されたが、上面は長原2層ないし3層の層準に対比される溝や土壊状の遺構が重複して掘られており、凹凸が顕著であった。2トレンチ北端で検出された墳丘は南に高度を下げ、トレンチの中央付近で未調査層準の下位に埋没していく。

墳丘上面や上位の地層から埴輪片が少量出土した。墳丘上面には古墳に係わる遺構は認められなかったが、今回墳丘が確認できた範囲において、大部分が黄色粘土を主体としていたのに対して、1トレンチ中央付近の墳丘盛土には黒色粘土や砂礫質の地山層が多く用いられていた。



写真15 塚ノ本古墳墳丘上の1トレンチ
(西から)

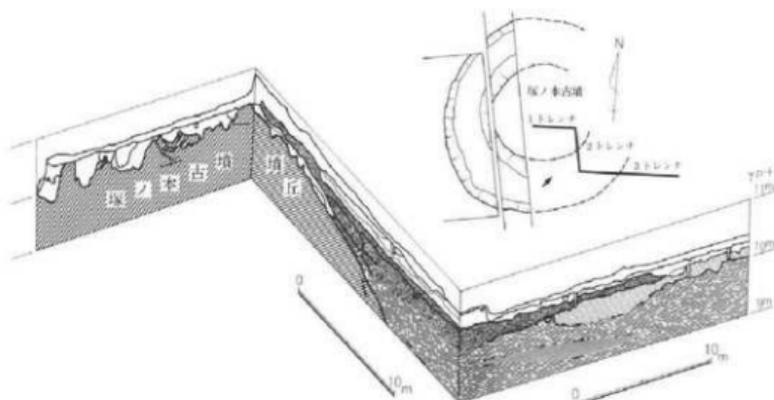


図104 調査トレンチのパネルダイアグラム

ii) 遺物

埴輪(図105、写真16)

495は墳丘上面で出土した家形埴輪である。外面に0.8cmの間隔で平行する2条の直線を下端面に平行して線刻し、その左端には直交する直線を線刻する。2条の直線の上方には2.6cmの間隔をあけて平行する直線が1条あり、おそらく、これと対をなす平行する直線が1cm前後の間をあけて上

方にあったと推測される。雲母・長石粒を多く含み軟質で、淡灰褐色を



図105 塚ノ本古墳出土の家形埴輪実測図(右は28号墳出土)

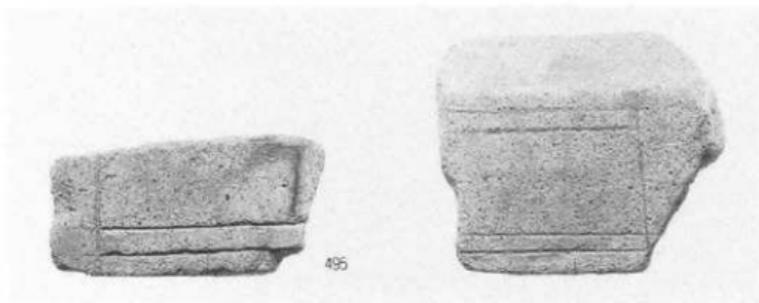


写真16 塚ノ本古墳出土の家形埴輪(右は28号墳出土)

呈する。こうした胎土・色調などの特徴は、本古墳に伴う他の埴輪の特徴とも共通するものであり、この破片は本古墳に伴うものであると考えられる。本古墳の北側50mに位置する28号墳から出土した家形埴輪の裾台部の破片[長原遺跡調査会1978 図版131-502]は、形状・線刻および胎土・色調からみて495と同一個体である。

本古墳から出土した家形埴輪には門柱を表現した大型の高床建物[長原遺跡調査会1978 図版137-566~569]があるが、495は既存の裾台部とは表現方法が異なるため、階を異にするものか、あるいは別の家形埴輪であると考えられる。

(京嶋)

石器遺物(図106、写真17)

墳丘上で512・513、墳丘周辺の上位層から514の石器遺物が出土した。これらはすべてサヌカイト製である。

512はクサビ本体で、G面が安定しており、板状の剥片が素材である可能性がある。A～C面で両極からの打撃が観察できる。I面は上方からの加撃によって形成された裁断面である。上端部には潰れが顕著であり、対向する下端部は比較的鋭い縁となっている。前者が打縁、後者が刃縁と考えられる。長さ3.26cm、幅2.19cm、厚さ1.40cmを測り、重さは7.02g

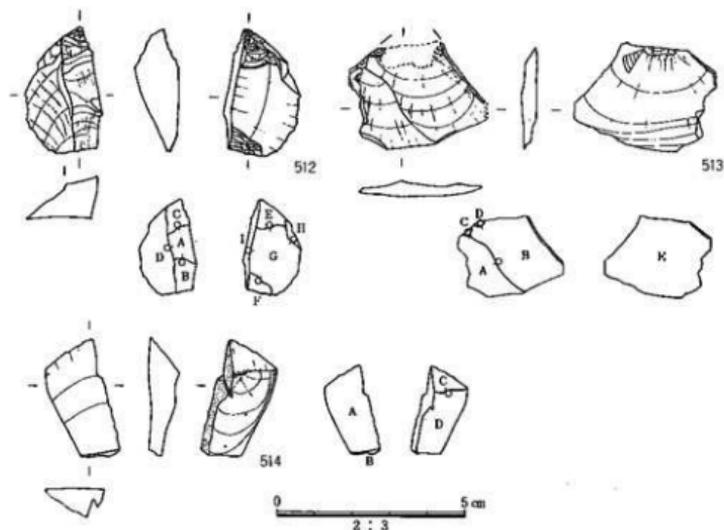


図106 クサビ・クサビから剥落した剥片・剥片実測図

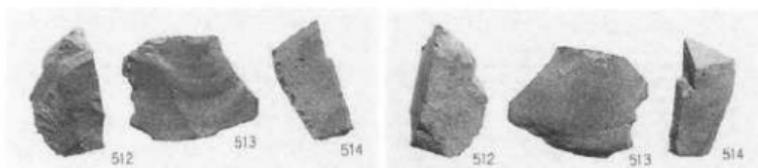


写真17 クサビ・クサビから剥落した剥片・剥片

である。

513は主剥離面に相当する面に不安定なリングがみられ、末端がヒンジ・フラクチャーとなっている。両面ともに打面に対して垂直に割れており、この時の打点は非常に近い位置にある。以上から、この剥片がクサビに使用した本体から剥落したものと考えられる。自然面である両側面の延長が打面であることから、本体は自然面が作る角を直接打撃するものであったと想定される。長さ3.45cm、幅2.71cm、厚さ0.38cmで、重さは4.77gである。

514は縦に長い剥片である。背面は平らな剥離面(A面)、右側面は自然面であり、この両面が作るコーナー部分が剥離されている。C面は打面、B面は剥片が取られた時にできた折面である。長さ3.10cm、幅1.53cm、厚さ0.74cmで、重さは3.49gである。

(岡村)

3) 平安時代以後の遺物(図107、写真18)

496～503は土師器小皿である。平底から斜上方に短く屈曲する体部を作る。口縁端部は丸くおさめるもの498～503と、体部外面に強いヨコナデ調整を施し、外反ぎみにするもの496・497がある。

504～510は瓦器椀である。509・510は深い体部で、509は断面三角形の高台を付ける。いずれも外面ユビオサエののち、ヘラミガキを施し、内面もヘラミガキする。509の内底面には格子暗文を施す。504～508は浅い体部で、内面に疎にヘラミガキを施す。505は小さく形骸化した高台を付ける。506の口径は11.8cmと小さい。509・510は瓦器椀におけるⅡ-2～3期、504・505・507・508はⅣ-1～2期、506はⅣ-3期である。

511は東播系の須恵器鉢である。口縁部は厚く丸みをもつもので、復元口径は31.6cmである。ヨコナデ調整で仕上げる。神出Ⅲ期(2段階附)〔森田稔1986〕である。504～508の瓦器椀と出土層位が同じであり、瓦器椀の編年ではⅣ-1～3期に属する。

(京嶋)

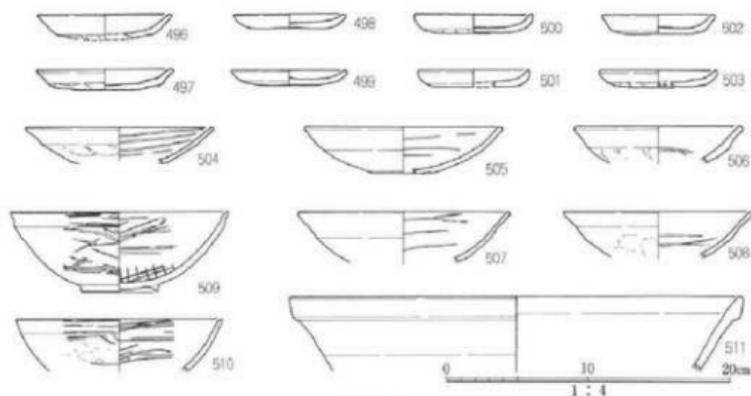


図107 平安時代以後の土器実測図
土師器 (496~503)、瓦器 (504~510)、須恵器 (511)

4) 小結

当地区北部の本事業に伴う調査は1986年度から本格的に調査が行われており、本書で報告する1984年度の調査は予備的な試掘調査や小規模な整地工事に伴うものであった。詳細については続刊の報告書中で明らかにされる。

長原1次調査と大阪文化財センターによる近畿自動車道建設に伴う調査以来、塚ノ本古墳の墳丘の調査はこの調査以外にない。それだけに、多くの制約の中で十分な調査ができず、わずかな知見を得たにとどまったことは遺憾である。本古墳に対する評価は、今後の調査・研究に拠るところが大きいといえるだろう。

(京嶋)



写真18 平安時代以後の遺物

註)

(1) 塚ノ本古墳(長原1号墳)は[長原遺跡調査会1978]で報告した「5号墳」であり、[大阪文化財センター1978]でも、西端部が報告されている。

第三章 遺構と遺物の検討

第1節 飛鳥時代の土器とその時期

今年度、瓜破遺跡東南地区の調査で出土した遺物は、奈良時代の遺物も少量あるが、おおむね飛鳥時代に属する土器であった。以下に、その分析を通じて、今回検出した遺構の時期や長原・瓜破遺跡における飛鳥時代の主要遺構との関係について検討したい。

1) 器種構成(表12)

井戸・土壇などの各遺構から出土した土器は後述するようにほとんど時期差を認めがたく、ここでは遺構から出土した土器を一括して、その器種構成の傾向を示す。器種名は第Ⅱ章第1節の図15・16で示した名称を用いる。

土師器食器類の半数が杯Cで占められ、杯A・皿は各1割前後である。杯Bは遺構から出土していないが、包含層から杯Bまたは皿Bの蓋と思われるつまみが出土している。高杯Aは包含層からの出土品に1点あるが、遺構からは高杯Bのみが出土している。

須恵器食器類は杯Gが半数を占め、杯B・Hで残りの4割を占める。古墳時代以来の杯Hは法量や形状に規格性が失われ、もはや主要な食器とはいえない。飛鳥Ⅳの段階に成立するとされる杯Aはみられないが、杯Gの中に口径が11cmを越え、直線的な体部をなして杯Aに類似した資料が存在する。また、少量ではあるが、本書で杯Cとした丸い体部をなす杯がある。土師器にみられる高杯や大型の鉢は含まれていない。

食器類における土師器と須恵器の占める割合は、およそ1:1である。

煮炊きで使用された土器は土師器に限られる。土師器甕A・C、羽釜がおもな器種で、甕Bは1割程度である。甕は破片であるが2種存在する。しかし、包含層中の遺物も含めて破片数は少なく、多量に使用されていたとは思えない。また、甌と思われる破片も出土していない。

井戸SE01からは土師器甕A・Bが完形に近いものを含めて各8個体出土した。これらは

表12 土師の器種別集計表（SE01を除く遺構出土土師器）

土師器		器種	個体数 (器種比率)	総数 (比率)
食器	杯A	5 (9.8%)	51 (52.1%)	
	杯B	0 (0.0%)		
	杯C	27 (52.9%)		
	皿	6 (11.8%)		
	高杯B	9 (17.7%)		
	鉢	4 (7.8%)		
調理具	甕A	10 (24.4%)	41 (41.8%)	
	甕B	6 (14.6%)		
	甕C	12 (29.3%)		
	羽釜	10 (24.4%)		
	鍋	3 (7.3%)		
	その他	6 (6.1%)	6 (6.1%)	

須恵器

須恵器		器種	個体数 (器種比率)	総数 (比率)
食器	杯C	1 (2.0%)	50 (78.1%)	
	杯B 身	7		
	杯B 蓋	5		
	杯G 身	27		
	杯G 蓋	14		
	杯H 身	5		
	杯H 蓋	12		
	碗A	1 (2.0%)		
	鉢	1 (2.0%)		
	台付鉢	1 (2.0%)		
貯蔵器	平瓶	6 (42.9%)	14 (21.9%)	
	提瓶	1 (7.1%)		
	長頸壺	2 (14.3%)		
	甕	4 (28.6%)		
	横瓶	1 (7.1%)		

	土師器	須恵器	計
食器	51 (50.5%)	50 (49.5%)	101 (64.7%)
貯蔵器	0	14 (100%)	14 (9.0%)
調理具	41 (100%)	0	41 (26.3%)
計	92 (59.0%)	64 (41.0%)	156

註) 土師器高杯は甕類、羽釜は鉢部、須恵器杯Bは甕類、その他は1) 鉢部の破片から個体を識別した。

法量からそれぞれ2種に分類される(図108)。これらは釣瓶として使用されたとみられるが、頸部に縄などを巻いた痕跡は認められなかった(註1)。

須恵器は平瓶が全体の4割を占め、次いで甕が多い。井戸SE01から出土した須恵器も平瓶がもっとも多く、長頸壺がそれに続く。これらも土師器甕と同様、井戸において使用されたものが廃棄されたと推測されるが、平瓶も長頸壺も口径が小さいことや小型品が含まれることから、別の用途があったかもしれない。平瓶は法量において4種に分類でき、体部の最大径が16~18cmのものが多。

2) 食器類の法量(図108)

土師器杯Cは口径が13cm未満のものと、16~17cmの2種がある。径高指数は22~33で26前後が多い。こうした法量の傾向は飛鳥Ⅱ~Ⅳの範囲にあり、なかでも飛鳥Ⅲが中心であることを示している。調整手法は不明のものが多いが、外底面をヘラケズリするものはない。

須恵器杯Gは口径が10cm未満、10~11cm、11cm以上の3種がある。杯G蓋もこれに対応して、口径10cm前後、11cm前後、12cm前後の3種に分類できる。このうち、身では10cm以上、蓋で

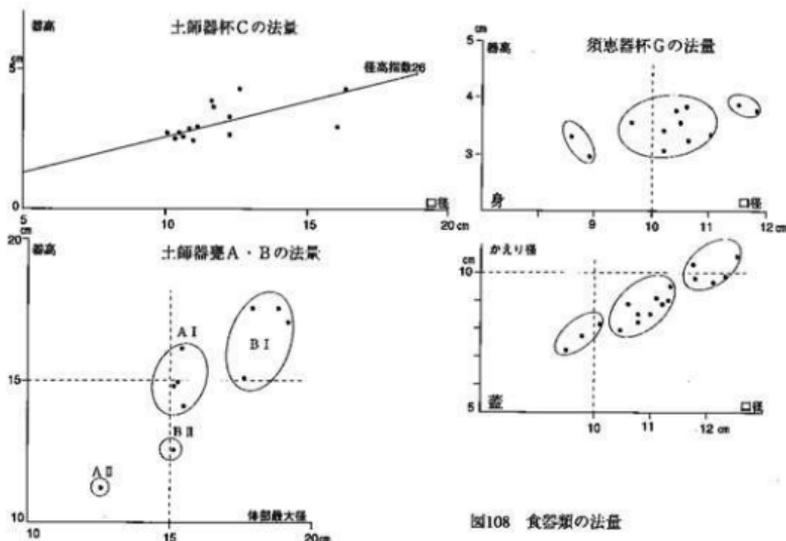


図108 食器類の法量

は11cm以上の資料が中心であり、口径10cm未満の杯Gは少ない。杯Gの法量の違いは時期差を示すものと思われ、飛鳥Ⅱの段階に多い口径10cm未満の資料が少ないことは、これらが飛鳥Ⅲに近いことを示している。

須恵器杯Bは口径が13～14cmのもので、器高は4.4～5.0cmである。全体が復元できる3点(97・161・162)の径高指数は、97・162が34、161が39で飛鳥Ⅲの資料に近い。また、包含層出土資料も含めた外底面の調整がわかる資料のうち6点がヘラケズリ、3点が不調整であった。径高指数が30を越える資料にヘラケズリ調整のみられる割合が高いことが指摘されているが[西弘海1978 p.97]、ここでは7割近くにヘラケズリが認められる。蓋は復元口径14.4～23.4cmと幅がある。おおむね20cm前後と15cm前後に分けられ、いずれにも内面に身受けのかえりがあるものとなないものがある。かえりの有無による二者の数量はほぼ同じである。口径20cm前後の蓋に組合う身は、82の杯F 1点しか確認できず、杯Bにはこの口径の資料は確認できない。しかし、高台径が11cmを越える底部片が3点あり、これらが組合う可能性がある。

今回の調査地の南側で実施されたUR86-11次調査地では、欄と溝で囲まれた建物群が発掘された。この調査で出土した土器の法量は土師器杯Cで径高指数が24～37、平均して32

である。外底面にヘラケズリを施す資料が含まれる。また、須恵器杯Gの口径をみると、10cm前後の資料が多く、12cmを越える資料が少ない。だが、欄を越えた建物群の北側、すなわち今回の調査地に近接する地点では、11cmを越える口径のものが中心となり、今回の資料の傾向と一致している。須恵器杯Bは欄の北側の包含層から出土しているが、建物群内では出土していない。また、この付近では今回の資料中に確認できなかった杯Aが1点含まれる。

3) 土器と遺構の時期(表13)

これまでの作業から、これらの土器はおおむね飛鳥Ⅱ～Ⅳの範疇に属するものであるといえる。しかし、遺構出土資料をみると、食器類において須恵器杯Aがなく、土師器杯A、須恵器杯Bが少量で、土師器杯C、須恵器杯Gが半数を占めるなど、飛鳥Ⅳの基準資料である雷丘東方遺跡SD110[奈良国立文化財研究所1980]とは大きく異なる。一方、須恵器杯Hが少量であることや、土師器杯Cや須恵器杯Gの分量からみて、飛鳥Ⅱの基準資料である坂田寺SG100[奈良国立文化財研究所1973]の資料より新しい様相も認めることができる。したがって、本資料の時期をさらに限定すれば、飛鳥Ⅲを中心にするといえ、飛鳥Ⅳに下りうる資料は非常に少ないと考える(註2)。

以上の井戸・土塙・溝から出土した土器の編年観に従えば、出土遺物の少なかった掘立柱建物もこの時期に比定することが妥当であろう。また、前項で提示したやや古い様相をもつUR86-11次調査南部の資料は、坂田寺SG100のそれに近いものであることから、南部に形成された屋敷地は飛鳥Ⅱの時期を中心とするものといえる。そして、その終末期には、今回報告した北部の遺構群と共存していた可能性を残しているが、おおむね南部建物群の廃絶を機に、北部の屋敷地が新たに形成されたと考えられる。そして、北部の建物群の下限は、今回の資料に従うならば、飛鳥Ⅳの時期以後に下ることはなかったとみられる。

次に、報告した遺構群と長原・瓜破遺跡における飛鳥・奈良時代の水田遺構[趙哲済・京嶋覚・高井健司1992]や周辺の建物群との関係を整理しておきたい。

長原・瓜破遺跡台地部において、長原7A層を作土とする水田の開発がいつから開始されたかを明確に示す資料はいまのところない。本書で報告した南地区の飛鳥Ⅱの土器を出土した溝は、平行する他の溝とともにこの時期の灌漑に係わる遺構であると思われる。また、長原1次調査のSD50は底面に木杭が打ち込まれた灌漑用の人工的な水路で、飛鳥Ⅰのやや新相を呈する土器が出土している。一方、長原中央地区でも、6Bi層基底面で同様の土器

を出土する井戸状遺構や土壌が確認されており(註3)、これらを7A層水田と関連する遺構とみれば、その開発・経営の時期は飛鳥Ⅰ・Ⅱ土器の時期を中心とするものであったと思われる。また、[大阪市文化財協会1992B]では7A層がⅰ・ⅱ層に細分でき、上層の7Ai層上面で飛鳥Ⅲの土器が出土しているため、下層の7Aii層の水田の時期を前述のように考えることに問題はないだろう。

飛鳥Ⅰ新相の土器を伴う建物群は長原遺跡西南地区で検出されており、飛鳥Ⅱ・Ⅲ土器の時期を中心とする瓜破遺跡東南地区の建物群に先行するものと考えられる。飛鳥Ⅰ～Ⅲの時期にかけて瓜破台地南部に形成された建物群は、おおむね長原7A層を土とする水田が営まれていた時期に当り、

本書報告の遺構群は、飛鳥Ⅲ・Ⅳ土器の時期に比定される(註4)水成層である長原6Bii層の堆積する時期に近い。また、これより上位の長原6Bi層を土とする水田は、飛鳥Ⅳ・Ⅴ土器の時期に長原6Aii層を堆積させた比較的大きな洪水の被害をうけるが、この時には当地区の建物群はすでに廃絶していたことになる。

当地区北方の喜連東遺跡で発掘された建物群[京嶋覚・西畑佳恵・上野裕子1990]は、これらを区画する溝からの出土遺物が飛鳥Ⅳ・Ⅴに対比できるものであり、建物群形成の端緒は長原6Aii層を堆積させた洪水前後にあったと思われる。

表13 飛鳥時代の土器と遺構

時期 (1)	土器	集落	水田 (層序) (2)
飛鳥Ⅰ	長原12次出土土器 (3)	⋮	⋮
	長原中央地区井戸・土壌 (4)	長原西南地区建物群 (5)	長原1次SD50 (6) 長原7Aii層
飛鳥Ⅱ	瓜破南部出土土器	瓜破東南地区建物群 (7)	長原南地区SD01
	瓜破東南地区SE01・SK01出土土器	瓜破東南地区SB01	長原7Ai層
飛鳥Ⅲ	喜連東遺跡SD06出土土器	喜連東遺跡建物群 (8)	洪水 (長原6Bii層)
飛鳥Ⅳ			長原6Bi層
飛鳥Ⅴ			洪水 (長原6Aii層)

- (1) [奈良国立文化財研究所1978]にしたがう。(2) [大阪市文化財協会1992]にしたがう。
 (3) [京嶋覚1992]に一級紹介。(4) [大阪市文化財協会1990]で長原6B層下面検出とした遺構。
 (5) [大阪市文化財協会1989B] (6) [長原遺跡調査会1978] (7) [西野謙二1987]
 (8) [京嶋覚ほか1990]

そして、その後、6Ai層を作土とする水田の造成が平城宮土器Ⅲの時期(註5)までのある時期に開始されたと考えられる(註6)。

(京嶋)

註)

- (1)古墳時代の井戸から出土した須恵器壺の頸部に、腐食した縄が巻かれていた例がある(84-25次調査)。
- (2)当協会10周年記念論文集に掲載予定の京嶋覚「難波宮下層」土器の再検討」では、難波地域の飛鳥時代の土器群をⅠ～Ⅳ期に分類し、飛鳥Ⅱに対比できる土器群をⅢ期とし、中でも新しい様相をもち、前期難波宮に関連すると推測される遺構から出土した一部の土器群をⅢ期新相とした。南部建物群出土の資料で中心となる資料は、このⅢ期新相とした時期に相当する。一方、北部の建物群の資料は難波地域では出土量が極端に少なくなる時期のもので、難波地域のⅣ期としている時期に当る。
- (3)長原遺跡82-4次調査の長原6B層基底面で検出された遺構や、[大阪市文化財協会1992B]で報告した6B層基底面検出の浅い土壌などである。
- (4)[大阪市文化財協会1992B]で報告したように、長原6Bii層から飛鳥Ⅲ～Ⅳの土器が出土している。
- (5)[大阪市文化財協会1992A]で報告したように、長原遺跡中央地区の長原6Ai層から平城宮土器Ⅲに対比できる土器が出土した。
- (6)飛鳥地域の土器については奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部、西口寿生・川越俊一・深沢芳樹の各氏のお世話で資料を実見し、御教示を得た。記して深謝の意を表します。

第2節 長原・瓜破遺跡の製塩土器

長原・瓜破地域では、古墳時代以降、平安時代初頭の9世紀初頭までの時期に属する数種類の製塩土器が少量ながら出土している。ここでは、本地域で出土した製塩土器を所属する時期によりⅠ～Ⅴ期に分類し、各時期の様相を明らかにしてその変遷を整理しておく。

1) 製塩土器の概要(図109)

Ⅰ期

この時期の資料は、十分に整理されておらず、詳細を述べることはできない。これまで報告されている資料としては、瓜破北遺跡で出土した少量の資料しかない[大阪市文化財協会1980]。資料はすべて脚台をもつもので、広瀬和雄氏の分類では脚台2式ないし3式[広瀬和雄1988]に相当するものと思われる。なかには脚台がかなり小型化したものも含まれる。これらは、土器における庄内式から布留式新相の時期に属するものと思われる。

Ⅱ期

5世紀後半から6世紀前半で、厚さ5mm以内の薄手丸底の製塩土器に限定される。

器形は口径3.5～5.0cm、器高が6.0～10.0cmで、やや下膨れの丸底(A類)、口径6.5～8.0cm、器高3.5～4.0cmで、前者に比べて浅く、丸底をなし、口縁部が内湾ぎみになるものがある(B類)の器形が確認できる。

調整は外面をユビナデし内面は横方向のナデ調整を基調とするもの(a手法)、外面に横方向の平行タタキを施し、内面のナデ調整は縦方向を基調とする粗雑なもの(b手法)の2種に分類でき、前者の内面には貝殻腹縁によると思われる横方向の条痕を残すものがある。A類の形態にはa・b手法がみられ、b手法のものは体部が直立ぎみになる。また、a手法には、b手法と同じく内面を縦方向にナデ調整するものがみられる。

また、胎土や色調において、砂粒をほとんど含まない緻密で精良な胎土で、淡黄灰色から灰白色を呈するもの(Ⅰ群)、精良な胎土で雲母の細片を多く含むものがあり、暗い灰褐色を基調とする胎土のもの(Ⅱ群)、砂粒を多く含む粗質のもの(Ⅲ群)がある。Ⅰ群の製塩土器はa手法を用いたA・B類で、Ⅱ群の製塩土器はb手法を用いたA類に限定される。また、Ⅲ群の製塩土器もA類にあるが、やや厚手で、調整はa手法だが内面を縦方向にナデ調整する傾向がある。B類にもやや粗い胎土のものがある。

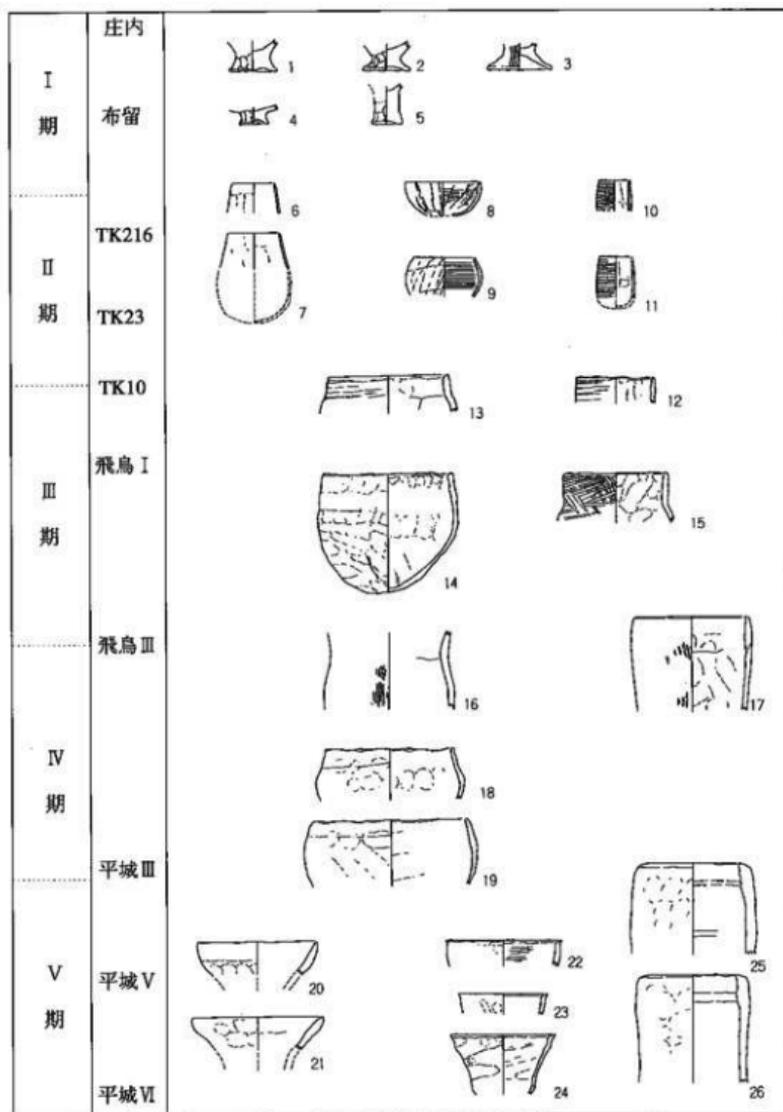


図109 長原・瓜破遺跡の製塩土器の変遷

これらの類例は柏原市船橋遺跡でもO-Ⅲ-O-Vの資料中に共存している[田辺昭三・原口正三・田中琢・佐原真1962]が、本地域におけるこれまでの整理結果からみて、須恵器の出現期において

表14 製塩土器一覧表

番号	引用文献
1~5	[大阪市文化財協会1980]図版40-45・39・504・358・37
6・7	[大阪市文化財協会1992A]図55-215・216
8・9	瓜破1次調査(未報告)
10~13	長原85-16次調査(未報告)
14・15	長原14次調査(未報告)
16・17	本書 図26-185・186
18・19	[大阪市文化財協会1992A]図133-574・575
20・21	[大阪市文化財協会1992A]図64-311・312
22~26	[大阪市文化財協会1992B]

はすべてA類で、しかもI群の胎土でa手法を用いたものが大半である。II群でb手法のものは少量混在する程度である。TK23型式の時期ころからI群の胎土でa手法の資料が減少し、器形におけるB類やb手法、II・III群の資料が日立ちはじめる傾向がある。

Ⅲ期

6世紀中葉～7世紀前葉で、初期にはII期と同じA・B類の製塩土器も多数存在するが、厚手で丸底の椀形を呈する大型の製塩土器が現われることをもって、Ⅲ期としておきたい。

TK10型式の須恵器とともに出土した資料には、厚さ5mm、口径8.0cmで、外面に平行タタキを施し、内面は縦方向にナデ調整している12があり、胎土は1mm程の長石粒を含むがおおむね精良である。また、13は口径13cm、器壁の厚さ8mm、やや内湾ぎみの器形で、口縁外面に平行タタキまたは板状の工具で押圧した痕跡が残るものである。内面は口縁上端部から下方に約2cmのところから下を、板状の工具で平滑にナデ調整している。口縁部内面と体部外面には焼成時に生じたひび割れがみられ、内面は黒色に変色している。胎土は石英・雲母・長石などの砂粒を多く含む。

これと同様の胎土・調整の製塩土器は、飛鳥Ⅰの中でも古相に属すると思われる長原12次調査出土の資料がある。14は完形に復元できる資料である。丸底で口縁は内湾ぎみになり、外面は無文で接合痕を明瞭に残す。内面は板状工具により、平滑に仕上げられている。内外面とも黒褐色を呈する。これと共伴して、体部からやや屈曲して口縁部となり、口縁部外面に平行タタキを施す15も出土している。

以上の資料の胎土は石英や雲母などの砂粒を多く含む灰褐色から黄褐色の胎土で、II期におけるII群の資料に類似するが、大粒の砂粒を多く含む点で差異がある。

このような、やや厚手で大型の製塩土器は岡山県広江・浜遺跡[間壁葦子1979]、香川県大浦浜遺跡[大山真充・真鍋昌宏1988]などの資料に類例を求めることができ、これらの地域からもたらされたものと考えられる(註1)。

Ⅳ期

7世紀後葉から8世紀中葉の時期で、形態・胎土・調整の異なるやや厚手の製塩土器が混在する。飛鳥Ⅲの資料として、内面に布の圧痕をかすかに残す17(本書図26-185)や、体部から屈曲して口縁部となる16(同図26-186)がある。前者のように内面に布圧痕を残す製塩土器は、後述するⅤ期にも、さらに厚手で布圧痕が鮮明な資料が多数みられ、むしろこの時期に多くみられるものと思われる(註2)。また、胎土も他の製塩土器とは異質である。16の資料は口縁部が欠損しているものの、口縁部が屈曲して立上がる形態は備讃瀬戸地域の製塩土器に近いように思われる。

また、前書報告の長原遺跡中央地区の平城宮土器Ⅲの土器とともに出土した資料18・19[大阪市文化財協会1992A 図133-574・575]は、内外面ともにユビオサエ痕を顕著に残す、やや厚手の椀形のものである。形態としては底部が尖りざみになる可能性もあるが、基本的にはⅢ期の椀形の資料に近い形態である。しかし、口縁端部を薄く作ることや、内面をユビオサエとする点に相違点がある(註3)。

この時期の資料数も少ないが、8世紀後葉以後、後述するように、厚手で砲弾形を呈する製塩土器が出土するようになるが、その先駆的様相を示す時期といえよう。

Ⅴ期

8世紀後葉から9世紀初頭の時期である。既報告の長原4層下面検出遺構からの出土資料[大阪市文化財協会1983 図52-100、図57-232・241]や、前書報告の西地区出土資料20・21[大阪市文化財協会1992A 図64-311・312]は、厚手で、口縁部がやや広がる「砲弾形」を呈する形態で、内外面をナデ調整する製塩土器である。また、[大阪市文化財協会1992B]出土資料22～26には、前述の形態のものと、口縁部が広がらず体部との境界がない形態で、内面に明瞭な布圧痕を残すものや、口縁上端部を強くナデ調整し、体部があまり長くない形態で、やや薄手のもの、貝殻腹縁を用いた可能性のあるハケメを内面に施すものなどが混在する。また、当遺跡の南に位置する松原市大堀城跡でも布圧痕を残すものを含めた4種類の製塩土器が出土しており、その時期は8～9世紀前半であるという[入江正則1984]。

これらのうち内外面をナデ調整する資料は阪南町田山遺跡[大阪文化財センター1983]から出土した「Ⅱ類」、いわゆる「丸底3式」[広瀬和雄1988]とされるものであろう(註4)。

2) 製塩土器の変遷と評価

長原・瓜破遺跡における製塩土器の変遷を以下に概観する。

I期における脚台式の製塩土器は、未整理の資料が多くあると思われ、今後の検討作業を必要とする。

II期には「丸底1式」と総称される薄手丸底の資料を中心にして多く出土するようになる。これらの出現は長原古墳群において小方墳が密集して造られる2期に当り、古墳の周溝内から出土する例もある。また、浅い碗形のB類やタタキを施すb手法の資料は、当初は少ないものの、6世紀初頭前後にはそれらが中心となる。この時期は長原古墳群の3期から4期の時期に当り、当地における古墳の変質期でもある。このように製塩土器の変化が古墳の動向との関連を示唆する時期がII期であるといえよう。

つづく6世紀中葉以後のIII期には資料数は減少するが、以下の点を指摘することができる。この時期の初期はII期後半には出現する薄手丸底でもやや厚手で、胎土に大粒の砂粒を含む資料が顕著になり、さらに備讃瀬戸地域の系譜と思われる厚手・大型の製塩土器が新たに出現する。また、7世紀初頭には厚手・大型の製塩土器のみが出土する地点があることなどから、おおむね備讃瀬戸地域の製塩土器が中心となる時期であろう。

IV期には、III期の系譜を引く碗形のものが存在するが、やや厚手で「砲弾形」の内面に布目を残す製塩土器がはじめて出現し、V期になると出土量が急激に増加し、致種類に分類可能な資料が9世紀初頭まで存在する(註5)。

以上の変遷過程を辿れば、長原・瓜破地域における製塩土器の様相は薄手丸底の資料が急増するII期に最初の画期があったといえ、8世紀後半代に厚手・砲弾形の資料が急激に増加するV期に次の大きな変化があったと推定できる。これは、広瀬氏の大阪湾岸地域における土器製塩に対する従来の見解(註6)を裏付けるものであり、その画期を反映したものと理解できる。

一方、資料数の少ない6世紀中葉～8世紀前半の資料も当地域の歴史を解明する上で、重要な手掛かりを示唆しているように思われる。すなわち、長原・瓜破地域では遅くとも7世紀前半には、灌漑水路の設置や水田の造成などの開発が広い範囲でなされていたと思われる。この開発は、すでに指摘されているように、耕地化のための大規模な溝渠の必要性[本原克司1982、広瀬和雄1983]や、水田畦畔における計画地割の存在、「富官家」の墨書土器の出土[藤永正明・阿部幸一1985、大阪文化財センター1986]などから、公的な開発事業であったと推測される。したがって、III～V期の製塩土器がこうした飛鳥・奈良時代の開発事業に由来する交流によってもたらされたものとみれば、製塩土器の示す様相はかかる開発の実体をより鮮明にする手掛りを提供するものとなろう。

内陸部の遺跡において、製塩土器の時期的変遷が辿れる遺跡は必ずしも多くはない。長原・瓜破遺跡の資料は、古墳時代から平安時代にかけての製塩土器の変遷、そして塩流通の変遷を示す好事例ともいえ、各資料の産地解明などの検討をさらに加える必要があろう。

(京嶋)

註)

- (1)生産地においても、「技術変化や大量生産がなされる時期が5世紀は大阪湾沿岸、6世紀が備前瀬戸、7世紀が若狭と時代ごとに地域が移り変わっていく。」といった変遷があり[大山真光1991]、こうした生産地の動向が本地域の製塩土器に反映されているものと思われる。
- (2)布疋痕を残す製塩土器の類例はほとんど8世紀以後の資料であり、その産地は淡路・播磨・紀伊の海岸部地域ないしは北九州から中・西部瀬戸内地域と推定されている[岩本正二1983 p.406]。したがって、飛鳥時代に属する本書報告の185はそれらの初現期の資料となる。
- (3)洲本市立淡路文化史料館 浦上雅史氏のご教示を得た。
- (4)製塩土器資料について(財)大阪府埋蔵文化財協会 藤田憲司氏、岡山県古代古備文化財センター 正岡睦夫・浅倉秀昭氏のご教示を得た。
- (5)阪南町田山遺跡の資料も「奈良時代中頃～後半」に比定されている[大阪文化財センター1983]。
- (6)丸底1式の段階と丸底3式の段階にそれぞれ土器製塩の両期があるとされた[広瀬和雄1988]。

別 表

別表2 銭貨計測表

種 類	状 態	登録番号	重量 _g	外縁外径 _{mm}	外縁内径 _{mm}	内縁外径 _{mm}	内縁内径 _{mm}	外縁厚 _{mm}	
188	万年通宝	Z-2887-1	7.52	27.10	22.33	8.13	6.80	1.89	
189	万年通宝	Z-2888	5.06	26.68	22.20	8.35	6.35	1.99	
190	万年通宝	一部欠	Z-2883	2.81	26.65	22.15	7.65	6.30	2.12
191	万年通宝		Z-2878	4.81	25.45	21.50	7.98	6.25	1.94
192	万年通宝		Z-2881	4.72	26.85	21.95	7.98	6.48	1.96
193	万年通宝		Z-2882	3.35	26.65	22.30	7.95	6.63	1.80
194	万年通宝		Z-2952	3.93	26.70	22.05	7.78	6.48	1.60
195	神功開宝(A)		Z-2885-1	6.33	26.15	22.60	8.53	6.73	1.50
196	神功開宝(A)	一部欠	Z-2954-1	2.98	—	—	—	—	1.75
197	神功開宝	一部欠	Z-2954-2	—	—	—	—	—	—
198	神功開宝(A)		Z-2886-1	6.70	25.55	21.48	8.13	6.30	1.75
199	神功開宝(B)		Z-2879	2.88	26.90	21.68	8.10	6.38	1.93
200	神功開宝(B)		Z-2880	3.28	25.30	20.93	7.70	5.88	1.49
201	神功開宝(E)		Z-2950	4.32	24.93	20.65	8.38	6.80	2.06
202	神功開宝(E)		Z-2951	3.70	25.30	21.15	8.00	6.80	1.89
203	神功開宝		Z-2887-2	—	25.45	—	—	—	—
204	神功開宝		Z-2953-1	5.68	25.35	—	7.83	6.33	1.81
205	神功開宝		Z-2953-2	—	25.28	—	—	—	1.70
206	神功開宝		Z-2877	2.72	24.80	21.05	8.18	6.25	1.61
207	神功開宝		Z-2884	2.92	24.88	21.35	8.03	6.40	1.70
208	神功開宝		Z-2886-2	—	24.45	—	—	—	—
209	神功開宝		Z-2885-2	—	24.63	20.18	8.55	6.38	1.53
319	(聖宋)元宝	外縁欠	—	—	—	—	—	—	—

別表3 発掘古墳一覧表(括弧内の数値は推定値)

地区	古墳名	墳形	調査	長辺(m)	短辺(m)	墳丘高(m)	周溝幅(m)	墳丘方位	土器	埴輪	備考
長原西地区	110号墳	方墳		9.3		0.40	2.7	N 3° E	須恵器	円筒・朝顔・衣蓋	
	111号墳	方墳		10.8	10.3	0.57	3.6	N 17° W	須恵器	円筒・家・衣蓋・人物	
	112号墳	方墳		5.7~	4.5~	0.30	1.8	N 33° E	須恵器	円筒・衣蓋	
長原南地区	197号墳	方墳	周溝のみ				1.9		須恵器	円筒	
長原南地区	69号墳	方墳	周溝のみ	(11.5)			(3.0)	N 26° W	土師器	円筒・朝顔	再発掘
	121号墳	方墳		(7.4)		(0.45)		3.8	N 12° W		
	122号墳	方墳		5.5		0.50	2.0	N 12° W		円筒	
	123号墳	方墳		6.0		0.52	2.4	N 19° E			
	124号墳	方墳		5.8~		0.64	3.5	N 12° W		円筒・朝顔・家	
	125号墳	方墳		6.7~		0.66	1.8	N 18° W	土師器		
長原南地区	126号墳	方墳		6.0~		0.77	3.3	N 5° E			

別表4 建物遺構一覧表(括弧内は推定)

地区	遺構番号	時代	棟方向	桁行(m)	梁行(m)	桁行総長(m)	梁行総長(m)	棟方位	備考
瓜破東南地区	SB01	飛鳥	南北	7	2	12.95	3.95	N 7° W	
	SB02	飛鳥	(南北)		2	2.46		N 8° 30' W	
	SA01	飛鳥		3以上		5.25~		N 6° 30' E	
長原西地区	SB01	古墳		2	2	3.75	3.03	N20° 30' W	
	SB02	平安	東西	2	2	3.60	3.40	E 7° 30' S	南側に柱列
長原南地区	SA01	古墳		3以上		5.35~		E 5° N	
	SB01	平安	南北	1以上	(2)	2.15~	3.50	N 3° 30' W	南・東庇

引用・参考文献

- 福田孝司1978、「忌の壘と王権」：『考古学研究会』第25巻第1号 考古学研究会、pp.52-69
- 入江正則1984、「製塩土器」：大阪文化財センター編『大瀬城跡』、pp.77-79
- 岩本正二1983、「7～9世紀の土器製塩」：奈良国立文化財研究所編『文化財論叢』、pp.401-418
- 宇野隆夫1982、「井戸考」：『史林』第65巻第5号、pp.1-39
- 大阪市文化財協会1980、「長吉川辺遺跡発掘調査概要」：『大阪府下埋蔵文化財担当者研究会』
- 1981、「難波宮址の研究」第7
 - 1983A、「長原遺跡発掘調査報告」Ⅲ
 - 1983B、「瓜破遺跡」
 - 1984、「難波宮址の研究」第8
 - 1989A、「長原・瓜破遺跡発掘調査報告」Ⅰ
 - 1989B、「長原遺跡発掘調査(NG89-67)現地説明会資料」
 - 1990、「長原・瓜破遺跡発掘調査報告」Ⅱ
 - 1992A、「長原・瓜破遺跡発掘調査報告」Ⅲ
 - 1992B、「長原遺跡発掘調査報告」Ⅳ
 - 1992C、「難波宮址の研究」第9
- 大阪文化財センター1978A、「長原」
- 1978B、「応神陵茶山遺跡発掘調査報告書」
 - 1983、「田山遺跡」
 - 1986、「城山」(その3)
 - 1989、「日置江遺跡(その5)－調査の概要－」
- 岡崎晋明1979、「内陸地における製塩土器」：榎原考古学研究所編『榎原考古学研究所論集』第四 吉川弘文館、pp.375-404
- 小笠原好彦1980、「近畿地方の七・八世紀の土師器とその流通」：『考古学研究』第27巻第2号 考古学研究会、pp.53-65
- 大山真充1991、「製塩」：『古墳時代の研究』第4巻 生産と流通Ⅰ 雄山閣、pp.147-163
- 大山真充・真鍋昌宏1988、「大浦浜遺跡における製塩土器編年」：香川県教育委員会編『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』Ⅴ 大浦浜遺跡、pp.205-235
- 香川県埋蔵文化財調査センター1990、「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」Ⅶ 下川津遺跡
- 柏原市教育委員会1988、「大瀬遺跡－阪下小学校屋内運動場に伴う－」1985年度
- 川西宏幸1978、「円筒埴輪総論」：『考古学雑誌』第64巻第2号 日本考古学会、pp.95-164
- 北村四郎・村田源1979、「原色日本植物図鑑 木本編」Ⅱ 保育社
- 本原克司1982、「長原遺跡の水田址をめぐる諸問題」：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』Ⅱ、pp.287-316
- 1989、「長原遺跡の調査からみた河内平野南部の条里施行期」：条里制研究会編『条里制研究』第5号、

- 京嶋覚1989、「長原古墳群の概要」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』I、p.17
- 1992、「古墳時代後半期における土師器の器種構成」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』III、pp.187-200
- 京嶋覚・西畑佳恵・上野裕子1990、「喜連東遺跡の奈良時代遺物群」：大阪市文化財協会編『華火』24号
- 久保和士1992、「埴をもつ古墳」：大阪市文化財協会編『華火』36号
- 1992、「動物遺体」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』III、pp.93-94
- 黒田慶一1986、「長原(城山)遺跡出土の「富官家」黒書土器」：『ヒストリア』第111号 大阪歴史学会、pp.1-23
- 小賀直樹1988、「大目津泊り遺跡と製塩」：興三郎先生古稀記念論集刊行会編『求真能道 歴史学書房』、pp.127-140
- 栄原永達男1991、「和同開珎の流通」：『古代の日本』第6巻 近畿II 角川書店、pp.347-362
- 佐藤隆1992A、「飛雲文系軒瓦について」：中山修一先生喜寿記念事業会編『長岡京古文化論叢』II、pp.117-126
- 1992B、「平安時代における長原遺跡の動向」：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』V、pp.102-115
- 菅原正明1983、「畿内における土釜の製作と流通」：奈良国立文化財研究所編『文化財論叢』、pp.725-758
- 鈴木秀典1982、「瓦器検の福年」：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』II、pp.278-282
- 1983A、「水田について」：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』III、pp.219-223
- 1983B、「長原遺跡における9～11世紀の土師器・黒色土器の器種構成」：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』III、pp.224-237
- 洲本市教育委員会1977、「山下町居屋敷遺跡発掘調査報告」
- 積山洋1992、「水田遺構の分析」：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』V、pp.91-101
- 田島富慈美・清水和明1993、「縄文～弥生時代の石器」：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』V、pp.9-20
- 田辺昭三1981、「須恵器の変遷」：『須恵器大成』 角川書店、pp.34-45
- 1982、「初期須恵器について」：『考古学論考』小林行雄博士古稀記念論文集 平凡社、pp.417-429
- 田辺昭三・原口正三・田中琢・佐原真1962、『船橋遺跡の遺物の研究(II)』
- 田村昭治1977、「淡路島の製塩土器について」：洲本市教育委員会編『山下町居屋敷遺跡発掘調査報告』、pp.27-38
- 榎野博幸1978、「長原遺跡出土の哺乳動物遺体」：長原遺跡調査会編『長原遺跡発掘調査報告』 大阪市文化財協会1982改訂、pp.196-199
- 趙哲済・京嶋覚・高井健司1992、「長原遺跡の地層をめぐる諸問題」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』III、pp.177-186
- 長原遺跡調査会1978、『長原遺跡発掘調査報告』 大阪市文化財協会1980改訂
- 中村浩1981、『和泉陶器の研究』 柏書房
- 中山平次郎1915、「窟内面の異形打痕」：『考古学雑誌』第5巻第9号 考古学会、pp.1-13
- 奈良国立文化財研究所1973、「坂田寺」：『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』3、pp.5-9
- 1974、『平城宮発掘調査報告』VI 奈良国立文化財研究所学報第23冊

- 1976、「平城宮発掘調査報告」Ⅳ 奈良国立文化財研究所学報第26冊
 1978、「飛鳥・藤原宮発掘調査報告」Ⅱ 奈良国立文化財研究所学報第31冊
 1980、「飛鳥・藤原宮発掘調査報告」Ⅲ 奈良国立文化財研究所学報第37冊
 1983、「類蔵文化財ニュース」41
 1989、「平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告」 奈良国立文化財研究所学報

第46冊

- 西弘海1978、「土器の時期区分と型式変化」：奈良国立文化財研究所編『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』Ⅱ、pp.92-100
 西中川駿・松元光春1991、「道跡出土骨同定のための基礎的研究」：『古代道跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究』鹿児島大学農学部獣医学科、pp.164-188
 羽曳野市教育委員会1982、「古市遺跡群」Ⅳ
 1984、「古市遺跡群」Ⅴ
 原口正三1962、「船橋遺跡の遺物の研究（Ⅰ）」
 林田承幸・山内忠平1957、「馬における骨長より体高の推定法」：『鹿児島大学農学部学術報告』6 鹿児島大学農学部、pp.146-156
 広瀬和雄1978、「小島東遺跡」：大阪府教育委員会編『堺町遺跡群発掘調査概要』、pp.1-24
 1988、「近畿地方における土器製法」：『考古学ジャーナル』第298号、pp.13-20
 藤永正明1986、「水田について」：大阪府教育委員会・大阪文化財センター編『城山』（その3）、pp.92-106
 富加見泰彦1991、「陶器出土の車輪文について」：『古文化談叢』第26集 九州古文化研究会、pp.175-181
 間壁俊子1979、「広江・浜遺跡」：倉敷考古館編『倉敷考古館研究集報』第14号、pp.2-203
 松井章1984、「鳴神地区遺跡出土の動物遺存体」：和歌山県教育委員会編『鳴神地区遺跡発掘調査報告書』、pp.401-404
 南秀雄1987、「瓜破遺跡で発見された7世紀の建物群」：大阪市文化財協会編『篝火』8号
 森毅1992、「青花の分類と呼称」：大阪市文化財協会編『難波宮址の研究』第九、pp.133-136
 森田豊1986、「東播系中世須恵器生産の成立と展開—神出古窯跡群を中心に—」：神戸市立博物館編『神戸市立博物館研究紀要』第3号、pp.3-31
 森本晋1985、「石小刀」：金岡忠・佐原良編『弥生文化の研究』5 雄山閣、pp.59-62
 横田賢次郎・森田勉1978、「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」：『九州歴史資料館研究論叢』4 九州歴史資料館、pp.1-26
 和歌山県教育委員会1984、『鳴神地区遺跡発掘調査報告書』
 波辺誠1985、「進歩の考古学」：『講座 日本技術の社会史』第2巻 煤炭・冶金 日本評論社

あ　と　が　き

「大阪市長吉瓜破地区土地区画整理事業」に伴う発掘調査がはじまって今年で11年になる。この間に蓄積された発掘記録と出土品は膨大な量に達しており、これらをいかに整理して、研究に役立てていくかが我々の当面の課題であるといえよう。本書の編集と刊行もこうした継続的な作業過程の中に位置づけられるものであり、その意味で、本書で示された遺跡に対する理解や評価は、今後も長く続くであろう研究作業のある時点における結論にすぎないのである。

現在、1985年度および1986年度の報告書も整理作業が行われており、本書で十分に検討できなかった部分や誤った理解などは、これら続刊の中で補われるものと思う。

(永島暉臣愼)

索引

索引は、遺構・遺物に関する用語と、地名・遺跡名などの固有名詞に分割して収録した。

〈遺構・遺物に関する用語〉

II Ⅱ期 (瓦器)	59, 112, 139, 147	う ウマ	91, 94, 96, 97, 98
III Ⅲ期 (瓦器)	59	馬形埴輪	2, 85, 88, 106
IV Ⅳ期 (瓦器)	59, 112, 139, 147	え 円面碗	37, 63
V Ⅴ期 (瓦器)	112, 139	お 凹基式	64
B B種ヨコハケ	89, 106, 123	近江産	59, 115
M MT15型式	56, 101	鬼瓦	105
O ON46段階	56, 106	オニグルミ	47
T TK10型式	56, 113, 157	折戸53号 (O-53) 窯式	59
TK216型式	56, 82, 94, 106, 132	か 灰釉陶器	59, 115
TK23型式	56, 82, 83, 94, 106, 157	瓦器	16, 59, 103, 107, 112, 139, 147
TK43型式	58	甲冑形埴輪	113
X X線	2, 42, 50	竈	37, 39, 63, 149
あ 足跡	109, 140	唐津焼	104
飛鳥I	152, 153, 157	河内型	49
飛鳥II	29, 48, 113, 131, 136, 150, 151, 152, 153, 154	灌漑	10, 11, 107, 141, 152, 159
飛鳥III	48, 58, 150, 151, 152, 153, 154, 157	広東碗	106
飛鳥IV	30, 50, 58, 136, 149, 150, 152, 153	き 衣蓋形埴輪	77, 81, 85, 89
飛鳥V	37, 136, 153	京都産	59
い イイダコ壺	39	切妻	85, 128
家形埴輪	85, 127, 128, 146	く クサビ	45, 64, 66, 68, 69, 115, 118, 146, 147
生駒西窯産	29, 32, 35, 39, 63, 113	「九」の文字	29
石小刀	42	け 畦畔	52, 101, 126
石匙	64, 66	こ 洪水	109, 141, 153
石燈丁	56, 64, 75	さ 摺摺鉢	104
和泉型	50	猿投窯	59
井戸側	2, 7, 18, 20, 47	三本葉	113
犬形土製品	107	し 鑄蓮弁	59
		籬窟	103

高島	140	筒形器台	82, 83, 106
車輪文	30, 50	坪筑溝	104, 105, 107
庄内式	113, 155	て 鉄釘	64, 77
条里	15, 104, 138, 141, 143	と 磁石	42, 46, 64, 76, 93, 137
植物遺体	2, 19, 47	陶甕	37, 63
神功開宝	42, 50	東播系	147
人物形埴輪	81, 85, 106	動物遺体	96, 98
す スギ	47	土墳墓	10, 77, 97, 98
鈴形土製品	40	土鏃	40, 50, 63, 107, 112, 113
スモモ	47	凸基式	64
摺鉢	104, 106	豊丘氏大板城期	104, 106, 107
せ 製塩土器	3, 37, 39, 50, 63, 155, 157, 158, 159, 160	な ナイフ形石器	64, 69
宵花	104	ぬ 布目	39, 61, 101, 159
青磁碗	59, 115	は 白磁碗	59, 115
石核	45, 69	白鳳時代	7, 48
石獣	64, 65, 115, 118, 130	ひ 飛雲文	2, 60, 61
摂津C型	59	東山72号(H-72)窟式	59
瀬戸内技法	64, 71	沱	63, 136
瀬戸美濃焼	104	肥前磁器	106
銭差	42	備前焼	104, 106
銭貨	2, 15, 42, 50, 64, 77	平瓦	61, 104, 105
埴	61	ふ 船	47
線刻	30, 32, 79, 81, 85, 88, 89, 113, 145, 146	布留式	155
埴仏	7, 48	へ 平安Ⅱ期	58, 103
そ 礎盤	61	平安Ⅲ期	58, 59, 102, 103, 137, 138, 141
た 大畦畔	136, 139, 140, 141, 143	平安Ⅳ期	58, 103, 104, 107
盾形埴輪	89	平城宮土器Ⅲ	37, 113, 154, 158
履長刺片	45, 72, 73	平城宮土器Ⅳ	58
井波焼	104, 106	平城宮土器Ⅴ	58
ち 柱根	16	ヘラ記号	79, 82, 94, 113, 143
沖積層下部層	16, 52, 53, 56, 112	ほ 器書	159
沖積層上部層	15, 16, 51, 52, 53, 56, 108, 112	北宋銭	77
つ 付け鹿系	37	掘立柱建物	7, 10, 16, 77, 90, 102, 136, 152

ま	曲げ底系	39
	曲物	46
	マダコ壺	50
	丸瓦	61, 101
	万年通宝	42, 50
み	美豆良	85
も	モモ	47, 48
や	葉壺	50

ゆ	斎串	19, 46
よ	翼状剥片	69, 70
	横長剥片	64, 65, 69
り	竜泉窯	59, 115
	緑釉陶器	59, 115
れ	蕙草文	60, 61
わ	和同開珎	50

〈地名・遺跡名など〉

い	雷丘東方	27, 152	丹北郡	15	
	一ヶ塚古墳	11, 12	ち	茶山	21, 40
う	馬池谷	7, 10, 48, 50, 53, 56, 60, 63, 64, 75, 76, 77, 97, 107	つ	塚ノ本古墳	11, 13, 144, 148
	瓜破北	155	な	長岡京	61
お	大浦浜	157		難波宮	154
	大塚城	158		難波宮下層	27, 154
	翁橋	27	の	野々井	50
	大庭寺	50	ひ	東除川	11, 107
か	河内台地	15		日置荘	143
	川原寺	48		広江・浜	157
	神出	147	ふ	藤原宮	21, 27, 37, 50, 154
き	喜連東	153		船橋	25, 155
さ	坂田寺	152	へ	平城京	42, 50
	猿投窯	59	み	南住吉	27
し	篠窯	103	も	百舌鳥陵南	27, 49
	下川津	50, 107	や	山直中	50
た	田山	158, 160		山之内	27
			り	竜泉窯	59, 115

**Archaeological Reports
of
Nagahara and Uriwari Sites in Osaka, Japan**

Volume IV

A Report of Excavations
Prior to the Development of
the Nagayoshi-Uriwari Area in 1984

March 1992

Osaka City Cultural Properties Association

Notes

The following symbols are used to represent archaeological features in this text:

SA : Palisade or Fence **SB** : Building **SD** : Ditch **SE** : Well
SK : Pit **SP** : Posthole

CONTENTS

Preface

Explanatory notes

Chapter I Excavation of Nagahara and Uriwari sites.....	1
1) The outline of excavations in 1984.....	1
1) Excavations	1
2) Procedure of publishing of this report.....	2
2) Outline and progress of research work.....	7
1) South-eastern sector of the Uriwari site.....	7
2) Western sector of the Nagahara site.....	8
3) Southern sector of the Nagahara site.....	11
4) South-eastern sector of the Nagahara site.....	13
Chapter II Results of research.....	15
1) South-eastern sector of the Uriwari Site (site code: NG84-24).....	15
1) Stratigraphy.....	15
2) Features of the Asuka Period.....	16
i) Buildings and fence.....	16
ii) Well.....	18
iii) Pits.....	19
iv) Ditches.....	20
3) Features of the Asuka and Nara Periods.....	21
i) Pottery from postholes	21
ii) Artefacts from SE01.....	22
iii) Pottery from SK02.....	29
iv) Pottery from SD04.....	30
v) Pottery from pits in Units II and III.....	32
vi) Pottery from SD01-03, 05	33
vii) Pottery from archaeological strata in Unit II.....	35
viii) <i>Sue</i> inkstone	37
ix) Fired clay artefacts.....	39
x) Coins.....	42
xi) Stone artefacts.....	42
xii) Wooden artefacts.....	46
xiii) Plant remains.....	47
4) Conclusion.....	48
2) Western sector of the Nagahara Site (NG84-12, 29, 47, 67 and 70)	51
1) Stratigraphy.....	51

2) Artefacts from each stratum.....	56
i) Pottery.....	56
ii) Glazed pottery.....	59
iii) <i>Haniwa</i> clay objects.....	60
iv) Tiles	60
v) <i>Sue</i> inkstone, salt making pottery, portable hearth of fired clay and net sinker of fired clay.....	63
vi) Stone artefacts, iron nail and coin.....	64
3) Features and artefacts of the Kofun (tumulus) Period.....	77
i) Kofun no. 110.....	77
ii) Kofun no. 111.....	81
iii) Kofun no. 112.....	89
iv) Kofun no. 197.....	89
v) Building and fence	90
vi) Pits.....	91
vii) Ditches	94
viii) Faunal remains.....	96
4) Features and artefacts of the Asuka and Nara Periods.....	100
5) Features and artefacts of the Heian Period.....	102
i) Building and postholes.....	102
ii) Pits	102
iii) Ditches.....	103
6) Features and artefacts of the Early Modern Period.....	104
7) Conclusion.....	106
3) Southern sector of the Nagahara Site (NG84-48 and 73).....	108
1) Stratigraphy.....	108
2) Artefacts from each stratum.....	112
i) Pottery, <i>Haniwa</i> clay objects and net sinker of fired clay.....	112
ii) Glazed pottery	115
iii) Stone artefacts.....	115
3) Features and artefacts of the Kofun Period.....	121
i) Kofun no. 69	121
ii) Kofun no. 121	125
iii) Kofun no. 122.....	125
iv) Kofun no. 123.....	126
v) Kofun no. 124.....	126
vi) Kofun no. 125.....	129
vii) Kofun no. 126.....	129
4) Features and artefacts of the Asuka and Nara Periods.....	131
5) Features and artefacts from the Heian to Muromachi Periods.....	136
i) Building.....	136

ii) Ditches.....	138
iii) Paddy fields.....	139
6) Conclusion.....	140
4) South-eastern sector of the Nagahara Site (NG84-70).....	144
1) Location of an excavation spot.....	144
2) Tsukanomoto Kofun.....	144
3) Artefacts during and after the Heian Period.....	147
4) Conclusion.....	148
Chapter III Investigation of features and artefacts.....	149
1) Chronological considerations of pottery of the Asuka Period.....	149
1) Pottery assemblage.....	149
2) Dimensional classification of food vessels.....	150
3) Phases of pottery and features.....	152
2) Salt making pottery from the Nagahara Site.....	155
1) Outline of salt making pottery excavated in the Nagahara site.....	155
2) The evaluation of changes in salt making pottery.....	158
Tables.....	161
References.....	164
Postscript	
Index	
English Summary	

ENGLISH SUMMARY

This report summarizes the achievements of excavations carried out at the Nagahara and Uriwari sites, prior to the town planning development of the Nagayoshi-Uriwari area. The two sites, attached to each other, are situated in the south-eastern part of Osaka city, Osaka prefecture, Japan.

Excavations at these sites have been almost continuously carried out over the last twenty years, prior to public or private developments of the area. Particularly, at the Nagahara site, three hundred excavations have been carried out so far and the total excavated area amounts to 140,000 square metres, covering 4% of the whole site. This large accumulation of fieldwork has clarified that both the Nagahara and Uriwari sites are large complex sites, in which discoveries belonging between the Upper Paleolithic and the Early Modern eras have yielded wide ranging information about settlements and cemeteries in each period. This excavation report is the fourth volume and covers nine excavations carried out in the fiscal year of 1984 (beginning April 1st), prior to the construction of new roads and the associated drainage system. The total excavated area extends for 3,866 square metres. The dates of discoveries fall between the middle Kofun period (5th century A.D.) and the medieval (spanning the 12th to 16th century). The areas excavated were divided up into four geographical sectors and the results of research in each sector are summarized as follows:

South-eastern sector of the Uriwari site

Two buildings have been found here, one of which is a pillared building whose dimensions are 12.95 metres in length by 3.95 meters in width and dates to the latter part of 7th century (frontispiece). One well (colour plate 1), ten pits and five ditches were found that yielded a large number of pots (colour plate 2), which can be dated to the Asuka phase III (the late 7th century), according to the chronological sequence established in southern Nara.

To the south of this site, a relatively large-scale excavation was carried out in 1986 and eventually a building group with a surrounding ditch and fence was unearthed. Features reported in this volume, however, seem to be dated slightly earlier than ones found in 1986, though they are possibly associated with each other.

The building group, part of a large settlement disclosed in this area, is considered to be one of the residences where people exploited and managed the associated contemporary 7th and 8th century paddy fields that extended to the west of the Nagahara site. Also, this group can possibly be associated with a foundation of an ancient temple, termed "Uriwari-haiji", which is assumed to have been built to the north of the site, but which has unfortunately not survived.

Western sector of the Nagahara site

Features dating to the latter part of the middle Kofun Period, (the late 5th century A.D.), include four kofuns or burial mounds, (Nagahara Tomb No. 110-112, and 197).

Two hundred kofuns have been researched so far at the Nagahara site. These had been constructed during the end of 4th and the middle 6th centuries so as to form a large cemetery, termed "the Nagahara Kofun Group". One of the main characteristics of the group is that 97 % of them belong to a small square-moated mound type. 2.5 km south of the "Nagahara Kofun Group", the large contemporary cemetery, the "Furuichi Kofun Group", which includes mausoleums, is thought to be the main burial site for the political elite from the main Japanese political centre. Therefore, the Nagahara Kofun Group is considered to have been a burial site for minor officials in the political centre, or for people who had constructed the Furuichi Kofun Group.

The excavated kofuns, all belonging to a small square-moated mound type, are situated in the northern cluster of the Nagahara Kofun Group. In this vicinity, more than ten kofuns have been previously researched.

One building and other features such as a pit, possibly used for the burial of a horse, were also unearthened.

A section of paddy field dating to the Asuka and Nara Periods (7th and 8th centuries) was excavated and it marks the western limit of an ancient paddy field at the Nagahara site.

One building, ditches and other features of the Heian Period (9th to 11th centuries) were also found.

Southern sector of the Nagahara site

Six kofuns (Nagahara Tomb No. 121-126) dating to the late 5th century, were unearthened. All of them are classified as the small, square-moated mound type and all belong to the southern cluster of kofuns. Comprising in total of more than hundred in number, the six kofuns excavated only yielded a small amount of haniwa clay objects and pots.

Paddy fields, the associated baulks and drainage ditches from the Asuka and Nara Periods were excavated to a large extent. One of the baulks was attached to an earlier kofun, and several straight large baulks can be assigned to a section of the field division unit.

One building from the Heian Period, and ditches associated with cultivation from the Kamakura period (13th century) and later, were also excavated.

South-eastern sector of the Nagahara site

Only a small excavation was carried out in this sector this year and so the results are only mentioned in passing. The central portion of the Tsukanomoto Kofun (Nagahara Tomb No. 1), the largest and oldest in the Nagahara Kofun Group, was researched and the surface condition of the mound was recorded.

Conclusion

The most important result of the research for 1984, was that buildings and a well of the Asuka Period were discovered in the south-eastern sector. This report is the first volume to publish these findings, though fieldwork of an associated site in the adjoining area is still being carried out. The excavated pottery portrays a good ceramic assemblage belonging to the Asuka phase III. As the native Asuka type pottery of that date has not been frequently discovered, even in the Asuka area, southern Nara, this finding is of great importance. It is not difficult to understand that a series of features occupying the Uriwari Terrace has been present throughout the Asuka Period and these features have remained tightly associated with the paddy fields developed in the Nagahara area. Therefore, this knowledge obtained from excavation provides us with much fundamental data which is essential to the understanding of the historical development of this whole area.

This volume also covers the destruction and subsequent redevelopment of the original kofun sites. The kofuns were levelled by paddy fields developed during the Asuka and Muromachi Periods (7th to 15th centuries) and later buildings were established as the last phase. These buildings were regarded as the base for the development and management of this area during and after the Heian Period. This series of discoveries reflects the regional formation of one of the ancient states in Japan; the transition from the construction of numerous kofuns under the control of the political centre, through the development of vast paddy fields from the demolition of the kofun, to the resulting appearance of the Medieval rural landscape.

In other words, this report introduces the history of this area in ancient times by means of archaeological evidence.

Further Reading

Aikens, C. M. and Higuchi T.

1982 *Prehistory of Japan*. Academic Press, New York.

Pearson, R. J., G. L. Barnes and K. L. Hutterer, Editors

1986 *Windows on the Japanese Past: Studies in Archaeology and Prehistory*.
Centre for Japanese Studies, the University of Michigan, Ann Arbor.

Tsuboi K., Editor

1987 *Recent Archaeological Discoveries in Japan*. UNESCO, Paris and
Centre for East Asian Culture Studies, Tokyo.

1992 *Archaeological studies of Japan*. Acta Asiatica 63. The Institute of
Eastern Culture.

原色図版



全景（西から）



SE01（北から）



土師器

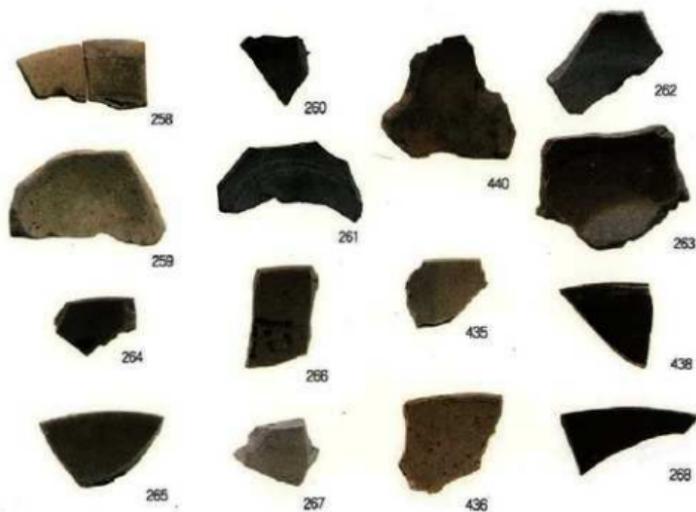


須恵器



外面

内面



西地区包含層 (258~268)、南地区包含層 (435・436・438・440)

圖 版

S B01 (南から)



S B01 (西から)



東部の遺構
(手前はS E01)
(東から)



S E01 (北から)



SE01 (上：井戸側検出状況、左下：裏込めの板材、右下：須恵器杯出土状況)

図版四 瓜破東南地区 井戸側材・土城



S E01井戸側材

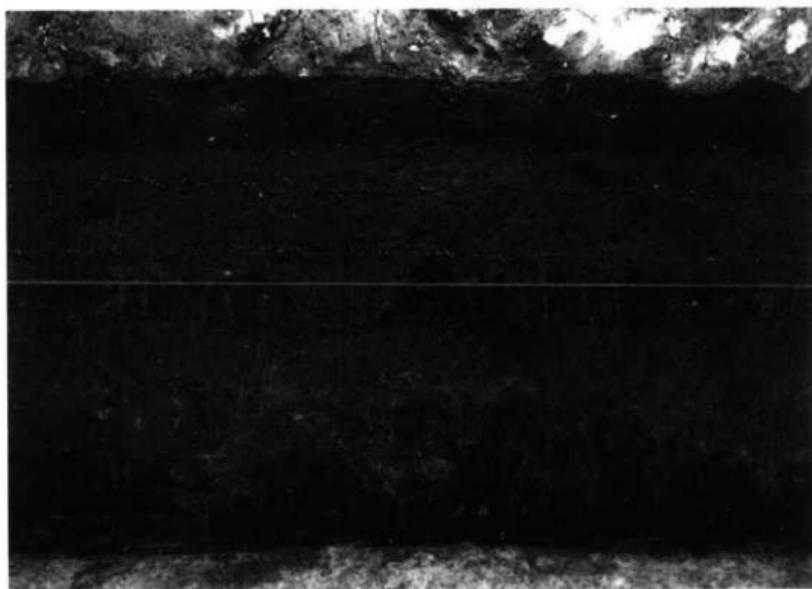


S K02 (北西から)

II区全景（南から）



II区全景（南から）



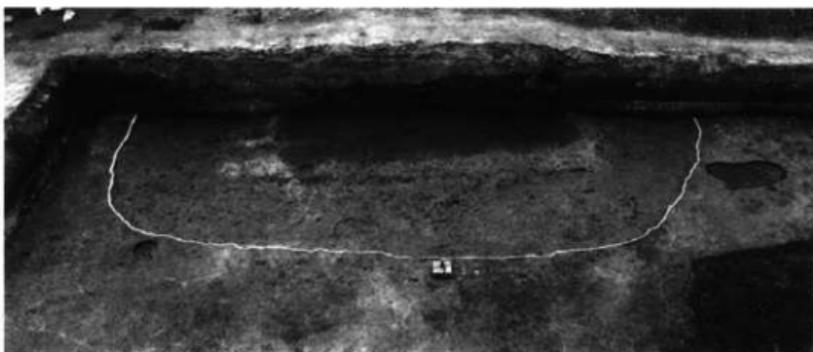
I-1区 南壁 (水糸高はTP+8.9m)



IV-1区南部 西壁 (水糸高はTP+8.5m)



検出状況（西から）



全景（西から）



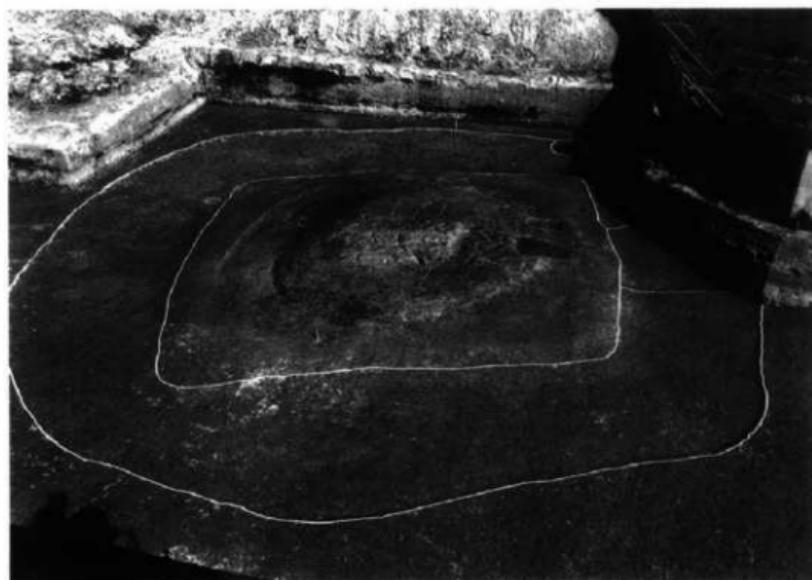
全景（南から）



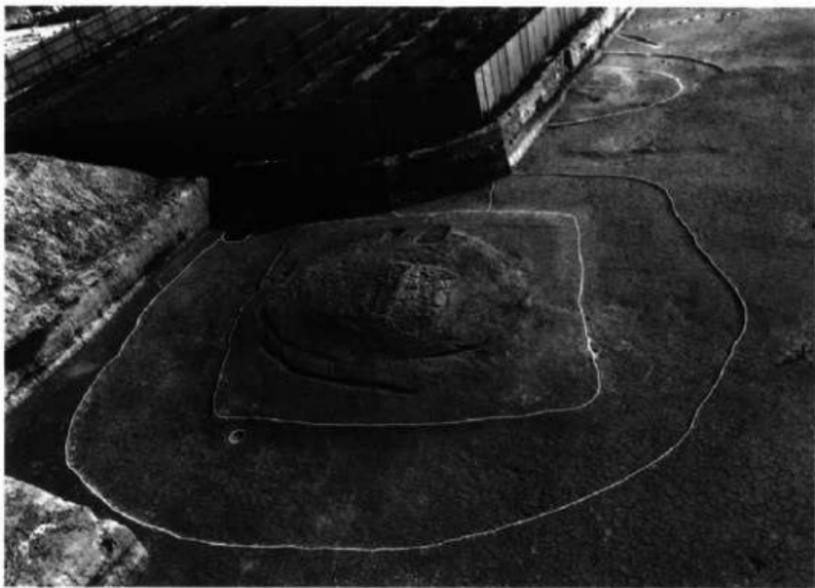
土器出土状況



検出状況（西から）



全景（西から）



111・112号墳全景（北から）



111号墳東周溝内遺物出土状況（北から）



北部全景（西から）



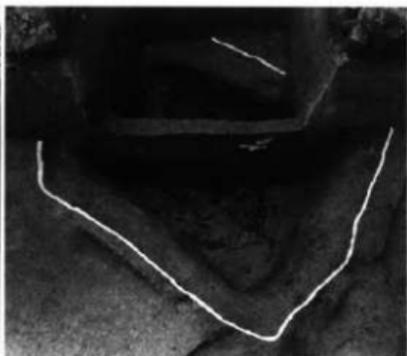
北部S B01・S A01（南東から）



西部全景（東から）



S K01遺物出土状況（南東から）



S K01（南から）



S D04~06 (西から)



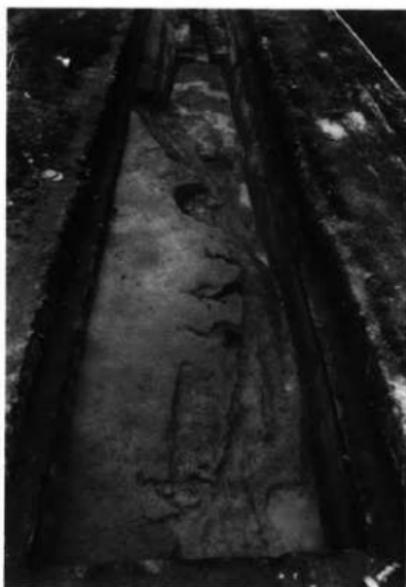
S D09 (東から)



I-2区 長原6A層上面(東から)



I-2区 長原4B層内(東から)



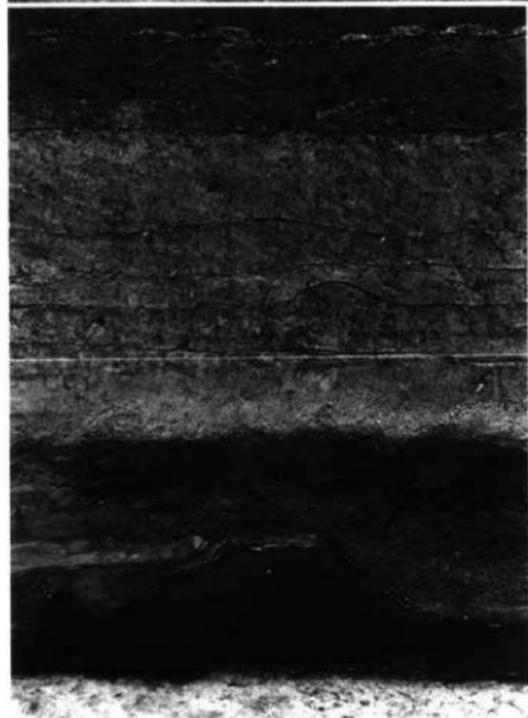
IV-2区 谷状地形(北から)



IV-2区 長原2層基底面(北から)



I-2区 南壁
(水系高はTP+10.0m)



II-1区 南壁 (水系高はTP+10.0m)



121・122号墳全景（西から）



121号墳全景（北西から）



全景（西から）



墳丘断面

123号墳全景（西から）



124号墳全景（東から）



全景（西から）



墳丘断面（南から）



II-2区 長原6A層上面(西から)



II-2区 長原6A層上面(西から)



III-2区 長原6A層上面(東から)



IV-1区 長原6B層上面(東から)



I-2区 S D01~04 (西から)



V-1区 S D05 (東から)



V-3区 S D07・08 (東から)



V-2区 S D19・20 (西から)



V-3区 S D21・22 (東から)



II-2区 S B01 (南から)



5



7



5



7



5



8



6



8



9



15



13



16



20



19



30



23



21



27



22



28



32



34



37



35



36



38



40



42



33



43



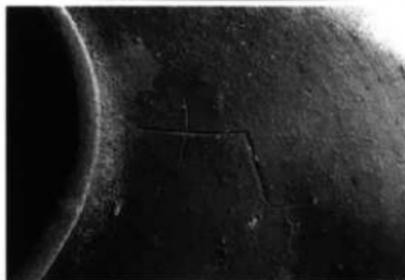
45



44



46





53



67



54



68



61



71



63



72



64



73



65



66



80



84



109



88



94



111



102



113



104



114



97



98



121

S D02 (102), S D03 (104), S D04 (84・88・94・97・98), S K01 (109), S K04 (111), S K05 (114), S K06 (121), S K08 (113)



136



152



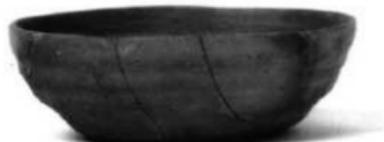
138



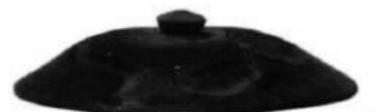
155



139



156



140



161



149



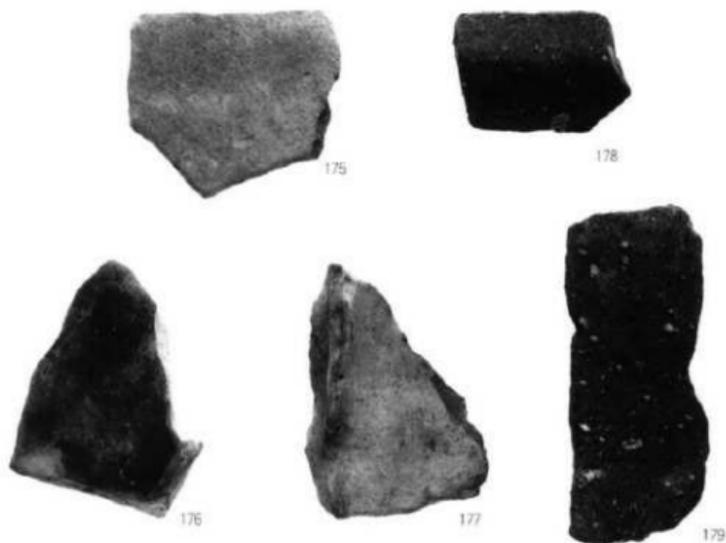
150



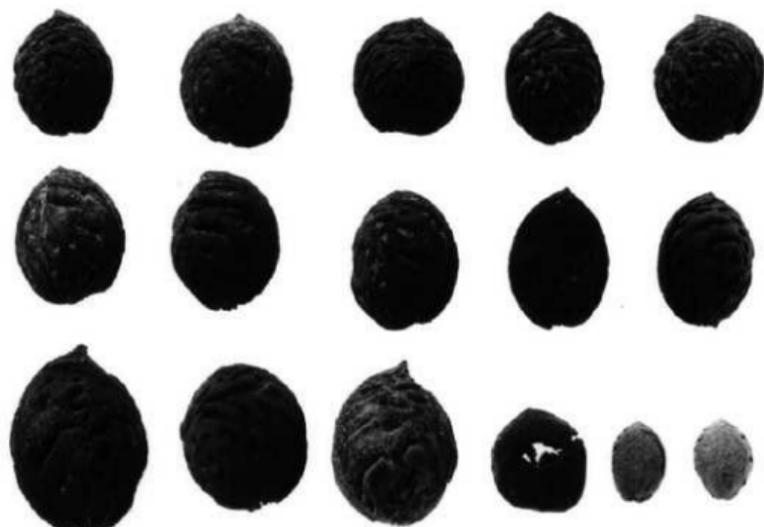
151



185



S K 01 (176)、包含層 (175・177~179)



S E 01 (1 : 1)
(下段右から2点：スモモ核、同右から3番目：オニグルミ核、その他：モモ核)



220



238



224



241



225



244



228



256



229



255



233



281



273

284



283



274



315

316



318

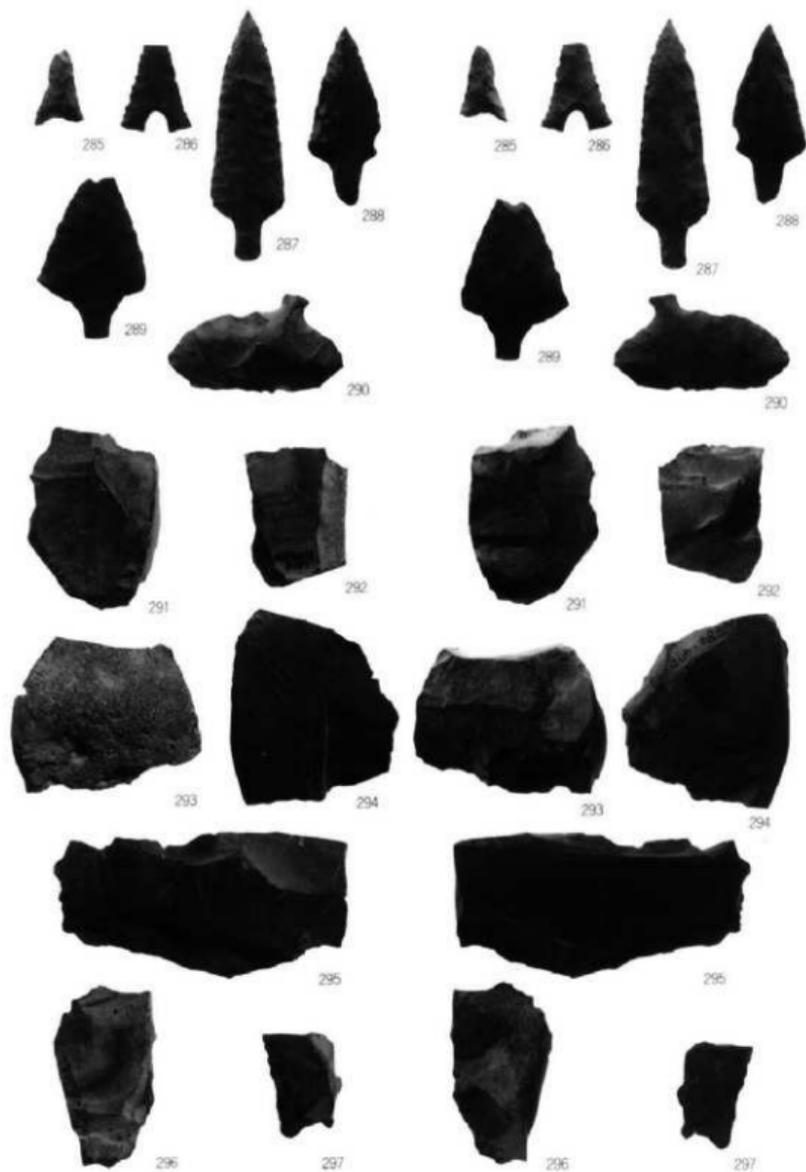


317



317

壺形土器 (284)、土錘 (283)、飛雲文軒丸瓦 (273)、飛雲文軒平瓦 (274)、砥石 (315・316)、石瓶丁 (317)、鉄釘 (318)



石鏃・石匙・クサビ・クサビから剥落した剥片・ナイフ形石器

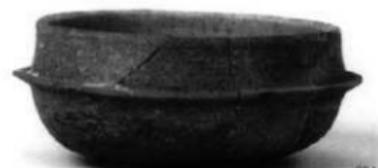




331



333



334



321



335



336



322



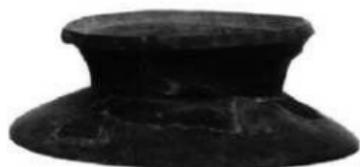
323



337



338



326



324



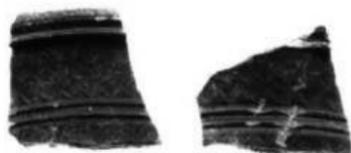
325



350



349



346



330



357



353



358



359



360



379

